
現実世界の仮想現実

芥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界の仮想現実

【Nコード】

N5022X

【作者名】

芥

【あらすじ】

VR技術の応用で作られたVR RPG『デュアルワールド』その魅力に引き寄せられる者は多かった。そんな人々の中の一人である青年が、なんとなくゲームへ挑む物語。ゲーム内でニケと名乗る青年はNPCである少女シアを助け、一夜を過ごした。その後訪れた街で事件に巻き込まれ、ニケはその事件を通じてシアとの仲を深める。そしてしばらくの間街に滞在する事となって、再び事件に巻き込まれていく……。

新たな一歩

VRRPG。

その意味する所は、普段ゲームに触れている者には実に分かりやすく、そして惹かれる文字だった。

普通のRPGとは違う。

前にくつついているVRとは、ヴァーチャル・リアリティーの略で、仮想現実を作り出しその中で様々な体験をすると、まるで実体を持った自分の体が体験したかのように感じる事が出来る技術の名称だ。

簡単に言ってしまうえば、仮想の自分アバターを仮想世界で動かすイメージだ。

その構想や技術は昔から注目され力を注がれてきたが、その技術が娯楽であるゲームの世界へと入ってくるのには、随分と時間がかかった。

未発達だったVR技術は進歩と共に、実験の意味も兼ねてか様々な所で目に付く様になり、やがて充分に発達した後、ようやく娯楽への転用が認められた、と言う訳だ。

ゲームをプレイする人と言うのは特別な限定条件がある訳じゃない。

やりたい人がやって、やりたくなくなればやらない。だから娯楽なのだが。

つまり様々な人間がゲームに触れていて、その中にはVR技術に触れた人ももちろん居る。居て当たり前だった。

だから情報が流れやすいこの時代に、VR技術に触れた人の体験談を聞いてそれをゲームに使うとどうなるのか、という各々の妄想は、VR技術が発達する前よりも、より現実味を帯びて強まるばかりだった。

しかしVR技術を応用したゲームと言うものは、作る側も頭を悩

ませるものだったのだ。

今まで積み上げてきたものが僅かに応用が利くとは言え、ほとんどは未知の物だった。

ノウハウの積み重ねが無い状態での開発は困難を極めた。

しかし、もしその困難を最初に突破したのなら、その先に待つ様々な恩恵は素晴らしく魅力的に違いなかった。

複数あるゲーム製作会社はこぞって製作に踏み切り、何社かはその困難の前に破れ、VRゲームの開発競争から外れていった。

残った会社はどれも大手の、体力がある会社ばかりだった。

どの会社も開発が進み、各社の広告宣伝にゲーマーは心躍らせるばかりだった。

その頃に、VRゲームをプレイするためのハードが発表された。

ゲームの広告宣伝が飛び交う中で、ハードはどうなるのか、と囁かれていたが、いくら待っても謎が明かさねず、VRゲームの開発側もハードについては一切の情報を明かさなかった。

だがハードが無ければソフトなんて作れるわけが無い、その認識は誰もが持っていた上に、ハードよりも確実に情報が流れるソフトの方が皆気になって仕方なかった頃の、発表だった。

『VRG』バーチャル・リアリティ・ゲーム。

実にシンプルで分かりやすい名前だった、だがもつと良い名前をという声もそれなりに有ったらしい。

しかし、最初の一步としてはいい名前だと、賞賛する人もかなり居て、更にハードなんてどうでも良いからゲームを早くやりたい、という人達も重なり、次第に皆納得してしまふのだった。

そのハードの形は、見た目はHMDヘッドマウントディスプレイとやら変わりがなかった。

使用例の画像は機械が目を完全に覆い、耳まで伸びた所に横長のボタンが並んでいた。

それがVRGの電源である事は明白だった。

他にも画像や情報が記載されていたが、どれも既に情報を追っていた人達にとっては既出の情報ばかりで、いち早くプレイしたいゲ

ーマー達はもう実物を触るしかない所まで来ていた。
そして発売当日。

長蛇の列がどこまでも伸びていた。

皆の目標、もとい標的はもちろんVRGとそのソフトだ。

VRGの発売と共に店頭に並ぶ、栄光ある最初の一步を踏み出すソフトは四本。

シューティング、アクション、RPG、シミュレーション、といったラインナップだった。もちろんその前には、見慣れないが想像すると気持ちを高揚させてしまう文字、VRとそれぞれに付いている。

人気なのはアクション、次にRPGとシューティング、更にその次にシミュレーションとなっていた。

発売当初はまだアクションがトップを独走していたが、VRゲームソフトがそうそう簡単に出る訳も無く、一ヶ月経ってもソフトの数は微々たる物しか増えずに、さらにそのクオリティも先に出たソフト五本に及ばないもので、実質VRGで遊べるソフトは四本と言っても過言ではなかった。

そして一ヶ月も経つと、最初は圧倒的だったアクションの売り上げは落ち着き、トップの座をRPGへと譲っていた。

その原因はアクションゲームにありがちなストーリーの短さと、いくらVRゲームがかつてない新鮮さを与えてもやがてそれに慣れてしまう事だった。

それに比べ、当初からかなりの出来でRPGの王道をひた走っていた物が、安定した売り上げを誇るのは仕方ない事だった。

しかしそれだけじゃなかったのだ。

VRGの発売から一ヶ月。つまりソフトの発売から一ヶ月と言っても等しい丁度その日に、RPGゲームの大規模アップデートが行われた。

VRゲームでないゲームの歴史でもおそらくは無かった蛮行だった。

しかしそのアップデートに伴い、更に売り上げが加速したのだから、猛攻とでも言い直すべきだろう。
そのアップデートとは……。

初体験

俺は特別ゲームに情熱を傾けている訳じゃなかった。

もちろんゲーム自体は好きだが、年間でやるゲームの本数はせいぜい一、二本くらいのもので、もちろん欲しいと思えるゲームがあればそれよりも多い時もあるのだが。

ゲームを買う本数が少ない理由としては、まず直感的に注目し、その後はゲーム雑誌やネット、店頭で実際に手にとって見たりして情報を集めて、設定やあらずじなんかを読んだ時に、この続きが知りたい、やってみたいと強く思わされるような作品だけを買っているからだ。

それに俺自身が一度、一つのゲームを始めてしまうと、そのゲームの裏の裏までやり尽くさないと納得がいかない、という無駄に几帳面というか凝り性な性格も関係しているだろう。

そんな俺が手を出したのがVRPGと言う、全く新しいジャンルのゲームだった。VRGと言われる新ハードとそれ専用のソフトからなる、ゲーム業界に一石を投じた物だ。

VRPGと言っても、既存のRPGをまるで現実のように体験出来るだけで、基本的なゲームとして構成する素材なんかは既存のものと同じ。そう言ってしまうえば些細な事を感じるが、そのVR部分の魅力と言うのはやはり強大な物である事は間違いなかった。

だから発売日当日はバイトを休みにして、長蛇の列に並ぶ羽目となったのだが。

幸いにもバイト先はゲームには興味の無い世代もそれなりにいたので、全員がVRゲームを求めて休みの取り合い、なんて事にはならなくて心の底からほっとしたものだ。

製作側も店側も相当の数が買い求めると予想したのか、何時間と並んで辿り着いても、まだ山のように在庫が並んでいた。それでもニューズなんかでは売り切れ続出、なんて報道しているのだから足

りなかったのだろう。そんな報道を流すテレビを消し、ベッドに横たわる。

ベッドの上には空の箱と説明書や保証書などが広がっていて、少し邪魔くさかったので箱に再び戻しておく。

説明書には一度目を通していたが、念のために再び見ようか、なんて考えが頭をよぎるが、そんな事より早くVRゲームがやりたい、と俺自身が急かすので、そのまま箱にしまい込む。

次にやることはソフトの開封だった。

買ったソフトはVRPGというジャンルに、初めて足跡をつけた記念すべき第一号。

名前を『デュアル・ワールド』

仮想現実であるVR空間での世界。現実とは違うが極めて近い二つ目の世界。故にデュアルワールド。

初めてのVRPGにとっては実にピッタリな名前だった。

ソフトは光学ディスクなんかが主流の時代に、今時かよ、と思われるカートリッジ式。素人には分からないけどきつと高性能なんだろうと無理やり納得して、デュアルワールドのカートリッジをVRGの左側に付いている、ソフト取り込み口から差し込む。その近くにある四角形で細長いランプが緑色に光る。それがソフトの認識が終わった合図だ。

ランプの下にあるボタンは、カートリッジを排出する時に使うボタンだが、今は使う必要ない。今使うべきなのは隣のVRG自体の電源ボタンだ。

それを押すと、電源ボタンの上に、ソフト認識と同じくランプが灯った。色はオレンジ。きつとソフト認識との差別化のためだろう。そして電源が入った事を確認すると、次に行うのはもちろんそれを身に付ける事だ。

まじまじと見つめ、深呼吸をし、これがVRGへの第一歩！そう心で呟き、意を決してそのVRGを被る。

恐る恐る目を開けると、そこに広がるのは無限に広がるファンタ

ジーンな世界……ではなく、ありふれたデジタルな画面だった。

体の感覚も現実のものだし、試しに手で顔を探ると感触でVRGが有ることもわかる。

はあ、とため息をついて改めて画面を見る。

そこに映し出されていたのは時刻設定の画面で、そういえば説明書に初期設定がどうだとか書いてあった事を思い出し、自分でVRGを付ければ分かるだろう、なんて思っていた事を思い出した。

仕方ないのでさっさと時刻設定を済ませようと思ったが……。

「……これ、どこで操作するんだ？」

てっきり感覚で全てを操作する物だと思っていただけに、そういった所は流し読み程度にしか見てなかった。

もう一度ため息をついてVRGを頭から外し、丁寧に仕舞い込んでしまった説明書を箱から再び取り出して、中身にもう一度目を通す。

どうやら電源とは別に、VR世界に移行するためのボタンがあるらしい。見てみると電源ボタンとは反対の、右側に確かにそれらしいボタンがあった。

改めてVRGを被りなおし、手探りでそのボタンを探し出して、ゆっくりと押した。

その瞬間、妙な浮遊感が体を包み、足の先、手の先から冷たくなって、やがて体の感覚が無くなる。それが体から首へ、首から頭へと伝わっていき、突如、意識が途切れた。

……目覚めの時のような気分で目を開けると、そこに広がっていたのは宇宙だった。

実際の宇宙とは違うと分かったのは、自分の周りに浮いた球体のアイコン達。

それらを視線の中心に捉えるとヘルプとして文字が浮かび上がる。宇宙をイメージして作られたVRGのメインメニュー画面だった。

その中から時刻設定を選ぶと、00:00と空中に表示される。その数字を指でスライドさせると数字が動いたので、今の時刻を早く入力する。

次に気になったのは自分の体だ。VR空間での体であるアバターの容姿だ。

VRGにおけるアバターはどのゲームの世界でも共通の自分自身の分身であり、VRGでアバターを弄ればそれが即時反映される。

なので自分のアバターをまずどういうものなのか把握しておかないと、色々と困るものがあるのだ。そう、説明書に書いてあった。

周りに浮かんだ球体達を眺めていき、やがてアバターと名の付いた球体に恐る恐る手を伸ばし触れて見ると、その瞬間に放射状に世界が塗りつぶされ、不思議な浮遊感は無くなり宇宙空間もあつという間に変わってしまった。

そこに新たに現れたのはどこまでも続く真っ白いタイルの床と、大きな鏡が据えてあるだけのとてもさびしい空間だった。

鏡には細くて筋肉も付いていない頼りない男の姿が映り込んでいて、それが自分である事は明白なのだが、信じたくない気持ちも持ちたくなる程にひ弱だった。

服装は質素なデザインの簡単な物しかなかったが、どうせゲーム中はそのゲームの中での服装になるし大して気にする事も無かった。それと鏡に映っていたのはもう一つあって、まるで地球の周りを漂う衛星のように、周りを飛んでいる手の平サイズの球体があった。

これはシステムスフィアと言って、触れると空間に応じて空中に半透明の板が現れて、その画面をタッチすることで操作することが出来る。

システムスフィアに触れるといくつかの操作画面が空中に現れ、今出来る操作を視覚的に確かめることが出来た。

……どうやら顔の造形や身長など、普通のゲームと同じぐらい自由で豊富なカスタマイズが施せるようだったが、性別だけは変えられないようになっていたようだ。

こういうキャラをカスタマイズする時に、自分とはかけ離れた美形にしたり、と言うのは特別不思議な事ではないが、どうにもVRゲームに関しては自分が操作するキャラを美形にするのはなんだか嫌な気分がした。

その理由としては、まず第一に思いつくのが操作するキャラがイコールで自分と結びつく事だろう。

気にしない人は気にしないだろうし、嬉々として進んでそれを行う人も居るだろうが、VRゲームでは必然的に一人称視点でゲームをプレイする事になるので、操作するキャラが美形と言う事は、その分身であるプレイする人間も美形、という扱いになるに等しい。

簡単に言ってしまうえば、一人の人間がアバターの皮を被っている、と言う扱いになるので、もしその姿を自分自身で見た時に感じるのは違和感か、優越感か、という話だ。

色々とステータスを弄っていると、あまりに現実とかけ離れたステータスは感覚的なズレ、違和感が凄かった。

慣れればなんて事は無くなるだろうが、最初から違和感だらけの体で行動はしたくなかったので、顔の造形も含め現実に近い値にしながらも、多少は見栄を張って盛っておく。もちろん違和感が無い程度に。

キャラメイクが満足いく形で終わると、次はVR空間での体の動かし方に慣れる必要があった。おそらく最初からそういう事も考えての、果ての無いこの空間なのだろう。

走ったり、跳んだり、回って見たり、逆立ちしたり。

結論から言うならば、疲れる。しかも凄く。

てっきりVR空間だから疲れることは無いだろうと思っていたのだが、動けばその分疲れるのは現実に限らずこっちの世界でも適用されるらしかった。しかし痛み、という物は一切感じない。その代わりに感覚が無くなるのだ。

仮想現実とはいえ、意識は現実にある人間の物なのだから、当然といえば当然の処理だろう。

ゲーム中に炎に包まれて死ぬ時なんかには痛覚があったら、それこそ死ぬ思いをする羽目になる。

痛みの代わりの無感覚は、言うならば麻酔を掛けられている時の感覚に近い物に挙げられるかも知れない。

見ればそこにちゃんとあるのに、動かさそうと思っても動かない。触っても触った方からしか感触が無く、触られた方は無感覚だ。ちなみに本来ある痛みの大きさに応じて無感覚の度合いは変わるように、今のは一番酷い場合だ。

アバターも決まって、準備運動も終わったので、システムスフィアからメインメニューへと戻る。操作画面のボタンを押すと、世界が放射状に広がったのとは逆に、世界の果てから宇宙空間が高速で侵食した。

自分の立っていた所が宇宙に吞まれると、足を付けるための地面が無くなったのだから当然、体が浮遊感に包まれ、すぐに落下する感覚に切り替わる。

覚悟をしてなかっただけに慌てふためいてしまったが、何秒かするとその感覚が当たり前のものとなり、最初に見たVRGのメインメニューへと戻ってくる。

つまり自分の周りに宇宙が広がり、いくつもの球体を取り囲んでいる状態に。

そういえば最初にメインメニューに来た時は、自分の姿を確認して無かったので覚えてないが、今はさっきキャラメイクしたそのまんなかの姿が確かにあった。

今度こそ、球体の中からゲームの文字が浮かび上がるものを探す。割とすぐにそれは見つかった。視界の中心に捉えるとゲームと言う文字の下に、大きめの文字でデュアルワールドと表記されている。それに手を伸ばす。仮想の心臓は破裂しそうなほどに脈打つ。

……アバターには血は無いのだから心臓も必要ないのだが、おそらくはキャラメイクの時に感じた違和感の問題か、より現実に近づけるために用意されたもの、もしくはそのどちらもだろう。

球体に触れる。その球体から眩いほどの光が溢れ、視界は真っ白に染まる。

そんな中でも次に目に入れる風景を妄想し、心臓が高鳴りを止めなかつた。

よつこそ

白一色の風景が真ん中から空色に染まっていき、眼下には広大な土地が広がっていた。

気付けば自分が飛竜の背中に座っていて、広大な土地を風を切つて飛んでいた。

頭の防具や鞍も付いている事から、視界にある大きな城で飼われている騎竜なのかも知れない。

凄いスピードと飛竜の動きに振り落とされそうになるが、どうやら落ちる事は無いように設定されているらしく、引つ張られる感覚は常にあるが、透明な壁に体がぶつかり止まる。

大きな城がそびえていて、その周りを少しスピードを落として飛竜は回る。

まるでこの世界を見る時間を与える様だったが、おそらくこれがデュアルワールドのOPなのだから、推測は間違っていないだろう。……確かにただ飛んでいるだけでも相当楽しい。普通は味わうことの無い感覚を楽しめる上に、今までは画面の向こうの世界だったものが、その世界に入り込んで現実のように感じる事が出来る。

遙か彼方にはどこまでも続く森や山、海までも見える。

現実にある高層ビルの群も無いし、汚れた空気もない。肺にいったいの空気を吸い込めばそれがどれだけ新鮮なものかが分かるくらいだ。

時々山の向こうに見える建物らしきものは、また別の街だろう。

RPGなのだから最初の街以外にも、いくつもの街がこれから待ち受けているだろうし、今見える風景は全て自分で踏破する事が出来るのだ。

あの森も、あの山も、あの海も。きっとこれから色々なイベントがあったり、レベル上げでお世話になったり、それぞれにそれぞれの思い出が刻まれる事だろう。

今はまだ白紙。これから自分の足跡をこの世界に付けていく。そう考えると、やっぱり気持ちが高ぶって仕方ない。VR技術のおかげで今までのゲームよりもそれを身近に、確かに感じる事が出来た。

飛竜の背中世界を眺めていたのは一分ぐらいだろうか、OPにしては丁度いい時間だ。

飛竜は進路を変えて緩やかに降下していく。目指した場所は城下町の中心にある大きな噴水で、NPC ゲーム側の住人 である街の人々が避けて飛竜が着地できるだけのスペースを作る。

飛竜がゆつくりと、何度も翼を羽ばたかせ着地し、静止した所で飛竜から飛び降りる。衝撃はあったが痛みは無い。

降りてみて初めて飛竜の大きさに驚いた。高さは三メートル、横は頭の高さから尻尾の先までで五メートルもある。

……さっきまでは世界の大きさばかりに目を取られて、それを比較対象としていたからこの竜の大きさにも気が付かなかったのだろう。

改めて全体像を見回してから、飛竜の頭の方へと歩いて行き手を伸ばす。

飛竜もそれに気が付いてくれたようで、長い首を曲げて鼻先を手近づけてくれる。

近づけてくれた頭を、猫や犬でも撫でる様にしてやると、クウンと可愛らしく鳴いて嬉しそうに顔を浮かべてくれるのだった。

飛竜に世界を見せてくれたお礼に少し戯れていると、突如周りから拍手の嵐が巻き起こる。

何事かと思つて周りを見渡すと、そこにはひたすらに人が居た。

もちろんNPCなのだが、その顔は実に現実らしく動きも滑らかで、とても仮想のものとは思えないぐらいだった。

拍手に戸惑っていると、飛竜が吼えた。狼の遠吠えの様に上を向き、全てに響き渡らせるかのように力強く。あまりの迫力に腰が抜けそうになった程だ。

それが合図となって、システムスフィアと同じ様な球体が空から降ってきた。

大きさはシステムスフィアとは比べ物にならないくらいに大きい
が、流石に飛竜ほどではなく、およそ三十センチ程度の球体が空中
に浮いていて、ニューゲームと文字が浮かび上がる事からここが今
従来のゲームにおけるタイトル画面なのだとわかる。

タイトルロゴは表示されなかったが、このNPC達の拍手と目に見える風景が、このデュアルワールドの象徴であって、それと同時に歓迎の意味も込められている。

包む雰囲気、この世界が、デュアルワールドへようこそ、と言っている。

その演出に少し感動を感じるが、まだ始まったばかり、いやまだゲームは始まってもない。

このニューゲームと表記された球体に触れる事で、ようやく始まる。

意を決し、手を伸ばし、触れる。

メインメニューからデュアルワールドを始める時には白い閃光に包まれた。今度はそれと逆でメインメニューの宇宙空間を思い出す暗闇が身を包む。

しかし宇宙空間のように無数の星が輝いているなんて事は無く、方向感覚すら麻痺する黒一色の世界だった。

それも一瞬の事で、眩い光が暗闇を裂いたと思えば、目の前には剣や斧、弓なんかを携行した屈強な男や女が結構な数で雑多に立ち並んでいる。

誰も彼も服装が見た事のあるような革製や布製のいかにも冒険者と言う格好。中には魔法使いだとも目で分かるローブを羽織った者や、騎士なのだろうか重そうな金属の鎧を纏った人も居て、誰もが
ある一点に居る人物を見つめていた。

そこには王様と一目見て分かるように、と言う配慮なのか、重そう
な王冠を被っている初老の男が、豪華な金枠と布地が赤く弾力の

ありそうな玉座に腰掛けていた。

その後ろには相談役なのか、王様よりもかなり年を取っているだろう顔にたくさん皺が刻まれた老人が、玉座より二歩ほど後ろに下がり杖を突いて待機している。

ガヤガヤと騒ぎ立てている数ある冒険者達に向け、王様が立ち上がり、叫ぶ。

「ここに立ち上がってくれた冒険者達よ、王の名の元に感謝する！この世界の命運はそなた等の腕に懸かっている。もちろん他の国からも、多数の勇気ある者がこの世界の危機に立ち上がってくれている。急ぎ、世界の安寧の為に、魔物達に砕かれた星の命を集めてくれ！」

王様がそう叫ぶとその場に居た全員が目を滾らせて、一致団結し遠吠えの様に気合の入った声で叫ぶ。

なんとなくそれに習わないといけない様な気がして、少し遅れながらもその声と重なり混ざる。

その後は特に何もなく、さっきの威勢はどこへやら、ぞろぞろと後ろの階段から全員が降りていく。

その流れに乗って階段を降りていくと、城の兵士に誘導されて城の入り口まで連れて行かれる。

どうやらこれから話を進めないと、城に再び入る事は出来そうになかった。

その証拠に門番が二人、堅く閉じた門の前で立ち塞がって動こうとしない。

無理矢理入ろうとすると、その手に持った長槍を二人全く同時に動かし、まるで×印を作るように道を塞いだ。

「王は執務にお戻りになった、面会は許可されてない。」

「また魔物達が活性化した事もあり、今後城での職務に従事する者

以外は立ち入り禁止だ」

門番の二人はそれだけ言い、俺が数歩離れるとまた元の長槍を天に向け、待機状態へ戻る。

王様の時も思ったが声はそれぞれピッタリと合っていて違和感も無く、かといって演技に問題も無くはまり役なのだが、目の前の二人は違う声だったし、王様もまた違う声だ。

もしかしたら、このデュアルワールドのNPCは全員それぞれに声があるんだろうか、なんて考えが頭を過ぎるが、いくらなんでもそんなことが出来る訳はないだろうし、まだ三人の声しか聞いてないからあまりにも情報が少ない。

それにエンディングを迎えればキャストも表示されるから、その時に疑問も解決するだろう。

そう自問自答し、城を背に歩き出す。

振り返った先の開けた町並みの中心に、さっきまで見ていた噴水があった。

OPで見て、タイトル画面でもあった町の中心の大きな噴水の周りには、子供たちが遊んで居たり、その子供たちの付き添いらしい大人達も居て世間話でもしてるのだろう、やけに賑やかだった。

残念ながらOPで乗っていた飛竜は姿形も無く、あれがOPだけの特別な存在だった事を思い知らされる。

しかしこれからストーリーを進める事でまたあの飛竜に乗れるかもしれない、そう思うとあの風景を思い出して胸が躍ってしまう。

しかもOPとは違い自由に操作できる可能性もあるんだから、期待は膨らむばかりだ。

とは言ってもおそらくは乗れても中盤からで、序盤では無理だろうというのはどんなRPGでも似たような物だ。

いつまでも飛竜の事ばかり考えていても仕方ないので、まだ日の差すうちにRPGでの醍醐味の初歩の初歩。街中の人達に聞き込みを開始しなければなるまい。

と思ったが、その前にまずはステータス確認だ。
と思つたが、メニューの開き方がわからない。

メインメニューの時みたたく周りに浮いてる訳でもないし、キャラ
メイクの時のようなシステムスフィアも無い。

となれば、残されたのはジェスチャーかボイスか。

一瞬考えたが、メニューを出すジェスチャーと言つのがすぐに思
いつかず、とりあえずボイスの方から試して見ることにする。

「……メニュー」

なんか大声で言うのと恥ずかしい気がして、小声で呟く。

NPCなのだからこちらからアクションを仕掛けない限り、反応
が返つて来る事は無いのだが、造形がリアルなので頭で分かっ
ても、いざとなると体が本能的に避けるのだった。

幸いにも試行一発目から当たりだった様で、目の前にキャラメイ
ク時と同じ半透明な板が空中に浮かぶ。

アイテム、ステータスから始まり、その下にお馴染みのメニュー
がつつらと並べられてるがとりあえずアイテムを覗く。

半透明の操作盤のアイテムの表記されている所をタッチすると、
新たな操作版が空中に現れる。

そこにはアイテムが表示されていて、現在は銅の剣、薬草が二つ
のみだった。最初から武器と回復アイテムがあるだけまだ親切な方
と言えるかも知れない。

更にアイテムを表記する操作盤の端に表記されている数字から、
持ち歩けるアイテムの上限数は三十だと言う事がわかる。

もちろん今持っている武器と薬草で二つの枠が取られているから、
現在の残り枠は二十八となる。

それ以外は特に得るものも無く、アイテムの操作盤を閉じる。
…前にやり残した事があった。

お約束と言うかなんというか、当たり前前の事なのにそれが抜けて

いた自分の頭に少し残念な感情抱かずにいられない。

思い出しただけマシか、と自分に言い聞かせ、アイテム欄にある銅の剣を指先で叩く。

操作盤に更に重なるように、装備しますか、はい、いいえの表示が現れる。

武器は装備しないと意味が無いよ、って訳だ。

はい、を更に叩き、その瞬間にアイテム欄から銅の剣と言う表示は消え去る。

……成る程、装備は手持ちの道具とは別か。

次に腰の所にずっしりとした重みが増えるのを感じ、視線を移すとそこには安っぽい皮製のベルトにぶら下がった、錆びてるんじゃないかと思うぐらいの赤さを帯びたごつい剣があった。

試しに抜こうとして見るが抜けない。どんなに力を入れても、抜く角度を変えて見ても。

少し銅の剣と格闘して、街の中では抜くことは出来ないのだと結論付けた。

確かに、RPGで街中を抜刀しながら歩く、そんな主人公を俺は見ただ事がない。

アクションゲームなんかだと自由度の高い作品では出来る事もあがるが、RPGは基本的には敵と遭遇した時にしか戦わないのだから、そういった場面以外で剣を抜くタイミングはイベントぐらいな物だ。

装備できたのは確実なのでこれ以上は無駄だと悟り、再びアイテム欄に目を向けたが、他にやる事は特に無かったので再びメニュー画面の操作に戻り、今度はステータスの文字を叩く。

新しく現れた操作盤からはいろんな情報が読み取れる。

まずは各種ステータス。Lvから始まりHP、SP、MP、筋力、技力、魔力、敏捷と続いている。

まだレベルが一なのでどの数値も一桁が大半で、HP、MP、SPはなんとか二桁だが、基本的に増減するものだと思うので二桁でも心許ない。

それとは別の所に表記されているのはA.P。アビリティポイントだ。

今はまだ何の世話にもならないが、後から特殊な技能を得るのに使うだろう事は予測が付く。

操作盤の端っこに地味に表記された、所持金を表す欄は空しくゼ口を表示していて、ただお金の単位であるCコラムだけが意味のある表記となっていた。

最後に気になったのが、半透明な紫色の水晶の欠片の様なアイコンがあつて、その隣にはこれもまた所持金と一緒にゼロと書かれている。単位は無かった。

最初はなんだろうと思つたが、すぐに思い当たる節が浮かぶ。

王様が言っていた『魔物達に砕かれた星の命』それがこれの事なのだろうと言うのは、何作かRPGをやっていると直感的にわかる。いわゆるキーアイテム。冒険の目的であり、いくつもあるそれぞれのくらい集めたのかを表記するカウンター。

とは言え物語の本筋には関係の無い、主人公を特別に強化したりするのに使うアイテムなんかも似たような感じで、メニューに表示されている事もあがるが、今回は王様の発言から分かるように砕かれた星の命、つまり欠片と言うのは簡単に推測できる事で、アイコンから見て疑う余地も無いだろう。

それがどのくらいの大かさかまでは流石に予測が付かないが、少し進めばボーナス的なイベントで一つぐらいは手に入るはずだ。それで実物を手に入れば大ききさなんてすぐに分かるだろう。

だから今は特に気にしない事にする。

そして次にする事、メニューの下から数えたほうが早い所に、コンフィグの文字。

つまりゲームの色々なところを自分なりに調整する設定の項目。それを叩く。

現れた操作盤を上項目から確認していく。

BGM、効果音、音声等のお馴染みとも言える音量調節は無く、

文字送りの調整も無い。

これらはVRゲームであるが故に必要な無い項目だったのだろう。確かにBGMは流れてないし、兵士に止められた時も、会話した時も、効果音らしきものは無かった。

画面に文字が表示される訳ではないので文字送りも必要ないし、音声を消してしまえば読唇術でも使っつかないだろう。幸いに口の動きもリアルそのものだ。

誰もしないし、出来ないだろうが。

慣れ親しんでいる項目はほとんどが無く、せいぜい操作盤の色を変える、透明、半透明を切り替えたりする項目ぐらいが従来のゲームからも引き継がれている項目だろうか。

その代わりにVRゲーム特有の項目ももちろんある。

まずはその一つを弄ると、自分の周りを飛ぶ球体が現れる。

それはシステムスフィアだった。弄った項目は、メニュー開閉時の認証方法という項目だった。

デフォルトの音声認識、今切り替えたシステムスフィア認識、後はメニューを出す時に浮かんだもう一つの方法、ジェスチャーだ。

どうやらきっかけになるジェスチャーを自分で登録するらしく、人によっては便利になるだろうが、俺はそれを選ぶ気になれなかった。

他にも項目はあったが、特に調整する必要もないと思ったのでそのままにしてメニュー画面を閉じる。

なんだか設定が終わると一仕事でもした様な気になってしまっが、従来のゲームで言えばようやくこれから自由に操作出来る様になり、気持ちの外に向いているはずなのだが……。

「あ」

不意にある事を思い出して、もう一度メニューを開く。今度はボイス認識ではなく、変更した通りシステムスフィアに触れて。

動作は違えど全く同じメニューが開き、更に端の所に表記されている時間に目をやる。

デジタルな時刻表示はもうすぐ昼になる事を示していた。

区切りもいいので、ここで一旦ゲームを中断して昼飯を食べてから、気持ちを改めてやるう。

昼飯のメニューをどうするか、冷蔵庫の中身を記憶から漁りながら考える。

それと同時に平行して次にゲームの中でやる事も考える。

当初の予定通り街中の人達に話しを聞いて、……その話によって多少は行動が変わるかもしれないが、その後はRPGの肝でもある戦闘だ。

VRPGの戦闘がどういう仕様なのかは、情報も無く分からない事しかないが、ここまで素晴らしい出来を誇る世界を作っているのだから、戦闘が味気の無い物にならない、という予感ひしひしと感じていた。

そう考えると俄然やる気が出てきて、このまま昼飯を食べずに……なんて考えも浮かぶが、腹が減ってはなんとやら、ちゃんと腹ごしらえはする事にしよう。

開いたままのメニューから中断を選ぶ。

その瞬間、現実でVR世界に飛び込んだ時のような感覚が再び襲い、意識が途切れた。

正しきは真実

腹ごしらえを済ませ、使い慣れたドアノブを捻って、見慣れた自分の部屋に入る。

ベッドの上に転がしたままのVRGを手に取り、まだ慣れてないせいか少し手間取りながら頭に装着する。

目の前に広がる光景は真っ黒な画面を下地に、操作盤と同じ半透明な板が張り付いているもので、そこにはゲームを中断している旨と、何のゲームを中断しているか　今はデュアルワールド　が表記され、その下に再開する場合はVRボタンを押してくださいとご丁寧にも表示されている。

何も気に留めることも無く、頭の右側、耳より少し前の所ぐらにあるVRボタンを慣れない手つきで探り、押す。

三回目にもなる体の先から冷えていき意識が途切れる感覚に、少しは慣れてきたものの、今だに少しの不安があったりする。

これは特にこのVRGに限った事ではなく、VR技術で仮想現実
に飛ぶ際は付いて回るらしく、次第に気にしなくなってくるらしい。
それが何時になるかは自分次第なので、今は気長に待つしかない
だろう。

いくら俺が不安を抱こうとも、もう数ある実績を上げたVR技術
の応用な上、商品化されたという事は安全面も特に気にする事もな
いはずなのだから。

意識が途切れ、再び目を開けるとそこはもうデュアルワールドで、
中断した城の前からそのまま始まる。さっきとどこも変わっていな
い。

こつちとしては立ったまま寝てて、そこから目を開けた、という
奇妙な感覚があったりするのだが、そこらへんに文句を言うのはお
門違いか。

それが嫌なら何処かに座ったり、寝転がりながら中断コマンドを

叩けばいいだけの話なのだから。

今度からはそうしようと、心に決めてから足を踏み出す。

やる事は昼前に決めた通り、町の人達への聞き込み。情報もそうだがイベントがあるかもしれないし、武器屋と防具屋、後は道具屋なども見て回りたい気持ちがあった。

所持金は相変わらず空だが、性能と値段から手ごろな物に目を付けておくのは俺なりの序盤の定石だ。

序盤は基礎ステータス自体が低いために、装備も含めた総合的なステータスの大部分を武器の性能に頼らざる負えない。

なので少し値が張っても攻撃力が上がる武器を買っておけば、そうそう戦闘で負ける事も無くなるし、楽に敵を倒せるおかげで経験値稼ぎもお金稼ぎもスムーズに進む。

この街は閑散として品揃えも無い、狭くて住人も少ない、よくあるRPG初めの村みたいな状況とは正反対だったので、品揃えは期待できるし、人が多い分、情報も期待できる。

一国の城下町なのでそれなりに広さがあって、全部周るのは骨が折れそうだが、それもまたRPGらしい楽しみとも言えるだろう。

自然と顔が笑い、足取りが軽くなる。

心の中で無駄にテンションを上げながら、まずは噴水を目指して歩き出した。

城の前、二人の門番を背に歩き出し、足を踏み入れたのは大通りと思われる広々とした道。

そこには荷物を運んでいる馬車や、道の端にいくつも立ち並ぶ露店、並ぶ商品を品定めしている人も居れば、店主と笑いに笑いかけている人も居たりして、活気に溢れるいい所だと思えた。

歩けないほど人が居たわけではなかったたので、歩いている人達の隙間を縫って歩いていく。

その途中で気付いた事だったが、システムスフィアが浮かぶ様に設定を変えてから、俺の周りを飛ぶシステムスフィアに通行人達は気付いてないどころか、ぶつかる軌道でもぶつかったりせず人を

すり抜けて行く。

システムの名の通り、どうやら干渉できるのは俺だけみたいだった。

噴水までたどり着き、手当たり次第に話を聞こうと思っていたのだが、なにやら騒がしく変な雰囲気醸し出している人ばかりが目についた。

噴水を取り囲むように家々が並んでいるその一角。およそ十人ちよつとの人が何かを取り囲むように集まって、なにやら怒声やら罵声を叫んでいるようだった。

気になって近づいて見るが、全員が全員別々に叫んでいるので全く聞き取れないし、何を中心にそんな怒っているのかもわからない。これがイベントである事は人だかりを見た時からなんとなく分かっていたので、人垣の一番外側に居た、少し高級そうな服を着てぼつちやりとした商人風な男に事情を聞くために、その肩を叩く。

前の何かに向けて放っていた嫌な顔のまま振り向き、今度はその敵意が俺に向けられる。

だが愛想の良い顔を見ると、少なくとも刺々しい物は無くなったようので、やんわりとした嫌な顔に変わってくれる。

これがイベント通りの仕様なのか俺の愛想が良かったのかは分からないが、話が聞ける程度には和らいでくれたのでよしとする。

あまり待たせてもまた刺々しくなりそうだったので、手早く口を開く。まず確かめるのはどうしてこうなったのか、誰がこうしたのか、だ。

「この人ばかりは何なんですか？」

俺がそう言うと、俺の全身をくまなくしたから上まで見て、それから嫌々と言う顔が少しの驚きと共に商人にふさわしい笑顔に変わる。

「あんだ、冒険者か。成る程、なら知らないはずだな、あの性悪女の事を」

商人風の男の顔が再び嫌そうな顔をするが、自分に向けられた物ではないとわかる。

この騒動の中心、この人ばかりを作った原因である人物に向けられていた物が、再び向けられただけだ。

性悪女と言っていたけど、こういう時は大体物語りに絡んでくる重要キャラクターな可能性が高いので、性悪という部分で避けたい気持ちがあつたが、仕方なく首を突っ込む事にした。

性悪女？ と返すと、なんらかのその性悪女にやられた事を思い出して腹が立ったのか、眉間に皺を寄せ、怒りのままに説明してくれた。

「あの女、名前は偽名ばかりで分からないんだが、金を持つてる男ばかりを狙って、色仕掛けで出来た隙を突いて人様の金をくすねてたんだ」

成る程。どっちが正しいのかはまだ決めかねるが、なんとなく事情は分かってきた。

そう言われるとこの商人風の男もそうだが、集まっている人たちは全員男で、身なりがどれも質のよさそうなものばかりだった。

事情は分かったたので、今度は本当にこの人垣に首を突っ込み、その性悪女と言うのをこの目で確認する事にする。

ゲームの主人公らしく無理矢理人垣を掻き分けて前へ出る。

なんなく最前に出れた俺の目が、その罵声怒声を浴びせられている性悪女を捉えた。

ピンクか紫か、またはその間の色合いを持った髪の毛を左右で縛る、いわゆるツインテールにしている、その毛先は面白いくらいに跳ねている。

目尻が少し上がっていて気の強そうなイメージを受けるが、長い事怒鳴り声に晒されていたせいなのか、その紫の瞳には涙が少し溜まっている様にも見えた。

服装に乱れは無く、暴力なんかを振るわないのはせめてもの良心なのか、年齢制限の壁なのか。

女の子は地面に座り込んでしまっただけで逃げないのだから、ただ虚ろに人垣に目を向けているばかりだった。

そんな時女の子と目が合った。誤解ではなくしっかりと、ぴったりと。

俺が顔に怒りを浮かべていなくて、怒鳴ったりもしていないから、この人達の中では浮いて見えたのかも知れない。

彼女の視線が一縷の希望を持って、俺に助けると訴えかけてくる。選択肢でも出てきそうな空気が流れたが、このデュアルワールドでは自分の行動によって選択を選ぶはずだ。

この人だけだっただって、気にせず関わり合いにならなければ、こういった事態にはなっていないはず。

助けを求める少女の瞳に、俺は……彼女に背を向けた。

一歩踏み出した後、人だかりの方を見る。何事かと、集まっていた男達全員が俺に注目している。

普段の俺ならこんな事はしないだろう。でもここはゲームの世界、俺が主人公の世界。

だったら多少の無茶も通っていいはずだ。

だから俺は、彼女を守るように、男達と対立するように、その狭間に壁の様に立ち塞がる。

金は無い。だから彼女が盗んだというお金を俺が返すのは無理だ。力で捻じ伏せる。これも初期ステータスなので無理だろう。

口で捻じ伏せる。話を聞くに相手の方が筋が通っていて駄目だろう。ハッターなんかで誤魔化せる程の頭の回転と口のうまさも自信は無い。

じゃあどうするか。思い浮かぶ答えは一つ、それもうまくいくか

は分からない。

でも彼女の助けに応えたからには、どんな手でも使って助けてやるしかない。

まずは俺の話聞かせる所まで、場を落ち着かせるしかない。

「皆さん、落ち着いてください！ 怒鳴るだけでは何も解決しません。まずは話を……」

「関係ない余所者は黙っててくれるか！」

俺が乱入して声を上げた所までは静寂を保っていたが、それは乱入者である俺の正体は何なのかを頭の中から探し出していた時間らしく、その答えが出た瞬間に怒鳴り声で張り上げた声が止められてしまう。

「あんだ、身なりからして冒険者だろう。だとしたらこの問題に関係ないし、関わる必要も無いだろう」

確かに正論ではある。俺にメリットは無いだろうし、デメリットしかない。

もちろんそれはこのデュアルワールドの住人から見たら、場合である。俺も同じ立場だったならそう言うだろう。

俺の推測が正しければ、このイベントはデメリットもあるがそれを越えるメリットをもたらしてくれる筈だ。

だから相手がいくら引き下がった方がいいと勧めてきても、それを跳ね除けて俺は彼女を助ける。

「そうですね。確かにあなたの見立て通り、私は駆け出しの冒険者です。彼女とも面識はありませんし、助ける義務も無いです」

「だったら……！」

「しかし、私にもやはり思う所はあります。私は今日始めてこの

街を拝見しましたが、とても素晴らしく感嘆いたしました。所がその素晴らしい町並みの一角でこんな騒ぎが起きてるじゃないですか。しかもこんな大人数がよってたかって、一人の女の子に」

口を挟む隙も無い程に流れるように言葉を紡ぐ。しかも内容がこの街を褒める物であれば、この街に住む者にとっては悪い気はしないだろう。そして更にそれを貶めているのが自分達だと余所者に言われれば、頭に血の上った人達も少しは頭を冷やしてくれる。そうなれば狙い通り、俺がペースを握って話を進められる。

「傍目から少し眺めさせて頂きましたが解決する様子も無かったので、私が仲介人としてこの問題を解決したいと思ひまして」

「う……ん、そう言われればそうかも知れないが、だがこの女が一方的に悪いのは確かだ。あんたはどうやって解決するんだ？」

心の中でガッツポーズをする。

向こうがこっちに対して歩み寄ってくる姿勢を見せたなら、後はもう俺が仕切って行っても大丈夫だろう。多少は強引になるが、致し方ない。

「ええ、解決するためにもお互いの話を聞かせてもらっていいですか？嘘をついているとは思いませんが、お互いの齟齬はなるべく無くしておいた方がスムーズですから」

「わかった」

男達の代表として俺と話していた三十手前、下手をすれば三十を越えてるかも知れない細長い顔をした男がそう言い、自分が少女に騙されるまでを詳細に語ってくれた。

周りの男達もその人が喋る中で、所々頷いたりしていて、おおよその手口は全員が共通の認識を持っているようだった。

実際語ってくれた内容も商人風の男から聞いたものと同じ様なものだった。

他の男達に改めて「皆さん、このような感じですか？」と聞くとき強く頷き返す。

これで片方の言い分は揃った。

次は騒動の原因、力無くへたり込んでいながら男を騙し続けてきた可愛らしい少女。

その言い分を揃えなければならない。

地面に力なく座り込んでいる少女の前にしゃがみ込んで、目線を合わせる。

泣いてたり、怯えている子供なんかは目線を近くして優しく語り掛ける事で、素直な子なら言うことを聞いて懐いてくれたりもする。ちなみにこれはバイトで培ったスキルで、そのおかげで割り親子連れに顔と名前を覚えられてたりする。

今回はそんな小さな子供ではないものの、怯えて精神的にも弱ってる事が見て分かるので、少しでも信頼してもらったためにやってみたが、どうやら効果は少なからずあるようだった。

「……あなたは、どうして……」

今にも泣き出しそうな声で喋るので、喋るのを一旦止めさせるために手を翳して制する。

それは少女に伝わってくれてみたいで、言葉は無くなる。

背中に刺す男達の視線が痛い、慌てず焦らず、落ち着かせる。

「安心してください、私はあなたの味方です。だからどうかありのままの真実を話してください。それで私が何とかします」

立場的には仲介人としてなので、彼女の味方とは大きな声で言えず、彼女だけに聞こえる声量で耳元に少し千近づいて囁く。

耳元から顔を離し彼女の顔を見るが、まだ疑いが完全には晴れてはいないような表情だったので、最後の一押しとして出来る限り優しく、笑顔で、今度は囁く必要は無いのでしっかりと言葉を吐く。

「大丈夫」

彼女の顔が今度こそ明るく、希望を見つけた顔になる。

後は事の顛末を聞き出す。

それは俺が言わなくても、少女は状況が分かっている自分から話し出すのだった。

「……私はシア・アメシスト、孤児院の子です」

少女の名前とこの騒動の真相に迫るキーワードと思われる、孤児院。

それを聞いた男達が急にざわめき出す。言葉の中の単語すら聞き取れないが、少女の言葉になにかを連想させるものがあつたのだらう。

少女はそんな男達のざわめきも意を解さない素振りです。しっかりと俺の目を見続け、話を続ける。

「私は幼少の頃に捨てられて、ずっと孤児院で過ごしてきました。親の顔も知らないし、記憶も孤児院の物しかありません。……けど私は幸せだった。母代わりに大事に育ててくれた人も居て、私は血の繋がっていないとは知っていましたが、それでもその人を母と呼びました。それが……母さんが一番喜んでくれたから……！」

何かを思い出したのか、一度引っ込んだはずの涙が再び溢れそうになっている。

俺はゆっくりでいい、とだけ言って静かに言葉を待った。

後ろの男達はもう黙っていて、ただ静かに俺と同様少女の、シアの言葉を待っていた。

「でも……幸せな日々は永遠には続きませんでした。孤児院の前に置かれて行く子供が年々増えるばかりで、私も手伝いはしていたものの、それでも次第に追いつかなくなり、やがて……母さんは過労で倒れ、そのまま……息を引き取りました。そうなれば母さんの名前の元に集まっていたお金も、人一倍動いていた母が居なくなる事によって人手も足りなくなり、その結果は……」

そこでシアは黙ってしまった。

再び涙を溢れさせ、今度はそう簡単に止まりそうも無いほどに泣いていた。

しかし、俺には今のシアの話が男達から金をふんだくる事に繋がらない。まだ何か明かされていない真実がある。

それを知るのはシアと、後ろに居る、さっきざわついていた男達。

俺は振り返り、男達に問う。

「何か……知っていますね」

なるべく感情を消す。怒りを感じていた訳じゃないし、シアに同情した訳でもない。

出来るはずがない。まだ真相を知らないのだから。

「あ……ああ、確かその孤児院は潰れてしまった。それと残された子供達の引き取り手を探していたのも知っている。その子供達がどうなったかは知らないが……」

「売られましたよ。……いや……買われていった、と言った方が正しい、ですかね……」

いつの間にか泣き止んでいたシアが少し強めに話しながら会話に入ってきた。

その声にはいろんな感情が混ざっている、そう思わせる声色だった。

「私は働ける年で働く所も見つかったので、この街から離れる事はありませんでした。でも買われた子供達が心配で、……これは明かせませんが、ある人に頼んで子供達が今どうなっているか、……それと過去の事を調べてもらいました」

急に男達がざわめく。それもさっきの比にはならないほどに。中には逃げ出そうとする者までいたが、俺は大声を張り上げ、元からこの騒ぎに興味を向けていた人達に協力を仰ぎ捕まえてもらう。

元よりこの街に住んでいるのだから逃げ道などないだろうに。

ここまでシアが話してるのだから、延々と怒鳴り続けた奴等は、最後まで聞かなければいけない義務がある。

男のむさい怒鳴り声より、透き通るようなシアの声で語られる方が一千倍はマシなのだから、それくらいは我慢すべきだ、と逃げた奴等に言い聞かせ黙らせる。

逃げ出そうとした男達は涙目になっていたが、生憎と逃げた事が自分たちが悪いと示しているようなものなので、一切の情けはかけない。

場が収まると、シアは再び語りだす。

「そして子供達の生まれの理由を知りました。金持ちの道楽、と言うにはあまりに行き過ぎたその行為を」

一息を置く。

きつとこれから喋ることに關しては、一際抱く感情が違うのだろう。

目には先程までは見えなかった怒りが垣間見え、それが男達に向けられている。

「彼らは自分達が遊び呆けていた証拠を！ その証拠の子供を孤児院に預ければいいと、繰り返した。その結果は、……悲惨な物にしかならなかった！ 子供達の引き取り手を探す時あなた達は事実を知りながらも、無視をした！！」

シアが初めて見せた激情だった。

だからその声に、雰囲気、……事実に、近く的全員が驚き、当の本人達は力なく崩れ去る。

正直、この展開は予想していなかった。

俺が借金を肩代わりする方向で話を進めようとしていただけに、俺もこの話に吞まれていた。

でも俺は立場上仲介人だ。もう流れるには決した様なものだが。だから最後には俺が仕切って終わらせなければなるまい。

「ここに互いの合意の元、選ばれた仲介人である私が、この騒動の裁量をさせて頂きます！！」

噴水を取り囲む全員に聞こえるように、まるで一つのエンターテインメントのように。

「騒動の発端は少女、シア・アメシストがここにおります男達に色仕掛けを仕掛け、そこに出来た隙を突き金を盗んだ事に始まります。男達の言い分は一つ。あの女が俺達を騙した、だから俺達は悪くない。一方少女は男達が金に物を言わせ、子供を作るも育てずに他人に擦り付けたその責任を、大切な母君と必死に背負ってきました。しかし当然限界はあり、それに耐え切れなくなり家族同然の子供達は各地へ売りに出され、たった一人の母親を間接的に殺され、居場

所である孤児院すら潰された。後に調べると引取り手を探す時に名乗り出なかった人達が子供達の生みの親だと発覚。それを知った彼女は！？」

ここまで大仰に噓し立てると嘘っぽく感じてしまうのだが、今の時に限ってはこれぐらいやっても足りないくらいだ。

言葉を切ったのはこの先の閉め所を知らないから。

彼女が何故事件を起したのかは分かっていたが、その先のどうしたいのかを俺はまだ聞いてない。

だけど、わざわざ彼女に聞いてから俺が言い直す必要も無い。

座ったままの彼女に手を差し伸べる。

ここから語るのは君だ、と。

少女は手を取ってくれた。立ち上がり足に着いた汚れすら払わずに、大きな声で叫んだ。

空に、全てに、響くように。

「彼らが見捨ててきた子供達とその子供達の未来の代金を払っていただき、新たに孤児院を建てます！！」

彼女の言葉を染み渡らせるように間をおいて、後は俺が場を引き継ぐ。

「仲介人である私には少女、シア・アメシストに理があると思いますが、……折角ですので皆様にも裁量をしていただきましょう！！私と同じ意見をお持ちの方は拍手を！！」

俺が叫ぶと、次の瞬間拍手の嵐が巻き起こる。

OPの歓迎の拍手とは違う、皆が正しいと思った、彼女が正しいと。

行った行動だけじゃなく、その理由に至るまでを吟味し、下して

くれた判断に、もはやケチのつけようは無かった。

そんな拍手の嵐の中、服が引つ張られた。

振り返ると少女の顔があり、瞳が合う。

「……ありがとうございます！」

そう言って少女、シア・アメシストは大粒の涙を流した。

今度は悲しみからではなく、喜びから。

結末

騒動は収まりを見せた。

街中での大騒ぎに城の兵士達が何事かと様子を見に来て、当事者であるシアと男達は事の顛末を詳しく聞くために城へと連れて行かれた。

俺はただの仲介人だったので、特に拘束されるような事も無く、町の人々から賞賛されるばかりだった。

仲介人、と言っても話を聞き出し、町の人々を扇動したりと、道化のような役割しかしてなかったが、結果的に思った通りの結末に至れて良かった。

無理矢理にでも首を突っ込んで、このイベントをこなそうと思っただ一因に、あの少女の存在がある。

流石にこの展開は予測できなかったが、あの少女が仲間になる可能性が高いと睨んだからだ。

地面に座っていた時に魅力的な細足が顔を覗かせるスカートの間から見えた、太股の所に黒いベルトで括り付けられた、こげ茶色の皮の鞘に納まった短刀。

あれは彼女が戦闘も可能である事を示している気がしてならなかったのだ。

それに他の街の人々なんかとは違う、物語の本筋に絡まないモブキャラ特有の地味さという物が、彼女から感じられなかった。

むしろその逆であの目立つ髪色と、可愛らしい顔立ちに声、服装はどこか周りとは一線を引くデザインだった

これであの少女には貸しを作れたので、今後それを理由に仲間として連れ立って歩けるとすればいい事尽くめだ。

最初からそんなに高いレベルでは無いだろうけど、一人が二人になって戦闘における行動回数が増えたり、パーティ内での役割分担なんかも出来るようになる。

もつとも彼女の目的が目的なので、ここはまた一つ彼女を言いくるめる舌戦を繰り広げなければならぬかもしれないが、こちらに好意を寄せてくれている分、あの騒動を収める時よりも簡単かも知れない。

あの少女の事を考えたついでに改めてあの騒動を思い出す。

推測にしか過ぎないが、彼女はあの真実を皆に分かってもらいたかったんだと思う。

だからあそこから実力行使で逃げようとも思わなかったんだろうし、どうにか話を聞いてもらおうと最初は努力したに違いない。いや下手をすると子供達の実事を知った時から憎しみ全開だったかも知れないが。

外見からは気の強そうなイメージしか持てないキャラなのに、あの騒動の中で見せた彼女の顔はどれも礼節を知る淑女、と言うイメージしか持てなかった。

とは言え、色仕掛けで騙して金を盗んだ事は否定しなかった事からも、それが事実であるのは十分推し量れる。

どんな理由があろうと盗みを働いた女の子に淑女と言うのは、他の淑女に失礼な気がしないでもないが、あくまでも俺自身が抱いたイメージなので、さほど気にすることでもないだろう。

思い返した騒動と少女の心境を推理してると一つの疑問が浮かぶ。ゲームのNPCなのにリアル過ぎないか、という事だ。

あの最中では普段大人しい俺もつい気が大きくなり、演劇部での癖なのかつい大立ち回りをしてしまった。

これがNPCしか居ないオフラインゲームだから良かったものの、将来的に出てくるであろうオンラインゲームでやったならさぞ恥ずかしい事だろう。

自分の行動を思い返して、顔が真っ赤に染まり、恥ずかしい気持ち胸いっぱい広がりは悶える。

少しの間頭を抱えて悶えるとようやく落ち着きを取り戻すことが出来て、改めて落ち着いて考える。

門番の時はてつきり何回城に入ろうと挑戦しても、寸分変わらぬ動作と、一言一句変わらない台詞で返されると思っていたので気にせず先へ進んだが、今回は俺の話す言葉を理解した上で会話をしていた。

選択肢があるわけじゃないので、あらかじめ決められた通りにNPCや主人公が動くのではなく、プレイヤーの行動、言葉で状況が逐一変わっていく。

そしてそれにしつかりと対応するNPCの頭脳。思考の元であるAIが人間と同等の物を持つてるとしか思えなかった。

VRGが出るまでの間にこんな高等なAIを持ったキャラが居るゲームは無い筈だ。そんなゲームがあつたならネットなんかで騒がれないはずが無い。

それにこの人間並みの思考を持つキャラは、固有キャラの可能性が高いシアに限つての事じゃないという所も、中々興味深いものがある。

商人風の男は典型的な返答だったものの聞かれたら、それに対しての答えを返してくれた。

仲介人として間に入った時に男達を代表して俺と会話していた、細長い顔の男も俺とちゃんと会話をしていたし、感情が荒れ狂つていた男達をなだめようと俺が言った言葉も、しつかりと男達は理解し収まってくれた。

シアは俺が差し出した手の意味を言葉にせずとも理解してくれたし、街の人々も突然の俺の呼び掛けに応えてくれた。

俺の行動が一般的な行動だとは思つてない。

それを予想し対応できるAIを作るとなると相当難しいのではないかと思う。専門的な知識は無いので詳しくは分からないが、簡単に出来るなら、これもまたさつきと同じ理由で従来のゲームでそういったキャラが居ないのはおかしいはずだ。

それにこれはオフラインゲームで、いくつものプレイヤーが購入し、プレイしているはずで、それら全ての行動に対応できるのは、

やはりそれぞれのデュアルワールドにおいてNPC達が自分で考え、行動する必要がある。

人と同等の思考を持つ仮想の人間。

映画かなんかでよく題材にされたりする言葉の並びだが、今回は同じフィクションでありながら自分で、自分なりのコンタクトを相手に取れる。

その間には絶対的に埋まらない差があるが、逆にここまで人間に近いと良くない事を考えてしまうの仕方が無い事かも知れない。

年齢制限的な行動はおそらくは禁止されている。

デュアルワールドは全年齢対象のゲームなので過度な暴力や性的行為は無いはずだ。

……そもそもVR技術の応用での性行為等はVRGに限らずVR技術に関わる全てで禁止されている為に関係なかった。なんでも身体や精神にどのような影響を及ぼすか分かっていないからだとか。

いくら実用化が進んでいてもまだまだ発展途中の技術なのかも知れない。

後はプレイヤーがデュアルワールドの住人に対してどのような感情を抱くか、だ。

俺はゲームをプレイしているだけで、いかに住人がリアルだろうとその絶対的な壁を持つために気持ち悪いとは思わない。

そもそも自分自身がこの世界の冒険者と言う役割を演じているのだから、その仮の自分と相対しているのが限りなく人間に近いフィクションのキャラだとしても、こっちもフィクションのキャラを演じているだけ、と割り切れてしまう。

だが俺とは違う考えを持っていて、はっきりと住人達を気持ち悪いと言う人も居るだろう。

現実と同じ様にそこに人がいて、喋りかければ応えてくれて、自分の行動が周りに影響を及ぼす。だからこそ、そこに現実と同じ考えを持ってきてしまうのだろう。

……他のプレイヤーの心配をしてもしょうがないか。

空を見上げた。

熟しすぎて腐りかけた思考を、空を見上げる事で綺麗にする為に長く答えの出ない事ばかりを考えていても、ただ脳を空回すだけの無駄な行為にしかない。

他人がどう思ってるのか、どんな技術でこの世界が出来ているのか、そんな事は何も気にする事じゃなかった。

俺はただこのデュアルワールドの冒険者となって、砕かれた星の命を探す。ゲームをクリアする、それだけがやる事だ。

別にオンラインゲームではないのだから他のプレイヤーに気を使うこともないし、ノイズのような思考をこのゲームに持ち込んでも仕方ない。

この世界を余す事無く楽しむ。それが一番必要で大事な事だから腐りかけの思考は無くなり、強い日差しが満遍なく街に降り注ぐ。噴水に腰掛けていた俺は、視線を空から城の方へと移す。

そこには一人の少女が立っていた。

右手を上げて存在をアピールすると、俺の姿を見つけた少女が途端に表情を明るく切り替える。長い間事情を聞かれていたおかげで暗かった表情は見る影も無い。

噴水の近く、俺の目の前まで駆けて来て立ち止まると、肩より少し長いツインテールが揺らしながら、腰ぐらいまで頭が下がるくらいのお辞儀をされた。

下げられた頭を無理矢理上げる訳にもいかず、とりあえずは黙って頭を上げるのを待った。

少女、シアが頭を上げると同時に俺は言葉を掛けようとするが、それより早くシアが言葉を滑り込ませてくる。

「本当にありがとございました！ あなたがいなければ私は……」

そこまで言うと急に言葉が途切れ途切れになり、それに伴って眩しいくらい笑顔が歪んでいき、泣き顔へとゆっくり変わっていく

のが見て取れた。

あ、と思う間も無く、シアはその顔を手で覆ってしまい、嗚咽を漏らす。

思った通り、見た目のままの強気キャラではなかったようだが、それにプラスして涙脆い部分もあるらしい。

周りの人々が視線を向けてくるが、大体の人がさっきまでの騒ぎを知っているので、男が少女を泣かせている、といった場面に見られないだけまだマシだった。

それでも街の人達が見ている中、ただ黙って待つのも男らしくない上に、刺さる視線のおかげで居心地も良くないので、噴水から腰を上げてシアに近づく。

我ながら凄くクサイ事をしようとしているのは分かっていたし、後でまた悶える事になるだろうという事も分かっていたが、それでもその小柄な体と小さな肩を揺らしながら泣いている姿を見て、体が反応してしまいそっとその体を包み込む。

心の奥底では拒否されたらどうしよう、なんて怯えた気持ちもあったが、それは杞憂だったようでシアは受け入れてくれたみたいだった。その証拠に最初は俺が一方的に抱いているだけだったが、こちらに体を預けてくれる。

そして泣き止む所どころか、更に声を上げて涙を流す。

全てが終わって、今まで溜め込んでいた辛い気持ちなんかが堰を切って溢れ出したのだろう。

俺にとってはこの世界は今日来たばかりなのだが、シアにしてみればここで暮らしてきた記憶が、思い出がある。

どのくらいの期間かはわからないが、その生きてきた年月の一部を灰色に染めてきたのだから、それはとても悲しい事で、その今日まで積み重ねた灰色の時間も今日限りで終わった。

だから救われた証に、全てを終わらせる為に、今はただ胸を貸して泣かせてやるのが俺が出来る事だった。

「……大丈夫？」
「……はい……すいま、せん……」

シアは散々泣いた後、ようやく落ち着いてきて一緒に噴水の端に腰掛けて居たがまだその顔を手で隠したままだ。

泣いた後らしく目が真っ赤になつてゐるのをシアが体から離れた時に見たが、すぐにそれを隠してしまった事から、そんな顔を見られなく無いという事だろう。

……現実こんな子が居たら即告白なのに、と考えるがゲームと現実を一緒にするな、なんてお決まりの台詞がどこから飛んで来そうなので自重する。

そこでふと思ひ出し、システムスフィアに触れてメニューを開いた流れのまま止まる事アイテム欄を開く。中から騒動の後に露店のおばさんからもらったソフトクリームを二つ選択し取り出す。白いクリームの甘さがどうたら、要約するとオーソドックスなバナナ味と説明文に書かれていた。

それを泣き腫らした顔のシアに差し出す。

おずおずと差し出す手にしっかりと握らせ、手を離す。

シアがそれを一口食べるまで見守り、恐る恐るだったが口をつけたので、俺も自分の持つソフトクリームに口をつける。

それなりの甘さだったが、しつこくなく口の中で溶けると、また違った甘みが膨らむ。

後味はすつきりしていて、いくら食べても太らないんじゃないかと思うぐらいだ。

……ゲームの中だから太るわけが無いという突っ込みは考えないでだが。

ローグ系、不思議系と言った方が一般的には分かりやすいかもしれないが、そういつたゲームには必ずあると言っていい満腹度というステータスは、このデュアルワールドには無い。

RPGなのだから無くても不思議な事は無いのだが、色々リア

ルな世界なのでそういったステータスがあってもおかしくない、と
思って改めてステータスの画面なんかを見たが、それらしい表記は
見当たらなかった。

このソフトクリームも満腹度を上げるものではなく、食べると体
力を回復させる道具　しかも薬草の五倍は回復する　と説明に
も書いてあって、未だに一度も戦闘を経験していないのに使うのは
もったいない気もするが、二人で食べなよ、とくれたおばさんに悪
い気がしたので大人しく二人で食べる事にした。

暑い日差しの中、後ろには噴水と子供の声が、前には冷たいソフ
トクリームと暑さに負けないくらいのおむさ苦しい露店の親父が、何
かの商品を声を張り上げて宣伝している。

街の活気をBGMに黙々とソフトクリームを食べていた。

シアの方が一口分早く食べ始めたのに、俺のほうが明らかに早く
食べ終わりそうだったのは性別の差か、食べ方の問題か。……ちな
みにソフトクリームに限らずアイスは舐めずに、普通に食べる派だ。
そんなくならない事を考えながら街を歩く人々を眺めていると、
横から声を掛けられる。もちろん声の主は俺の隣に腰掛けるシアだ
った。

「今回は本当にありがとうございました。私じゃどうにもならなく
て……復讐、って訳じゃなかったんですけど、私にはあんな事しか
彼らに出来なくて、彼らに見つかって囲まれた時も真実を全て伝え
たかったです。どんな顔をされようともそれが真実だと知って欲
しかったです」

「……ああ、わかってる。だが俺はあんな事を言ってしまったが、
君の取った方法は好きじゃない。結局それはただの犯罪でしかない
し、下手をすれば真実すら誰にも届かせられなくなる。本当に伝え
たい事があるのなら誠意を持って、正当な手段で迫るべきだ。…
…ごめんね、説教くさくなっちゃったけど」

「いえ、それは正しいと思います。私が……間違っていたんです。

母さんも自分が辛い時こそ人に優しく接しろと言ってましたし、それを守れずに不当な手段で奪われたものを取り返そうとした……」

少し声色が震えていたので、また泣きそうになっているのが手に取るように分かる。

また泣かれても困るのでその頭に手を優しく乗っけて、撫でてやる。

破壊力抜群の潤んだ瞳での上目遣いに危うくやられそうになったが……何とか堪えてゆっくりと撫でながら言葉を掛けてやる。

「大丈夫。確かにやり方は駄目だったけど、行動する元となった気持ちは正しいはずだよ。シアが報われなかった子供達のために何かしようとした。それは間違っではないから」

「あ……はい、ありがとうございます……」

赤面して俯いたのでシアの表情は見えないが、怒ってるという事も悲しんでいるという事も無いだろう。

ふと、こんな妹が居たなら俺も良い兄でいれるのになー、と現実の残念な妹を思い浮かべてしまう。

思考は現実に向いていたが、撫でてる手は止まらずシアの頭をひたすらに撫でていた。

だが思考もこっち側に引っ張られる。

そのきっかけはシアがぼそりと呟いた言葉。

何か言ったのは分かるが、街の喧騒に吞まれ何を言ったのかは分からない。

わからないからと言って無視する訳にもいかず、俺は聞き直す。今度ははっきりと聞こえた。

「……名前。あなたの……」

そういえば俺はあの騒動の時にシアの名前を知ってなんとも思わずに使っていたけど、俺の名前をまだシアに教えていなかったのに今気が付いた。

「ああ、俺の名前まだ教えてなかったな。……ごめんな、俺は……」

そこで固まってしまった。何故かという俺が今言おうとした名前は現実の名前で、ここ仮想現実での名前ではなかったからだ。

……そういえば、アバターを決める時に名前を決めてない。いや、俺の記憶が正しければ操作盤にも名前を入力する欄は無かったはずだ。

「……あの……」

「ああ、ごめんね。ちょっと待って……うん、何も聞かないで、少
しだけ、ね?」

やばい。こっちに来てから初めてうるたえてるかも知れない。

とりあえずはこの場を切り抜けるためにも、普段使ってるHNとかでいいだろう。

……後で名前を設定する所を確認しておこう。

手早く思考を纏めて、目が泳いでるシアに名前を告げる。

「俺は、二ヶ。そう呼んでくれ」

「……二ヶ、さん」

まるで嘔み締めるように俺の名を反復するシアの頭から手を離し、その口の端に付いた少しのソフトクリームを指で取ってやる。

それを数秒たってから認識して、シアの目がゆっくりと見開かれて、真っ赤に染まる様は見てるこっちとしては中々に見ごたえのある変化だった。俺がうるたえた事を隠すためにやった事とは言え少

々やり過ぎたかも知れない、とも思ったが、可愛かったのでよしとしよう。

再び俯いてしまったシアに助け舟を出してやる。

もっとも攻めたのも助けたのも俺なので、自作自演みたいなものだが。

「それで城に連れて行かれて、その罰とかはなかったのか？」

男達とシアは街中で大騒ぎ　より騒ぎを大きくしたのは俺だが

した当事者として連れて行かれたが、理由を含めればシアの方が理に適っているとは言え、行った行為としては実際に十数件から金を騙し取ったシアの方がよろしくない。男達はそれがあつたからこそシアを見つけて取り囲むような行動に及んだのだから。

だから事の顛末を城の兵士が聞いたとして、どう判断を下すかは俺には全く分からない。

今こうしてシアとゆったりと話せているし、シア自身もあまり切羽詰まったような態度も取ってなかったので大丈夫だとは思うが、関わった以上その顛末は聞いておかなければ目覚めが悪い。

「私は、私が行動を起す理由と彼らが街中で長時間私を拘束した事を考慮されて、お金を騙し取った事とその盗んだお金は帳消しだと言われました。その代わりに彼らもお咎め無しと言う事で決着しました」

「そう、か……」

案外あっさりとしていて驚いた。流石にこの世界観で禁固刑とかは無いと思っただけだが、あるいは……なんて思ってた自分がどこか馬鹿らしく見えてくる。

だがお互いにそこまで損失をこうむった訳じゃ無さそうだし、これにて一件落着か。

ああ、最後にシアに聞く事がまだ残っていた。

「ところでシアはこれからどうするんだ？」

過去も清算出来たようだし、確か働く所もあると行ってたからそこで働いて、働いて、働いて、すこしづつ貯金をためていき、新たな孤児院を建てて、そこで憧れた母親のように捨てられた哀れな子供を育てていく。そんな未来をシアは考えているかもしれない。

正直、シアが仲間になるという可能性はあの騒動のクライマックスで言った、シアが目指す目標を聞いた時に格段に下がったように思えた。

孤児院を建て直す。つまり詳しい事は聞いていないが、おそらくはこの思い出のある街で、出来れば同じ所に建てるだろう。お金がどのくらいかかるかはわからないが、相当な金額が必要だろうし、継続的に収入も無ければ続かない。

一応俺は冒険者と言う立場で、根無し草な俺が彼女のためにできる事といえばお金を立ち寄った時に寄付するとか、食べ物なんかを贈与するとか、そのぐらいしか浮かばない。

ゲーム中ではサブイベント的なポジションで割とあるイベントなので、もちろんやり込む派の俺は、これから何度と無く足を運ぶ事になるだろうがそれもいいだろう。

現実世界ではそう言った行動は無にも等しいのだから、仮定の現実くらいは心優しく生きたいものだ。

突如、俺の思考を遮るシアの発言が飛び出す。

「ニケさんは、冒険者ですよね？」

「うん？あ、ああ、まだ駆け出しだけどね」

戦闘を一度も体験してない上に、いまだ初期装備の初期ステータス。それどころか街から一步も出ていない。もっと言うなら移動し

た範囲が城からこの噴水のある広場までの、百メートルもないんじゃないかと思う短距離。

二つの意味で駆け出しな冒険者。

そんな俺にさらにシアは困惑させるように言葉を紡いでいく。

「私も、連れて行ってくれませんか……！」

出発

それは意外な申し出だった。

とは言え最初からそれを狙っていただけに、心の中では歓喜していたのだが、俺が独りでに考えていた事が引つかかり素直に喜べないのと、どうしてもその申し出をするのかという理由が純粹に知りたかった。

だから俺はすぐにその答えを返さず、両手の先同士を合わせながらそわそわと俺の返事を待つシアに、まずは質問を投げかけてやるのだった。

「シアの目標、孤児院の件はどうするんだ？てつきり働いて建て直すものだと思つてたけど……」

「孤児院の事を諦めた訳じゃないんです。でも普通に働いていたら何十年掛かるかわかりませんし、稼ぎも普通に働くより冒険者としての方がいいんです。旅のついでに色々と周って見るのもいいんじゃないかと思つて……。もちろんニケさん次第なのですが……」

「俺次第、か……」

何も迷う事はない。むしろ願つたりな申し出なのだ。

俺は本当に駆け出しで、この街の事も、外の事も何も分かつてる事はない。

そこに仲間が一人増える。しかもそれなりの時間をこの町で過ごし、地理に明るい上に、この世界の事も一般常識ぐらいなら知っているだろう。

おまけに、こんな可愛い子を連れていけるなら羨望の眼差しを向けられる事もあるだろうし、何よりこれから予想される長い旅路で飽きることなく過ごせる。

これは可愛いとか関係無しに、話し相手が居ない孤独な旅は得て

して寂しいものだ。

だから俺は何も迷わないで、シアの申し出を受ける。

「俺は構わない。むしろ助かるぐらいだ。……それじゃあよろしく」

右手を差し出す。

左手にはソフトクリームのクリームはもう食べてしまっていてコーンの部分だけが残っていた。

俺の申し出を受ける言葉と、その差し出された右手に何を思ったのかは俺の知るところではないが、しっかりと握り返して、笑顔でそれを喜ぶシアはとても幸せそうだった。

「こちらこそ無理を言つてすみません……。不束者ですがよろしくお願いします」

笑顔が日差しでさらに眩しく照らされる。

その返事という言葉は色々と誤解を招く気がしなくてもないが、シア自身が本当にそう思っているという極僅かな可能性もあるので、特に言及する事もなくシアの差し出した手を握る。

シアも握り返してくれて、硬く握手を交わした。

システムからシア・アメシストが仲間になった的なメッセージが出てきても不思議じゃなかったが、残念ながらそんなメッセージは出ない。

でもお互いが仲間だと認める事によって、システム側でそれを勝手に認識でもしているのだろう。

シアと固く結んだ手を解き、システムスフィアに触れて、メニューを出すところにはしっかりとシアの名前が仲間として、パーティーの一員として登録されていた。

パーティーが何人まで連れて行けるのかは分からないが、流石に二人二人でその枠が埋まるとは思えないのでとりあえず置いておき、

新たにパーティに入ったシアのステータスを見ようとメニューを指先で叩く。

そこに表示されたステータスは、ほとんど何も表示していなかった。

せいぜい表示されていた所は名前や武器、生い立ちと書かれた文字。生い立ちの文字を叩いても出てくるのは俺がああ騒動の中で聞いた事と何も変わらない事ばかり。

なんだこれ、と思って色々試すものの何も変わる事はなかった。思いつくのはパーティ加入時のレベルが俺、つまり主人公基準で俺がレベルだからシアもレベル……そのせいで魔法なんかは一切覚えていない、と言うのは十分に考えられる話だった。

しかしその考えからいくと、魔法、スキル、アビリティは分かるが、レベル、基礎ステータス、HP等も一切の表示がないのはどういう事なのだろう。

従来のRPGではもちろんこんな仕様を見た事はないし、何らかの意味があるのかは分からないが、現実問題そうなるのだから意味のある仕様なのだろうと無理矢理納得する。

念のためシアにも確認しようと顔の向きを変えると、ばっちり目が合う。

「……どうした？」

「いえ、ニケさんこそ何も無い所を眺めていて……、何か考え事ですか？」

「え……」

俺は今まで空中に浮かんだ、近未来デザイン的な半透明の操作盤を操作し、シアのステータスを見ておこうと考えて、そのあまりにも情報が少ない画面を見ていた。

それが今のシアの言葉からすると、このメニュー画面はシアに見えていないという事になる。

システムスフィアがNPC達に接触も認識もされないのと同じで、このメニュー画面も同様に接触、認識ができない。システムに関わる事、普通のゲームならば気にする事でもなかったが、このVRゲームという舞台になって初めて意識する。

確かにNPCがメニューを開く必要もないし、それで困る事もない。NPC達からすればここが現実で、俺達が普段暮らしている現実をそれと認識する事となんら変わらない。

それならば、レベル、ステータスやスキル、魔法等ははどうなるのか。

戦闘を経験し上昇するレベルは、戦闘経験を積んだって事で特に問題ない。ステータスも同様に、体が何だか軽い気がする程度の認識で済むだろう。

スキル、魔法に関してはレベルアップと共に閃いたという形なら問題はないだろう。

アビリティはどうなる？

未だに俺のAPはゼロなので何も習得する事は出来ないが、文字を叩くと一覧が表示され、どんなアビリティがどの程度のポイント消費で獲得できるのか、どのような効果を持つのが表記されている。

その中には多種多様な特殊技能の名前が並ぶ。

裁縫、料理、鍛冶、採掘、掃除、錬金……家庭的なものから専門職的な事までがごちゃ混ぜに並んでいて良く分からない感じだったが、ある法則性に気付く。

戦闘に関するものは並んだ名前の中には無く、それ以外の部分ばかりがアビリティの一覧に名を連ねる。

つまり、アビリティもまたスキルや魔法と同じで自然に習得が可能と言っわけだ。

だからNPCにはメニュー画面が要らない。

俺はレベルアップなどでシステムからポイントを供給されて、それをメニュー画面から使う事によって、昨日まで出来なかった事が

……さつきまで出来なかった事さえも、ポイントを消費しアビリティを習得したならば、その瞬間から出来るようになってしまう。

ゲームをプレイしている側から見れば当たり前だが、何年、何十年とこの世界で生きてきた人達に、俺がこんなチート紛いな事をしているのか、と俺の僅かな良心が痛むが、おそらく強化しなければただの人間程度の戦闘力しか得られないので、ここはゲームとして割り切って痛む心を治めておく。

シアが心配そうに見つめてくるので、耐え切れなくなって適当に誤魔化す。

「……ああ、うん。考え事をしてね、これからの事とか……」

「これからの事、ですか……?」

シアも俺に付いて来ると言ったのだから、俺の動向はすなわちパティ、ひいてはシア自身の動向にもなり得る。

だからそれに興味を向ける事は自然な事で、俺もこういう展開になってしまったので、シアに街を案内してもらおうとか考えていた。俺自身の出自がどうか良く分からないので、一応、騒動時に余所者と言ってるのでそれに沿って、シアに捏造した設定のまま、道案内を頼む事にする。

「まだこの街に来たばかりで見て回る暇も無かったから、街を回りたいんだけど大丈夫かな? シアは退屈になると思っただけ……」
「私は大丈夫です。……むしろ喜んで道案内を勤めさせていただきますよ」

ありがとう、と言って手に持ったコーンを口に放り込んで、噴水から腰を上げる。

シアもそれに習って、まだ手に持っていたコーンを口に入れ立ち上がる。だがコーンまでしっかりとアイスが入っていた様で、きつ

とあのキーンとした感じを我慢しているのだろう、こめかみ辺りを押さえて、まぶたを強く瞑り、眉間に皺を寄せている。

そんなに急がなくてもいいのに、と思うがあえて言葉にする程でもないか、と思わずに少しだけ笑ってやる。当の本人はそんな事とは露知らず、ひたすらに耐えているのだった。

シアの頭の痛みが取れるのを待ってやる。

ようやく収まってきたのか頭から手を離し、今までの自分を思い出してか、恥ずかしそうな笑みを俺に向けて浮かべた。

それと同じく笑顔で返してやり、予期せぬイベントもあってか遅くなってしまうたが、当初の計画通りに街の人々から話を聞きながら街の探索へ向かうために、改めて声に出して言う。

「それじゃあ行こうか」

「はい！」

本来ならそんな事も言う必要はなかった。でも予期せぬイベントごと、シアの加入イベントにより、こんな事を言っても返事をしてくれる仲間が増えた。

それを？み締めて足を踏み出す。街の喧騒に紛れて初期装備の皮靴が、石の地面を踏み鳴らす。

それに続いて軽い足音が続く。

最初の目的はこの噴水周りでの聞き込み。あの騒動で街の人々に顔が知られてやりやすくなってるはずだ。……俺の気分的な問題でも。

探索と遭遇

街での聞き込み及び探索は思いのほかスムーズにいった。

その要因はやっぱりシアのおかげ、と言いたいのだが半分ぐらいは意外な事に俺のおかげでもあった。

正しく言えば俺の冒険者と言う肩書きが、思っていたよりも力を持っていて、シアの地の利と俺の人に対する利が、相まった結果、と言っべきか。

まず計画通りに噴水の周りに居た人達に話を聞いた。

特に重要な情報は無く、RPGにはよくある基礎的な情報ばかりが集まった。

この街はあの噴水を中心として円を描き、そこからはみ出るように城が建っている。

シアから聞いて分かった事だが、城から街を貫き外へ繋がる大通り、その中心に位置するこの大きな噴水を取り囲んでいる建物の群れを『内街』《インタウン》

それ以外の外側の城壁に近い所を『外街』《アウトタウン》
そしてその全てをまとめたこの国の名前はフィルストと言っらしい。

俺がシアの騒動に巻き込まれたのはもちろん内街。

ここでは城に続く大通りがあることから城に用のある者や、観光で訪れる人なんかが多く来る場所らしく、物や宿の質は高いものと同じく値段もお高いものになっているという話だ。

逆に外街は正反対、というか汗臭い感じの所だとシアに教えられて、最初は何の事かと思っただが実際に案内されて納得した。これはたしかに汗臭い。

なにせ城壁に隣接した外周部の通りは、誰も彼もがあของเกม開始時の、王様が叫んでいたあの時の冒険者達によく似た格好をしていたからだ。

外街は、内街が気品と礼節を弁える上級階級の街とすれば、外街は正反対の有様に見える。

質より量、静かさより騒がしさを選ぶような、しかも全体がそういう風潮になってるのに驚いた。

なんでも休憩がてらにこの街に立ち寄る冒険者達が多いために、自然と外街には冒険者に適した環境が出来上がっていき、気付けば一日寝ればいい宿屋や、内街とは味のランクが落ちるが量はその数倍を誇る定食屋、冒険者達の交流の場であると共に情報交換の場でもある酒場等どんどん増えていったらしい。

それで最終的には冒険者が多く集う、土臭い感じになってしまった、というところか。

何故冒険者が外街に集まるようになったのかは実に単純で、外に出るのにも、入るのにも近いから。

街から外へ通じる門は一つで、下手をすると城の物より豪華なのでは、と思わせる大きさを誇り警備している兵士も何人が居るうえに、休憩所的な物まで備えられていた。

とは言え硬く閉じているものではなく、常に人が二人か三人は通れる隙間が空けられていて、どうやら人が通るのを防ぐものではないらしかった。

シアが言うには魔物の侵攻が及んだ時に閉められるらしいのだが、シア自体は閉じた状態を見た事がないと言っていた。

次に色んな店屋を回……ろうとは思っていた。

いくらゲームとはいえ文無しでお店に入る度胸が恥ずかしながら無かったのだ。咎められる事もないだろうが、VRゲームとなると頭で考えていたRPGの定石よりも、実際感じる恥ずかしさの方が上回ってしまうのだった。

何時間も歩き回って、まるでデートのような有様だったが、収穫は乏しく努力に対して報われた気はしないが別に気にする事もなかった。

疲れきってる足を休ませるために、城のはずれに街とその周りの

草原を見下ろす事のできる高い丘に二人はいた。そこがこの街の、シアの道案内の終点だった。

二人とももう立っている事すら辛いぐらいに足が疲弊していて、そこにたどり着いた時に、なりふり構わずに少し長めの芝生達のクツシヨンに身を投げた。

しばらく二人とも言葉も交わさず、寝転がっているせいで街は首を上げないと見えないが、代わりに空を見ていた。

まだ強く日の光が差す空。メニュー画面を開き、現実時間を確認するがまだ四時過ぎだ。

昼過ぎからあの騒動に巻き込まれ、街をシアと一緒に探索して、まだ三時間と少ししか経っていないというのは自分でも驚きだった。色んな物を見て、色んな人達と話し、全てが新鮮だった。

もちろん知識としては知っているものだし、画面越しにはそれらを見てきたから全く知らないと言う訳ではなかったが、この限りなく現実を再現したVR空間でそれを改めて見るのは、やはり現実に近いだけに新鮮さを感じるのは当然の事かも知れない。

だから、それを思い出して自然に顔が笑い、呟いてしまう。

「楽しかったなあ……………」

「そう……………言われると、私も案内した甲斐が、あります……………」

隣で仲良く寝転がっているシアが俺の呟きに反応して、言葉を返してくれる。

その声はやはり疲労感が現れていて、今にも寝てしまいそうなくらいにも感じてしまうが、シアの顔は笑顔だった。つられて俺も笑顔で返す。

そういえばセーブとかどこでするんだろう……………、あと夜とか、俺は中断して現実で寝ればいいけど、そうなると中断してる時はこの世界の時は止まってしまうのだからシアが寝る時間も俺に付き合う羽目になるし、やっぱり睡眠とかは取らないと駄目だよなあ、

NPC達もこの世界で生きてるんだし。

……なんて、これからの事を考えるが、街を探索してて発見した、法則とも言える事実、自分の目で見たほうが早いを思い出し、今は考えない事にする。

なんとかなるだろう。そんなお気楽な考えを添えて。

再び二人共が沈黙する。気まずい様なものじゃなく、二人共が疲れを癒し、この風景を楽しむために。

だからそんな静かな所に、二人以外のものが足を踏み入れたなら、俺とシアが気付くのも当然だった。

そして、ここは街から離れていて、人の目も無く、街の外と同じ様な草原で……だから、敵にエンカウントしたとしても、当然だった。

「ッ！」

体は疲れきっていたがそんなのかまわずに全身に力を込めて跳ね起きる。見ればシアも同様に臨戦態勢に入っていた。

スカートを少し上げて、吸い込まれそうなその太股に隠されていた短刀を一息に抜いて構える。

それを見てから俺も慌てて、シアとは恥ずかしくて比べられないほど不器用に、錆びた様な黒ずんだ赤色をした銅の剣を構える。

この銅の剣は片手剣なので利き腕の右手に持ち、反対の左手には、盾でも持てればいいのだが生憎とそんなものは無いので手持ち無沙汰だ。

相対したこのデュアルワールドでの最初の記念すべき敵は、黒味がかかった紫色の体表を持ち、鋭い牙が並んだ口からはよだれが垂れ流しになっており、鋭い眼光で身を竦ませたくなるほどに敵意、いや殺意に満ちていた狼だった。数は四体と一体。

四体が横一列に並び、その後ろにリーダー格と思われる一回り大きく、基本的な見た目は一緒だが、それとは区別するためか頭の上

でこげ茶の長い毛が靡く狼が一体。

多分、勝てない。そう直感した。

勝てないモンスター、王様の言葉に習うなら魔物だと思う要因は二つ。

ここが地理的に普通は長時間居る必要が無い所だからだ。俺はシアに案内されたからであって、普通のプレイヤーならばイベントで来るか、来ても立ち寄って何も無いと判断すればすぐに去ってしまうだろう。

だからここに敵がいたとしても気が付かない。

二つ目は明らかかなリーダー格の狼の存在と、数の多さ。

こいつらはそれぞれがバラバラに動いてるわけではなく、見てすぐ分かるようにリーダー格の狼を中心に集団として、襲ってきてる。なんとか前に陣取る狼達四体を倒しても、その奥に控えるアイツは体の大きさと比例して強さもまた一回りは強いだろう。

こつちは二人。レベルも装備も初期状態。

数も個々の強さも足りないのは分かりきってる事だった。

それに俺は足が竦みそうになって、逃げ腰になっているのが自分でも分かっていた。

現実ではありえないシチュエーション。こちらに殺意を向ける獰猛な敵達。

それに、知らず知らずのうちに怯えていた。逃げていた。

どうせ勝てないなら、逃げるのに全力を尽くせばもしかしたら…
…なんて考えが過ぎる。

足は疲れ切ってるがこの際そんなのは関係ない。原始的な恐怖に押され背を向けて走る事はできるだろう。でも、逃げ切れるのか、と言われると、それもまた無理だろうと予感できる。

現実世界で狼より足の速い人間なんて、ましてやスポーツなんて一切して来なかった俺が仮想世界とは言え、狼の足の速さに適うはずも無い、というのはすぐにわかる。

そういった所は現実と似せなくていいかなあ……などと考えなが

ら、八方塞がりのこの状況に弱腰になる俺の思考を、炎が焼き払った。

え、と思う間も無く手に持った銅の剣が突如現れた炎に包まれ、ただの銅の剣がその赤色も伴って煌々と燃えている。柄までは炎が包んでないが、刀身に宿る炎の勢いからして、普通は猛烈な熱が柄を握る俺の手を襲うのに、全くと言っていいほど熱は感じられない。感覚的にはただ銅の剣を握っているのとなんら変わらない。

これは、起こった現象から察するに付加魔法^{エンチャント}。

誰が？ と疑問が浮かぼうとしていたが、この場にいる者は限られている。

自分ではもちろん無いし、敵がそんなことするはずも無い。だから……。

「ファイアチャージ
火炎装填！」

そう女性特有の声色で叫ぶ。手に持っていた短刀が炎を帯びる。

これは、この付加魔法はシアが放ったものだった。しかも自分だけではなく俺の剣にまで。

でもあの時、シアのステータスを見た時には魔法の類は何も表示されてなかったはずだ。だからこそシアのレベルが俺基準で最底の一なのだと思っただし、だから魔法の類を覚えていなくてもなんら不思議では無いと納得したのだ。

だが、今確かにシアは魔法を使った。考えても答えが出るわけでもなく、シアの叫び声でようやく今の状況を思い出し、くだらない思考を閉じて目の前の敵に目を向ける事が出来た。

「ニケさん、剣を！」

構える。様にもなっていない素人丸出しの構えだが、今はそんな事構ってられない。

必要なのは敵から逃げ出さず、切り伏せて、生き延びる事だ。

少し長めの草をしつかりと踏み、駆け出す。無謀な突進と言われれば確かにその通りだが、行動の幅が無い今はこの選択肢しか思い浮かばない。

四体の狼は半分の二体づつに別れ、それぞれが俺とシアにその凶暴な牙を剥き出しにして、噛み付こうと助走をつけて走ってくる。

それに対して俺は不恰好ながら剣を横一線に振る。炎が軌跡を描き、まるで炎の壁でも作り出したかのように一瞬だけだけど空中を炎が覆った。

すると狼達は速めていた足を止め、殺しきれなかった勢いを保つたまま草の上を滑ってくる。

苛立ったように短く吼えた狼達に足を止める間も無く、再び返す刃で炎を振るう。

攻撃を当てるのを重視し胴の辺りを狙った。まず一匹目に攻撃がヒットしその身を焼いた。もう一匹もそのまま炎で焼き払おうとしたが、一匹目に当たって鈍った刃は、二匹目の狼に当たる事も無く難なく避けられてしまう。

剣を振るったままの体勢で、剣に体重を乗せていた俺は攻撃をよけられた事によって体が硬直する。そんな隙を見逃すつもりは無いのだろう、攻撃を避けた狼は体勢を整え、獰猛で鋭い目で俺を標的と定め、襲い掛かるうとしていた。

だがそれは狼の短い悲鳴のような鳴き声とその頭に刺された炎の短剣に防がれた。

「大丈夫ですか……!!」

「ああ、おかげさまで」

狼が、頭に刺さった短剣の炎に体を包まれて、まるで灰のような細かい粒子となり、風に乗ってどこかへ飛ばされていった。

俺の助けに入ったという事は、始めにシアに向かっていた狼二

匹はもうシアの手によって倒されたのだろう。……意外と武闘派なのかもしれない、とか思いつつ、あんなに泣いたりして大人しそうなイメージを持っていたシアを、改めて見つめ直す。

極端に変わったような気配は無いし、言動も普通だった。ただ今は街中でのシアとは少し違っていて、その少し強気な顔立ちに近い、勇ましさを感じられた。

従えていた狼四匹を瞬殺され、怒りを覚えたのかリーダー格である狼がたてがみを揺らして、空間を揺らすように吼えた。

体の奥底まで響き渡るぐらいの声だった。悲しみや怒り、リーダー格の狼が抱いた感情が込められた咆哮。その中でも一番強い感情は怒り。それに殺意も同じぐらい纏っていて、抵抗すら無駄なんじゃないかと思わせるぐらいに迫力満点だった。

……実を言うとシアの付加魔法の炎を振るって狼を倒した時に、これはいけるんじゃないのか、と思った。手下扱いの狼を一撃で粉砕する事が出来たから、それより少し強いだだけの奴も二人掛かりなら倒せると、そう思った。

でもその咆哮は、そんな稚拙な考えを吹き飛ばし、余りあって恐怖を刻み込む。

だから一步、足を、引いてしまった。

それを俺が怯えたのだと奴は悟った。だからまずは俺を標的に定め、その足を踏み出すのは至極当然の事だった。……複数を相手にするにはまず弱い奴から。基本的に忠実な奴だ、なんて思ってる間も無く間を詰められて、目の間にさっきの狼よりも凶暴凶悪で、鋭く大きな口と牙が俺を噛み砕こうと迫っていた。

怯えに囚われた俺はなりふり構わず、ただその俺に向けられた殺意から逃げるために剣を振るう。だが。

適当に振るった炎を纏った剣は、狼の体に確かに当たったが、まるで岩かなんかに打ち付けたような嫌な音と痺れるほどの衝撃を手に伝わらせ弾き返される。

驚愕する暇も無く反射的に手持ち無沙汰な左手で自分の身を庇う。

そこに盾があつたならいま俺の剣が弾かれたのと同様に音を立てつとも狼の牙を防いでくれただろうが、生憎と現実には盾が無いので当然の如く腕を噛まれる。

痛みは無い。だが左手がぐちゃぐちゃと噛まれ、形と感覚が無くなつていくのが分かる。

右手の剣で再び攻撃を加えようとするが、そこで剣が纏っていた炎が消えているのに気付く。

時間切れ。悪態をつく暇も無く、それでもと剣を振るつたが案の定弾かれる。

だが次の瞬間、狼は苦しそうな悲鳴を上げて、俺の左手を離し、後ろに跳躍して距離をとった。

何事かと見ると狼の右目が無くなっていた。

そして俺の隣にはシアの姿が。それだけでシアがああ狼の右目に短刀突き刺したのだと言うのは簡単に予測がつく。

俺の左手は狼に食われたせいで感覚が無くなり、だらんとぶら下がっている。

HPは現在の状況では確認できないが、まだ全身から力が抜けたわけではないし、剣を掴む右手もまだまだ健在なので大丈夫だろう。

「ニケさん！大丈夫ですか！？」

「大丈夫だ！すまん、助かった」

二人が隣り合わせに立ち並んで狼に向けそれぞれ武器を構える。

一瞬の気も抜け無い。あんな狼の突進スピードからして、もう一度付加魔法を使う暇は無い。だからこそシアも改めて付加魔法を掛け直すといった事はしないのだろう。

だが付加魔法が無ければ、いや付加魔法があつても奴の体表は手下の狼に比べて随分と硬くて通らなかつた。じゃあどこを攻撃すれば。

それは今シアがやったように、これは従来のRPGではなくアク

シヨンの方の知識になるが、ボスが固い時は目や間接の隙間などの柔らかい所が弱点なのでそこを狙うのは、割とよくある攻略法だ。

だから狙うべきは目か口の中、という事になる。

シアもそれが分かかっていてさっきもそうしたのだろう。

シアに視線を送る。シアも同じ様に俺に視線を送っていたようで、しっかりとアイコンタクトが取れた。

俺が右側から狼に向けて走ると、反対の軌跡を描いてシアは左から攻める。

狼は迷いもしなかった。右目が死角になっているにもかかわらず、そちら側に回り込もうとしていたシアを標的に捉え、襲い掛かる。

狼からすれば手下三人と自身の右目を潰したのはシアなのだから、俺よりも憎悪値^{ヘイト}が高いのは当たり前だったのかもしれない。だから俺は進路をやや直線的に狼へととる。

俺を気にしていないというのならこつちとしては好都合だった。

シアの持つ武器は短刀。明らかに武器としての攻撃力は低く、どちらかというと手数重視な武器だろう。対して俺の片手剣は確かに初期装備で攻撃力も低いかもしれないが、一発の威力は短刀よりも重いはずだ。

敵の柔らかい部位を狙って攻撃するならば、手数勝負の短刀より一発が重い片手剣の方が有利だ。

だから俺よりも戦い慣れたシアよりも、今の本命は俺だった。

狼がこつちに背を向け始め、それと同時に俺も片手剣を逆手に持つ。

別に格好をつけてる訳ではなく、斬るのではなく貫く、刺すのならば逆手の方がやりやすいと思っただからだ。

この作戦を成功させるためには、完全に敵の狙いから外れた俺が奇襲として一発で成功させないいけない。

もし攻撃を外してこつちの狙いがばれてしまえば、途端に警戒され隙も無くなり、あつという間に全滅の道を辿るに違いない。

緊張が体を強張らせるが、酸素を取り込んで無理矢理解し、息を

止めた。

戦いは一瞬で決まる。

シアが、さつき俺に襲い掛かったのと同様の狼の食いつこうとする突進を、ひらりと身を擦ってかわす。避けられた事をすぐに察知した狼が、今度は黒光りする鋭い爪が生え揃った前足でシアの体を裂こうとするが、それもまたシアは軽く飛んで避ける。どころかその襲い掛かる前足を足場に再び飛んで狼の上を飛び越える。

俺はもう狼との距離は僅かで、ここで狼が振り返れば目の前に顔が来るであろう距離まで詰めている。

そして狼を飛び越えて狼の背中側、つまり俺の隣に着地し、狼が振り返る動作を見せてから振り返るまでの間に唱える。

「ファイアチャージ
火炎装填」

炎が灯る。もちろんシアの短剣ではなく、俺の逆手に持った片手剣が。

狼が振り返る。その速さからどの辺りにどのタイミングで来るか予測し、剣を構える。

そして炎が貫いた。狼が振り返り向き際に俺のことを認識し、そのまま食い付こうと開けたその大口に。

硬い体に覆われた生き物は、得てして体の体内は脆く、その一撃で凶悪な狼は葬り去った。

体の内から焼かれ、炎に包まれた後、手下の狼とは違い灰のような粒子とならずにその体を残していたが、どうやら動かないようだ。力が抜けてその場に座り込む。元から街での探索でへとへとだった事を思い出し、鞭打って動かしていた体は強制的に休む事を決めたようだ。

シアも同様に、座り込んで空に向け息を吐いていた。そして俺の視線に気がつくと言ったね、と返して来る。

俺の初戦闘にして、シアとの初の共闘。それは少し危なかったが、

なんとか二人で力を合わせて勝つ事ができたのだった。

戦闘の後、RPGでは経験値がいくらだとかの表示があるのはお馴染みだが、このデュアルワールドでは表示は一切無かった。

俺はなんと無しにメニューを開くと俺のレベルから一から二になっっていた。

それに伴いAPも二ポイント入り、片手剣スキルの一番簡単な技だと思われる『スラッシュ』も習得したようだ。その証拠に今まで灰色だったのが白い文字で書かれていた。

とりあえず俺のステータスはそれぐらいで後回しにし、気になったシアのステータスを開く。

今までは魔法の欄は灰色の文字で書かれていて叩いても何も起こらなかった。

だが今シアのステータス画面を開いて見ると、魔法の欄が白くなっていて叩くとシアが覚えている魔法、火炎装填がしっかりと表示されていた。

疑問なのがなぜそれが最初見た時に無かったのか。街中の探索をしていただけなので戦闘はもちろんそんな魔法を覚えるイベントも無かったはずだ。

だとすれば最初から覚えていたという事になるが、それだと表示されなかった意味が分からない。

考えつくのは戦闘中に思いついた、ぐらいだが、まるで勝手知ったるかの如く使っていたシアを思い出し、その可能性を捨てる。

次に思いついたのは、あまり期待できないが、俺が知らなかったからという線だ。

つまりあのステータス画面は全てを表示するシステム的な物ではなく、俺の記憶から作られるプロフィール帳なんじゃないかという可能性だ。

もちろん俺自身のステータスは数字まで事細かに書かれていてシステムのなものは間違いないが、仲間に関しては違う仕様と考えるとどうにか説明が付けれる。

それを証明するためにも俺はシアに話しかける。

「あれ、凄かったな。知らなかったよ、シアが魔法を使えるなんて」「ごめんなさい、言っただけで勝手にしたね……」
「いや、いいよ。そのおかげで勝てたんだし。他にも使える魔法とがあるの?」

「ええ、初歩的な回復魔法ですが……。あ、ニケさん左手、大丈夫ですか?」

「うん。動かないけどとりあえずは……」
「ちよつと待つててください」

そう言っただけでシアは重そうな体を起し、俺の近くまで来てまた座る。左手を持ち上げられてシアの右手がその上に翳される。

横目に開いたままのシアの魔法の欄を見るが、まだ火炎装填のみだ。

シアが呪文を唱える。

「ヒールドロップ」
「癒水」

シアの翳された右手から水滴が一滴垂れて俺の左手にぶつかったかと思うと、水滴が触れた所から淡い青色の光が左手を包んで輝く。再び横目で見た魔法の欄にはしっかりと癒水と刻まれていた。

可能性の低かった推測は見事的に射ていたという訳だ。

謎も解け、シアの回復魔法のおかげで左手の感覚も戻ったおれは改めてシアにお礼を言う。

「ありがとな。こんな回復までしてもらっちゃって」

「気にしないでください。私達はもう仲間なんですから……」

「そう、だな。ごめんな」

「いえいえ」

なんか仲睦まじいやり取りを繰り広げる。気が付けば開かれたままのメニューの端っこにあるデジタル時計が、そろそろ五時ぐらいを示そうとしていた。

今日はバイトも休みにしたので一日中やるつもりだったが、晩飯の準備なんかもあるのでここで一旦落ちないといけない。幸いまだ時間があるので今度は中断ではなくセーブしてやめよう、とか考えていたが、その前に目の前に転がったままのあのリーダー格の狼が気になって仕方なかったのでシアに尋ねて見る。

「あれって何で手下の狼みたく消えないの？」

死体に指差し、シアに聞くと、少し見開いて、それから落ち着くように息を吐き、それから普段と変わらぬ顔に戻って、説明をしてくれた。

「あれは魔物の死体クリーチャー corpseって言って、あれから素材を剥ぎ取って売るとお金になるんです。冒険者の代表的なお金を稼ぐ手段ですね。えっと、外街にあつたお店覚えてますか？」

「ああ、なんか無駄にでつかいところだったかな。名前は……クリーチャーズコレクト」

「そうです。あそこに死体ごと持っていくと、解体などをやってくれるんです。武器とかに素材を使いたい場合は解体だけしてもらって素材を受け取る事もできます」

「へえー、じゃああれも持ってった方がいいんだよね」

「そうですね。損にはならないですから、出来る事なら持ち帰った方がいいです」

そう言われておれは重い腰を上げた。急に起き上がって襲い掛かってくるんじゃないかと内心ビクビクしながらその死体に近づく。

そして四次元ポーチこと、最初から腰についていたポーチへ入れようと試みると、案外素直に入ってくれた。

アイテム欄を確認するとそこには『ウルフリーダーの死体』と書かれていて、確かにアイテムとして収まっている事を確認した。

そして振り返るとどこかで聞き覚えのある声が耳に届いた。

もう一度、振り向くとそこには見覚えのある紫色の体表の狼たちを従えて、今倒したばかりのウルフリーダーがこちらを睨んでいた。

俺とシアは戦う事を選ばずに、一目散に逃げ出した。

逃亡戦

街を見下ろす事の出来る丘から、新たに出現したウルフリーダーから逃げるために全力疾走をしていた。

街を数時間歩き、疲れ果てて休憩している所に四体の狼を連れた一体のウルフリーダーが現れた。シアと協力し何とかこれを倒して一息つき、戦闘の余韻に浸っていた。ここまでは良かったのだが……。

「……ハア……で、どう、する……！」

丘から街に入るまでは相当な距離がある。その道中は折り畳まれたような通路が延々と続き、百八十度曲がるカーブで追ってくる狼達を牽制して何とか距離を稼いでいるが、やはり総合的に見ると直線の方が距離は長いので、直線的なスピードではまず敵わない狼達に距離を詰められてしまう。

「……まずは、手下の方を、叩きましょう。……奴等なら、ファイアチャ火炎装填イッを掛けたニケさんの、一撃で……倒せます」
「……それは、つまりあと、一回しか掛けられない……って事、かな？」

二人で、では無く俺にと言うことはつまりそういう事になってしまふ。それが悪いとも言う気は無いし、仕方ない事は分かっている。MPには限界があるのだから。

息も切れ、足も纏れそうになるが、それでも必死に走りながら作戦を練る。

死ぬ、という事に関してゲームだから怖くないと言うのは無かった。

それはVRゲームという現実に近い環境だから本能的に怖いというのもあるし、ゲーム的に考えれば、死んだ時のデメリットが未だにはつきりしていない分、何が起こるかわから無いから怖いのもある。

……後は心情的な問題もあった。俺がシアがやられる様を見たくはない。

「……そうです。多分、あと一回が……限界です」
「そうか……」

このままジリ貧の逃亡劇をいつまでもやっていったって追い詰められるだけだ。

ならいつそ抵抗した方がまだ生き残る可能性は高い。

「シア、次でッ……」

剣を振る。曲がり角から頭を出した狼を叩き、吹き飛ばされた狼がさらに別の狼とぶつかり、全体の動きを阻害する。でも今回は狼を叩き、前へ振り返った所で吹き飛ばされた狼とは別の狼が曲がり角を曲がって走ってくるのが見えた。

完全に体が前へ走ろうと向いてしまっているのに、狼の足の速さからして、今から再度振り向いても剣が間に合うかは分からない。でも何もせずには後ろから後頭部でも齧られるのは流石に嫌だったので、迎撃しようと体を再び傾けた時、不意に何かの影が通った。

「りよう、かい……です！」

滑り込んできた影はシアだった。ご丁寧に俺への返事まで添えて。シアはどうやらスピード型のようで。足の速さもシアの方が早い。だから俺が後方を勤めていたのだが、俺が止め切れなかった狼をシ

アが斬り飛ばし時間稼いでる間に、俺と並走するシアが付加魔法を唱え、その瞬間俺の剣は炎に包まれる。さっきの戦闘から推測するに効果時間は一分ぐらいか。

それまでに決めなければ博打のような逃亡劇をするしかない。腹を決め曲がり角に滑り込む。

右手に持つ剣を左肩まで絞り、体も捻って待機する。数秒もしないうちに懲りずに追ってきた狼の鼻先が見えた。そこで最大限の力で剣を半円を描いて切り込む。

並走していた二匹をまずは焼き払い、勢いのまま壁に衝突した衝撃を押さえ込み、次に備える。

馬鹿見たく学習能力の無い狼は再び並走してくる。それをさっきと同じく迎撃し、今度は残った親玉ことウルフリーダーを討つために、曲がり角から一気に飛び出す。

十メートルほどの通路の丁度真ん中辺りに標的の姿があった。

黒味がかかった紫色の体表、頭の上のこげ茶のたてがみは間違いなくウルフリーダーの姿だ。

だけどさつきとはつきりと違う箇所があった。

先程倒したウルフリーダーの目を、シアが目潰した事で注目したのもあってちゃんと覚えていた。しかし、今この対峙しているウルフリーダーには俺が知っているウルフリーダーには無い、目に古傷のような物があった。

それは、丁度シアが潰した場所と同じ右目に、x印で確かに刻まれている。

それに一瞬気を取られるが、今は一刻も争う事態なので些細な事だと思いを捨て、同時に足に力を込めてウルフリーダーへ一直線に向かう。

ウルフリーダーも俺を認識すると猛然と突っ込んできながら、その大口を開ける。

それに合わせてこちららも炎の剣を合わせ、その口へ吸い込まれるように突いた。

それでさつきと同じ様に倒せる、はずだった。

俺の体が思い切り引つ張られ、そちらにつられてしまう。もちろんピツタリと合わせていた剣の照準もズレて、ウルフリーダーの口を狙っていた剣は、右前足の辺りに吸い込まれる。

ウルフリーダーを倒すのを妨害したのは一人の少女。

言うまでもなくシアだったのだが、それを何故か、と聞く前に俺の剣がウルフリーダーの黒ずんだ紫色の、付加魔法を掛けた剣でさえ弾き返してしまうその体表に、深々と傷を付けて、そこから炎が伝い、ウルフリーダーの体が燃え盛る。

起きた事実と自分の頭の中での想像が相反し、体が固まり、声が出てしまう。

「なん、で……」

ウルフリーダーは炎に包まれながら断末魔を上げて、死体へと変わった。

本来ならそれを手放して喜んで、辛くも勝利する事で得る事の出来た二つ目のウルフリーダーの死体を四次元ポーチに放り込むところなのだが、今は力なく立ち尽くし、炎の消えた剣を収める事すら忘れて、呆然と死体を見ているしかなかった。

「危なかつ、たー……」

隣では流石に疲れきった顔を隠せないシアが俯きながら立っただけで、膝に手をつけてその体力を少しでも回復させようとしていた。

「シア、なんだ今の……」

普通なら弾かれる所が、まるで弱点のようにそこに攻撃が当たっただけで倒すことが出来た。

それを意図的に行ったのは間違いなくシアだ。だから何故あのウルフリーダーを倒すことが出来たのか、知っているのもまたシアなのだ。

とうとう力尽きてシアはその場座り込んでしまった。MPももう無いと言っていたし、相当疲れているのだろう。でも俺との会話はする気らしく、疲れきった顔に笑顔を貼り付けてさつき俺が呟いた事、俺が今思っている疑問に答えてくれる。

「あれは……ウルフリーダーなんですけど、特殊なんです」

「……特殊？」

「はい……。目の所に傷がありましたよね？」

「ああ」

俺が一瞬気を止め、些細な事だと気にしなかったあの傷が何かの証なのだろうか。

「あれが通常とは違う種である事を表していて、その固体は姿形は似ているんですけど性質が大きく異なるんです。普通のウルフリーダーが体表が硬く、内部が弱点なのに対して、あの変異種、冒険者の人達の間ではデュアル種、もしくはD型と呼ばれている固体は、内部ではなく外部が弱点なんです。だからニケさんの剣が体表を斬って勝つ事ができたんです。……ニケさんが飛び出してから気付いたので少し遅くなってしまうんですが……」

「そう、だったのか……まあ、結果オーライって事で、シアが気にする事じゃないよ」

通常種に加えて亜種のようなものまで居て、しかも対処方法があれだけ違つとなると今後も戦闘に際して苦労しそうだ。……でも、それでこそ楽しみがある。

シアには助けてばかりで知識も教えてもらってばかりで、なんか

悪い気がして謝罪と御礼をしたが、あの時の恩に比べれば、なんて言われてしまつて丸め込まれてしまう。

忘れずにD型ウルフリーダーの死体を四次元ポーチに投げ込み、少し休憩して歩けるだけの体力を回復させ、今度はゆっくりと蛇腹の通路を二人で降りていく。

休むために

ようやく街に着いた。

街の唯一の出入り口である門を南、城を北だとすると、北西の位置にある街を見下ろすことが出来るぐらいの丘とその通路で、二度の死闘を繰り広げ、ようやく帰ってきた。

街の喧騒がどこか懐かしく感じ、身に染み渡るものを感じた。だが街はもう日が落ちる事もあって昼間よりは人が少なく、あちこちにあった露天はもう店仕舞いの用意をしている。

メニューを開くと現実時間がもう五時過ぎを示していて、俺もそろそろデュアルワールドをやめて晩飯の準備に取り掛からないと本格的にまずい事になる。

本当は街の探索が終わってから、すぐにもセーブしてやめる予定だったが、予期せぬ戦闘を二度挟み、かなり体も疲弊してしまっただために、元から予想していた時刻よりもだいぶズレた時刻にこの街に帰ってくる羽目になった。

もちろんそれなりの収穫はあった。レベルは二度目の戦闘でD型ウルフリーダーとその手下を倒した事で二から三に、APも使う間アビリティポイントも無く四も溜まっている。

残念ながら今回はスキルを覚えなかったが、流石にレベルが上がる度に覚えるつてのは無くて当たり前と言っか、珍しいというか。だから特に気にしなかった。……：：：：そういえば俺二度目の戦闘で折角覚えたのに『スラッシュ』使わなかったな。まあ、あの時は口の中を狙って突いていたから、覚えていても使おうとは思わなかっただろうが。

街に着いた俺はまずセーブできる所を探す。晩飯の後も再びやる気ではいたが、もしこのまま不慮の事故で電源が切れてしまっっては今までの時間がそのまま無駄になってしまっ。

そしてセーブで思いつくのは、教会か宿屋。でも街を探索した時

に教会にそういった機能が無いのは確認済みなので、宿屋にまずは足を運ぶ。内街イントウンか外街アウトタウンかはまだ決めてないが正直セーブ出来るならばどっちでもいいというのが本音だったりする。

「シア、この辺で一番近い宿屋つてのはどこだろう？」

「この辺なら、……コクカテイ黒香亭ですけど……内街の中でも結構高級な部類に入りますよ？」

正直、高級だとか低俗だとかそんな事は気にしてなかった。質ではなく早く休みたい、早くゲームを終わらせたい。そんな気持ちがある今一番心の領域を占める思いだった。

だから別に高かるうがなんだろうが近くあるのならそれでいい、と言おうとした所で自分が重大な見落としをしている事に気がついた。

「あ、無理だ……」

「あ、気がつきましたか？」

「わかってたの？」

「えっと、……はい」

疲れなど忘れて悶えた。確かに街の探索中にシアに「今は文無しだから次に来よう」とは言っていたが、肝心な言った本人が忘れていて、言われたほうがしつかり覚えている。しかもそれを指摘された日には穴があいたら入りたい気分にもなるが、生憎穴らしいものは無いので悶々とした感情の行き場を失い、結果、路上で悶えるしかなかった。

一通り悶え終えた後、俺は実に簡潔な解決策をシアに提示する。

「換金しに行こう」

「……はい」

笑顔で返してくれるシアだったが、やはり疲れが見えるので早く休ませてやりたいという気持ち芽生える。……もちろん俺も休みたいのだが。

そんな訳で近くにある黒香亭には悪いが、今は外街にあるクリーチャーズコレクト、CCへ重たい足を引きずりながらも出来る限りの速さで向かうのだった。

重たい足で十分も歩くと外街の名物、というかフィルストを象徴するような対魔物用の門が見える。そこからさらに五分くらいの道程を歩き、やがて門に劣らない大きさの建物へとたどり着く。

看板にはCCと書かれていて、きっちりしているとはいえない外装で、所々塗装が剥げたりしていたりもする。

そんな少し小汚いCCの建物に俺とシアは足を踏み入れる。黒の両開き扉は見た目に反して押すと簡単に開いて、もしかしたらこのドアも壊れかけなんじゃ……と思わせる。

ドアをくぐるとまずは結構な人数が一度には入れそうなロビー、左手には壁に沿って階段があり二階にも行けるようだ。今は用が無いので行こうとは思わないが。

ドアをくぐりそのまま真っ直ぐに進むとカウンターがある。部屋の三分の一は占めているカウンターでは何人かが窓口立ち、その後ろではなにやら慌しく働いてる人達の姿も見える。

後ろを歩いていたシアにどこで換金するのか聞くと、小さくカウンターで言えば大丈夫、と答えるのでそのまま進み、一番近い所に居る受付の人に話しかける。

お姉さん系のすらっとした人がこういう受付を担当しているのが大体のゲームでの有様だが、見事に正反対の三十台後半と見られる顔と筋骨隆々でごつく、その黒く焼けた肌は間違いなく外で働く人間の証拠で、こんな所で事務的な受付を普段からしてるとはとてんじゃないが思えなかった。

しかし対応は実にスムーズで、多少馴れ馴れしい所もあったが、

気さくなおっさんだと思えばなんて事はなかった。

「すみません、クリーチャーコープスを換金したいんですけど」

「ん？ お前さん、新人か？」

「……はい、そうですけど」

「そうかそうか。いや別にお前さんに文句があるとかじゃないんだ。ただこの義務として、最初に訪れた冒険者つてのには説明しなきゃならん事が山ほどあってなあ……って、後ろの人は……シアか？」

前半部分の説明を真面目に聞いてただけに、突然飛び出したシアの名前に呆気に取られる。

なんでここで急にシアの名前が出るのかは分からないが、この受付のおっさんがシアの名前を口に出した事から少なくとも知り合いである事は分かる。

当の本人のシアは俺の後ろに隠れていたが、少し経っても会話が進まずに、自分に視線が注がれているのに気付いたようで観念してその体を俺の後ろから出す。

「どーも……ガランさん。お久しぶり、です……」

「おお、やっぱりシアか。どこほつつき歩いてるかと思えば、男でも捕まえてたのか、成る程成る程」

「違います！」

俺の後ろに隠れてた割には元気よく挨拶をしていたが、ガランというこの受付のおっさんの年齢特有の冗談に、まともに返事をしてる辺りシアの性格も出ている。

「お二人は知り合いなんですか？」

「ん……？ ああ、つい……一ヶ月前だったか。それまでうちで働いてたんだが、書き置きと共に姿を消しちまってなあ。てっきり他所

にでも行つたかと思えば……」

シアの言っていた働く場所とはこのことだったのか、と思い返し、そこから出て行つた経緯は、おそらくあの騒動の発端となった、子供達の事を知つたからだろう。

シアの性格を鑑みるに迷惑を掛けると思つたから何も言わずにここを出て行き、その後はまさに体当たりの行動をしていた訳だ。

俺の後ろに立っていたシアは一步踏み出し、改めて俺の隣に立つた。

そしてその頭を俺にしたように、深々と下げるのだった。

「ごめんなさい！私の身勝手に……」

「……なあに、気にする事はねえさ。確かにあれだけ働いてた優秀なシアが突然居なくなつて慌てたが、それぐらいで致命傷になるほど俺らはシアに負担掛けてた訳じゃないと思つてる。それにシアが自分の意思で出て行つたんだ、それを引き止める訳にも行かないだろう」

「……ガランさん」

二人の意味深な会話についてシアの過去の事とかを聞いて見たい衝動に駆られたが、あまり無理に聞くのも悪いし、何より今は急がなきゃならない。

二人の間でなにやら気まずいやらほんわかしてるのかよくわからない空気が流れるが、俺はそれを遠慮なくぶつた切つて話を進める。

「それで……」

「おつとすまん。懐かしい奴にあつたとは言え、仕事は仕事だ。きつちり説明させてもらう。……んだが、シアから何も聞いてないのか？」

「いえ、ここにクリーチャーコープスを持ってくると解体やらなん

やらをやってくれる、というのは聞きました。が詳しい事は……」

「そうか……それじゃ、シア、お前から説明してやれ」

「え！わたし、ですか……？」

「これも黙って消えた罰って事だ。『マニュアルの天使』様なら大丈夫だろう、これで許してやるよ」

「その呼び方はやめてください！ もう……」

おっさんこと、ガランさんがその顔に笑顔を浮かべ、シアに此処、ココの説明を、これもまた冗談だろうが罰として強制する。……いやほんとに罰なのかもしれない。あのぐらいの年のおっさんがシアぐらいの年齢の子を、娘のように可愛がっていても何らおかしくないし、そうだとしたら今まで親のような気持ちですっと接してきていつかは別れも……、とは考えていても、それが急に居なくなつたとすれば少なからずショックはあつただろう。だから、今こうして顔を見て、無事で居る事がわかって、ほっとした。だから、心配を掛けた事に対する罰。

とは言えこれ以上俺が無為に二人の過去を詮索するのは良くないだろう。シアもこれからココの説明をしてくれるようだし、二人の間柄の詮索はやめ、シアに向き直る。

「えっと、……」ここクリーチャーズコレクトでは冒険者様による魔物の死体、クリーチャーコープスをお預かりし精査、後にその質量、レート等に応じまして金額を算出し、冒険者様に提示。納得いかれましたら受付でサインをしてもらい、冒険証の提示での本人確認を終えた後、その金額が支払われます。それ以外にも武器や防具などに魔物の素材が使いたい場合、その旨を伝えていただければその素材自体をお渡しする事もできます。もちろんその場合はお渡しする金額は減少しますし、素材全てをお求めする場合は手数料を払っていただきます……です」

「流石、一ヶ月も仕事しなくても、一字一句間違えないでよく覚え

てるもんだ」

何だか事務的な説明だと思ったら、ガランさんの発言から本当に推測するに本当にマニユアルっぽいらしい。

だからマニユアルの天使、か……。確かに説明としては凄くしつかりしていて分かりやすかったし、つかえる事も無くまるで当たり前のように長文をスラスラと読む様は、シアの可愛さも伴ってマニユアルの天使の名に相応しい仕事っぷりだ。シアのその様に驚きと賞賛を送りたい気持ちがあったが、今はそれよりもさっきのシアの説明の中で必須らしい話をしておきながら、俺が初めて聞いた単語があった。

だから説明してくれたシアにお礼を言い、気になった単語についてどちらとも無くぶつける。

「……冒険証って何ですか？」

俺の質問に二人共が一瞬目を丸め、その後取り繕ったように顔を戻し、俺の左手を二人揃って注視する。なんだろう、と俺もそこに視線を移すと左手首にあるのは金色か茶色がよく分からない色合いのリングで、色の無い宝石みたいに輝く物体がはめ込まれている。もしや、と思い手首にあるそれを顔の横まで持ち上げると二人の視線も一緒に移動し、半ばそれで確信は出来ていたが、最後の念のための確認に二人に聞く。

「……これ、ですか？」

二人ともが頷いた。何だか恥ずかしくて顔が真っ赤になりそうになるが、自分に仕方がない事、仕方がない事と言いつけてクールダウンさせる。ともあれ換金に必要なものは揃ってたし、さっきのシアの説明で分からないところも無い。これで換金に関する知識は全て

揃った。

さっきの恥ずかしさをまだ引きずっていたのを乾いた笑いで誤魔化し、俺は取り繕ったように改めてガラランさんに換金をお願いする。

「よし、それじゃあここにコープスを出してくれ。最初から換金って事は素材類は持ち帰り無しって事でいいんだな？」

一瞬迷う。確か武器や防具にも使えると言ってたから、序盤で装備が心許ない今、魔物の素材で武器の一つでも作れば……、と考えるが結局首を縦に振って全てを換金する事にする。

四次元ポーチへ手を突っ込み、ウルフリーダーの死体を思い浮かべながらポーチの中身を掴み、引きずるように取り出す。現実ならどうやって入ってたのかと驚く所だが、リアルに中々こだわってるデュアルワールドでもここらへんの仕様は従来のゲーム的なものと何ら変わらない。

完全にリアルを再現しようというわけではなく、元をただせばゲームに過ぎないのだから。

まず一体のウルフリーダーの死体を取り出し、カウンターの上に乗っけて、俺が再びポーチに手を入れた事でまだあるのだろうと思ってくれたのか、ガラランさんが自然な動作で最初に取り出したウルフリーダーの死体を少し横に退ける。

俺は再びウルフリーダーの死体を取り出し、カウンターの上にある最初に出したウルフリーダーの死体に半分ほど重なるように置いた。同じウルフリーダーの死体とは言え、二つ目に取り出したのはD型のウルフリーダーの死体で、普通のよりは多少値段が上がると思われる。

その証拠に俺がそれをカウンターに置き、死体の顔、右目の所に刻まれたD型の証である傷痕を見たガラランさんの目が見開き、感心したようなため息を吐いたからだ。

「初心者のかせに、一体以上持ってきた上にそれがD型とは……こりゃこの先が楽しみだ」

「まあ、ほとんどはシアのおかげなんですけどね」

自嘲気味に笑うと隣に立つシアが何だか凄く慌てた様子で叫ぶ。

「そ、そんな事は無いですっ！ニケさんが居なかったら倒せなかったですし、わたし一人の力程度じゃ……」

「ニケ、って言うのか……シアは強かったろう？」

「ええ、そりゃもう。俺よりよっぽど冒険者って肩書きが合うんじゃないかってぐらいに」

「ははは、ここにいる時に護身術代わりに最低限の戦い方ってのを叩き込んだからな。駆け出しよりは強くて当たり前だな」

必死に講義するシアを余所に、俺とガランさんとそんな会話を交わす。

通りであんなに強いわけだ。俺と会話をしながらも慣れた手つきで後ろに居たこの従業員らしき人に、俺が取り出した二体のウルフリーダーを持って行かせる。多分、これから精査が行われるのだろう。

とか思っていると放っておかれたシアが泣き出しそうな顔をしていたので、その頭に手を乗っけてそっと撫でてやる。シアは恥かしそうに俯いたが、心地いいのか振り解くような事はせずに黙っていた。

「……まるで兄妹だな」

「あ、やっぱりそう思います？俺もそんな気がしてたんですよ」

そんな事を言い、シアの頭を小気味よくポンポンと叩く。

シアは相変わらず俯いていたが、今のでさらに顔を真っ赤にしている気がしないでもない。だからと言ってやめる気は毛頭無かった

が。

するとガランさんが大きく笑い、俺に言う。

「シアを頼むな。この先も……」

「むしろ俺が世話になるかも知れないですけど、ね」

俺も同じくらい大きく笑い返してやる。言葉に隠した意味をガランさんはしっかりと受け取ってくれたみたいで右手の拳を突き出してくる。

俺もそれに答え右手の拳を差し出し、ガランさんの拳にしっかりとぶつける。大きさは明らかに釣り合っていないが、そんなのは関係なかった。

そして少しの間そうしていると突然ガランさんが後ろを振り向く。

そこに居たのはさつきウルフリーダーの死体を持っていった同じ人で、その手には死体ではなく何枚かの紙の束を持っていて、それをガランさんに手渡すとそそくさと奥へ消えていった。

どうやら精査、と言うものが終わったらしい。あの紙には換金に関する情報が書かれているに違いなかった。

無言で真剣な目つきを紙に向け、静かに捲っていく。

「ふん……まあ妥当な所か。ほら、これが換金する際の精査要素が書かれた紙だ。後学のために見ておくといい」

そう言って紙の束を俺に渡してくる。それを受け取り一番上の紙の一番上から目を通していく。

そこには死体の損傷具合などの項目がずらっと並び、それぞれにプラスやマイナスが書き込まれている。わかりやすいのは、一体目のウルフリーダーの死体をシアが右目を潰したのでその分マイナスになっているところか。

しかしこうなるなるべく無傷で敵を倒さないと、コープスを持

つてきてもたいした金は入らない事になる。それはただ力だけで圧倒するのも駄目って事で、これから金を手に入れたいと思っただら多少でも作戦を考える必要があるそうだった。だが、いざとなればそんな事に構っている暇も無くなるのだが。今日のウルフリーダー戦でも、正直ギリギリ過ぎる戦いだっただ。

紙に一通り目を通し、ガランさんに返す。

そのついでに紙の最後の方に書かれた単語の意味を尋ねる。

「ありがとうございます。あと、レートって何ですか？」

「レートってのはクリチャー単体の相場価格って言えばわかるか？ ウルフリーダーのレートは今日は約千、D型は三千だ」

「なるほど……」

相場って事は市場があるって事だが、OPで見た他の街々と連携して形成でもしてるのだろうか。詳しい事は分からないが、ようは日によってクリチャー単体の価格が変動するって事でレートはその価格の事を指してるのだと、噛み砕いて理解しておく。

「合わせて四千二百コラムだな。詳細は見せた通り。これで大丈夫か」「大丈夫です。お願いします」

ガランさんは一瞬仕事の顔になり、再びさっきまで気さくなおっさんの顔に戻る。

ガランさんに促されて左手首の冒險証を差し出す。確かに、と言ってガランさんはカウンターの下からお金を取り出し、差し出したままの俺の左手にお金を握らせる。

現実の日本の通貨と似たような感じで四枚のお札と二枚の硬貨。もちろんデザインは違っし、百円玉の変わりは金色の硬貨だ。

それをどこに入れようか迷ったが、財布らしい装備は無いのでとりあえず四次元ポーチへ放り込む。

「これで換金までの一通りだ。大丈夫か？」

「はい、ありがとうございます。今後も世話になると思いますがよろしく願います」

「こつちこそ、大物頼むぜ」

ガランさんの大きくこつちい手と硬く握手をして、ここを出る。

後ろでシアが再びガランさんに改めての謝罪と別れの言葉を告げていたが、俺が関わる場所ではないのでそのままドアを開けて外で待つ。

シアが外へ出てくる僅かな間にメニューを開く。所持金の欄には先程受け取った四千二百Cがしっかりと刻まれていて、あれで良かったのかと思わせる。それとは違う画面の端に現在時刻が表示されていて、もう六時近い。まずいなあ、とは思うがもうすぐでセーブが出来るので、中断は選ばずにそのままいる事に決めた。こういう時にあとちょっと、あとちょっとって思ってしまうのはやはりゲームに毒されているからなのか。

開いていたメニューを閉じると、丁度シアが扉を開き出てくる。元から目的は分かっていたので、シアは俺が何も言わなくても的確な言葉を掛けてくれる。

「ここから一番近い宿は、『^{ナクツバキ}哭椿』ってところですね」
「よし、じゃあ行くか」

シアが俺の一步前を歩いて道案内をしてくれる。俺は情け無いながらもそれについて行き、五分もするとその哭椿という宿にたどり着いた。

石造りでしつかりと手入れも行き届いてるようで、少なくともCよりは外見が綺麗だった。

哭椿と書かれた看板がドアの近くに垂れ下がっていて、なんだか

いい雰囲気を醸しだしていた。

扉を開け、シアと共にくぐると待ち受けていたのはガリガリな、下手するとシアよりも細いんじゃないかと思わされる青年だった。年の頃は俺と同じくらいだろうか。

「ようこそ、哭椿へ。本日はどのようなご用件で？」

「えっと、休みたいんですが……」

「一部屋、二部屋、どっちですか？」

一瞬戸惑った。NPCとはいえ現実そのもの見たいなものなのに、女の子と一つの部屋で寝るのは。俺は……まあいいんだが、問題なのはシアの方だ。今日初めて会った男と同じ部屋で寝るのは流石に抵抗があるだろう。だから俺は多少の出費は覚悟して二部屋を示す、二本指を立てた右手を上げた。元はといえばシアの存在がなければこのお金も無かったような物なのだから、シアのために使った所になにもおかしい所はないのだし。

だが俺の上げようとした右手をシアの手が押さえ、代わりに少し大きめな声で一部屋、と宿屋の店主らしき青年に宣言するのだった。俺がそれに驚き、何か言おうと言葉を頭の中で考えてる間に、青年が薄く笑い話を進めてしまう。

「かしこまりました、一部屋ですね。それでは宿帳を付けさせて頂きますのでお名前をよろしいですか？」

「あ……ああ、えっと、二ヶ、で」

「二ヶ様、以下一名様、本日はご利用頂き有難うございます。こちらがお部屋の鍵となります。お部屋の位置はあちらの案内板に書かれておりますので、鍵の部屋番号と照らし合わせてお向かいください」

青年は流暢にそう言って鍵を手渡してくると、二回へ続くと思わ

れる階段の近くにある案内板を指差す。そしてごゆっくりどうぞ、
と言うと顔に笑顔を貼り付けてその場で佇むばかりだった。

なんだか抗議を唱える間も無く押し切られてしまったが、やっぱり不安なのでシアにいいのか？ と小さく聞くが、先に部屋に行きましようとなんだか怪しい笑顔で言うばかりで、取り合ってくれなかつたので仕方なく階段を近くの案内板に目を通し、鍵番号の二番の部屋を探す。案内板によると二階に上がって通路の一番奥の通り側、つまりはこの宿の入り口側の部屋に二番と割り振られていた。

階段を上り、奥の部屋、二番の部屋へたどり着く。鍵穴に鍵を通し回す。ガチャリと鍵の開いた音がしてから鍵を抜いて、ドアノブを回す。割り振られた部屋はしっかりと清掃も行き届いていて、シアに言われたような汗臭い冒険者達がとりあえず泊まるには少しもつたないくらいだった。そして、案の定ベッドは一つ、何とか二人は寝れそうだがおそろくはぴったりくつつかないとどちらともなく落ちるだろう。柵も無い白いシーツの様な物が何枚か掛けられただけの布団は明らかに二人では狭すぎる。

これ、どうするんだろう、とか思いながらも、さっき店主が宿帳を付けてくれた事を思い出し、セーブがおそらく完了している事にほっ、として、次に繰り広げられる展開に目を背けながらもメニューの中断を叩くのだった。

宿屋、哭椿

失った感覚が体に戻ってくる。疲れきっていた体は現実の体に戻った瞬間に嘘のように無くなっていった。だから、重たかった仮想の体に慣れていた感覚のせいで、現実の体が嘘見たく軽く感じられて、なんだか気分が良かった。

VRGを頭から外し、ベッドの上に無造作に放っておく。

頭の中でこれからあの状況をどう打開しようか考えるが、空腹感からかうまく思考がまとまらない。

部屋に置かれた時計を見ると、もうほとんど六時としか言えない六時前を指していた。

ベッドから妙に軽くなった体を起し、部屋のドアへ向かい、デュアルワールドでの出来事は一旦置いておき、とりあえずは今日の夕飯の献立を考えるのだった。

晩飯も食べ終えて再び自分の部屋に戻ってくる。VRGを被ってVRボタンを押そうとした所で画面端の電池残量を確認、昼前から続けてやってた事もあり充電が半分を切っていたので、箱から充電器を取り出しセットする。

充電されている事を画面上で確認し、今度こそVRボタンをしつかりと押す。

落ちる感覚と共に意識が途絶え、デュアルワールドで目を覚ます。状況は確か、死闘二回潜り抜け、その疲れを癒すためにも宿屋に泊まろうとしたが、文無しだったために魔物の死体をC_クC_{ロム}で換金し、この世界の通貨であるC_クを入手。それを使って近場の宿屋「ナクツバキ哭椿」で部屋を二人いるのに何故か一部屋だけを借り、そこに足を踏み入れた所で途切れている。

復帰した俺を襲ったのは、まず全身の疲れと主に足を中心に感じる重たい感じだった。

そういえばこっち、デュアルワールドではこんな状態だった。だ

からこそなんとか宿に泊まろうとしていた事を思い出す。

本当に一室といった感じの部屋の窓側にはシアが立っていた。両開きの窓を開け放っていて少しの風が部屋の中へ流れ込む。窓辺に立ち、外の通りを歩いている人達を眺めているようだった。

シアの隣まで歩いていき、シアが見ていたものを見ようと同じ様に窓辺に立ち外へ目を向ける。

それに気付いたシアが一瞬こっちを見るが、何も言わずにまた窓の外へ向き直る。

風が頬を撫でる中なんとなく呟く。

「……なに、見てたんだ？」

シアの表情は何も変わらない。ただ何かの感情に浸ったような遠い目で、通りを少し慌てた様子で歩いている冒険者達の流れを眺めている。

「……私も、あの人達と同じ舞台に、立てたのかなあ、なんて思いました」

「冒険者に憧れてたのか？」

「……はい。ここで働いてる時に色々な冒険者の人達と関わって、色々な話を聞いて、外に憧れていました」

でも、とシアは続ける。憧れながらも冒険者としての道を選ばなかったのは、冒険者となればここにいづまでも居るわけにはいかなから、それはココの皆を裏切る事になるんじゃないかと。折角拾ってくれて、仕事までくれたのに、それはあんまりじゃないかと。そんな想いを話してくれた。

「でも結局、感情的に行動してしまっただけですけどね……」

自分を嘲笑うように、そんな言葉を吐いてシアは笑った。儂く消えそうな、今にも泣きそうな、そんな顔をするシアの頭に手を載せ、これでもかというくらいくしゃくしゃにしてやる。

抵抗する気配もなくシアはただそれを受け止めていた。

「終わった事は気にするな。ガランさんも気にしちやいなさ。シアに比べたら付き合いなんて無いようなものだけど、そんな事をいつまでも気にするような人じゃないってのは分かる。むしろいつまでもシアの方が気にしてたら、ガランさんも素直にシアが帰ってきた事を喜べないだろう?」

「……そう、ですかね」

そつだ、と返事する代わりに再び頭をくしゃくしゃにしてやる。

今度はしっかりと抵抗の意思を示し、元気が出てきた事を窺わせる素振りをする。

シアの元気が出て来たところで、肝心で重要な一つの疑問をぶつける。

「シア、そういえば何で部屋を一部屋にしたんだ? 明らかに二人で寝るには狭いぞ」

「えっと、それは……その、まだ駆け出しですし、あの、……資金も出来る限り節約しないとイケないかなー、と思ひまして……他に他意はないです、はい」

窓から差す夕日のせい顔は赤く、俯いてるせいで表情は見て取る事ができない。

そういえば今現在のデュアルワールドで夕日が出るような時間だという事は、ここの時間軸は現在時刻と連動しているという事になる。……などと余計な事を考えてお茶を濁して見るが、これは、あれか。……そうか。しかし一つ気がかりな点がある。だがそれも実

際にやってみればわかるだろう。

「そうか……ならいいんだが」

「今日は疲れましたし、私はお風呂に入ってきます、それでは！」

言うが早いかシアはすぐに部屋を飛び出してしまった。……しかし風呂もあるとは中々現実感溢れるゲームだと改めて感心せざる終えない。戦闘などの面が現実味を帯びているのは、より現実に近づけるため、緊張感をもたせるためだという事は分かるが、生活面で現実に似せる必要があるのかといえば正直必要ない気もするが……。でも確かに本来のRPGではシナリオがあつてそれに沿うように進んでいくが、このデュアルワールドでは『砕かれた星の命の欠片』集める事だけが目標と定められ、それ以外は何も決められていない。つまり、その目標に至るまでの道程を自分で決めていくしかない訳だ。

だから全ての自由度を上げるためにも、生活面の充実も欠かせない要素なのかもしれない。

一人部屋に残った俺は特にする事もなく、重たい足を休ませるためにベッドに腰掛けた。

パタパタと動かす力もなく、座るだけのつもりが腰掛けた途端に全身の力がベッドまるで吸われたように抜け、そのまま横たわる。

体に力が入らない。それだけ体自体が疲弊していたのだろう、動かさそうと言つ気すら起きない。

ああ、そういえば俺も風呂に入れば少しは疲れも取れるだろうか。現実ではあの疲れた時に入る風呂には何とも言えない染み入る感覚があつて、結構気分的にも肉体的にも疲れが取れる。

もし、生活面も現実に近いものを再現しているのなら、もしかしたら、とも思わないでもない。

とはいえシアはこの宿に風呂がある事を知っていたようだが、俺は何も知らないのです。まずは店主のあの青年に聞かねばならないだろ

う。……なるべく荷物は部屋に置いておこうと思ったが、よく考えたら手荷物ぐらいしかなないので何も気にする事はなかった事に気付く。便利だな、四次元ポーチ。

まだ体は重かったが目的が出来たので力を入れてベッドから起き上がる。

そのまま部屋を出て鍵を掛ける。シアも荷物らしいものは置いてなかったので仮に俺より先に来て入れなくとも大して困る事もないだろう。それでも一応シアには伝えておかないといけないが、……それはもし会えたらにしよう。わざわざ自分の身を滅ぼしかねないところに、自らの意思で赴く必要はない。

少しの通路を渡り、階段を下りると、相変わらず青年が店番をしていたので、近づいて風呂場を尋ねてみる。

「風呂場……ですか？　そうですね、うちは本当に寝泊りするだけなので備え付けの物はありませんが、近くにお湯屋があるんです。そちらでしたらお客様の要望にもお応え出来るかと思いますが……」

「お湯屋か……それってどこら辺にあるんでしょうか？」

「ここを出ますと左手側に『覚能乃湯』サノウノユというお湯屋があります。ここを出てから目で見れば暖簾が見えると思いますので、そちらに向かっていた頂ければ」

「わかりました、ありがとうございます。あ、鍵はどうすればいいですか」

「鍵は紛失対策にこちらで預かる決まりとなっております。お顔を覚えていただきますのでこちらにお顔を出していただければまたお渡します」

そういうシステムなのか、と半ば感心し、鍵を取り出して店主に渡す。

「それではいってらっしゃいませ」

恭しく礼をする様と、完璧な対応は相当手馴れている感じがして、まだ見た目は若いのに相当しっかりしてるんだなあ、と思わせる。おそらく同年代であり、バイトで鍛えた多種多様な客の捌き方をマスターした俺でもあそこまでの対応は出来ないだろう。ましてや一切の彼自身の感情、嫌そうにしたりと言うのが全く感じられなくて、店主としては完璧だ。

俺もあそこまでとは言わないが、もっと精進しないとならない、と何故かゲームのNPCに対して負けず嫌いな俺は闘志を燃やしつつ、^{ナクツバキ}哭椿から出て左手の、黒色にお馴染みの温泉マークが白く刻まれた暖簾を目標に歩き出した。

外はもう暗くなりかけていて、人も疎らになっている。それでもまだ俺のように出歩く人も居るが、大体は帰る途中の人達らしかった。

覚能乃湯 二ヶ

お湯屋『サノウノユ覚能乃湯』は、実に和風な、馴染みある近所の銭湯と似たような感じだった。

暖簾と言われた時点で何だかそんな気はしていたが、街の雰囲気
が日本とはかけ離れていたもので、なんだか凄いギャップを感じてしま
う。とはいえ覚能乃湯は、そんなものと一緒に疲れも吹き飛ばし
てくれるくらい快適だった。現実にあるお湯の種類は揃えられてい
る上にサウナまで完備してる辺りはゲーム会社のこだわりが見え隠
れする。

ゲームの中だからいいか、とそのまま入ろうかとも思ったが、や
はりNPCとはいえ周りの目が気になるのでしっかりと備え付けの
洗面器具で体を洗い、室内に取り揃えられた選り取り戻りの風呂を
片っ端から試していく。そしてその途中、一通り回って少し温めの
ところに入っただけのんびりしていると先客が話しかけてくる。こうい
ったところでのコミュニケーションはそう珍しいものではないが、
まさか話しかけられるとは思わなかったので驚いてしまう。

これもまたNPCだが、俺と同じぐらいの年の男だった。それで
いて引き締まった筋肉にところどころに見え隠れする傷痕がそれな
りの経験を持つ冒険者である事を示している。髪は短く、濡れてい
ようがほとんど変わらない長さだ。

「よ、あんたも冒険者かい？」

「そっちは中々経験豊富そうぞ」

「ははは、そう返されたのは初めてだ。それに見る目もある」

ガランさんほどではなかったが、豪快に笑う青年は俺の向かいで
風呂に使っていた。

何だか年の近い感じがして、変な親近感が沸いていた。シアとも

違い、男で、文字通り裸の付き合いだと、多少近しく感じてしまっても不思議じゃないだろう。

「俺はレオン。あんたは？」

「二ヶ、まだまだ駆け出しの冒険者。というか今日なつたばかり」

「お、駆け出しか。それじゃここはいつちよ先輩として色々教え
てやら無いとな」

「お手柔らかに」

そんなやり取りをしたが、話し始める前にレオンが風呂から上がる。なんだろうと思っていていると突いて来いと手で示すので疑問に思
いながらも黙って付いていく。

レオンが向かったのは覚能乃湯、男湯の中から外へ出る扉。そう、
露天風呂だった。

「こつちの方が気分がいいだろう？」

顔だけをこちらに向けてそんな事を言うレオンに、俺は全面的に
同意せざる終えなかった。元より露天風呂は行く予定だったのだが、
お楽しみは最後に取って置く派なので、今まで入らずにいたのだが、
新たな話仲間が出来たのならこれ以上無いタイミングだろう。

レオンが誘ってくれなかったら俺から誘っていたかも知れない。

外へ足を踏み入れると、火照った体には寒いくらいの風が吹いて
おり、早く湯に漬かりたい気持ちが大きくなる。

そこに広がる露天風呂はどうやら大きな楕円の形をしているよう
で、全体が石造りのそれを竹かなんかの大きな仕切りが真ん中あっ
た。……いやいや、と突っ込まざる終えなかったがそこはそれ、年
齢制限の壁があるから決して何らかのトラブルがあってもあれが倒
れたりはしない。……はず。だが音声は聞こえるようで、なにやら
姦しい声が時々聞こえる。

「な！」

力強く俺に同意を求めてきたが、俺自身は、さっきまでの俺の気持を返してくれ、と叫びたかった。だが、何とか言葉を飲み込んで、湯に漬かる。俺は扉から近めの所に腰を下ろし、レオンもその隣に腰を下ろす。

「それで、何で冒険者やろうなんて思ったんだ、こんなろくでもない仕事……下手すりゃ死ぬかも知れない」

「……さあ俺にも分からないな」

事実だった。俺は現実からこのゲームの世界に遊びに来ているようなもので、この体も、この名前もすべては偽りの物で、死ぬかも知れないなんて言われたって、死んだらやり直せばいいとしか言えない、この世界に生きている人間じゃないから。

それをこっちの住人であるNPCに伝えたって何も変わらないし、何も理解はしてくれないだろう。だからそんな無意味な事はしないし、しようとも思えない。

前も確かこんな事を思った気もするが、彼らはこの世界に生きている。それを俺がわざわざ壊す必要は無い。俺一人がこの世界の駆け出しの冒険者を演じればそれで丸く収まり、俺はただゲームを楽しむ事が出来る。……こんな事を考えさせるのもこのVRゲームだから、リアル過ぎるから、だろうなあ。

「……そうか。まあ、ニケみたいな奴も結構いるからなあ。ニケに限らず、生きる意味だとか、やる事がないから、だとかそんな不確定な事を目標に冒険者になる奴も少なくない」

「そりゃまあ、物好きだな」

「ニケ、お前もそうだろうが」

レオンにそう言われたが適当に笑って誤魔化すと、それを察して話題を変えてくれる。

見た目と喋り方から熱血系な感じだとは思っていたが、どうやらこの人の良さから見ても筋金入りだろうな、とは予想がつく。

「それで、なんか魔物は倒したのか？」

「ウルフリーダーを二体」

「ほう、そいつは駆け出しにしちゃ上出来だな。何人だ？」

「二人。それと片方はD型だった」

そう言った途端レオンが勢いよく噴出した。

何事かと思つて隣を見ると、むせ返っているレオンが苦しそうにしていた。ガロンさんにもなんだか将来を期待している事を言っていたが、やっぱり値段にも結構な違いがあつたように、強さもまた違うのだろうか。

ようやく落ち着きを取り戻したレオンが、俺になんか聞いてはいけない事をこれから聞く、と言わんばかりの顔で迫り、顔に書かれたその通りに俺に質問を投げかけてくる。

「お前つ……！二人でD型なんて、もう一人が強いのか？」

「いや、もう一人は冒険者ですらない。しかも女の子」

レオンは今度こそ言葉を無くし、失礼だが変な顔でこっちを見たまま固まった。

レオンの頭の中はきつと真っ白になってるか、過去の記憶でも探つてるのだろう、どちらにしる今の俺にこのレオンに掛けてやる言葉は何も無かった。

「大したもんだな。理由は無いとか言つてたが、なるべくしてなっ

たんじゃねえのか、それ？」

「そうだとこれからも安心できるな。先輩のお墨付きとあらば」

「へっ、安心してると足元すくわれるぞ。俺だってそこまで名があるって訳じゃねえから、俺と同じくらいまでは保証してやるがな」

「そりゃ心強い」

二人で大いに笑いあった。学校を卒業し就職するわけでもなく、バイトで自分の小遣いをちまちまと稼いでる俺にとって、人と触れ合うのは家族かバイト先の人達。後はたまに遊ぶ友達か。

だからこうして仮想世界のNPCだとしても、同じ年ぐらいの男とこんなに和気藹々に話すのはとても心地が良かった。

「連れが女だと色々と苦勞するだろう？ 買い物が無駄に長かったり、こまけえ事をいつまでもグチグチ言ったり、拳句人の事を道具みてえに扱いやがって……」

何だか淒く私怨が混じってるような気もするが、俺とシアは今日初めて会ったばかりで何もトラブルめいた事も無いし、困った事も無かった。とはいえ街の探索時は文無しで話を聞いて回るだけだったし、その後は戦闘をして宿に……。ああ、そういえば何故か部屋を一部屋にされたんだっけ。とはいえ間違っても起せないこの世界では杞憂だろうし、シアとも長い付き合いではないのでこれから色々問題が出てくる可能性はあるが、今はまだシアとの問題は全く無い。

「いや、俺の場合は今日初めて知り合ったばかりだからあんまりそういうのは……。レオンはその口調からして女性の連れがいるのか？」

レオンは心底嫌な顔を作り、それだけで全てを肯定した上に、あ

あ好きじゃないんだなあ、という感想まで抱かせる。なので俺はそれ以上追及せず別的话题でも、と頭を探っていると、レオンがそんな俺の様子を見てだろうか、気にするなと声を掛ける。

「別に一緒に居たくねえ、て訳じゃないんだ。たまたまなんかこう、似たような境遇のお前さんにグチを言いたくなつた、ていうか、うん、なんだ……その、すまん」

「いや、気にしなくていいよ。俺にはレオンのその苦しみは分からないけど、そのグチくらいは聞いてやれる」

「……二ヶ、お前良い奴だな」

「何をいまさら」

「前言撤回」

そんなやり取りをして二人で笑った。そろそろのぼせそうだったのでレオンに風呂から上がると伝えると、じゃあ俺も、なんて言うて付いてくる。

「入っていたければまだ入っていればいいのに」

「風呂に入るのはいつでも出来る。だけど一期一会かもしれない出会いはその場限りだ。大事にしないといけないだろうか？」

どうやら風呂から上がってもまだまだ逃がしてはくれなさそうだ。

覚能乃湯 シア

部屋を出て一切振り返らず走った。

ここ哭椿ナクンバキという宿はCCの近くにあってだから名前だけは知っていたが、実際に泊まる機会は一切なかった。でも近くのお湯屋、ウリユ覚能乃湯は近くにあったのでよく利用していた。

そこへ飛び込む。ここしばらくは利用してなかったが、外も中も変わったところはなくて記憶にあるままだった。

まだ顔が熱い気がして、それを塗りつぶすようにお湯を被る。肌を撫でたお湯ではこの体の熱が塗りつぶせなくて。体を洗ったらすぐに少し熱めのお風呂に浸かる。

疲れきった体を癒してくれる温もりが心地よかった。その暖かな熱は体を支配していた熱も溶かしてくれて、ようやく少し落ち着いた。

思い出す。今日一日の出来事。

子供たちが失った未来を、私は”生みの親”から徴収し、払ってもらおうとしていた。

やり方がよくない。それはニケさんに言われた。本当の事だと、自分でも今になって見ればなんて馬鹿なことを、としか思えない。ただあの時の私はそれが正しいと思っていた。だから続けた。そしてその報いとして今日、あの場所で捕まり、囲まれた。逃げ隙もなく、私はそこでようやく気付いたんだ……。このやり方は間違っていた、と。

だから私が犯した罪を罰で贖う事は何も怖くなかった。ただ真実だけは伝えないと、そう……。あの時思った。でも状況はそれを許さない。私が伝えるべき真実が表に出る事を、光を目指す事を許さなかった。

私には何も出来なかった。だけど。彼が、ニケさんが人垣を割って顔を出したあの瞬間は一生忘れな

いと思う。

皆が私を恨み、罵倒し、見下していた。なのにそこに突然現れた人は周りの人とは何もかもが違っていて、その目は温かさに満ちた目で、私を見て驚いたような顔をしていたのには私も驚いたなあ……。

そして、私がこの人なら……助けてくれるんじゃないだろうか、

……そう思って、思ってしまったって、目を合わせた。思いを込めて。

だから一歩踏み出して振り返った時には、自然と涙が流れてしまった。私を庇うように立ったあの背中はずごく……たくましかった。この人は、こんな私でも手を差し伸べてくれる。

そして、最後に手を本当に差し伸べてくれて、私はその手をとって、叫んだ。

それである騒動は終わった。私が間違った方法で解決しようとして、そしてその罰を受けるはずだったのに、それをしっかりと導いてくれた。

私が受けるべき罰は無いとみんなは言うけれど、それは間違っているんだと、私はそう思う。

盗んだお金の使い道は二つしかなかった。新たな居場所を作るか、子供たちが失った未来を少しでも買い戻すか。

ニケさんには孤児院を建て直すとしか言っていないけど、その先に……それ以外にもまだ私が受ける罰は残ってる。そう思ってしまふ。だから……。

「そこのお嬢ちゃんは何をしみつたれた顔してるのかなあ？」
「えっ……」

目の前にはいつの間にか大人っぽい女の人が出て、何故だかわからないけど私に話しかけてきた。

その顔には覚えはなかったの、初対面なのは間違いなかったのだけれど、どうして私に話しかけてきたんだろうという疑問は残る。

「安心しな。別にとって食おうって訳じゃない。なんだか暗いオーラを放ちながら、お湯に浸かっている物憂げな少女がいたから、私の性分で頼っておけなくてね」

「はぁ……」

何だかよくわからないけどこのお姉さんみたいな女の人は私を心配……してくれたみたいで、悪い人ではない気がした。でも余りに突然の事でなんて反応をしたらいいのかわからない。

「なんか悩み事でもあるなら相談してごらん？」

「……いえ、もう何も悩んではいないんです」

「もう？ って事は……」

「はい、私の悩み事はもう解決してるんです」

「……の割にはやけに暗い顔してたけど……」

その質問には答えられなかった。いや答えてしまえば、この思いを自分以外の人に教えてしまえば、それはもう、……私だけの罪でなくなる。

「少し……思い出していただけなんです。私ってなんでか思い出すだけでも、悲しくなっちゃうみたいで……」

「……そっか」

お姉さんみたい見知らぬ女の方は、私の隣まで移動する。そして頭がぐいっと引っ張られる感覚がして、気付けばお姉さんに頭を抱えられ、肩に頭を預けていた。

「あの……」

「私はアイリ。悲しい時は誰かを頼るんだぞ。ここであつたのも何

かの縁、少し話でもしようじゃないか。えーと」
「シア、です」

暖かかった。それになんとか懐かしい。お湯の熱さとかじゃなくて、恥ずかしい時とも違って、……あ、そうだ、母さんが私を励ましてくれた時と同じ様に、俯く私をこうして抱きしめてくれた。それで、言葉を掛けてくれた。

「シア、ね。あ、そうだここじゃ何だし、外へ行こう」

「えっ、そ、外ですか？」

「そう、露天風呂。この街初めてだからね、存分に楽しまないと」

そう言っただけという間に外へ繋がる扉の方へ向かって行ってしまい、なにも言う間もなく、黙って帰るのも何だか悪い気がして、仕方なくアイリさんの後を追うしかなかった。

扉を開くとひやりとした風が体を撫でて、思わず引き返したなるが、もうお湯に浸かってこちらに手招きしているアイリさんを見ると、いまさら引き返す訳にもいかなかった。

アイリさんに招かれるまま湯に浸かり、夜空を見上げた。

吸い込まれそうな夜空に星が輝いていて、その広大さを考えたら私の悩みなんてちっぽけ物にすら思えた。

「今日はいいい空だね。野宿しながら見る空より断然綺麗だ」

「アイリさん……冒険者なんですか？」

「ああ、一応ね。シアは、冒険者なのかい？」

「いえ……冒険者の人の手伝い、なのかなあ……」

「おいおい、なんだその自信なさげな答えは」

そういえば、ニケさんに連れて行ってくださいと言って、それを受けてもらえたけど、私の立場って具体的にどうなるんだろう。

付き人……ペア……あ。

一瞬、頭が沸騰しそうな事を考えてしまった、ような、気がしたけど気のせい、気のせい。

違う。ニケさんとはそういうのじゃなくて……ええーと、うーん。

「そんなに悩む事なのかい、それは？」

「はっ……えーと……はい」

「ふふふ……悩ましいねえ」

「……？ どういうことですか」

「……いずれ気付くぞ」

そう言っただけでアイリさんは何かを含んだように笑うのだけれど、私には何の事かさっぱりわからず。でも私の事なのでなんだかはつきりしなくて、すぐくもやもやが胸に残る。

「こんな気持ちのいい湯なら酒の一杯でも欲しくなるが、仕方ない。帰ってからレオンの奴と晩酌と行くか」

「……お連れさんがいるんですか？」

「ああ、中々男気溢れる奴だよ。ただし短気だがね」

そう言っただけで笑うアンリさんはなんだかとても幸せそうで、月明かりが霞むぐらいに眩しかった。

それがその連れの方をどれだけ大事に思っているのか、それを映す鏡のようで、すぐくうらやましかった。

「あれ？」

体が何だかふらつく……。なんだろう、力が……。

「ん？ おい、大丈夫か？ 付き合わせ過ぎたか……仕方ない、こ

れも私の責任だな」

ぼんやりとした意識の中で、ふわっと体軽くなる。目に移る世界は何だか奇妙な事になっていて、床だったはずの固そうな石が壁になって、いつも倒れそうだなあ、と思っていた仕切りが床になっていて、そこでやっと、自分が動いて無いのに視界が動いてくのを見て……。

談笑

湯からレオンと共に出る。

そこに待ち受けるのは中々大きなロビー。湯から上がった客が湯上りを心地よく過ごす為か、大人数が談話の出来る、長いちゃぶ台みたいな足の短いテーブルのが六脚、しかもそれが置いてあるのは畳の上という完璧な日本仕様。とはいえ俺は正座が苦手なのであまり畳というものが好きではない。というよりは嫌な思い出が思い浮かぶから嫌だ、という至極私怨極まりないのだが。だがそれほどあの足の痺れる感覚は恐ろしい。人を殺せるんじゃないかとも思う。

食べ物と飲み物もそれなりに揃えてあり、風呂に入ってそのまま飯を、という流れも可能なようで、実際長テーブルでは何人かが集まり、顔突き合わせながら談笑している。何だかああいうのはいいなあ、とか思いながら、俺は畳に腰を下ろさずに、一直線に向かう。そこは飲み物が売っているカウンター。その奥に立つ恰幅が良くニコニコと笑顔が眩しいおばちゃんに何があるかを尋ねる。

「おい、どうしたんだ急に。逃げるもんでもあるまいし」

とレオンは言うものの、やはりこれは湯上りの気分が覚めない内にはやっておかないといけない気がする。おばちゃんから商品を受け取り、四次元ポーチからお金を取り出して渡す。毎度、とおばちゃんが笑顔を崩さずいい、俺も笑顔でありがとうと言う。

手に持つのはビンのコーヒー牛乳。製作会社は流石だ、わかってる。

その場で蓋を開け、腰に手を当てる。あとはそのまま一気にビンの中身を飲み干す。流れ込む冷めたい感覚が何とも言えなかった。そして一気に飲んだ後思い切り息を吐く。疲れた体はどこへやら、もう体のどこにも疲れを残してはいなかった。

「……何やってんだ、お前」

「和の心、だよ」

「いや、さっぱりわからんが」

やはり日本風な場所であっても、外は正反対のヨーロッパ辺りをイメージして作ったせいとか、住む人々にはあまり日本的な知識は無いようだ。という事はしつかりとこういう物が用意されているのは、プレイヤーへの配慮という事になる。そんなスタッフの遊び心はどんなゲームでも、俺がゲームをプレイしてる時に見つけるとついほくそ笑んでしまうポイントだ。

そんなスタッフの気配りに感謝しつつも、俺は呆けた顔をしたままのレオンに向き直る。

「そういえばこれからどうするんだ？」

「俺の連れも今ここにいて、後で合流するように話はしてあるから、それまでのんびりしようと思うが」

「よし、じゃあそうするか。食い物でもなんか食べるか」

「いや、俺はつまみ程度でいいな」

「そっか、じゃあ俺は無難にカレーでも食うかな」

現代的なメニューが並ぶ中から基本的にハズレが少ないものを選ぶ。シアもおそらくここに來てるだろうから、待つてれば分かるだろう。あの髪型だし。ツインテールは街中でも見なかったし、そうそう居ないんじゃないだろうか。

もし仮にシアとはぐれてしまっても、その時は哭椿ナクツバキのしつかりした青年店主が何とかしてくれるだろう、と軽く考え、頼んで数十秒で出来た、ほかほかの出来立てカレーを、コーヒー牛乳の時と同じおばちゃんから受け取る。

手前のところが空いてたのでそこに二人向かい合うように胡坐で

座る。ちなみにレオンは枝豆を選んだ。あれだけ俺よりは稼いでそんな素振りをしてた割には随分と所帯染みている。見た目とは違つて実は儉約家だったりするんだらうか……。などと考えていたが今は目の前にあるカレーライスがとても気になつて仕方ない。

VRGを使いVR空間に入った時、最初はてつきり現実の体の感覚とリンクしているものだと思つていたが、それが覆されたのは先程、晩飯を食べて中断していた途中から再開したときの事だ。相当疲弊していた体のままVR世界から離脱し、現実の体では今までが重かつた分軽く感じた。逆に復帰するとVR世界での疲れが残つたまま、現実では晩飯も食つて動ける状態だというのに動けないほど体が重かつた。それに晩飯を食つた直後にも関わらず、いま俺はこうしてカレーライスを頬張ろうとしている。

結果、導き出されるのはVRGで作りに出された仮想体は、現実の体とは一切のリンクがないと言ふ事だ。

トイレとかどうなるんだらう、と思つてしまふが、別にオンラインゲームではないのでポーズが効く分、そこは現実の体が尿意を感じたら自動的に中断して、接続を切つてくれるとか、その辺だらう。実際の所はなつてみないと分からないが、これで現実に戻つて糞尿垂れ流しだつたら軽く死ねるぐらいだ。

そんな事を考えて、カレーライスを見るとなんだか……。いや考えるのをやめよう。折角今日一日死ぬ思いをして稼いだお金で買ったものを、食わないで捨てるなんて選択肢があつていいはずが無い。俺は無心でカレーライスに食らいついた。

あまり辛口ではなく、実に平凡なカレーライスだつた。ここまで味の再現とかが出来るならこつちで暮らしてもいいんじゃないか、と思つてくるが、先程自分で出した現実の体とリンクしないというのを思い出して、あえなくその考えを捨てざる終えなかつた。

VR世界では腹いっぱい食べてようと、現実の体が栄養もなく餓死してしまつたら元も子もない。

「お」

俺が色々と考えながらカレーライスを食べている様子を、奇異の眼差しを向けながら枝豆を貪るレオンが、何かに気付き手を上げる。

「アイリー！ こっちだー」

振り返るとそこには俺やレオンと同じぐらいの年の女性が居て、その豊富な胸を強調したような服で手を振りながらこちらに近づいてくるのには危うくカレーを噴出しそうになったがなんとか堪える。そしてその後ろの少し小柄な女の子が何だかこっちに視線を向けている。

可愛い子だけど俺会った事あったかな……。胸の辺りまで伸びた髪は何も縛る事もなく降ろされていて、湯上り特有の瑞々しさを帯びていて、照明が反射するツヤのある髪は艶やかで紫っぽい色だった。

湯上りだからかほんのり赤くなっている顔を良く見てみると、うん？

なんかどつかで……。

思うが早いか、相手が話すが早いか。

「ニケさんも、来てたんですね」

後者だった。ごめん！と心の中で全力で謝り倒し、それを表に出さないように細心の注意を払いながら、自然な会話に努める。……髪下ろすだけでここまで変わるものなんだなあ。

「……ああ、シアが言ってたから、場所は店主さんに聞いて」

「そうなんですか……あ、すみません、私場所も教えずに飛び出してしまって……」

「いや、全然気にしてないよ」

俺も髪を下ろしたシアに気付かなかったからおあいこで、なんて口には出せないが、心の中で呟いておく。

シアとそんなやり取りをしたのも束の間、シアの隣に立つお姉さんが急に近づき顔を寄せてきて、なんだか値踏みしているような目で全身を見られる。レオンが確かアイリ……って呼んでたな。

「……なんででしょう？ 顔になんか付いてますか？」

「いや、……ちょっとね」

ちょっと、って何だろう。とか思うが教えてくれそうも無いので、まずは仲が良さげだったシアに助けを求める視線を送るが、わたわたとするだけで具体的な救済策は無いようだ。……元よりあまり期待はしていなかったが。俺が助けを求められるのは、残るはレオンだけ。視線を向けると、はあ、と一つため息を付いて、俺の目の前に迫るアイリと言う女性に声を掛ける。

「アイリ、いつまでやってんだ。迷惑してんだろっ」

「おっと、ごめんなさい。つい、ね」

何が、つい、なのかは分からないが、とりあえず見知らぬ女性の顔が急接近したまま、と言う窮地は、その仲間である、レオンによつて救われた

ので、俺もやっと長い息を吐き、落ち着く。

「ごめんね、あたしはアイリ。その馬鹿レオンと一緒に冒険者やつてるわ」

「俺はニケです。まだ駆け出しの冒険者で……」

「そのわりにはD型をもう狩ってたりするけどな」

俺がアイリさんに自己紹介をしてみると、言い終わらないうちにレオンが割り込む。

さらにそれに対して俺が文句を言おうとしたのに、被さるようにアイリさんがその会話に乗っかる。

「うっそ！ D型を初心者が、ってますます気になるわねえ」

最後に俺はシアを頼って視線を送るが、相変わらず慌てて何をすればいいのか迷い、最終的に俺がいつもシアにしているように、頭に手を載せて撫でるだけだった。

あれから四人はそれぞれ向かい合うように座った。俺とシア、その向かいにレオンとアイリという席順だ。冒険者として先輩でもある二人に色々と聞くことが出来て、これからの旅路に役立ちそうだった。

話してわかったのは、冒険者と言っても一枚岩で星の欠片を集めているわけではなく、どうやら冒険者の中から星の欠片を探してくれる有志を募った、というのが正しいらしい。

もちろん他の冒険者達も星の欠片を見つけたらCCに報告し、欠片を手渡す。そしてその欠片を国に引渡し、CCから冒険者に報酬が払われるといった形になっているらしい。

一応この世界の人々は全員が魔物とこの星の命に危機を感じていて、国の募集に募った証として無色の宝石があらわれた冒険証を持つ冒険者はなにかと優遇される、と言う話だった。つまり俺の持つ冒険証がその無色の冒険証なのだが、いまいちその実感が、恩恵

をあまり感じない事もあって薄い。まだ俺が駆け出しだということもあるのだから。

冒険証にはめ込まれる宝石は冒険者となった国によって色分けしてあるらしく、レオンとアイリは赤色。シアは冒険証が無いが、この国の冒険証の色は青色なのだとか。

無色はこの国でも共通で、世界の救済者、だとかなんとか。ご大層な名前が付いていてもやる事は歩き回ってその欠片を探すだけなので、やることは地味極まりないが。

それと武器なんかの話も聞いた。俺自身今は初期装備の片手剣だが、他にも種類があるので参考までに二人に聞いてみた。

レオンは大剣。確かにイメージ通りと言うか、力任せにブンブン振り回している絵が簡単に浮かぶ。

アイリは魔弓使いらしく、後方からの弓攻撃、魔法支援が主な役割で、たまにストレスが溜まってる時にはレオンごと攻撃魔法で吹き飛ばす事もあるらしい。アイリらしいといえはらしいが。

そしてシアの武器について聞いた時に、聞きなれない言葉を聞いたので例の如くシアに聞いてみる。

「魔剣士？」

「はい。魔法と剣術を合わせて使う人をそう言うんです」

「魔剣士すら知らないって……ニケは今までどこに住んでたのよ」

日本です。とは言えず、笑って誤魔化しておく。間髪入れずにシアに魔剣士について説明させてその場をしのご事に……いや、この世界の勉強と言う事にしておこう。

「私の場合は短刀と、知っての通りの火炎装填や癒水だけですけど、両方使うので一応魔剣士という扱いになります」

「へえー」

「シアちゃんって、冒険者じゃないって聞いたけど……良く知って

るね」

「CCCで働いてましたから、ある程度だけなんですけどね」

褒め称えるようなレオンの表情と声は、シアには少しくすぐったいらしく、もじもじとして俯いてしまふ。それとは別にアイリが最初にあつた時のような、全身を嘗め回すような視線を向けてきている事に気付く。

「……二ヶ、アンタって本当に冒険者？」

痛い所を突かれた気がする。いや突かれた。

俺自身がシアの方が冒険者っぽいと思ってしまうているし、ステータスを比べても明らかにシアの方がらしい。

「多分、きつと……そのうち」

アイリに鼻で笑われた。すごく屈辱的だったが返す言葉もなく、絶対アイリなんか追い越して鼻で笑い返してやろうと心に決めた。今決めた。

それと今後シアの方が冒険者っぽいと言われないために、明日からは積極的に外に出てレベル上げをしないと……あとはこの国の周りも少し見ておきたい。あの丘から見ただけじゃ、……というよりあの時は疲れてすぐにへばっていたのでまともに見てもいなかったっけ。

「俺、そろそろ宿に戻るよ」

そう言っただけ俺は楽しい席を立つ、少し名残惜しかったが、流石にそろそろ休まないと明日に響く事になりそうだったからだ。だから多少は引きずるものもあったが、振り切ってそこから離れる。明日

はレベル上げが主な目的になるだろうから、俺一人でも大丈夫だと思っただので、一緒に席を立とうとするシアを押し留めて、俺だけがその場を去る。

「じゃーな、またどっかで。シアは後でな、鍵は開けとくから」

「ああ、またどっかで、な」

「ばいばいー、楽しかったよー」

三人に別れを告げて外へ出た。……そういえばここお湯屋だったんだなあ、と黒と白の暖簾を見て思い出した。なんだか食べたり呑んだりしながら談笑していると、どこでも居酒屋のような気分になってしまうのも、だんだん年寄り臭くなってるのかもなー、などと思いつつ、満天の星空の下、もはや湯上り気分でもないが気持ちは上を向いたまま歩いていく。

恒例行事

宿に帰り、店主の青年から鍵を受け取る。

足早に階段を駆け上がり部屋の鍵を開けて飛び込んだ。ベッドの横に力なく座り込む。

楽しい楽しい時間が遠く、まるで祭りの会場から離れる時のような気持ちを抱きながら、あのひと時を思い返したりする。あの二人も、仲間になるのかなあ。だけどあの二人中々レベル高そうだったし、なるとしてももう少し後か……。

眠気が襲ってくる……。シアがベッドで寝ると思うから俺はこのまま寝よう。

睡魔に襲われながらも現在時刻をメニューを開いて確認する。

現実時間で八時前

楽しかった……。あんなに人と喋りしたのは久々だったなあ。

レオンさんと、アイリさん、しばらくこの町を楽しむって言ってたし、またいつか会えるかな。

……そういえばニケさん、先に帰っちゃったからあんまり喋れなかったけど、やっぱり今日一日色んな事があったから疲れたんだよね……。部屋開ける時は寝てるかもしれないからそつと開けないと……。ニケさん起こしたら悪いし……。

部屋のドアを開ける。ドアノブはゆっくり捻り、扉を開ける時も軋む音が立たないようにそつと開けて、中を見るために顔を覗かせる。

目は合わなかった。けど姿は見えた。

扉を開けてそのまま進んだ所にある、ベッドの横の床にニケさんが座って寝ていた。

「な、なんで？」

扉を開けた時と同じ様にゆっくりと閉めて、そろりと近づく。

ベッドのシーツには皺がついていて使ったような感じはあるけど、寝たような後には見えなかった。まるで上に乗っただけのようなそんな感じがした。

どちらにしろニケさんがベッドで寝ていないことは見て分かるのだけれど……。

どうして？　なんでニケさんはこんな所で……。

……ああ、そうか。原因は私、か。

こんな事になるなら二部屋取ってもらうんだったなあ、……もう遅いのだけれど。

でもこのままベッドで寝るのも何だか悪い気がするし……どうしよう。

……そうだ、だったら……

う……ん……。

瞼が重い。体も足も重い。ちゃんと休んだはずなのに……。

……ああ、そうか。宿のグレードはこの仮想体アバターの、ステータスに表示されないパラメーターである疲労の回復の度合いが違うのかも知れない。

高級な所で休めばどんな疲労も一発回復。逆に安宿だと一日だけしか休まないと満足に回復しない、とか。今度手持ちに余裕がある時にでも試してみないと。

……ね？　隣で寝てるシアさん。

とりあえず訳が分からなくて、心臓も寝起きの癖にバクバクで、なんかかわいいというのだけは分かる。俺は冷静だ。

状況を整理する。

俺が目を覚ますとシアが隣で寝ていた。なんだか凄く、電車で隣の人がこちらに頭を預けて熟睡してる的な、気まずさともどかしさを思い出す。

俺が寝る前の行動から思い出すと、俺は確かに一人で、シアがベッドを使うものだろうと思い、ベッドの脇に腰掛けて寝た。起きるとシアがご丁寧にベッドのシーツを掛けてくれた上で隣で寄り添うように寝ている。寝顔が可愛い。あとシアは髪を下ろしているほうが個人的に可愛いと思う。明日言ってみようかな。

この状況は、どうしてこうなった、の一言に尽きるのだが、俺は冷静なのでとりあえずメニューを開く。

現実時刻は寝る前に見た時間からほとんど変わっていないかった。

……現実時間とリンクしてるものだと思ったけど、これもアバターの時と同じで実は別だったらしい。

一通り動かずに出来る事はしたが、……さてどうしようか。

下手に動くとシアを起してしまいそうで怖いけど、こっちは寝起きドッキリをやられた気分なので眠くない。あとこの状況で二度寝出来るほどに俺の女性免疫は高くない。

このまま寝顔を眺めているのも悪くなかったが、流石にそんな訳にも行かないので、意を決してそっと体を起こし、シアをゆっくりと抱きかかえてベッドに寝かす。やっぱり小柄な女の子なので、見た目通り軽かった。

なんとか起こす事なくベッドに運び込めたので、そのままシーツを肩まで掛けてやり、俺はそっと部屋を出た。

空を見ると藍色の空に星が輝いていて、月も星に負けないくらいに光を放っていて、その光を遮る障害が少ないおかげかこんな時間でも道は明るく照らされていて、明かりがなくとも全然平気なぐらいだった。町のほとんどが寝静まり、音は風が吹く音と自分が放つ音だけだった。

そんな静寂が心地よかった。

俺はこの街から外へ出る唯一の道、門へと歩きながらメニュー画面を操作する。

今日の二回の戦闘で二度のレベルアップ。その際に得たAPを^{アビリティポイント}まだどれに振るか決めていなかったからだ。

アビリティの欄を開く。戦闘、というか武器関連や特技はスキルとして別枠なので、ここで選ぶのはそれ以外のものになる。

裁縫やなんかの生活系のアビリティはとりあえず関係ないので除外し、必要そうなのをピックアップする。

このデュアルワールドのアビリティは少し変わっていて、一つのアビリティには三ランクあり、一ランク目は基本的な効果を持っていて、ほぼ全てがAPで取得できる。そしてその上のランクに上げるのは、物にもよるが十から二十付近までAPが必要だ。さらにその上もあるが、……生憎と今はまだ俺のレベルが低いせいか詳細すら出ていない。育ててからの楽しみだろう。

俺がピックアップしたアビリティは四つ。

『手入れ』 武器と防具の耐久値の消耗を抑える

いたって地味な効果だが、こういうのはあるのと無いのでは後に響く時があるので習得しておく。

『魔法』 基本的な魔法を使用する事が可能になる。

このアビリティが無いと魔法が使用出来ないらしい。俺はこのVR世界で魔法を自分が使えるなら絶対使いたかったので、これを習得する。

『休息』 疲労が回復するのが早くなる。

これはさつき疲労と言うものの恐ろしさを味わったので習得しておく。

『識別』 敵を注視すると情報が表示される。

これはもはや必須というか、なきゃ困るぐらいのものだと思つので、習得。

とりあえずこの四つを習得する。どれかをランク二にするためにポイントを残すという選択もあったが、まだまだゲーム序盤なので

質より量を今回は取っておく。他にめぼしいものもあつたので、またレベル上がってAPが増えたらそちらを選んでいき、ある程度の数を揃えたら質を上げていく方向で考えていく。

メニュー画面を順に叩いていき、ピクアップした四つのアビリティを習得し、画面を閉じる。目の前にはもう門が見えていた。

少し開いたままの門を潜り、近くで警備をしている城の兵士に挨拶をして外へ出る。

外は危ないから気をつけて、と声を掛けられたのでお礼を言つて月明かりに照らされた草原へと足を踏み入れる。静けさと中で風に揺られた草達がざわめく。目に見える範囲に敵は映つてないが、これがフィールドだとすると、あの丘で突然現れた狼達のように敵が突然現れてエンカウント、という事もあるかもしれないので、気を引き締めて気配を探る。もちろん胸の剣はまだ抜けない。

静けさが一層深まり、風が強く、一瞬だけ吹いた。

自分が出した音、風によって起きる自然な音。それらに一切当てはまらない、違和感のような物音がした。振り返るとそこにいたのは俺が持ち望んだ魔物だった。

月明かりが反射し煌いている体表は鱗のようになっていて、その右手には俺よりも高価そうな銀色の剣。左手には皮で作られている質素な盾。二本足で立つその魔物の足の隙間から長くうねうねと動く尻尾が見える。

早速識別アビリティを使うためにその魔物を注視する。

名前は『リザードマン』装備は思った通りの『鉄の剣』『皮の盾』で、それ以外の表示は無い。

その表示を読み終えた瞬間に敵が動いた。

数メートルも離れていたリザードマンは、一回の跳躍で空中から鉄の剣を振り下ろしてくる。

剣を抜く暇もなく、ただ反射的に横へ転がる。地面に振り下ろされた剣が刺さる音が聞こえたが、それを目視する暇もなく、ただ手探りで腰の頼りない俺の武器を手取る。

体勢を立て直し、半ば自動的に剣を構える。

リザードマンは標的を外したその剣で空中を切り払い、当たらなかつた事にイライラしているようだった。……そんな簡単に当たつてたまるかよ。

俺の狙いは一つ。ただひたすらに避けて俺の唯一のスキルである『スラッシュ』をお見舞いする事だ。

このリザードマンは出会いがしらの跳躍といい、機動性に富んでるみたいなので、隙を突く事は難しいだろうけど、かといって切り合いをして勝てるとも思えない。武器の質も向こうが上で、おまけに盾もあるのだから、それで受けられて反撃されればかなり厳しくなる。

方針は決まった。あとはそれを実行するだけだった。

リザードマンが先程の跳躍とは違い、小刻みに跳ねるようにこちらへ向かってくる。俺はただひたすらに待つしかないのです、リザードマンから目を離さないようにしながらその周りを回るように走る。リザードマンは走る俺を追うように跳ね続ける。このままだと堂々巡りか……。

敵の隙を見つげるために敵の周りをひたすらに回るのは、アクションゲームでは割と有効的な手段だが、時折ひたすら回るとそれを追って敵もひたすらに回り続ける、いわゆるループ状態に陥る時がある。

これを抜けるには俺自身の動きを止めるか、敵の動きが変わるか、他に乱入者が現れるか。

今この状況で二対一になるとまず逃げるしか無いだろう。そうならない事を祈るのならば、俺か、リザードマンが行動を変えなければならぬ。

しかしリザードマンはAIで行動が限られているだろうから、実質的にはプレイヤーである俺が動かなければならない。それが分かっても具体的にどう行動すればいいのかはまだ答えが出ていない。だがこのループ状態ならば考える時間はいくらでも作り出せる、…

…俺の体力が続く限りだが。だから今は冷静に考える。

むやみやたらに突っ込んで切りかかっても、盾で防がれて反撃の一太刀を受けるのは目に見えている。

ならば最初の出会い頭の一撃をかわしたように、敵の攻撃を誘いそれをかわし、反撃を叩き込む、というのはどうなるか。……まず前提が難しいかもしれない。

まだこのデュアルワールドでの戦闘は三回目で、人型で剣を使う魔物の相手にするのは初めてだ。もちろん現実で剣を相手取ったこととは無いし、経験が全く無い俺が、リザードマンの剣を正確に見極めて避ける事が出来るとは思えない。

最初の一撃は、大きく跳ぶ、剣を思い切り振り上げていた、そういった動作があったからこそ、見極めて横に避ける事はできたが、それでも無様に転がりながらで、なので、完璧に避けれたとは言えないだろう。それを狙って確実に出来なければ、相当な深手を負うことになる。

選択肢が無い。でも何かしらの作戦がなければ、俺の実力では勝てないのは明白だ。

このデュアルワールドは、RPGにしては戦闘の部分はアクションゲームに近いものがある。それもVRゲームと言う媒体のせいなのだろうが……。そのおかげでアクションゲームの知識も役立つ事はあるのだけれど、コントローラーを握って操作するのとは違い、自分が動く事で操作となるので、指先だけの操作よりは反応が鈍くなるのもあるし、自分の行動がリアルタイムで反映されてしまうので、頭が考えるよりも早く体が反射的に動いてしまうのを止める事は出来ない。その例としては、レースゲームで曲がるときに体を傾けたりや、ホラーゲームで驚いた時に体が反応してしまうのがいい例だろう。

だから原始的な恐怖に本能的に体の動きが止められるのを防ぐ事も出来ない。ましてやそれが真に迫るものならば尚更だ。

だから突然動きを変えて襲ってきたリザードマンの剣に、一瞬だ

け体が固まり、相手が剣だと言うのに腕を盾代わりに交差させて防いでしまう。

剣が深々と腕を裂く感覚だけを感じる。

それを振り払うように無造作に剣を振り、リザードマンを牽制する。後ろに跳びそれを避けたリザードマンが、余裕のある顔でさっきの借りを返したと言わんばかりの顔をするので、若干イラツとする。

切られたのは左手だったようだが、まだ動く。痛みを感じないから体を盾に使うという手もあるが、今回はレベル上げが目的なので出来る事ならば攻撃を食らう回数は減らしたい。

一旦距離を取り、相対するが、状況は劣勢だ。

ループ状態だと思って考え込んだのが間違이었다。この世界ではNPC達が意思を持ち、自分で考えて行動するのだから、それと同等とはいかなくても、魔物なりの思考回路があつてしかるべきだった。従来のゲームと同じに考えていると、今の俺のように怪我をする、か。

覚悟を決める。敵が高等な思考を持つのなら、小細工のような作戦じゃ駄目。かといって作戦の幅は少なく、俺の力じゃその数少ない選択肢すら実行出来ずに、リザードマンを敗れない。

ならば、俺が変わつてその作戦を成功させるしかない。

敵の剣を避けられる自信が無い、なんて言つて逃げてる場合じゃない。もうそれしか勝つ見込みが無いのだから。

両方が動かない。俺は相手の攻撃を待ち、敵は俺の出方を探る。

緊張感が走る。仮想の心臓が悲鳴を上げるが、それすら押さえ込んでリザードマンの動向に目を配る。無理だと諦めた、敵の攻撃を誘い、かわし、一撃をお見舞いする作戦。出来なきゃ多分、死ぬ。でもやるしかない。

そして、リザードマンが動いた。地面を蹴り、一息に放物線を描いて跳躍する。

油断はしない。思い切り振り絞られた、その腕の先の鉄の剣に意

識を集中する。

最低限の動作で避け、最大限の攻撃を叩き込む。攻撃ポイントは人型の魔物なので、人の急所と同じ首を狙う。

リザードマンが目の前まで迫り、腕を振り下ろす。俺はそのタイミングに合わせて、剣を振るために一度引く動作をして、紙一重のところでのその剣をかわす。

リザードマンの剣は俺に当たらずに、勢いそのまま地面に吸い込まれていく。だが地面に刺さる前に、俺の一閃が、地面に平行に振るわれた『スラッシュ』が青い軌跡を残して首を切った。

手ごたえは確かに感じた。しかし血も出ないし、首が真っ二つに切れる事も無い。だがリザードマンの動きは不自然に固まっており、こちらが構えを解くと同時に糸が切れたように倒れこむ。もはやそれは『リザードマンの死体』と表記されるアイテム扱いになっていた。

それを四次元ポーチへ放り込む。そして何も無かったような静寂に包まれて、ようやく実感できる。

「……………勝つ……………たー！」

今の戦闘で精神がかなり削られて、もう正直帰りたい気持ちだった。

リザードマンの一撃を食らった事を思い出し、HPの確認にメニューを開く。HPは半分程度になっていた。連戦するには心許なかったので、アイテムの欄から薬草を取り出す。

「……………これどうすんだ？ 塗るのか、食うのか……………」

薬草は使えばHPが回復するのはもはやRPGに限らず、ゲームをよくプレイする人達にとって別に不思議な事ではない。ただ、問題はどうかやって使うか、だ。

コマンド式ならば薬草を選んで”使う”でも選べば済む事だが、このデュアルワールドではそうもいかない。とはいえすり潰したりする道具も無いし、はっぱをそのまま負傷したところに当てておく事も試したが、効果は無い。……やはり食べるしかなかった。

唾を一回飲んで、意を決し口に入れ、噛む。

感想、凄まじく苦い。良薬は口に苦し、とは言っけれど、薬草如きで良薬と言っているものなのかも定かじゃないし、苦すぎて舌の感覚が無くなってくる。これ実は舌にダメージでも入ってるんじゃないのかと思うぐらいに、苦い。

でもメニュー画面を見るとちゃんとHPが回復されているので、効果はしっかりとあるようだ。……だがもう食べたくない。

レベルはまだ三のままだったが、薬草を取り出した時に見たアイテム欄に、リザードマンの死体と共に、その装備品である鉄の剣が何故か入っていた。残念ながら皮の盾は無いようだったが、これはリザードマンからのドロップって事でいいのだろう。早速装備品を入れ替える。

みすばらしかった剣がグレードアップして、なんだかようやく様になった気がする。

さっきまでは俄然弱気だったが、ここに来てこのドロップで自然とやる気も出てくる。

その後も出てきたのはリザードマンばかりで、一対一で戦えるので俺には丁度良かった。薬草の苦味を味わいながらも、限界まで戦い、レベルも六へと到達した。

APの振り分けは宿に帰ってからする事にしよう。振り分けてる途中で襲われたら確実に一撃は食らうだろうから。

レベルが上がったおかげで、スキルも『ストライク』という突き技を新しく覚えた。あまり使う機会は無さそうだなあ、とか思ったが、ウルフリーダー戦で突きを使った事を思い出し、考えを改める。相変わらず盾はドロップしてくれはしなかったが、鉄の剣を装備しているのを除いて二つ入手。

レベルアップの副産物にしては中々良い拾い物だろう。売ればそれなりになりそうだ。ついでにリザードマンの死体も溜まっていたので明日の朝一番で売り払ってしまおうか。……少し素材にして見るのもいいかもしれない。

門の前で相変わらず警備を勤める門番の兵士に軽く挨拶をして中に入る。俺が出る時と同じ人だったので、どうやらこんな時間でも怪しまれずに通れたようだ。

そして、宿へ戻るために歩を進める。

現実時刻は夜九時。デュアルワールドの時間は、もう日が昇り始める頃だった。

目覚めの朝

現実時間で九時を過ぎた頃、デュアルワールドでは朝になっていた。

夜のレベル上げの後、宿にこっそり戻ってシアに気付かれないように再び眠る。どうやらプレイヤーである俺がこのデュアルワールドで睡眠を取ると、デュアルワールドの中の時間が急速に進むようだ。最初こそ時間は合っていたが、睡眠を取ったおかげでズレが生じたのがその証拠だった。

目を覚ますと目の前にシアが居た。なんだか奇妙な表情をしていた。

怒ってるようで、恥ずかしがっていて。悲しそうで、嬉しそうなそんな複雑な表情。女心が手に取るように分かるスキルもアビリティもないので、今の俺にシアの本心がどういったものなのか分からないが、とりあえず謝っておく。多分俺が原因だと思うので。

「……………なんかよく分からないけど……………ごめんな？」

シアは反応こそすれど、言葉で返す事はしてくれなくて、俺に取れる選択肢は限りなくゼロになり、俺も困る。

気まずい沈黙が空間に満ちるが、俺に何かしらの原因があるっほいので、俺は動けない。ただただシアがこの沈黙を破ってくれるのを祈って待つしかない。今の俺にはそれしか出来なかった。

やがて、シアもこのままだと何も進まない事に気が付いたのか、ようやく口を開いてくれた。

「……………つ……………んです、か？」

シアが俯きながらも搾り出した言葉は、良く聞き取れなかった。

細く消え入りそうな声で呟くように言ったので、最初の方が聞き取れない。

「触っ、たん……ですか」

……これは、どうしたものか。触ったと言えば触った事になるが、決してそんなやらしい事をした覚えも無い。とはいえシアは触ったかどうかしか聞いて無いので、変に自分から墓穴を掘るような事は避けたいところではあるのだが。

様子見でまずは真実を告げよう。何か勘違いしている様ならその誤解を解けばいい話だ。変に考えると余計に面倒な事になる。

「……触りました……」

途端に、シアが俯いていても顔が真っ赤に染まっていくのが分かる。

その様子を見て俺は慌てて理由を付け足す。

「ちょっと待ってくれ！ そんなやましい気持ちじゃなくて、起きたらシアが隣で寝てて、俺に氣遣ってくれたんだと分かったんだけど、やっぱりシアみたいな女の子がベッドで寝ないのも体に悪いからさ、ちょっと動かしたただけなんだよ、本当に。本当に」

「え？ えっと……本当に、それだけ、ですか……？」

「もちろん」

「そう、ですか……」

なんとかシアも分かってくれたみたいでほっとした。

そういえば朝食とかはどうなるんだろう。一応夜動いて寝た分は、腹も減っていて、余裕で食えるのだけど。あと今日の予定も立てないといけないなあ。俺一人じゃなくてシアもいるし、ちゃんと話し

合って決めないと。

あ、リザードマンの死体を忘れてた。朝にでも換金しようかと思
ってたけど、シアを驚かすために、まだ秘密にしておく。

とりあえず、朝食でも取りながらシアと今日の予定を立てる所か
ら始めよう。

「シア」

「はっ、はい！」

ただ呼んだだけなのにこの過剰反応なのは、やっぱり弁解したけ
ど納得できていないんだろうか……。とはいえ俺にはもうこれ以上
どうする事も出来ないなので、そのまま提案をシアに示す。

「いや、そんな怯えなくても……。今日の予定なんだけど朝食でも
取りながらどうだ？」

「はい……。大丈夫です」

案外、素直に応じてくれて良かった。もしかしたら断られるんじ
や無いかとも思ったりもしたが、元気が無さそうではあるが了承し
てくれたので、そのままシアと会話を続ける。

「それじゃあ行くか、ってここで出してくれるのかな」

「……こころへんの宿だと大体ご飯は付きませぬね。朝夜問わずに
「そうなのか……」

これは予想外だった。昨日の夜は『覚能乃湯』で風呂に入り、そ
のまま夜食を取ったので、宿での食事の事は何も考えていなかった。
思い返せば、宿を出る時に食事の事を何も聞かれなかった。あれは
元から食事の準備が宿には無く、普通の客と一緒に、他所で食べる
ものだと思っただろう。ましてや俺が聞いたのは近場にあるお湯

屋。その詳細もあの店主の青年は知っていたようだったし、そこでそのまま食事を取るものだと思ったはずだ。

そして俺自身も食事の事を忘れていたために、自然と普通の客と同じ利用方法を図らずも取ってしまった、と言う事だ。

しかし、そうなると再び覚能乃湯に向かうしか……他に俺が思いつく食事処は無い。

いや……街の探索している時に見たような気もするが、生憎と場所も名前ももはや記憶から抜け落ちている。

「あの……」

これから予定を立てるための朝食の時間を取るために、食事処を考えていた俺の思考はシアの遠慮がちな声に遮られる。

「どうした？」

「その……食事を取れる所を考えているんですよね？」

まだ一日しか一緒にいないというのに、思考を見透かすのはスキルかアビリティか。ともあれ間違っではないし、別に否定する事でも無いので素直に頷く。

「私がお勧めの場所があるのでそこにしませんか？」

「よし、じゃあそこにしよう。道案内よろしく」

「はい！」

シアは元気をすっかり取り戻したようで、さっきまでの様子はどこへやら。女心と秋の空、とは昔の人もよく言ったものだ。そんな事を思うがもちろん口には出さずに、部屋を出て宿の階段を下りる。

「ニケさん……」

「ああ、なんか騒がしいな」

階段を下りる前からなにやら下が騒がしい。叫び声……いや、怒鳴り声か。太い声は男のようだが、一体誰に？ それにあの店主の青年は仲裁に入ったりしないのだろうか。

色々疑問が浮かぶものの、状況がはっきりしない上に、どのみち階段を下りなければ外に出られないので少し気後れしながらも、階段を下りていく。

階段を丁度降りきったところで、一層強い怒声が気圧されるほどに響く。

「だから！ こんなものに金を払えるかって言ってんだよ！」

恐る恐る歩を進めると、一回のロビー部分で中年の男性が、小柄な人にこれでもかと言うぐらいに怒鳴っている。それが騒がしかった原因なのは一目で分かったが、店主の青年の姿が見えない。こういう時は真っ先に対処するはずの人物が居ない。だからこそこんな朝っぱらから騒々しい事になっているのだろうか。

店主が居ない事にはこの宿を出て行く事も叶わないので、とりあえず怯えているシアをなだめつつ、中年の男と小柄な人の動向を観察する。

「そうは言っても、これを注文したのはアンタだし、事前に金額と出来上がる日にちは伝えてたはずだけど」

中年の男に相對していた人は、小柄な女性だったようだ。その声を聞いてようやくはつきりとする。髪は方に届くかどうかの短さで茶色。服装は汚れてはいないものの、工事現場でよく見る感じの服装だった。腰に手を当てて、怒鳴る中年に一步も引かずに対応しているのを見ると、隣に怯えきったシアが居るせいも、際立って強い

女性に見えてしまう。心なしか背中も大きく見える。

「出来が悪いって言ってんだよ！ こんなものに金を払うくらいなら、魔物にでもくれてやった方がまだましだ」

「……アンタ、自分が言ってる事分かってんの？」

あ、なんかやばそうな雰囲気か漂ってらっしゃる。無関係と言われればそうなので無視する事も出来るが……。ここで無視できるよ
うならばシアにも会ってない訳だ。

「ストップストップ。二人共落ち着いてください」

「何だお前」

おおっ……。まさか二人が綺麗に同じ言葉を返すとは思わなかった。

だがとりあえず俺の話は聞いてくれるようなので、説得のしようもあるというもの。

「いえ、少々騒ぎすぎなのでは、と思ひまして。他に寝泊りしている人も居るでしょうし、こんな朝からそんなに騒ぐ事も無いでしょうっ」

俺がそう言うと、意外にも反発してくるのは、女性、シアと同じくらいの子だった。

「アンタには関係ないでしょう。私はこの人と仕事の話をしているの」

「その仕事の話のせいで周りが迷惑してるって言うてるんだけど」

「それはこの人が全面的に悪いわ。怒鳴ってるのもこの人だけだし」

そう言っ指差す少女の態度に俺は呆れ、中年の男は頭の血管が浮き出るほどに怒りを溜め込んでいて、今にも爆発しそうだ。

自然と小さなため息が一つ出てしまう。またこれか、とは思わな
いでもないが、首を突っ込んでしまった以上仕方ない。やるしかな
い。

「……分かりました。私は無関係な人間なので本当はとやかく言う
権利はありませんが、円滑に事態を解決するために、私がお二人の
間に立つのは如何でしょうか」

「余計なお世話だ！」

中年の男が怒りを俺に向けて放出したのか、再び怒鳴り声で俺の
提案を跳ね除ける。

そのせいで俺もどう会話を続ければいいのか迷っていたが、も
う一人の当事者である女の子が、それよりも早くその口を開く。

「いや頼めるならぜひ頼みたいね。この人は話を聞く気も無いし」

女の子の言葉に反論出来ないのか、男は黙る。

話の流れはなんとなく掴んではいるものの、具体的に何が問題に
なっているのかがわからないので、そこから話を聞く事にする。

「それで、何が原因でこんな騒ぎに？」

「これさ」

女の子は腰の所から何かを取り出す。

取り出されたのは赤色の皮に収まった、シアが持っているような
短刀だった。

「……これは？」

「魔紋付きの短刀。私の自信作さ。これをこの人が頼んで、それを

届けに来ただけで、そんなものに払う金は無いとか言い出すもんで、揉めていたんだ」

魔紋という言葉に聞き覚えが無かったが、とりあえず付加価値的なものだと理解して飲み込んでおく。

どうやら話を聞くに女の子に武器を依頼した男が、出来上がるといらないと駄々をこねてる訳か。いい年して何をやってるのやら……。その手首にある青い冒険証がこの街の冒険者であることを示している。

女の子の話聞く分には明らかに男の一方的な我侷だ。要らないから料金を払わない、なんて子供みたいな言い訳が通じるはずも無い。しかしそれだけで結果を決めるのはあまりにも不平等なので、一応男の方にも話を聞いておきたい。

「それじゃああなたの方は何かありますか？」

男に問うが、さっきまでの威勢と罵声はどこへ言ったのか、静かに黙り込んでいる。

待っても、もう一回聞いても、反応が無い。

痺れを切らしたのか、女の子が男に向かって冷静に、静かに問う。

「もういいわ。唯一つ聞かせて。これを買うのかどうか」

「……さっきから払う金は無いって言ってるだろう」

「あっそ」

女の子はそれだけ言うつと短刀を仕舞い、身を翻して宿から出て行く。丁度入れ替わりで店主の青年がやってくるが、もう事態は収束してしまっただ後なので、一步遅かった。

男も何も言わず、ただ俺をその目で一瞥し、同じ様に去っていく。

「なんだっ たんだ……」
「さあ……？」

呆気に取られている俺とシアはただ呆然とその場に立ち尽くし、二人が出て行った宿の入り口を見つめていた。店主の青年がなんだろうと見ているのが分かったが、少しの間動けずに居た。

その謎の拘束を腹の虫が破り、ようやく動けるようになった俺達は、奇異の目を向けていた店主の青年に宿の代金を払い、外へ出る。四千と少しばかりの所持金が今は、昨日のお湯屋で使った分も含めて半分ほどになっていた。だがまだ昨日の夜中に一人で稼いだ分を換金していないので、それを所持金に含むのならまだ金欠とも言えない位には持っている事になるはずだ。

「こつちです」

シアのお勧めの食事処を楽しみにしながら、先を歩くシアに付いていく。

シアは髪型を再びツインテールにしていた。黒いリボンで結ばれたその綺麗で艶やかな髪をつい触りそうになるが、何とか堪える。

シアは通りを何分か歩き、そこからいかにもな路地裏へと足を踏み入れる。

多分、地元の人でも限りある人しか知らないような、秘境の店なのだろうか、とか思いつつ、置いてかれないように付いていく。

やがて目の前に現れたのは定食屋だった。通りには目が届くものの、少し離れているせいか通りからは注目もされないような寂れた所に建っていた。

店の名前は『こりゆう』暖簾にそう書いてあった。

朝食の時間

昔ながらの定食屋をそのまま持ってきたような、どこか浮いたその存在にシアは何のためらいも無く暖簾をくぐり、引き戸を音を立てて開き、入っていく。

確かに、いかにも高級そうなレストランとか、そんな上流階級のお店よりは心が落ち着くが、それにしたって少しみすばらしい気がする。

シアの後に付いて暖簾をくぐると、その内装もいかにもな感じだった。

お店の半分ほどを占領するカウンター席。そして人がやつとひとり通れるほどの通路があつて、テーブル席が三つほど並んでいた。

カウンターのの中には歳を取ったおじいさんが居て、いらっしやいとゆっくりと言ってくれる。

どうやらシアがお勧めと言っただけあつて、シアはこのおじいさんと顔馴染みらしく、シアの姿を見るとその顔を綻ばせて、ひさしぶりだね、と言うのだった。シアは同じくらいに笑って言葉を返す。そのついでに注文を頼んでいたが、いつもの、で通じる辺り相当な常連客なのだと思わされる。俺は何にすると言われたが、シアと同じでいいと答えておく。シアがいつもの、で通るほどに食べている物ならば、ハズレは無いだろうと思えるし、どうせならこの店を勧めてくれたのだから、料理もシアのお勧めに従って見るのもいいんじゃないかと思つたからだ。

注文した後、三つあるうちの一番奥のテーブル席に俺とシアは腰を下ろした。

注文が来るまでの間に、さつき聞きたかつた事でもシアに聞いてみる事にしよう。

「シア、さっきの人が言つてた『魔紋』って何なんだ？」

「えっと、魔紋っていうのは魔法が使えるようになる特殊な文様の事です。武器や防具、アクセサリーに刻んで持ち歩くのが普通ですね」

シアはそう言うつと首の後ろに手を回して、何かを取り外し、手に乗せた後、俺に差し出してくる。

シアの手に平に収まっていたのはペンダント。赤く細長い宝石に鎖が繋がっていた。

「これは？」

「私の魔紋付きのアクセサリーです。この宝石の表面を良く見てください。……紋様が見えると思うんですけど……」

シアにそう言われて改めて宝石の表面を見る。確かにそこには、宝石の赤よりも深く濃い紅色で複雑な紋様が描かれていた。

「これは何度か使った見せた^{ファイアチャージ}火炎装填を使えるようになる魔紋です。これが壊れたりすると、もうその魔法は使えなくなるんです。もちろん同じ紋様を用意すればまた使えるようになるんですけど……」

シアにそこまで言われて、俺はふと疑問に思う事があった。シアが使った魔法は二つ。昨日確認した事なので今も変わってないはずだが、その一つが魔紋によるものだとして、もう一つは同じ様に魔紋なのか。そうだとすれば、魔法を魔紋無しで使う事は出来ないという可能性も出てくるのだが、答えを知るにはさらにシアに話を聞かなければならないのに、丁度そこへ、店主の奥さんだろうと思われるおばあちゃんが、器用に二つの盆を片手でそれぞれ持って現れた。

料理を運んできてくれたおばあちゃんも笑顔がとても穏やかで綺麗だった。ごゆっくりどうぞ、と言う声も優しさが感じられて、こ

の店がシアのお勧めになるのも分かる気がする。

恭しくお辞儀をして去っていく。

運ばれてきた料理は、和の定番ともいえる内容の定食だった。

鮭の塩焼きに大根の千切りの味噌汁。おひたしと二切れの漬物に輝くような白米。どれも出来たてで、暖かそうな蒸気が空中に舞っている。こんな和を体現したような定食なんていつぐらいに食べたものか……。日本に居ながらも、食べるものは和食からはかなり離れた生活をしているので、なんだか凄く新鮮に感じる。

意外とシアは日本食が好きなんだなあ、とか思ってしまう。外見はファンタジー世界の住人そのもので、一切、日本らしいポイントは無いのにも関わらず、好むのが日本食というのは何が基準で決められているかは俺には分からない。

一口ずつ全てに口を付けて見たが、やはり味の方も見た目通り、いや見た目以上に美味しい。

空腹も手伝って箸が進む中、先程の話の続きに戻る。

「魔紋で魔法が使えるようになるのは分かったけど、シアは確かもう一つ魔法使えたような気がするんだけど、それも魔紋ヒールドロップの魔法なの？」

「いえ、癒水ヒールドロップは魔紋魔法ではなくて、私自身の魔法です。魔紋はあくまで補助的な物なので、習得して使うよりも消費は激しくなりま
すし、効果も少し落ちます」

あの威力で落ちた状態って事は、実際は相当威力があるんじゃないだろうか、とか思ったりもするが、確かに威力はそれなりにあったが効果時間については結構短い方だと思う。シアが四回ほどしか使えなかった事を考えれば、それが劣化した結果として妥当なのかも知れない。

説明を受けながらも、定食は滞る事も無くほとんど平らげつつあった。

魔紋という物は、言ってしまうえばお手軽な魔法だと思えばいいの
だろうというのはわかったが、問題はその魔紋入りの道具等をどう
やって手に入れるのか。

現段階で俺はレベルが五にもなって、魔法の一つも覚えていない。
魔法のアビリティは習得しているので覚えれば使えるし、習得して
無いから覚えれないと言うことも無いだろう。アビリティを取って
から二レベルは上げているのだから。

なのでいつ覚える事が出来るのかわからない習得を待つよりは、
魔法が使えるようになるという道具があるのならば、それに一度飛
びついてみてもいいんじゃないかと思える。

「その魔紋入りの道具とかはどこで手に入れるんだ？」

「えーっと、そうですね。基本的には魔紋師と呼ばれる人達に頼む
のが普通らしいです。それかあらかじめ魔紋が刻まれた道具類を購
入するとかも基本的な入手手段ですね。値段は結構なものらしいで
すけど……。後は稀に魔物が落としたりもするそうです」

「なるほど……」

現実的に考えて俺が魔紋入りの道具を手に入れるためには、魔紋
師に依頼するか、金を貯めて既存の魔紋入りの道具を買うか、その
二つになるだろう。魔物のレアドロップに賭けるといっものは正直、
まだ早い気がする。

値段が相当なものだという魔紋入りを、魔物が低確率で落とすと
言うことは、おそらく性能も普通に手に入るものよりも強力な物で
ある可能性が高いし、それと比例してそのドロップする魔物自身も
強力な可能性もある。今の強さでドロップするまでひたすらに戦う
のは厳しいだろうし、どの魔物が落とすのかも分からない。むしろ
その過程で溜まったお金で既存の物を買った方が手っ取り早い可能
性もある。

とはいえ、全体的な魔紋関係の相場が分からないので、あまりに

も手が届かないようならば、今回は諦めて地道に頑張るしか無いの
だか。

「魔紋を刻むのにはどのくらい掛かるかわかる？」

「それは……私の持つこれは貰い物で、私自身が刻んだわけでは無
いので値段までは……。あとその刻む魔紋の質よつても結構な差が
あるみたいで、一概には言えないと思います……」

「そっか」

もう定食は完全に食べ終わっていた。米粒一つ残すのがもつたい
なくらいにうまかったので、帰りにでもおじいちゃんとおばあちゃ
んにおいしかったと言いたいくらい、気分が浮いていたが、肝心な
事を忘れていた事に気付く。

そもそも朝食を取りながら今日の予定を話すはずだったのに、俺
の好奇心から魔紋の説明だけでもう食べ終わってしまった。我なが
ら計画を立てて、それを無計画に潰すこの性格は何とかしないと
いけないか思いつつも、今更どうにもならないので、少しここに居
座らせてもらって今日の計画を立てることにしよう。とはいえ俺の
興味は魔紋にしか向いてなかったのだけだ。

「すっかり忘れてたんだけど、今日これからどうしようか」

「えっ、魔紋の事を聞かれたかので、てっきり魔紋師のところへ赴
くものだと思ってたんですが……」

やっぱりそう思ってたのか……。とか思ってしまいが、どうせ他
にどうしてもやりたい、なんて事も浮かばないので、そのまま魔紋
師のところを目指す事にするか。

「じゃあそうしようか。魔紋師ってどこに居るんだろう」

「街から少し離れた所に小さな町があるんです。そこに魔紋師達は

住んでるそうですよ」

「よし、じゃあ今日はそこに行ってみよう」

今日の行動方針も決まったので、席を立つ。二人してお盆を持ちカウンターへと差し出す。最初は普通にそのまま置いておこうとしたのだが、シアが立った後に盆を持ったので、に俺も持つ事にした。帰りにちゃんとカウンターの中に立つおじいちゃんとおばあちゃんに、美味しかったですと告げて、外へ出る。その足で外へ出る門へと足を向けた。

魔紋師の下へ

門は前に見た時よりも開いており、多くの人々が行き交っていた。その中に紛れて外に出る。今思えば昼間に外出るのは初めてだったが、夜の時はまた違った、開放感のある空間に妙に気分が高揚する。

門から少し歩き、行き交う人々の邪魔にならない辺りまで移動してから、隣を歩くシアに目的地を聞く。

「あの森の辺りに見える建物がそうです」

シアが指差す先には広大な森があり、その木々よりも少し高いせいか、人工物らしきものが頭だけを出している。何であんな所にあるんだろうとは思わないでもないが、今そんな事を考えていてもしようがないので考えない事にしよう。

行き先が分かれば後はただ歩くだけだったが、夜の草原とは違い、目に見えてあちこちに魔物が徘徊していた。距離がありすぎて注視しても識別は出来なかったが、見た感じリザードマンほど強そうには思えない。

ゴブリンっぽいのが集団でいたり、スライムらしき半透明のぶよぶよした奴が跳ねながら草原を闊歩していたり、まさに最初の草原と言える魔物達ばかりだった。

最初は避けて通ろうかとも考えたのだが、目指すべき魔紋師達の住む場所までは結構な距離があり、敵を避けて迂回しながら進んでいたら日が暮れるんじゃないか、と言う結論に至ったので、真っ直ぐに敵をなぎ払っていく事にした。……こつそりとあの強烈に苦い薬草でも何個か買っておけばよかったとも思ったが、今更引き返すのも億劫なので、本当にやばくなったら引き返す事にして、今は猪の如く突き進むだけだった。

道中に戦った魔物を識別アビリティで見た限り、俺が思っていた通りスライムであったり、ゴブリンだった。

戦いになった時に俺は鉄の剣を抜いた。シアの記憶にあるのは赤錆びたような銅の剣だったので、すぐに疑問に思われた。昨日一人で夜この草原を歩いた事はあまり知られなくなかったため、レオンを使って誤魔化した。……後にはあれそうだがその時はその時だ。

俺やシアのレベルではこの辺りの魔物は相手にもならず、ファイアチャ 火炎装填ッを掛けていなくとも、一刀の元に切り伏せる事ができた。もちろん楽に倒せるので、経験値は無いも等しい値しかもらえなかったが、数十分も草原を駆けると、ようやく建物を囲む森の入り口まで辿り着いた。

体力はそこそこに消費しているものの、傷や武器、防具の消耗もほとんど無かった。

うっそうと茂る森の中を注視するが、外から見えた建物の姿は木々に遮られて見る事が出来ない。しかし、この中にある事は確かなので、そのまま真っ直ぐ進めば着くだろうと考えて、そのままシアと共に森に足を踏み入れた。

真っ直ぐに、ただ真っ直ぐに歩けば着く、はずだった。

十分ほども歩いただろうか。そこまで経って違和感に気付く。

「なあ、シア……」

「……はい」

「なんか変じゃないか？　こんなに歩いて辿り着かないほど、外から見た時は離れて無かったぞ」

「そうですね……でもそんな、何かあるような話は聞いたこと無いですけど……」

シアがそう言った話を聞いた事が無いのならば、ここは本当に普通の森なのだろう。普段は、だが。

明らかに今は異常だ。方向感覚が狂っているとかそういうのではなく、延々と同じ所を歩かされているような、そんな感じがする。分かりやすく言うならば、この森が”迷いの森”になっているって事になる。

原因が定かではないが、何かしらの原因があるのは確かだ。そしてこのまま歩き続けてもおそらくは同じ事だろう。今まで取ってきた行動とは別の行動をすれば何か突破口が見えるかも知れない。

とはいえ、シアと別々に行動する訳にもいかないので、考えられるのは二つ。

木々に目印を付けていくか、焼き払うか。

後者は最終手段として取っておくとして、とりあえずは順当に、目印になる傷を木の幹に付けていき、ゆっくりと辺りを警戒しながら歩く。

再び同じくらいの時間を歩いた。メニュー画面の現実時間はこの世界の時間軸とはずれているが、何分経ったかの確認には使える。計りたい時の現実時間を見て記憶しておけば、その後見た時間から逆算して導き出せる。

おそらく合計で三十分も歩き通したが建物は見つからないし、辿り着きもしない。

そろそろ体の方も厳しくなってきた。肩で息するぐらいに疲れ、まるで体力がこの森に吸われているような錯覚すら覚えるほどだ。

そして肝心な木に付けた傷。それをシアと二人で探す。

「……ありました！」

シアがそういうのでシアの目の前、調べていた木を見ると、確かに俺達が付けた矢印が刻まれていた。

矢印は進行方向に向けて刻んだので、今この木に刻まれている逆

向きの矢印は、俺達が逆に歩いている事を示している。

森が延々と続いていた訳でなく、俺達がどこかの地点で、気付かぬうちに反対を向かされて居たと言う事だ。

原因が分かれば、対処するのは実に簡単。

俺とシアは再び矢印の方向へ歩き出す。今度は木に刻んだ目印とは別の、地面に剣で軽く刺してそのまま引きずるように歩いていく。その結果、地面には歩いてきた方向、つまり俺達の後方に線が出来る。もし俺達が知らぬ間に反転しても、線ですぐに気付く事ができる。

多少は剣の耐久度も心配だったが、鉄の剣は後二本新品があるので、仮に壊れたりしても取り出すだけで万事解決だ。

そして少し歩くと、地面に描かれた線が気付くと目の前に、彼方まで延びている。

「ここだ」

さっきまでなら何も気付かずに、馬鹿みたいに来た道を戻る所だが、今回は反転する所をしっかりと見極める事が出来ている。そして正しい道へと歩を進めるために振り向く。

すると、突如空中が何も無いのに燃え上がり、やがて敵が現れる。即座に視線を合わせ、注視して識別する。

迷わせのレイス。

その魔物の名前が即座に浮かび上がる。俺の識別アビリティはまだランク一なので、敵の名前、装備品しか見えない。名前しか浮かび上がらなかったと言う事は、装備品は何も無い状態という事になる。それは、敵の姿を見ただけでもすぐに分かる事なのだけれど。

突如現れたのは人を丸呑み出来そうなサイズの口を持つ、幽霊。

そうとしか表現できない。透けてはいないようだが、空中に風船のように浮かび、おぞましいほど大きな口を咀嚼でもするように動かし、口に比例した巨大な舌で、ご馳走を目の前にした動物のよう

に舌なめずりをしている。

ただのレイスではなく、二つ名的な物がついてる事から、普通の敵とは一線を越す存在だと言つのは分かる。その巨大さも相まってか、威圧感と背筋が寒くなるような嫌悪感が凄まじい。

しかし、こいつがボスクラスなのは間違いなかった。

引きずっていた剣を軽く振って先端についてた土を払い、構える。……そういえば道中に敵が出なかったのは、こいつが居たからなのかもな。

そんな今更な思考も遮断し、目の前の敵の一挙一動に目を張る。

空気が鋭く刺すような緊張感に包まれる。下手をすると話の進行上まだ倒せない奴かもしれないが、とりあえずはやってみるしかない。

シアとの連携を取るために、目線を送ると、そこでシアの異変に気付いた。

剣すら構えず、怯えたように自分の体を抱いて後ずさる。視線はもちろんレイスへとしっかり固定されているのだが、倒すべき敵に向けるような目では無く、恐怖の大王でも見るかの如き恐れの目をしていた。まさか……。

俺の予感、その数秒後に発したシアの言葉で、当たっていた事を証明される。

「ひっ……お、おばけ……」

どつちやら少しまずい事になっているようだった。

迷わせ幽霊

怯えているからといって、敵が情けを掛けてくれるはずもなく、レイスは真つ先にシアへと突進する。それを確認し、俺もまたシアの元へと駆ける。

距離と速さを考えるならば、俺の方が少し早かった。しかし、シアの元へと向かう途中で、はっきりと見えた。

あいつの舌が誰よりも先にシアを絡めとろうと伸びているのを。

右手の剣を握る。もし先に相手の舌がシアに触れようと、そこから一瞬の間も無く切りかければ大丈夫なはず。駆ける足に込めた力は緩む事は無い。

シアは突進するレイスに気がついてはいるが、恐怖からか少しづつ後ずさるばかりで、ウルフリーダーと戦った時の繊細かつ大胆な、舞うような回避行動はその一片だって伺えない。

レイスの舌が一瞬はやくシアを絡め取る。短いシアの悲鳴が聞こえたが、俺は構わず、目標をその伸び切った舌に定め、剣を構える。斬っても良かったのだが、少しでも早く剣を届かせようと、選択したのは突き技『ストライク』覚えたばかりの技だが、頭でイメージして動作を取ればそれがスキル発動の鍵になる。

そのままレイスの舌へと鉄の剣の鋭い切っ先が吸い込まれるように軌道を描き、突き刺さる。しっかりと手ごたえがあった。血はもちろん出ないが、レイスは拘束していたシアを離し、痛がるように空中で舌が暴れ回る。

俺はそのまま歩みを止めずにシアの元へ駆け寄る。

「大丈夫か！」

「あ……は、はい………すみません、ありがとうございます………」
「戦えるか？」

俺の言葉にシアは力なく頷くが、その様子を見る限り戦えるような状態ではなく、俺が何とかしなければならぬ状況だった。

右手の剣を改めて握りなおし、レイスへと視線を向ける。俺が傷を付けた舌を完全に口に仕舞い込んで、空中に浮かぶ白い物体と化しているレイスに、俺は攻撃を仕掛ける。

五歩も歩けば届く距離にいる無防備なレイスに、今度は『スラッシュ』を叩き込む。

その攻撃は確実にレイスの体を捉える軌跡を描く。だが、レイスは避けるような素振りすら見せずに、ただ浮いたままだ。何かあるのか、と思う間も無く、レイスがその大きな口を歪んだ笑みに変えた。

確信する。だが今更攻撃を止めれるほどに余裕は無く、逆にこの勢いのまま斬る事で、強制的に相手の行動を阻害するしか俺の取れる道はなかった。

そして俺のスラッシュがレイスの体を、……通り抜けた。手応えも無く、ただ空を切っただけ。

剣を振るって気付かされたその違和感に、振るった直後の硬直の中、首だけを回しレイスを目で見て確認する。

傷は無い。本当に剣がすり抜けたのだとそれで確信できる。

幽霊っぽいからなのか、物理系は無効なのかもしれない。もちろんそれは外側に限って、だが。

さつきシアを捕らえた舌には確かに剣が通った。そしてそれを体内に仕舞い込んだ。そして外側は攻撃が通らない。弱点はすぐに導き出せた。

性質こそ違えど、基本的な攻略方法はウルフリーダーと何も変わらない。

レイスが、横目に捉えていた俺の硬直の隙を突いて、その舌を伸ばす。

俺はなす術も無く捕らえられ、締め付けられる。唾液と下の表面のざらざらした感覚が、体に寒気を走らせる。力を込めてもその拘

束を解く事は出来なくて、俺一人ではもうどうにもならず、ただ死を待つのみになる。

しかし。今この場に居るのはボスクラスの魔物である迷いのレイスト、駆け出し冒険者の二ヶだけじゃない。そしてその残る一人は俺の仲間だ。

幽霊型の魔物、レイスは甲高い悲鳴を上げる。俺を締め付けていた舌の力が無くなり、自力でもその舌の拘束から逃れる事が出来た。するりと抜け、右手の剣でさらに追撃をかけ、身を引く。隣に立つシアの持つ短刀には炎が宿っていた。

「大丈夫ですか！ すいません……私のせいで……」

どうやらシアはしつかりとお化けではなく、魔物だと認識すれば大丈夫なようだ。最初はインパクトが強すぎて、本物の幽霊だと思いを込んで恐怖したのだろう。

「いや……こっちは大丈夫。それより……」

鳴き叫びながらも、その弱点である舌を振り回し暴れているレイス。無差別に暴れるせいで無闇に近付こうものならば、たちまちその舌に弾き飛ばされるだろう。かなりの距離を取り、万が一に備えていつでも咄嗟の行動できるように構えておく。

すると突然あれだけ暴れ狂っていたレイスが、急に顔を下へ向けてその動きを止めた。

「なんだ？ と思う間も無く、レイスがその顔を上げる。

おぞましいほど醜悪な顔で、その舌をまるで蛇のようにすばやく出し入れする。そしてその舌先がさつきとは違う事に気付く。

「なんだあれ……」

その舌先は二股に分かれていた。本当に蛇のように。

舌全体がピンク色だったのに、二股に分かれたと同時にその舌先の色が無くなっていた。

色彩の無い灰色。だが木々の隙間から入り込む日の光を反射して、その色は輝く。

レイスの行動パターンと形態が変化したのは、すぐに分かった。おそらく何度かヒットさせた攻撃でHPが規定値を下回り、その結果、レイスは第二形態へと変化した。

確かに形態変化はボスの専売特許だが……初期のボスとしては少し早すぎないか、とか悪態をつくが、レイスはそんなこっちの様子も気にも留めず、さつきよりも凶暴性が増した状態で、その舌先の鈍い輝きを俺達にぶつけるために振り回す。

レイスを中心に扇状に降られた舌をギリギリの所で、地面に伏せて避ける。シアは俺とは逆に、ウルフリーダー戦で見せた軽やかな跳躍で避けている。高速で自分の顔をレイスへと向け固定させる。

……見えてしまったのは不可抗力だと自分に言い聞かせる。

シアがそのままレイスに突っ込む。短刀を包む炎もそう長くは持たないために、今の内に出来る限り敵のHPを削っておきたいのだろう。炎を纏ったシアの短刀は、おそらく俺のただの鉄の剣よりも威力が稼げる。威力的には同等近いかもしれないが、そうなることやりは攻撃スピードで勝る短刀の方がダメージを稼げるのは明白で、短刀が炎を纏ってるうちは、出来る限りシアの攻撃チャンスを作るために、俺が援護に回る。

「シア！ 任せた！！」

俺がそう言っただけで地面から起き上がりながら、不安定な姿勢を無理矢理起こす為に地面を強く蹴り、振り子のように帰ってくるレイスの舌先に目掛けて、剣を振る。渾身の力を込めたスラッシュだ。ここまで三回のスキルを使って、後どれくらい使えるかは分からない

が、感覚的に後一回は確実に使える。

遠心力によつて威力が増大したレイスの硬質の舌先と、重心を前に倒して勢いを付加し、さらにスキルを使って力の底上げをした俺の剣とが、互いが吸い込まれるように引き合い、金属質の音を高らかに奏で接触する。

ぶつかり合っただけで、互いの力比べとはいかず、無様に剣を弾かれて吹き飛ばされる。体全体に響く衝撃とそれに伴う浮遊感。そして数秒後に訪れた接地の瞬間、視界が回る。

揺れる意識を引き戻し、すぐに状況の把握に努める。

俺がレイスの舌を止めれなかった事で、シアがやられると言う事は無く、レイスの悲鳴が響く。シアがしっかりとその炎の短刀で何度か攻撃を与えたようだ。再び暴れまわるレイスからシアはすぐに離れる。俺の方へと視線を向けて心配そうな顔をするが、俺も黙って地面に転がってる訳にはいけないので、大丈夫だ、と手振りで示し立ち上がる。

俺の手に剣は無い。さっきの激突でどこかに飛ばされたようだ。今はそれを探す暇は無い。

すばやくメニューを開き、アイテム欄から鉄の剣を選択して装備する。

その瞬間腰には新たな重みが現れ、それとほぼ同時に剣を抜き、走り出す。

暴れ終わりに合わせて突っ込んだ俺に、レイスが気が付いた時には、もうその長い舌を振り回す余裕すら無いほどに接近している。そのまま舌の根元に斬りかかろうとしたが、剣は勢いのまま地面へと刺さる。

簡単な話だった。ただレイスが後方へとその体を動かしただけ。

RPGでだって敵は攻撃を避ける。そんな事すら頭から抜け落ちていた俺に、レイスは大きな口を開き、そのまま飲み込もうとする。

俺は未だに攻撃の硬直で動けない。このまま行けば間違いなく食われる。

口の中は何も無い真つ黒な空間になっていて、その闇の中から舌が現れている。ここに飲み込まれたらどうなるかはわからないが、正直嫌な感じがする。こんな序盤からまさか、とは思うが、ある一つの特性を持つ攻撃をその空間は予感させる。

即死攻撃。

食らったら最後。ただ死ぬしかない絶対の攻撃。

普通は滅多に見ないような攻撃だが、たまにその即死攻撃を持つ敵がいるのは特別珍しい事じゃない。ましてやボスクラスになれば、これだけは気をつけないと全滅の可能性がある、なんて攻撃を持っていたっておかしくは無い。さらにHPも相当削れている状態の事なら尚更だ。

その時、目の前に影が通る。シアじゃない。それよりももっと小さく細長い……。

レイスの大口に、そのまま俺の代わりに吸い込まれたそれは、一瞬の事だったが確かにその存在の正体が分かった。俺の手元にあるものと同じ、……鉄の剣。

それがさつき弾き飛ばされたものだというのは分かった。

視線を一瞬だけレイスから外すと、シアが投擲した直後の動作をしていた。その顔にはほっとした様な表情が浮かび、笑顔だった。まるで当たって良かったとも言つように。……あれ、俺に当たっていたらどうなってたんだろう。

剣を飲み込み、苦しむレイスが暴れようと舌を振り回す直前、かなりの距離まで接近済みの俺は改めて剣を構えて、上から下へ、舌の根元に向け剣を振り下ろした。もちろんスキルのスラッシュで威力の増幅は忘れない。

「……じゃあな」

ぱつさりと根元から切れた舌が地面に落ち、レイスは悲痛な叫びを一際強く短く鳴いた後、力なく地面に落下する。

それは迷いのレースのHPがなくなった事。そして、俺達が勝利した事を示した。

魔紋師の少女

人一人分の高さがある白い球体、もといレイスの死体をポーチへと仕舞い込む。最初はこんなに入るのか、と思っただが、そこはゲームらしく何の不都合も無くすんなりと収まる。

アイテム欄で見てもしつかりとその名前が表示されている。

ついでにレベルも一つ上がり、六になった。スキルは何も覚えなかったが、そういう時もあるだろうと少し残念だが納得しておく。

そして、ある事に気が付く。

レイスが居た所、つまりレイスの死体が落ちた所に、光を反射し輝く物が落ちていた。

手の平からすこしはみ出す位の大きさの紫色をしていて、向こうが若干透けて見える程度の透明度と、どこか見え覚えのあるその形。

「これって……」

その欠片を試しにポーチへ放り込んで、すぐにメニューを開いてある一点に目をやる。メニューの端にある、意味ありげなアイコンの表記がある所へと。

そこには今までゼロだったのが、一という表記になっていた。これが示すのは一つ事実しかない。

王様が言った星の命の欠片。俺がこの世界で探し、集めるべき唯一つの目標。いくつあるかはまだ定かではないが、そのうちの一片が、いま手に入った。

これが迷いノレイスのドロップである事は間違いない。

その変動した数字を眺めながら、まだ続く道程と確かに一歩進んだ事実を噛み締める。

「どうかしたんですか？」

シアが俺の行動に疑問を抱く。それもそうだ。他人から見れば何も無い空中を眺めて、うすら笑う変人にしか見えない。だがシアはすくなくとも俺にそういった感情は幸いにも抱いていないようで、ただ純粹に疑問に思ったただけだろう。

「いや、なんでもないよ。ただ、なんでこんな所にあんなのがいたのか考えていたんだ」

口から出任せだが、実際気になる事の一つではある。

迷いのレイスは二つ名が付いていた。それがただ強いボスクラスを表すのか、欠片持ちの魔物を指すのかははっきりとはしないが、その名の通りに俺達をこの森に仕掛けたトラップで迷わせた。

魔物達が独自の思考を持っているのは、リザードマン戦などで痛感しているので、レイスにも独自の思考があり、その結果ここを通る人間を迷わせていた、というのは納得出来る。それが何故なのかは、今の俺には知る術が無いが、その事から浮かぶ疑問が一つある。

俺達が目指していた魔紋師達の住む所は、レイスに惑わされなければものの数分で辿り着くぐらいの距離のはずだ。もちろんそこに住む人達はこの道を行き来するはずなのに、街でそんな噂は聞かなかったし、今朝宿で会った女の子は届けに来た、と言っていたから、状況から考えてこの先の街から、今日、品物を届けるためにこの道を使ったはずだ。様子がおかしい事もなかったし、俺が見抜けなかったただけとしても、先にここへ戻るはずの女の子とは森の入り口でも道中でも会わなかった。

もしかしたらまだ戻っていないという可能性もあるだろう。その場合は、行きはよいよい、帰りはこわい、みたいな事になっていたのかも知れない。

「本当、なんだったんでしょね……。最近魔物の活性化が進んで

るって聞きましたし、そのせいかも知れませんね。これからはもつと用心しないと……」

「そういえばそんな事も聞いたな。まあ、どちらにしろ俺達に出来る一番いい方法は強くなる事だ。状況次第だが、もし魔紋が刻めれば俺も少しは強くなれると思うし、先を急ごう。迷ったおかげで時間も食ったし……」

「そうですね、行きましょう。あ、ニケさん怪我とかは大丈夫ですか？ 回復していかないと何があるか……」

「俺は大丈夫だ。そんなに気にするほどじゃないさ」

「そうですね…… ならいいんですけど……」

シアの心配を他所に俺は歩き出す。実際の所、HPは半分以上を保っている。

それに、迷わされていたとはいえ、街まで実際に必要な距離の半分以上を使っていた迷いのトラップが、もう今は存在しないというのならば、少し歩けば敵に出会う前に街に辿り着いたってなんら不思議じゃない。

だけど、目の前に現れた光景には少し拍子抜けさせられる。

魔紋という少し禍々しい響きを持つ、そんな不可思議なものを刻む事が出来る人達が住む街。そのせいで少しはダークな雰囲気を想像していた。森に囲まれ、まるで外の人を拒絶している、なんて状態も少しは手伝っていただろう。

だが目の前に現れたのは最初の街、フィルストと同じぐらい、いやそれ以上に活気のあるまさに職人の街だった。

あちこちで職人気質な方々の怒号が飛び、その度に、その声に弾かれるように声が返る。 師匠と弟子。その関係がありありと見て取れた。

あちらこちらで金属を叩く音が響き、やかましいぐらいだった。

その立地条件や話に聞く分で半ば分かっていた事だったが、どうやらこの街には受け入れるといった意思は無いようで、大きな門も

無ければ、街の入り口を示す装飾すら一切無い。

ただそこにたまたま人が集まっている、とでも言いたげな整合性の無い雑多な街。

「あれ？ アンタは朝の……」

その声に振り返ると、後ろには今朝、宿で一騒動起していた女の子が、こつちを不思議そうに見ていた。

「君は……」

「私はトツネ。ここにいてるって事は魔紋関係でなんか訳あり？」

「ん……ちよつと試して見ようかと。まあ、様子見程度に」

「……そっか。じゃあ私の店に来なよ。これも何かの縁だ、付いて来て」

それだけを言うとトツネは歩き出す。なんだか押されてしまったが今更断るわけにもいかないし、そもそも目的は魔紋をより知って、あわよくば刻んでもらって戦力強化を図る事だ。

話を聞くだけでも損は無いだろう。そう思って隣のシアが戸惑った顔でこつちを見ていたので、軽く頷いて俺の意思を示し、先を歩くトツネに置いて行かれない様に歩き始めた。

大きな通りから外れて裏の路地を歩く。日も当たらず冷え切った薄暗い路地裏は、陰鬱な気分させる。

しかし前を歩くトツネは一切を気にせず軽快に進んでいく。後ろにはシアが俺に付いてきて、実質、女の子達に狭い路地裏で鉢まれる形になってしまっていた。

何をするでもないが、現実ではまずありえないシュチュエーション

ンなうえに、外見は二人ともかなり可愛い部類に入るので、少なからず意識をしてしまう。

そんな俺の思考は無事二人に読み取られる事も無く、街の入り口から五分で目的地に辿り着く。

そこはどこかの家の裏で、トツネは止まる事無く壁にある扉を開き、中から手招きする。

ここはトツネの家の裏口のようなだった。

「ごめんね。表だと色々と厄介だから」

そんな事を言われたが、俺はともかく、シアも大して気にした様子も無く、むしろ普通じゃありえない対応に楽しそうな表情を浮かべている始末だ。

家に入るとそこは二つに分かれていた。壁によって区切られているとかではなく、全く異質の空間同士が無理矢理くつつけられた様な、そんな光景。

片方は店の裏側と言うしか無いような空間。注文を受けたりするカウンターがあつて、その下の、外側から見えない位置には色々雑多に置かれている。その他には魔紋を刻んだ既製品だろうか、金属の鎧や槍などの武器が並んでいた。

そんないかにも魔紋を扱う店のような風貌とは反対の、俺達がいるのがおそらく居住スペースなのだろう、木の温かみを感じられる白めの木造で、一本足の丸テーブルと、トツネが座り、あと二つの空きがある椅子も木製だ。

丁度店の外側からは見えない位置に居住スペースはあり、そこはしっかりと考えられているようだった。

今はまだお客さんもないようだったが、今トツネが帰ってくるまではどうしてたんだろう、とか考えてしまいが、俺に答えが出る訳も無く、空いている木の椅子に俺とシアはそれぞれ腰掛ける。

俺の抗議の声にトツネは一層その剣幕を強くし、拳句その身を乗り出して顔が触れそうなほどにまで近づけて、それから俺の問いに怒気を帯びた声で答える。

「あんた達、魔紋の事知りたかったんじゃないの!? いきなり変な魔物の話なんかしちゃってさ、聞く気あるの?」

「あ、ああ……ごめん」

俺がそう言っても、トツネは少しの間近づけた顔を離す事無く、不満そうな顔でいたが、やがて諦めたように再び椅子に腰掛ける。

「えつと……魔紋を刻むのにどのくらい掛かるのか、ちょっと相場を聞いてみたくて……」

俺がそう言つとようやくトツネはその不満そうな顔を引つ込めて、改めて顎の手をやり話し始める。

「相場、ねえ……。魔紋の種類とそれを刻む物次第でかなり差は出てくるけど、本当にしょぼいもので三千、最高級なものなら二十万とかかなあ」

価格の差が凄まじいのに驚いたが、よく考えれば現実世界でも楽器なんかは物の質によってその価格の差は激しい。そう考えると何だか納得出来る気がした。

トツネの言った最低限のものならば今の手持ちでも出来るが、本当にしょぼいとまで言われると、なんだかそれで妥協すると損をするような気がする。

とはいえその付加される魔法の効果にもよるので、詳しいこ

とを聞かなければ一概に答えは出せない。

「その低めな所は具体的にはどんなのがあるんだ？」

「うーんと、単調な音を鳴らすだとか、剣先に指ぐらいの火を灯すとか、そんなしょぼいのばかりだよ。つける人はまずいないね」

正直もう少し使えるようなものだと思っていたが、どうやら値段が低いほど子供騙しのようなものしかないようだ。となるともう少し高めのものでないと、ただ記念に刻んだ程度のものになってしまう。懐に余裕があるならそれでもいいが、生憎と駆け出しの懐はそんなに暖かくない。

「……實用レベルの物となるとどのくらいからだろう？」

「ああ、あんたら冒険者だったね。それなら……うん、大体一万ちよつとぐらいかな。まあそれでも『ライティング照明』とか『フローティング浮遊』のサポート系だけだね。冒険者なら持ってた方が役立つでしょ？」

確かにそういったサポート系の魔法は各地を回る際には必須のものだろう。様々な障害もそれに対応する魔法で突破する、なんて事もあるかもしれない。これから冒険者としてやっていくにはあって困るものではない。しかしそれだけ便利なものが実践で使うものよりも安い値段なのは、やはりプレイヤーへの配慮なのだろうか。まあ、どちらにしろ今の俺達にとって一万を越えるものは高級なものである。とてもじゃないが手を出せない。

「うーん、そうか……。欲しいものではあつたけど、今の俺達には手が届きそうに無いな。また今度、改めて来させてもらおうよ」

そう言つて俺は椅子から立ち上がる。大体の情報は手に入れられたし、元から手が届きそうも無ければ取りやめる予定だったん

だ、今更ここで値切りの交渉もどこかみつともないような気がして、同じく席を立ったシアと共に入ってきた裏口から外へ向かう。

そんな俺たちの背中にトツネは声を掛けてきた。よく聞き取れず最初は別れの挨拶だと思ったが、振り返ってその顔を見ると、どこか悲しそうな表情で、ただ立ち尽くしていた。

そのあまりにも予想外なトツネの姿に俺は固まり、つい声を掛けてしまう。

「どうしたんだ……？」

「あ、……いや、その……」

どこか歯切れの悪いトツネを見ると、何か言いたげな事があるのだとすぐに分かるのだが、少し舞っても中々口を開かないので仕方なくこちらから声を掛ける。どちらにしる、そんな顔で見送られたら、ずっと気になって気持ちが落ち着かなくなるのは分かっている。

「言いたい事があるんだろ？」

「……う、うん」

ようやく絞り出された声に、俺再び椅子に座る。シアは俺が座った後にその意味を理解したようで、慌てて戻ってきて椅子に座った。

その様子を見てからようやく立ち尽くしていたトツネも椅子に座り、話し始める。

「……本来掛かる魔紋刻費を半分にしてあげる」

「……そして、その裏とは？」

そんなうまい話がタダで転がってる訳が無い。それにそれを

最初から言わずにいた事も、口籠っていた事もあつてますますその真意が怪しい。

そもそも宿で少し会っただけの人間を、たまたま再会したからって家にまで連れてくる必要は無いはずだ。その上での話なのだから裏が無い方がおかしいと思うのも普通のはずだ。

「……………手伝って欲しい事があるんだ。それを無事終えることが出来たら、その報酬として半分の費用で刻んでもいい。安心して、腕は確かだから、アメノの名に賭けて」

そう言ったトツネの顔は真剣で、信じるに値するようなもののような気がした。それでも自分の実力が低いのは自覚しているのに、無理そうならばおいしい話ではあるものの、断る事も考えていないと駄目だ。

「とりあえず、話だけでも聞かせてくれるか？」

「……………ああ、……………なるべくすぐ必要な鉱石があるんだ」

「それを取って来い？」

普通に考えるならばそんな所だろう。いわゆるおつかいイベントだ。それなりの物しか手に入らないのに労力が見合わないものが多い印象のイベントだが、今回はその報酬が先に提示されている。だから報酬はいいものだとは分かるが、問題はその対価、鉱石を取りに行くとなるとやはりダンジョン的な所に行かねばならないだろう。しかしレベルがレベルだ。その雑魚ですら倒せないほどの高難易度だと今は手も足も出ない。

俺の言葉にトツネは予想外な言葉を返す。もつともいい方向での裏切りだが。

「違う違う。元々私の父さんといつも行ってる所なんだけど、父さ

んが仕事で行けなくなっちゃって、私一人だとちょっと荷が重いから、その護衛って所」

「なるほど。それなら何とかかなりそうだけど、護衛って事はそこに魔物とかが出るって事になると思うんだが……」

「ああ、出るけど大した奴はいないよ、雑魚ばかり。でも数が多くてね、万が一って事もあるし」

「ならいいんだが……」

やっぱり話を聞けば聞くほどにうますぎる話だとは思う。だけどその報酬は今の俺にはとても魅力的で、掛けて見る価値はあるかも知れない。

少し悩んで、シアの方へ視線送る。どのみち俺一人では受ける気はさらさら無い。シアが頷かなければ、俺はこのまま何も聞かなかった事にして帰るのだが、シアは俺の視線に気付くと軽く頷いた。それを確認してから俺はトツネに向き直り、真っ直ぐとその視線を目と合わせ、右手を差し出し、言った。

「わかった。受けよう」

俺のその言葉にトツネは表情を明るくし、俺の差し出した手に被せるように右手を差し出し、固く握った。それは口約束のようなものだが、しっかりと報酬が用意された依頼でもある。

その成約によって俺達はトツネを依頼者として、従う必要もあるだろう。まあ、当然の事だが。

「それじゃあ、なるべくすぐに……、今日の日が落ちるまでは終わらせたいんだけど、そっちの準備はどう？」

「こっちは問題ないけど……、そうだな、強いて言うなら万全な体制を整えるのために、道具屋かなんかががあると助かるんだけど……」

実際、回復アイテムの類は皆無に等しく、レイス戦での負傷によってHPも減っている。見知らぬダンジョンに突入するのなら、HPは満タンで、アイテムも潤沢でないと行く気すら起きないのは、きつと俺が過剰な心配性だからだろう。特別今に限った事でもなくゲームでは毎回こんな感じで進めるために、ゲームオーバー画面に遭遇することはほとんど無く、その代わりにプレイ時間が以上に増大する。つまり慎重すぎるプレイスタイル　友人にはチキンとか言われたが　ーな訳だ。

「ああ、そういうのを揃えるならここから通りに出ればすぐに見つかるよ」

「わかった。すぐ済むと思うから、申し訳ないけど待っててもらえるかな」

「それくらい大丈夫だよ。私も万全にしてもらえると安心できるし……つと、あんたら武器を少し貸してくれるかい？」

「え……、なんで？」

突然のトツネの言葉に俺は戸惑い、家の裏側、つまり入ってきた方から出ようとしていた足を止めた。

正直言つて、そこらの道具屋に行くのでも何があるか分からないため、武器を手放したくないという気持ちがある。

俺のそんな疑いを感じ取ったのか、トツネは慌てて付け足した。

「ああ、その武器結構使ってるだろう。直してあげるよ。これは今回受けてくれたサーブスみたいなもの」

「魔紋師なのにそんな事出来るんですか……？」

トツネの言葉にシアが反応した。

普段はあまり喋らないシアでも反応するほどの何か、トツネの言葉に含まれていたのだろう。俺には何の事か分からないので、黙

ってその顛末を見守る。

「私は魔紋と鍛冶の両方を生業にしているの。厳密に言うならその二つが混ざったうちの家特有のものなんだけどね。そのおかげでこの店『一目連』が成り立ってるようなもんさ」

「はあ……」

そう自慢げに言うトツネを見ると、悪い人ではないのかなとも思えてくるから不思議だ。それは純粹にその事を語るトツネの目が輝いていたからだろうか。なににせよトツネは見知らぬ人よりは信用できる気がした。

「それじゃあ、これ。お願いするよ」

俺はその腰にある鉄の剣を皮鞘ごとトツネに手渡す。それにならってシアもスカートの中から白い肌の足を覗かせながらも、短刀を取り出してトツネに手渡す。

二人の渡した剣をトツネは受け取り、軽々と持つ。

「任せて、買い物から帰る頃には終わらせるから」

「ああ、頼む。それじゃあ行って来る。ほらシア、行くぞ」

「は、はい！」

そして俺達はトツネに見送られながら、裏口から外へと出た。

道具屋での出来事

トツネの店『一目連』を裏口から出て、案内された裏路地を通り、再び街の迎え入れる気のない質素な入り口へと戻ってきた。相も変わらず怒鳴り声が飛び交う通りを、今度はシアと二人、並んで歩いていく。

通りは見通しはよく向こう側の街の外まで、一直線で繋がっていた。

その通りの中で道具屋を探す。トツネが言ったのは見れば分かるという言葉だけだ。具体的な場所は教えてもらっていないが……確かに、通りに目を向けていればすぐ分かる。

数ある店構え　おそらくほとんどは魔紋や鍛冶の店　すら霞むような、一回りも二回りも大きい建物で、道具屋を示すマークがあしらわれた看板が、建物の大きさに比例して大きくその存在をアピールしていた。

「確かに見てすぐ分かるな、こりゃ……」

「ははは……そう、ですねー」

シアはどことなく苦笑いを浮かべながら、俺の意見に同意する。

怒声と甲高い音の響く通りを歩き、その道具屋の前までやって来る。建物は赤暗い色で、汚れなどが窺える事から、相当年季の入ったレンガ造りなのだろうと予想がつく。扉は木製で黒鉄で補強され、取っ手も黒鉄の環だ。どうもこの世界はこういう扉の造りが多く、宿屋『哭椿』の扉もこのタイプだった。まあ、世界観からすれば、さして違和感のない扉なのだが、やはり俺はドアノブを下げたり、回す方に慣れてしまっているせいか、違和感が拭えない。

微妙に不器用になりながらも道具屋の扉を開ける。

そこに広がるのは雑多で視界全てが埋まってしまうような品物の数々。よく見ると薬草などのHP回復系だと思われるアイテムが、一まとめに整理され置いてあり、他にも見ただけである程度、使い方が連想できるようなアイテムから、何だこれ？ と首を傾げてしまうような謎のアイテムもあった。

言うなればそこは宝箱だ。未知のアイテムが溢れる箱。

俺がRPGをプレイしていて楽しい事はたくさんあるが、そのうちの一つとして未知のものとの遭遇がある。アイテムや人、イベントに限らず、土地や敵に至るまで、自分の知らないものがそこにある。そしてそれを知る事が楽しいのだ。……確か、こういうのを知識欲とでも言うのだったか、まあ俺の場合は本やゲームなんか限定の事なのだけど。

元々このVRゲームに手を出したのもそんな興味からだった。木製の棚やテーブルに置かれたアイテム達に囲まれた空間は、はたから眺めている視点でプレイする普通のゲームと違い、その数によって圧迫されているような錯覚すら覚えるほどで、それを見て触れると思うと、胸が躍った。

そんな俺を正気に戻すのは、若い女性の声。

「いらっしやい。ゆっくり見て行って頂戴」

その空間、扉を入った正面に、店の中央を陣取る机を挟んだ向こう側、カウンターで木製の揺り椅子に座って優雅にそこにいる女性は、この道具屋の店主だとすぐに分かる落ち着き払った対応で迎えてくれた。

金色の長い髪に、妖艶な雰囲気漂わせるその女性は、それ以上何も言わず、ただただ椅子に揺られていた。

今思えばこの世界の道具屋というものに入ったのはこれが初めてだ。だからここここまで感慨深いものを感じてしまったのかも知れない。

しかしいつまでも自分の世界に浸っている訳にもいかない。

トツネに武器の修理を頼んでいるから、多少は時間が掛かって大丈夫だと思うが、それでも今日中には終わらせないといけない依頼だ。道のりに掛かる時間もまだ分からないし、道具を買い揃うくらいであまり時間をかけてももらえない。じっくり見るのは時間がある時にすればいい。

そう思い、俺とシアはその道具屋へと踏み入り、様々なものにざっと目を通して、必要になりそうなものを揃えていく。

手にしたのは回復アイテム。薬草より回復する上位のHP回復アイテムである、薬瓶を五個、念のためにMPを回復するアイテムである星の実、というアイテムを二個手に取る。

薬瓶は、薬草から絞り汁を取り、そこに幾つかの薬実という物を混ぜて作られた物らしい。不純物を取り除き、より薬草の効果を高めたもので、手の平に収まるほどの小瓶に入っている。見た目は力キ氷にかけるメロンのシロップのような感じ、だと第一印象に思ってしまった。

星の実とはMP回復のアイテムだ。薬草と同じように効果のある自然物をそのまま持ってきたのだろう。球体に棘が付いた様な形をしていて、言うなれば金平糖が大きくなったような印象を受けた。しかしその大きさは金平糖を二つほど並べたぐらいの直径で、シアでも一口でいけるだろう、というぐらいの大きさにしか過ぎない。そして星の実の名に違わず、店内を照らす照明に一つ摘まんでかざすと、逆光によって黒い星の形を取る。だからこそ星の実なのだろう。

これらの説明が分かるのも、ひとえに説明画面が表示されるからだ。物に触れながら何なんだろう、これ？とか思っている所に、説明画面が何の予兆もなく現れた時は、思わず声を出してしまつて、シアと店主に何事かと視線を向けられたものだ。少々きつかった……。

そのおかげで俺はシアにいちいち尋ねる事もなく、スムーズ

にアイテムの知識を得ながら買い物で済ませる事が出来た。VRゲームとして入り込んでいる人にとっては興醒めだ、なんて言われてしまうかも知れないが、大半の人はこの親切設計を喜ぶだろう。

それらの商品を抱え、女店主のいるカウンターへ置く。それに気付いて女店主は揺り椅子から体を起こし、カウンターの机に体を預ける。その際にその豊富な胸がより強調された気がするが、見ないように努めながら、ポーチへと手を入れる。

女店主は手早くその商品を目で追って数え、すぐにその合計を弾き出す。

「全部で千五百クロムだね」

「あ、はい」

俺はポーチから手を抜きながら千五百のCを取り出すように思考する。それでポーチから引き抜かれた手には、丁度それだけのCが握られる仕組みになっている。これでもう残りの資金はかなり心許なくなるが、まだ換金していない死体もある。ここにくる時の二つ名持ちの魔物であるレイスの死体も、どのくらいになるかは分からないが、少なくとも普通の魔物よりは高くなるだろうとは思う。そう考えればここでの多少の出費はマイナスにはならない。

俺はしっかりとCを握った手をカウンターへ差し出し、そのCを置いた。お札が一枚と金貨が五枚。千五百ピツタリだ。

女店主はそれを丁寧に確認し、間違いなくある事を確かめると、笑顔で、毎度あり、と言うのだった。それはその大人びた顔にしては可愛らしいもので、少し惹かれるものもないとは言えないのだが、今は隣にシアもいるのであるべく表情からそれを悟らせないようにして、俺も笑顔で返すのだった。

「あなた達冒険者でしょ？ それだけ買って行くって事は、坑道での護衛かしら？」

「えっと、どうなんでしょう？ 場所こそ聞いてないんですけど、護衛はしますね」

あっさりとした依頼内容を喋るのもどうかと思ったが、この街でこれだけ大きな道具屋で、トツネもこの場所を教えにくれたし、利用もしているだろうから、この女店主とも知り合いだと勝手に決め付けて良しとおく。

「うーん、まあここで護衛の依頼ならまず坑道だとは思っけど……本当にあなた達だけで行くのかしら？」

女店主はそんな意味深な事を言うので、俺は何を言いたいのか、をその表情から探ろうとするが、そこにあるのは疑問の色と不安の色だ。

「どういう事です？」

「最近魔物が活性化しているって話は聞いたかも知れないけど、その波がここまで来てね、坑道に棲む魔物も少し凶暴化してるのよ。それでこの前、この街全体でその坑道への町民の出入りを一時禁止にして、クリーチャーズコレクションCCにその魔物達の掃討を依頼していたんだけど、やっぱりいくらやってもきりがなくてね。仕方ないから鉱石を掘りに行く際には護衛をつけるように、って事で収まっちゃったのよ。だからそんな所にあなた達のような護衛だけを連れて行くってのが、どうにも腑に落ちなくてねえ」

「それは私達がその魔物に勝てない、という前提で話をされますけど、何故なんですか？」

その話はこの街の背景を知る事が出来て、聞いて得をした気分なのだが、あからさまに魔物より弱いと見られると少し頭にくるものもなくてはならない。

確かに駆け出しだが、ここに来るまでにそれなりの戦闘経験も積んだし、シアとの戦闘連携も結構なものだとは思う。本当の最初に比べれば随分と様にはなっていると思っていた。だからこそ、そんな少しばかり伸びた鼻っ柱を叩かれると、やっぱりきつめの言葉が出てしまう。

女店主もそれが分かっているはずだ。その表情から余裕は消えず、なお変わらない表情で、俺を諭すように優しく俺の言葉に答えた。

「私も長い事ここで仕事してるからね。人は星の数ほど見てきた。この街に住む人達、魔紋師や鍛冶を目当てに来て、そのついでに寄る冒険者達。話もたくさん聞いたわ。だから、そうね。言うならばそうだった経験から来る法則性かしら。私の目で見ると、あなた達がまだまだひよっ子なのは手に取るように分かるわ。だからこそこうして話しているの、これがあなたのした質問の答えだけど、如何かしら？」

完敗だった。俺はそれを示すために両手を軽く挙げて降参のポーズを取る。

「自分が間違っていたと思った時に、素直にそれを認めれるのは良い事よ。あなたは大成するわね」

「それも経験から来る法則ですか？」

「いえ、……女の勘よ」

少しばかり女性の恐怖というものを再認識した気がする。

シアは大人しいし、妹は馬鹿で騒がしいが、俺が上なので気にする事も無い。母親は俺が家事をして、バイトもしてるのであまり文句を言うことはない。もっとも彼女がどうか、そういう話は持ち出すが……。

そこまで考えて俺は思考を止める。折角のVR世界を楽しむ時間を現実の事で無駄にするのはもったいない。それにこの世界での時間もあまりない。

少々世間話にしては長話をしたかと思い、俺はシアに目を配る。いわゆる助け舟を出し欲しい、の合図だ。

シアは俺の意図に気付いてくれたようで、今まで一切口を出さなかったが、おずおずと前へ出てきて俺の隣に來ると、女店主に不器用ながら話しかける。

「……すみません、そろそろ……時間なので……」

「ああ、そうね。店主と客の立ち話にしては長く話し込んでしまったわ。それじゃあお二人さん、気をつけてね」

「はい、ありがとうございます」

俺はカウンターの商品をポーチへと流し込み、女店主に礼をする。そしてそのまま店を出ようと、扉に手をかけたところで、不意に女店主の綺麗な声を掛けられる。

「坊や！」

俺は何事かと思いつながりながらも振り返る。後ろを付き慕うように歩くシアも同じく女店主の方を見る。俺とシアの視線を集めた女店主は不適に笑い、何かを投げた。

それを慌ててなんとかキャッチし見ると、それは星が付いたヘアピンだった。その形状はまるで流れ星のようで、なんとというかシアに似合いそうだった。

「まだ名乗ってなかったわ、私はニア。それは饞別。死なないようにね？」

「ニケ、です。ありがとうございます。またいずれ」

「し、シアです！」

慌てふためきながら、すっかりと名乗ったシアを俺とニアさんは軽く笑い、一度視線を合わせれば、もう何も言うことはなく、ただその道具屋を後にするだけだった。

外に出て、職人たちの怒声が飛び交う通りに出る。そして後から出てきたシアが、道具屋の扉を閉めたところで、俺はそのシアの頭にそのヘアピンを付けてやる。

「動くなよー」

シアは何事かと慌てていたが、俺がそう言っているとピタリと動きを止める。そしてそのヘアピンをつけたシアの姿を遠くから眺めて、頷く。

中々に似合っている。俺の間は間違っではいなかった訳だ。シアはゆっくりと頭に手を伸ばし、探るようにそのヘアピンに触る。

「なに、したんですか……？」

「ヘアピン。似合ってる、可愛いぞ」

俺がそう言いとシアは顔を真っ赤にして俯いてしまうが、それが何だか面白くて、敢えて俺はシアを置き去りにしようと走り出す。

「時間ないぞー！ 急げー！」

実を言うと俺も少し恥ずかしかったりもした。こんな事を現実でするなんかまずないからだ。だからこの追いかけてこも恥ずかしさを誤魔化し、気持ちを落ち着かせるためのものでしかない。ま

だ時間は昼前だ。無理に急ぐこともない。それでも走った。

昼前の双子

「トツネ、戻ったぞー」

迷わないように近道しようとはせずに、同じ道を通って『一目連』へと戻ってきた。

念の為に裏口の扉を数回叩き、中にいるはずのトツネに確認を取ってから、中へと入る。

そこに待ち受けていたトツネの手には、買い物に行く前に俺とシアが手渡した二つの武器が収まっていた。それを入れて早々に手渡される。

「無事に終わったよ。確認してみな」

自信満々な表情を浮かべたトツネにそう言われて、俺は皮鞘に納まった鉄の剣を抜いた。そこには光り輝く、新品のような鉄の剣が、少し変わった状態であった。

シアも俺と同様にその短刀を手にとって、物珍しそうに様々な角度から眺めていた。

「これは……」

「いやー、直すだけって言ったんだけど、作業してるうちについ……」

新しく手渡された鉄の剣は、刃の部分が鮮やかな赤色に染まっていて、ただの鉄の剣に比べて幾分か軽いような気がした。別にそれを勝手にしたからといって怒る訳ではないが、純粹に何をしたいのか、気がなくなってしまふ。それとその効果に付いても知っておきたい。デメリットがあるのならば知っておかないと、いざという時に痛い

目を見る羽目になる。

「これは……なんか効果あるの？」

「えっと、まあ大したものじゃないんだけど、キイカの方は少し切れ味が上がるように、シアの方は炎の威力が増すように、それぞれちよつとだけ手を加えたの。もちろんないよりマシ程度だけどね」

「それでもないよりはいいさ。ありがとう」

「いや、ついやっちゃっただけだから……ははは」

トツネは両手を頭の後ろで組みながら恥ずかしそうに笑みを浮かべて、はぐらかそうとしていた。

トツネは魔紋師であると同時に、鍛治も出来る。むしろトツネの持つ技術は魔紋と鍛治が混ざったものだと言っていたのだから、本当にトツネ自身にしてみれば、それは大した事ではないのだろう。修理のついで、と言うのも納得できる。

……でもちよつと待てよ。どうしてトツネはシアが炎を使う事を知っていたんだろう？ トツネの目の前では使った事はおるか、戦闘さえしていないはずなのに。シアの短刀だってあの時手渡して初めて目にしたはずだ。それなのにシアの短刀に炎を強化するような細工が出来るのだろうか。

俺の剣に切れ味上がる細工をするのは、納得できる。そもそも魔紋を刻みたいのは俺な訳だし、現に俺の戦い方もただ隙を見て切りかかるだけのものだ。強力な戦闘になればこそシアに炎を付加してもらおう事もあるが、雑魚戦ではその機会はほとんどない。

どうにか傍目で見た時に、シアが炎を使うのが分かったような痕跡を探し、記憶を探って見るが心当たりが浮かばない。

何だか気になるのでその疑問をそのままトツネにぶつけてみる。

「なあ、俺はともかく、なんでシアが炎を使うって分かったんだ？」

「ん？ ああ、簡単だよ。武器に付いた傷とかで、偏った使い方し

ていればすぐに分かるんだ。二ケのも炎の痕跡こそあったけど、あんまりメインに据えて使ってるようじゃなかったから、無難なものにしたんだ」

素人目ではトツネが言うものは一切確認出来なかった。

レイス戦の後に、俺は新しく取り出した鉄の剣を再びポーチへと格納して、今まで使っていた鉄の剣に装備し直した。その際にその剣を少し見たが、特別焦げ痕があった訳でもないし、刃も新品の物と変わった様子はなかった。それを見て俺自身が、あんな乱暴に吹き飛ばされても目立った傷は付かないんだなあ、とか思っていたのだから間違いない。

そしてそれを完璧に見抜く辺り、今朝の騒動の時のような態度を取っていたのは、全て実力の裏返しだったのだろうと思う。自信があるからこそ、それを否定されて悔しくて、食い下がっていたところなんだろうか。

「それで、なるべく早いところ出たかったんだけど、もうすぐ昼だしね。ご飯を食べてから行く事にしよう」

「いいのか？」

俺達は特別急ぐ事はない。元々成り行き上の話なので、相当危ないと思わない限りはトツネの言うように動くつもりだ。

対してトツネは何だか焦っていたような様子だったし、のんびりとお昼なんか食べてる暇はあるのだろうか、とも思ってしまうのだが、その当の本人であるトツネが昼にしようと言い出すのだから、俺達に一切の反論はなかったが一応確認は取っておく。

「いいよ。片道三十分ぐらいで、行き帰りと魔物が出る事も考慮しても、二、三時間あれば事足りるし、このまま行って空腹で力が出せませんでした、なんて言われても困るもの」

「そんな事はないと思うけど……」

俺の言葉はある音によって遮られた。一瞬で空気が一変する。響いたのは可愛らしい腹の音。その音の出所は明らかにトツネだった。

「……………」

「私がお腹減っているからお昼にしよう」

「……素直でよろしい」

顔を赤く染めながらも堂々と言い切ったトツネに拍手を送りたい気持ちだったが、それよりも早く、トツネはシアの手を引いて裏口の扉に手をかける。なんだ？　と思う間も無く、トツネは「買出しに行つて来るから待つてろー！」とだけ言つて、あつという間にその姿を消してしまった。シアも何が起こったか分かっていないような表情を浮かべたまま、扉の隙間に吸い込まれていき、扉がひとりで閉まる音とその後訪れた静寂だけが、俺に残されたものだった。

「いや……どうしろって……」

ただ一人残された俺は、変に歩き回る事も出来ず、あれこれ触る訳にもいかず、ただただ椅子に座つて、今の状況だとか、このデュアルワールドについて考察でもして、暇を潰すしかなかった。

メニューを開く。現実時間はもう日を跨ぐような時間だ。でもVRGの発売に合わせて、連休を取った俺に死角はない。流石に限界まで眠くなってきたら辞めるつもりではいるが、出来る限りはやり続けたい。

この世界で起こった事を思い返す。まだ現実時間では一日しか経っていないがこのデュアルワールド内の時間は一日半にも及び、R

PGとしてはまだまだ序盤の範疇だろう。

武器を見たのも未だに、銅の剣、鉄の剣、あとはシアの持つ短刀に、トツネが持っていた短刀だけだ。そして俺の使ったのはそのうちの半分である二種類だけ。武器の総数がどのくらいなのかは俺には想像もつかないが、その数は少ないのが明白だ。

星の欠片も未だに一個だし、全てを踏破しクリアする頃には、現実時間でどのくらい掛かるのか想像もつかない。

改めて自分のステータスを確認する。

レベルは六、HPは五十をようやく超えた所で、椅子に座って休息しているおかげか、少しづつ回復している。

SPはレイス戦でギリギリまで使ったはずだったが、今はもう完全回復している。

戦闘後に自分の状態を確認した事がないので、それがHPと同じ自然回復なのか、戦闘終了後に自動回復するのは定かではないが、とりあえず勝手に回復してくれるようなので、当分はSP回復アイテムは必要ないだろう。

MPは言うまでもなく最大値のまま動いてない。これから使う機会も増えるだろうから、その数値を見るが、シアの魔法の消費MPを見る限り、そこそこにはあるらしい。これで魔法は覚えたけどMPが足りなくて使えない、何て事にはならないだろう。

筋力以下の各種ステータスも二十から三十の値でおおよそ揃っていて、順調に育っているのがわかる。ステータスが上がった事で体が嘘のように軽くなる、なんて事はあまり実感が無いが、戦闘においての行動の際には、確かにそれを実感できる。

敵に近付いたりする時のダッシュも、現実ではまずありえないような速度が出るし、武器もまるで重みがないような感覚で振り回せる。もちろん何かに当たった時には手ごたえもあるし、岩なんかを打ち付けた時は手が痺れるような衝撃が伝ってくる。

だから実際に剣には重みがあるのだろうけど、それを振るう俺の感覚がそれを消してしまっている、という事になるのだろう。

習得スキルは二つ。切りかかる攻撃にさらに威力を乗せる『スラッシュ』と、突き攻撃に威力を乗せる『ストライク』の二つだ。

アビリティは武器消耗軽減の『手入れ』に、魔法の使用に必須な『魔法』。それと疲れが早く取れる『休息』に魔物解析の『識別』の四つ。

アビリティポイント
APはレベルが上がるごとに二ポイントなので、アビリティ習得に使った四ポイントを減らし、残りは六ポイントだが、今から新しくアビリティを取るよりは、既存の物を強化するために貯めておきたい気持ちの方が強いので、とりあえずは置いておく。

後は星の欠片が一つと、買い込んだアイテムに、溜め込んでいる魔物の死体コアぐらいのものだ。

俺は一通りの状態を確認して、やる事もなくなったので、メニューを閉じた。そのまま天井に顔を向けて一息つく。

「あら、お客さん?」

そんな俺に、不意に声を掛けてきたのは女性だった。おそらく二階に続いているだろう階段から、突如として現れた長い金髪の、どこかで見たような顔の女性。

「あれ……? ニーアさん?」

そつだ。さつき会ったニーアさんとその姿形がそっくりなのだ。髪型も、その色も、肌の色も、顔立ちも。違う所といえばその胸のサイズと優しい眼差しだけだ。

俺の言葉にその女性はゆったりとした動作で手を持ち上げ、横に振る。

「違う違う。ニーアは私の妹。私はディア。トツネのお母さん、だよ」

「え……………つて、はあ!？」

その目の前にいる女性、ディアさんは、その見た目からすればどう見ても二十代前半と言ったところだ。それがトツネのお母さんって…………。

トツネはその見た目ではシアと同じくらいのもので、おそらく十六、七程度だろう。それをディアさんの見た目年齢から引くとんでもない事になる。これは俺がディアさんの年齢を大きく読み違えている可能性が一番高いが、そうは言っても、見た目からすれば三、四十代とはとても言えない若さと美貌を持っている。

……………これこそファンタジーか…………。

ディアさんは階段を下りて、椅子に腰掛ける。丁度俺の真正面だ。

「ふふふー、初対面の人はそうやって驚いてくれるから面白いねー」

そんな暢気に語るディアさんの正体不明な感じに若干恐れおのいていたが、いつまでもそうしている訳にもいかず、とりあえず挨拶だけはきちんとしておこうと思った。

「ああ……………つと。お邪魔させてもらっています。はじめましてニケです」

「ニケ君、ね。初めまして。ゆっくりして行ってね」

「は、はい……………」

「トツネとは知り合いなの?」

「え、はい。まあ今朝知り合ったばかりですけど……………」

「そうなの……………、あの子をよろしくね、ニケ君。あの子はちょっと向こう見ずな所があるから」

そういえば朝は結構大柄な男にも一步も引かずに言い合いしてたもんな。理がトツネにあったとはいえ、変な奴だったらあそこで逆

に怒って暴力振るう可能性もないとは言えなかったのに。そう考えると確かに少し危うい所はあるのかも知れない。

「俺程度でどこまで出来るかわかりませんが、出来る限りは……」

「もう！ 男の子はそういう時に、堂々と胸を張って任せてください！ って言うものなのよ」

「そう、言われましても……」

ディアさんは自分の胸の中心に右手を当てて、胸張ったポーズで言うのだけど、俺はレベル六の弱小冒険者なので、自信満々かつ無責任にそんな事は言えず、ただただ情けないながらも苦笑いを浮かべて誤魔化すしかなかった。

そんな俺を射抜くディアさんの眼光は、まるで見透しているようで少し寒気が走った。

「冗談よ。まあ、ニケ君にはシアちゃんがいるから大丈夫だと思うけど……」

「一体全体、何の話ですかね……？ というかなんでシアの事を……」

俺がそう言うと、無言でディアさんは指を上を指す。それにつられて俺も上を見るが、そこにあるのは天井だけだ。

「二階まで丸聞こえなのよねー、この家」
「なっ……」

つまり、ディアさんは二階にずっといて、さっきまでの会話を全て聞いていた訳だ。だからこそ、シアの事も知っている。

しかし、もしそうならば、それまでの依頼の件も全て聞いていた事になる。まあ別に困るような事でもないのだけど、親としては子

供の事が心配なのかも知れない。だけど、ディアさんは何も言わないし、表情にもそういった心配の色は窺えない。

だというのに。

「だから、多分苦勞する事になるかも知れないのだけれど、あの子を頼みたいのよ。それとあの子の魔紋もしっかりと刻んで欲しいの」「どうしてそこまで……」

ディアさんは穏やかな表情だというのに、その言葉の端々にどこか尖ったようなものが感じられて、その言葉を素直に受け取れない。

「……本当は言わない方がいいのかも知れないんだけどねー、ニケ君になら言ってもいい気がするの。だから聞いてくれる？」

「……………はい」

判断に迷った。でもそれは知っておかないといけない事だ。

依頼してきた本人であるトツネの事である事は明白だ。それを俺が勝手に知る事は、きつとトツネ自身はいい顔をしないだろう。しかしその親であるディアさんは、トツネの傍にいつもいるからトツネを一番知っている。そんな人が、俺に何かを話そうとしてくれるって言う事は、ディアさんの言葉通りで、俺がそれに足るものだと思ってくれたのだ。

それに、現実的な話。トツネは未だに何かを隠しているのは実に分かりやすい。そしてそれを隠したまま依頼を実行し、その際に何らかの事故が起きる可能性もくはない。

俺だけならまだしも、シアもそれに巻き込まれてしまうのはやっぱり避けたい。そうなると出来るだけ話を聞いておくのは、悪い事ではないと思う。

つまりは、俺が勝手に本人の知らぬ所でトツネの話を聞いて、罪悪感を持ってしまうのに問題がある訳だが……シアの事を天秤にか

けると、俺の中ではシアの方に傾いてしまっ。

だからトツネの事は本人には内緒にしておいて、今はディアさんが聞かせてくれるという話を素直に聞いておく事にした。

「なんだか悪い事考えてる顔ね」

「えっ！ いやそんな事は……」

「まあ、いいわ」

どうやら考えが表情に出ていたらしい。俺は慌てて表情を繕い、ディアさんと視線を合わせた。吸い込まれそうなその瞳は、とても穏やかで、鮮やかだ。

「あの子はね、技術を持っているんだけど、それが評価されない事に悩んでるの」

「評価されない？」

トツネの技術の高さについて、俺はなにも分からない。技術があるというのは話を聞いてたり、修理された鉄の剣を見れば分かるが、それが俺の中で基準であり唯一なので、比べるものがなければ、最高にも最低にもなってしまう。しかし、俺とシアが買い物に行っていた時間で、修理はおろかオマケすら付けられる事を考えると、その腕の高さが見える気もするが、如何せんゲーム世界の鍛冶の時間は信用ならないものがある。しかもそれが俺の目の届かぬ所で行われているのだから尚の事だ。

「ええ、それがヒコネさん、私の夫の名前のせいなのよ」

「どづいっ事です？」

「身内が言うのもあれんだけど、ヒコネさんの練り上げた魔紋鍛冶の技術は、どこにも負けないような一級品のものなの。名の立つ冒険者の方々や王様なんかも目をつけてくれるほどの最高級品。も

ちろん手間が掛かる分値段も高くなってしまっただけで、その辺りがトツネに仕事が入らない原因になってるの」

最高級品と聞いて、驚きが隠せなかった。魔紋の事を詳しく知るためにここに来て、たまたまトツネに出会った。そして連れて来られた先が最高級の店だったとは、少々出来すぎな気もするが野暮な事は考えず、今は聞かされている話について、トツネについてのみに思考を絞る。

ここが王様も目をつけるほどの店ならば、その技術を継いでいるトツネにも、その名にあやかつて人も集まるのが普通だとは思っただが、現にあの宿ではトツネ自身が造った物を手渡していたようだし、依頼が全くない、と言う訳でもなさそうだった。

それでも評価されないと云うのだから、俺の考えが何か間違っているのだ。

改めて聞いた事、見た事を思い出して考える。

最初にトツネが男に断られた時に、男は「こんなもの」と言っていた。それはつまり、手渡されたトツネの作品に対して、明らかに下に見た発言だ。しかし、ディアさんはトツネに技術はあると言っただけならば、トツネの技術は最低でも一般的な基準だと考えてもいいはずだ。そしてそれを下に見るといふ事はその上があるという事になり、それこそがトツネの父親の作品なのだというのは簡単に考えられる。だから原因だとディアさんは言ったのだ。

「その表情だとおおよその予測はついたみたいね。察しのいい男はモテるわよ」

ディアさんに茶化されるが、俺にとってはまた表情に出ているという事実の方が驚きで、再び慌てて繕うのだが、それをみたディアさんに笑われてしまい、少し恥ずかしい。やっぱりこの世界の年上の女性はどこか苦手だ。

「トツネの技術は正直言つてヒコネさんに及ばないものの、普通の所よりもいいものだ」と私は思う。鼻眞目抜きにしても、ね。でもそれが返つて仇になつてるのよ。

ヒコネさんはその技術があるから高めの金額でも依頼は来るのだが、トツネは頑固な所はヒコネさんに似ちやつて、「私の腕で作つたものは、それ相応の金額に見合つただけの価値はある」って言張るおかげで、普通の所よりも値段を高く設定しちやつてるの。もちろんそれが腕にあつた値段なのは確かなのだけど、やっぱり他の人からすれば、トツネのものはヒコネさんの劣化品、という認識にしかならないの……」

「そして、普通よりも高いせいで、一般の人達からすれば高嶺の花、つて事ですか」

複雑、でもないが、それでもそこには俺の理解できない職人のこだわりというものがあるのだろう。

もちろんお金を払う方だって、より良い物が欲しいと思うのは当然だ。流石に宿にいたあの男のような態度は許せないが、その流れも十分に考えられる話ではあつた。

トツネは今、中途半端な位置にいるのだ。最高級品としては実力が足りず、汎用品としては高く、そうなれば最高級品の代替品として売れる可能性もあるのだろうが、現実問題、売れていないのだから、おそらく代替品としては高いのだろう。

そして、そのせいでトツネは悩んでいる。それをディアさんは俺が打開出来ると思つたのだろう、だからこんな話を眞面目に俺にしているのだ。でも俺は名がある訳でもないし、トツネの作品一つ満足に買えるだけの金もない。

俺はトツネに依頼されただけで、それをこなせば後はどこ吹く風でいいのに、そんな話を聞けば黙っていられないのは悪い性格なのだろう。

シアの時もそうだ。イベントだから、仲間になるかも知れない。そう考えてたのは事実だが、それとは別のものも確かにあった。今回もそれに近い状況だ。魔紋を刻む費用の半減させるためという、ゲーム上の事を考えながら、トツネに出来る限り協力してやりたいと思っってしまったている。

「でも今回トツネ、さんは、魔紋を刻むのを半額にしてくれるって言うてました。プライドがあるのなら、そんな事はしないんじゃない？」

「そう。だから今回はあなた達に賭けようと思ったの。普段は頑固なあの子が、そんな事を言い出したのには、きつとあの子の心境に何かしらの変化が訪れようとしてるんじゃないかって思うの。そしてそれを引き起こしたのはきつとあなたよ、ニケ君」

「俺、ですか……」

俺がトツネにした事なんて何も無い。せいぜい宿で仲裁に入った事だけだ。それもあんまり俺自身は言う事もなく、自然と解決してしまった。その後はこの町の入り口であっただけ。

俺が一体どんな影響を与えたのかは知らないが、もし、本当にそうだとしたら、俺にも何か出来る事があるのかも知れない。

「あの子が今、どう思っているのか、何を考えているのか、私でも完璧に把握できる訳なんてない。子供は親から離れ、子は親から離れなくちゃいけない。そして多分だけど今回を逃したら、あの子はもう変わらない気がするの。だから、どうかお願い。あの子を変えてあげて……！」

ディアさんの表情は完全に子を想う親の顔だ。

そしてそんな顔でお願いをされた日には、俺は断る権利もなく、ただ無言で頷いた。

どうなるかは分からないが、おおよその背景は掴めた。後はなるようなるだろう。俺に出来る事は些細な事だが、それでも静まり返った水面に小石を投げるぐらいの事は出来る。後の事は本人次第だ。

「出来る限り何とかしてみます」

「……ありがとう」

そして、互いに微笑んだ。

無色の横暴

トツネはシアの手を引いたまま、路地裏を走っていた。あつという間に通りにまで出て、そこでその手をようやく離し、両膝に手をつけて体を休める。肩で息をする二人を何事かと行き交う人達は目をやるが、無為に関わる事もなく一瞥するだけに止まる。

二人はそんな事は露も知らず、踏みしめた石畳ばかりを眺め、その息を整えようとしていた。

「っ……はあ！」

トツネは先程までとは逆に体を反るように一気に起こし、それを仰ぎ見る。その頃にはもう行きは整っていた。照りつける日差しの眩しさに、右手を顔の前にかざして和らげる。

「トツネ、ちゃん……？　どうかしたの？」

シアはそう言うが、トツネは空を仰ぎ見たまま動かず、二人の沈黙を埋めるように辺りの喧騒がより一層、二人の間に流れる。

しかしそれを掻き消すようにトツネは振り返り、シアに先程まで繋いでいた手を差し出す。そして日の光にも劣らぬ眩しい笑顔で、シアに応えた。

「……いや、何でもないよ。さあ行くっ」

シアは戸惑い、その差し出された手と顔に何度か目を向けていたが、やがてその手を恐る恐る握った。するとトツネは再び振り返り、通りを歩き始める。シアは引っ張られるように歩き出し、やがて隣に並ぶ。

二人の身長はあまり変わらず、見た目も歳が離れているように見え
ない。

行き交う人達からすれば仲の良い友達、もしくは姉妹のように思
われるだろう。しかもその手を繋いでいるとすれば尚更だ。

シアは少しの間戸惑い、トツネに手を引かれながら歩くだけだっ
たが、やがてその状況にも慣れたのか、足取りも表情もいつも通り
に戻っていた。

それでもどこことなく不安そうな表情を浮かべるのは、見知らぬ土
地だというのが大きかったのだろう。今は頼っていたニケも隣には
いない。

シアにしてみればこの土地の勝手知ったるトツネより、何かあつ
ても守ってくれるようなニケが隣にいた方が安心できたのだ。

「それで、どこに行くの……？」

シアはそうトツネに尋ねる。昼の買い物だという事は分かっていた
が、具体的にどのような場所に行くのかは、先導するトツネのみ
が知っている。

そもそもお昼といっても何を食べるのかすら決まっていけないのだ
から、その材料を揃える以前の話だ。だからシアはトツネが既にそ
のメニューを考えていて、その上で必要なものを買って揃えるのだと
思っていた。しかしトツネはゆっくりと歩みながら、シアと繋いだ
手とは反対の、手持ち無沙汰な手の人差し指を顎に当て、何かを考
えているように唸っている。

その姿を見たシアはもしかして、と思うが、その予想をトツネは
すぐに言葉で肯定するのだった。

「どうしよっか」

シアの僅かな希望は砕かれて、二人は何の計画も無しにただただ

通りを歩いていく。

「これとこれ……あと、これ」

シアとトツネがいたのは食材を扱う『天菜』^{てんさい}という店だった。そこには様々な種類の肉や野菜、その他加工品も揃っていて、現実で言う所のスーパーマーケットのようなものだった。だがもちろん現実のようにかごが置いてあったり、カートが用意されているなんて事はなく、ただただ物を詰め込んで並べているようにも見えるほど、隙間なくその空間に食材が詰まっているだけ。入り口兼出口の所に人が立っていて、そこで会計するのは現実と似たような感じだ。

その中を縫うように移動する二人組こと、シアとトツネの役割はきっちりと分かれていた。

シアはその視線を数ある商品に滑らせて、その質を見極めて、吟味した食材を手に取りトツネに手渡す。トツネはそれを受け取って、その手にある食材の山に加えて抱きかかえる。

トツネの手にある食材は肉や野菜等、多種多様。完全にシアが仕切って買い物をしていた。

「家事出来るって羨ましいなあ。私が出来るのは鍛治くらいだし……」

「やらなきゃいけないから、勝手に身に付いちゃっただけだよ。やればすぐに覚えるようなものだし……」

「そんなものなのかなあ……」

二人はそんな会話をしながら、店の会計を済ませ、紙袋に入れた食材達を手分けして持つ。支払いは全てトツネ持ちだった。シア自身がお金をそんなに持っていないのもあったが、トツネはこれ

も依頼のサービスみたいな物だと言って、気持ちよくその支払いを請け負ったのだ。

二人は再び通りを歩く。今度は空いた手もなかったが、話は弾む。

「……それでニケとはどういう関係なの？」

「えっ！？ ……いつ、一緒に旅する冒険者、だよ……？」

「ふーん……、そうは、見えないけどねえ？」

意味深な笑みを浮かべ、隣を歩くシアにその視線を向けるトツネに、シアは顔を赤らめて紙袋に顔を埋める。

トツネはそんなシアを数秒間見てから駆け出し、シアの数歩前でくるりと振り向く

「まあ、私には関係ないけどさ、大切なら離しちゃ駄目だよ」

「え……？」

トツネは笑う。シアが戸惑いの表情を浮かべても、何も言わずただ笑っていた。すると突然、進行方向に背を向けて進んでいたトツネが、シアの方へ駆け寄る。

「うわっ！」

驚きの声を上げるトツネを、声こそ上げないもののシアも驚きそのまま受け止める。二人まとめて倒れたり、シアが突き飛ばされるといった事は無かったが、シアはトツネの肩越しにその目の前にいる存在に顔を向けていた。

トツネも自分の身に何が起こったかわからなくて、シアの顔を見てからようやく正面を向く。

そこにいたのは男が二人。一人は煌びやかな鎧に全身を包んだ、青目の青年。髪も青色で、少し長めの髪の手先は尖っているかのよ

うに鋭い。その背中には身長には及ばないほどの、相当に大きな大剣が担がれている。その鋭い、嫌悪の色が満ちたその瞳がトツネ達に向けられていた。

もう一人は、打って変わって地味な色のローブのような軽装に全身を包んでいる、赤めの青年。髪は掻き揚げられ、オールバックだ。腰には剣のようにぶら下げられているのは、ホルスターで固定された本。それもただの本ではなく。魔紋が刻まれた魔紋書だ。

魔紋書は一ページごとに異なる魔紋が刻まれていて、その該当ページを開いて魔法を発動することが出来る、いわば魔紋の集合体だ。もう一人の鎧の青年と見た目は同じぐらいで、シア達に向ける視線は鎧の男よりは柔らかいものの、嫌悪しているのは間違いなかった。

「人様にぶつかって、謝罪もなしか」

「あつ……つと、ご、ごめんなさい！」

トツネは慌てて振り返り、鎧の男に荷物が落ちない程度に頭を下げて謝罪の言葉を言う。それを見てシアも遅れて頭を下げる。

そんな二人を鎧の男は鼻で笑い、蔑んだような目で見下す。そして鎧の男は後ろのもう一人の男に振り返る。

「よく見ると二人ともそこそこだな。おい、ステイード、どうする？」

「いいんじゃないか？ 丁度いいだろ。悪くはないし」

二人の笑みは下品なものに変わり、その笑みを見たシア達は戦火に寒いものが走るのを感じた。直感で二人の言葉に隠された意味を感じ取り、それが嫌な感じがしたのだ。

だからトツネはすぐにシアの手を取り、走り出そうとする。

「行こう！」

しかしトツネの足は一步踏み出して止まる。いや、止められた。シアの手を掴むトツネの肩に鎧の男は手をかけていて、力づくでその動きを止めたのだ。そしてそのままトツネが振り向くように腕を引いて、その力に抗えなかったトツネはバランスを崩しながら振り向かざる終えなかった。シアも手を握られていたために少し引つ張られ、体勢を崩す。

「おいおい、人にぶつかつたといっただけで済むと思ってるのか？
ちよつと付きあつてもらつぞ」

そう言つと鎧の男は強引にトツネの手を掴む。それをトツネが振り払つと、男の顔は歪んだ。

「女如きが調子に乗るなよ……！ 世界を救つてやるつていう、俺のような冒険者の言つ事が聞けないつて言うのか！？」

そう叫ぶ鎧の青年は、その振り払われた右手首についているものを、見せ付けるように構えた。

青年の腕には鎧に隠れていて見づらかったが、確かにニケと同じ、国の募集に応じた証としての無色の寶石が付いた冒険証があった。

それを見てトツネもシアも唇を噛む。それは決して偽造する事が絶対に来ない代物だ。

それを持つのは大抵は力のある冒険者だ。だからトツネもシアも、周りの人達も敵わないのがすぐにわかつてしまう。

だから無闇に動く事はできない。冒険者は各地を飛びまわるために、変な噂を立てば魔紋と鍛冶を生業にする街にとつては痛手になつてしまう。だから出来るだけ穏便に済ませないけなかつた。

だというのに、動く。その足を確かに一步踏み出す人影。紫の髪

を持つ少女、シアだ。

「その証を、あなたなんか掲げるなんて……そんなの許せません！」

シアは下劣な行為をする鎧の男が許せなかった。それはもちろん当事者として当たり前前の反応なのだが、それとは別に、その男と二ケが、無色の冒険証で重なってしまったからだ。

自分を救い、旅の同行も快諾してくれた優しい二ケと、目の前の力で暴虐を振るう男が重なる事が、どうしても許せなかった。だからシアは怒りのまま、物怖じせず言い放った。

もちろんその言葉で鎧の男は激昂する。元よりプライドの高いうえに、それまでは冒険証を見せれば誰もがひざまづいてきたため、今回もそうだと思っていたから。自分の思い通りに行かない事が気に喰わないのだ。

「っ……てめえ！ 調子に乗りやがって……！」

状況は明らかにシア達の方が不利だった。周りの人々も助けるような事はなく、ただ周りに野次馬のように群がり眺めるばかり。トツネの知り合いもその中には混ざっていたが、やはり打つ手はない。しかし、そんな中密かに、誰にも気付かれない場所で見えていた女がいた。

騒動の場所は道具屋の目の前だったのだ。

窓から事の顛末を見守っていた道具屋の女店主のニアは、その手に装飾が施された一本のペンを持ち、それを片耳に当てていた。それは現実世界で言う所の携帯電話と全く同じ役割を持っていた。

もう既に誰かに掛けているようで、外の様子を心配そうに眺めながらも、そのペン先に声を掛ける。

「そうなの。……ええ、店の前で、トツネちゃんと女の子がなんか変な奴に絡まれてるの。ヒコネさんはいないの？……そう、私も出来る事はして見るけど、相手が厄介だからどこまで持つか分からないわ。出来るだけ早く……ええ、それじゃあ」

ニーアはその耳からペンを離し近くの机に置いた。そして腹を決めて扉を開ける。

扉を開ける直前、それは男達に向ける台詞の練習なのか、吐き捨てるようにニーアは呟く。

「国の冒険者だか知らないけど、流石に無理矢理は許せないわねえ」

無情の現実

ゆったりとした時間と空気は一変し、緊張が走る。

ディアさんが持つているのは万年筆で、その表面にはシアの短刀に描かれていた紋様と似たようなものが刻まれている事から、それが魔紋が刻まれた何かしら道具である事は確かだった。そしてそれをまるで携帯電話のようにキャップの部分に、反対側を口に近づけ、会話している。

相手側の声は聞こえないものの、ディアさんの受け答えの音が真剣さを帯びている事から、何かしらの事件が起こったのかも知れない。それが俺に関係あるかないかは分からないが、ともかく平和な昼下がりにはなりそうもなかった。

「わかったわ。ヒコネさんはまだ戻らないけど……」

ディアさんは俺にちらりと視線向けてくる。その視線の意味は詳しくは分からないが、俺に何かしら関係あるのはすぐに分かる。

それは俺に解決を頼むということなのか、俺に関わる何かが事件を起した、もしくは巻き込まれた、と考える事が出来る。その疑念からすぐに思いつくものがあった。

まさか……。

「ええ、それじゃあ……」

ディアさんは通話を終える。手に持つ万年筆を机において、一呼吸の間を空ける。俺は気が気じゃなかった。もし俺の予想が当たっているのならば、今すぐにでも飛び出して行く、そう心に決めていた。

だからディアさんの口から、それを確信させる言葉が出ない限り

は俺は動かないつまりだった。むしろそうあった方が俺は落ち着けるのだ。でも、そんな俺の考えは甘く、あっさりと裏切られる。

「シアちゃんとトツネが冒険者と揉め事になっているそうよ。しかも無色の冒険証を持っているから分は悪いわ」

無色の冒険証は俺の腕にも付けられた、国のため、世界のために尽力する事を誓った冒険者のはずだ。なのになんでシア達が……。その時脳裏に言葉が浮かんだのは、レオン達との会話だ。そういえば無色の冒険証は何かと優遇される事が多い、そう言っていた。それを逆に利用してある程度好き放題が出来るという事でもある。そして俺は勘違いをしていたのだ。

レオンのような善良な冒険者ばかりだと、そう思っていた。でもこの世界のNPCは生きて、独自の思考を持っている。その人間臭さに俺は驚いていたはずだ。

どこまでも真つ白な人間が世界を覆いつくしている、なんてことはまずあり得ない。百の人間がいれば、百の思想があるからだ。

だから善良な冒険者がいれば、その反対の悪逆の冒険者だっているもおかしくない。理不尽にその力を振るう、そんな輩が。

どの程度の揉め事なのか俺には検討も付かないが、少なくともシアとトツネが他人を不快にさせるようなことを好んでは思えない。だから揉め事の発生した原因は、相手の理不尽か、何かしらの勘違いって所か……。

「場所は！？ すぐに向かいます！」

「ニアの道具屋の前よ。ニアが時間を稼いでくれていると思うけど、長くは持たないと思うわ」

それだけ聞いてすぐに駆け出す。

腰の剣を走りながら握り、祈る。どうか無事でいてくれよ……。

通りに出るとすぐにそれは見つかった。明らかに異様な人ばかりで騒がしい。しかしその中でも際立って耳に届いたのは女性特有の叫び声。

「くそっ！」

それが誰のものかはわからないが、状況からしてシア達かニアさんのものだろう。俺は全速力で駆ける。これ以上どっかの冒険者なんかに好きになんかさせてやれない。

人だかりを掻き分けて前へ前へ体を運ぶ。視界が揺れて、それでふと思いつく。こんな状況がつい最近……、そう、シアを最初に助けた時もこうだった。

その事を思い出し、唇を噛み締める。あの時は舌先だけでやり過ぎたが、今回は相手が相手だ。口先だけでどうにかなる可能性は低く、最悪の場合はその冒険者と対等の証を持つ俺が、そいつと戦う事になるかも知れないが、そうならやむ終えない。どちらにしろ見捨てるという選択肢はないのだから。

人ごみを抜けた先にあつたのは、無残な光景だった。

ニアさんが倒れていて、それに寄り添うようにトツネがいる。明らかにニアさんに意識はない。そしてその先、人だかりが作る円の中心にシアがいた。短刀を手に、服はぼろぼろで、それでもその瞳には絶対に負けないという意思があつた。

相対するのは鎧の男。それとその後ろに明らかにこの町の人ではない、ローブを被った男が嫌な笑みを浮かべながらその様子を眺めている。

「はっ！ だから女如きが俺様に敵うかよって！」

鎧の男はあろうことかシアの腹部に回し蹴りを放った。シアはそれを避ける事すら敵わずに、その体を吹き飛ばされる。それを……、しつかりと受け止める。

「あ……、二ヶ……さ……ん？」

「ああ、もういい。もういいんだ……」

俺は怒りというものを久々に思い出していた。あるいは憎しみという感情なのかも知れない。ともかく、目の前の男が許せなかった。

「ごめん、なさい……」

そう言っただけシアは体の力を抜いて、その瞼を閉じる。血や目立つた外傷はないが、それでも相当な傷を負っているのは分かる。

シアの体をゆっくりと降ろし、トツネに任せる。

「二ヶ、コイツには敵わないよ！」

「それでも……」

それでも、ここで引けるほど俺は理性的じゃない。鎧の男を注視するとそのステータスが識別で浮かび上がる。

装備は『蛇鱗の大剣』と青灯の鎧一式。浮かび上がった名前はグリード。

それが俺の定めた、敵の名前だった。

「……ここで引く訳には行かないんだよ」

剣を引き抜く。日の光を受けて、刃の赤ががより一層輝きを増し、まるで俺の怒りを表すようだった。そしてその切っ先を敵に向ける。

俺が向けたのは、その優越に浸った醜い顔のグリードという男。切っ先を向けても尚その余裕を崩さず、苛立つ口調で飄々と饒舌に語る。

「おいおい、騎士^{ナイト}様の登場ってか？　っは！　コイツあ傑作だ。その貧弱そうな体に、粗雑な鉄の固まり。それで俺と渡り合おうってか？　夢見る騎士ごっこもいいが、今は現実を見るよ、分かるだろ？　この状況がいかに関自分にとって不利なのか。わかったらとつと消える、雑魚。なあに女は悪いようにはしねえさ。女は俺達にとつて貴重な清涼剤だからな」

「黙れよ、生きてる価値もない」

「……！！　つてめえ……殺すぞ！」

グリードの目の色が変わる。余裕に満ちたむかつく顔も、今は怒りと憎悪に染まった愉快な顔だ。正直な所、武器や防具を見る限り、勝てる気はしない。普通のゲームならば半ば諦めている所だが、今この瞬間だけは負けられない。どんな事をしてでも勝つと心に決める。

「圧勝する必要もない。いたぶる必要もない。泣いて許しを請わせる必要もない。」

ただ勝てばいい。それだけが俺の出来る事。

「口だけならいくらでも言えるさ。御託はいいからとつと来いよ、軟弱者」

「くそがあああああ！」

それが引き金になった。グリードは血管をはち切れんばかりに浮かび上がらせて、その背中の大剣を突進しながら引き抜く。

勢いに任せただの振り下ろし。それは俺の考えていた予想と全く同じ展開だ。馬鹿正直にやっても勝てるとは思えないのなら、相

手を馬鹿にするぐらいしか俺に勝ち目はない。

怒りは視野を狭くし、力任せの単調な攻撃に走りやすい。ましてやグリードのようなプライドの高い奴は、よりこの作戦にはまる可能性は高かった。

勢いも相まってその力は確かに凄まじかった。なにせ俺が避けて放たれたその一撃が石畳に直撃すると、剣先を中心に小さなクレーターが出来るぐらいだ。当たればただではすまないのだろうが、当たらなければ結局無意味だ。

攻撃を避けられ硬直する隙を逃さぬよう、剣をすぐさま振る。スラッシュで威力を増した一撃を胴へと横一線に振ったが、金属的な音と共に手に衝撃が走り、思わず仰け反ってしまうほど弾かれる。しかし少なくともダメージは通ったようで、グリードもよろけるモーションをするが、それもすぐに立て直して、同じ横なぎの一撃で反撃して来る。

それを後ろに軽快に飛んで避けた。

その短い攻防を経て、二人は場所を入れ替えて再び対峙する。

俺の動きが予想外だったのか、少し青ざめたような顔をするグリードに、俺は言葉で煽る。そんな事で、これぐらいでその気持ち冷めてしまつてはこちらとしても困る。

種火があるうちに再び燃やさなければならぬ。鎮火した後にはまた燃え上がらせるのは、かなり厳しい。だから今の内に決着をつけるか、手傷を負わせて有利な立場を確保するまでは怒りで冷静を燃やし尽くしてくれなければならない

「……おいおい、さっきまで余裕はどうしたよ？　まさかこれぐらいで全力か？　本当に口だけなんだな、お前」

「……………ッ！」

その顔には言葉にもならないならぬのだらう。凄まじい怒りが浮かび上がる。

それでいい。そうでないといけない。だからもう少しだけ油断していてくれ。

今度は俺から切りかかる。考える時間を与えては駄目だ。剣のやり取りだけに集中させて、怒りだけを燃やし続けさせる。

一気に駆け寄り、右手に持った剣を無理のない軌道で斜めに切り上げる。

グリードはその軌道に交差するように大剣を構えて防御し、反撃しようとは僅かに動く。しかし俺の狙いは元より剣にはなく、本当の狙いはただの蹴りだ。

切り上げた流れで体を捻り回し蹴りをガード出来るように、構えた大剣の中心に放つ。

それをすばやく察したグリードは律儀にそれをガードする。

今度は真正面で受けたので俺の蹴りの勢いのままグリードは押し込まれる。多少不器用な技でもステータスの数値によって威力はある程度は保障されている。

そのまま一瞬のための後、蹴りを放った足を地面へと強く降ろして体に無理矢理勢いを付けて振り降ろす。鎧で守られていない脳天を狙い放った。

滑らかとは到底言えない様な体に無理のかかる連携技だが、それでも十分だった。

やはり地力はあるのだろう、グリードにとっては完全に予想外の攻撃にもかかわらず、咄嗟に片腕でガードする。それでも初撃よりはダメージが通ったはずだ。

反撃に備えて距離を取る。

グリードは地に膝をつけて、まるでひざまづくようなポーズでいる。

……早く来い。……お前にはその状態が許せないはずだ。

ただ一方的に攻めるばかりでは相手も防御に専念して、隙を作らない不利になる。冷静に戦況を分析されれば俺にとってこの

だからターン制のように誘導し、適度に反撃させて調子に乗らせるのが俺の作戦だった。

なのに待っても、動かない。それどころか笑う。あれだけ激怒していたグリードが愉快そうに、笑う。

「……クッククク……」

不気味なものを感じた。それと同時に作戦が破綻してしまったよ
うな気がした。何事も予想通りに行かないのは世の常だが、それ
も単純な奴ならある程度はその行動を予測して罠に誘い込める、そ
う思っていたのだが……これは嫌な気がする。

「そんなに死にてえのなら……全力で殺してやるよ。おい、ステ
イード！」

「……はいはい。つたくやりすぎないでよ、面倒だから」

グリードの言葉に反応したのは案の定、人だかりから浮いたロー
ブの男。何か本を開きその口を動かしている。

その瞬間、本から光の玉が浮かび、グリードに飛んで吸い込まれ
る。他にも幾つかの光球が現れてはグリードに吸い込まれていく。

そのの意味する所はすぐに浮かぶ。支援魔法だ。

すぐに地を蹴って切りかかるが、軽々と大剣を振られ体ごと弾き
飛ばされる。そして再び余裕を持った憎憎しいほどのしたり顔を浮
かべたグリードが地面に垂直に剣を突き立てる。その行動で出来た
クレーターは、初撃を遥かに凌ぐものだった。それはつまり、魔法
の阻止に間に合わなかった事を意味する強大な力だった。

「さあて、ここまで舐めてくれたお礼だ。限界まで苛めて、てめえ
の目の前でその女共と遊んでやるよ」

怒りを忘れ、支援魔法でさらに強化されたグリードに、俺は……
打つ手が思い浮かばなかった。

負けられないのに、逃げられないのに、勝たなきゃいけないのに。
打開できる術が一切浮かばない。
絶望しか想像できなかった。

窮地の覚悟

状況は一変した。

ローブの男、ステイードと呼ばれた男の強化魔法でその身を大幅に強化したグリードは、今はもう怒りなど忘れ。その身を慢心に満たしていた。

しかし慢心はあくまで油断をするだけであって、怒りで我を忘れた時のような猪突猛進をする訳じゃない。勝つと確信しているからこそ、攻撃に備えて構えるでもなくその歩をゆっくりと進める。

一步ですら地面をへこませて風を生み出す、攻撃ともなりうる破壊力を秘めていた。その一步を二度、三度と繰り返し、人だかりによって造られた闘技場のような円の空間の中心へと辿り着く。右手には軽々と大剣を持っている。

俺自身は倒れているシアとニアさん、それとトツネに、いつの間にか追いついてきていたディアさんがいるところまで下がっていた。吹き飛ばされたダメージはあまりなかったが、どのみちあんな状態になったグリードと正面きって戦う事は不可能だ。見て分かるほどの強さは、もはや立ち向かう事すら許さないようだった。それでも……。倒れ、傷付いた姿のシア達を見れば、意地でもその足は持ち上がる。

「ニケ、これ……」

「これは……」

突然近くにいたトツネがそれを手渡してきた。渡されたのは赤い皮に収まった短刀。それは朝にトツネが揉めていた原因の品だった。

「どうしてこれを……」

「母さんが持ってきてくれたの」

ディアさんは頷く。きつと何か力になると思ったのだろう。しかし俺はこれに刻まれた魔法を知らないし、使える魔法もアビリティの関係で初級の物しか使えない。どうやっても形成を逆転出来るような魔法は使えないのだ。

それでも受け取った。どうせ片手は空いてるんだ。そこに鞘から抜き取った短刀を持つ。

システム的には多分装備状態にあるだろう。

「おいおい、苦し紛れでもそれはないだろ。道化にでもなるつもりか？ それなら喜んで歓迎してやるがな」

そんな事を言うグリードから目を離さないようにしながらも、メニューを出して使える魔法を確認する。

魔法の欄にあったのは『ディスプレイ解呪』の文字。それを見た時にふとした予感がよぎる。

もしこの魔法でグリードの魔法を打ち消せば、再びステイードが魔法が掛けられるまでの間は、グリードの強さも何とか出来るかも知れない範囲まで落ちる。

そうなれば今よりは希望が見出せるはずだ。やってみる価値はないとは言えない。

「そつちが来ないのなら、こつちから行ってやるよ！」

グリードが地面を抉りながら突進してくる。シア達に被害が及ばないように横に飛び、さらに二本の剣を交差させてグリードの攻撃に備えた。

グリードはシア達の目の前で体を捻り、片足を軸にした回転切りで俺を狙ってくる。

それをあらかじめ構えていた剣で受けた。……のに俺は宙を飛び、

人のクッションへと背中から突っ込んだ。

クッションになってしまつて下敷きになっている人や、衝撃の余波で地面に倒されてしまつた人に、短く謝罪だけしてすぐに駆け出す。最悪の場合街の人達に手を出さないと限らない。出来るだけ巻き込まないように気をつけながら、何とか解呪を試みるしかない。

解呪は確認した時の説明に、剣が触れていないと使えないという説明が書かれていた。魔法が掛けられているのはグリード自身の体のみのようで、剣や鎧には包み込むような光のエフェクトは見当たらない。だから解呪をするのならば、グリードの体に直接短刀で触れなければいけない。それがどれだけ難しいかは身をもつて証明しているが、それでも勝機を掴むにはそれを意地でも成功させ、隙が生まれた瞬間に一気に畳み掛けて終わらせるしかない。

今はただ再起不能なダメージは負わないよう逃げ回つて隙を探し、それを突く事のみ専念する。

「さっきまでの勢いはどうしたあ！ まだまだ俺は元気だぞ」

下品な高笑いを織り交ぜながら挑発の言葉を吐いてくるが、一切を無視する。なにせそんな事を言いながらも、手に持つ剣はいつでもどんな攻撃でも迎撃できるように構えられている。

そういつた攻撃の気配を感じ取れるのは、リザードマンとの連戦で俺がシステマ的なものではない、経験として得たものだった。

しかし、手を出せば反撃が来る事が分かつていても、そんなの構い無しに向こうから攻撃しに突っ込んでくるのには何の意味も持たない。

動き回る俺の行動を完全に先読みした、不意の一撃。

上空へ、太陽に突き刺すかのように振り上げられた大剣は、もう避ける事すら敵わない距離で俺を補足していた。

グリードもそれを分かっていたのだらう。だからこそその顔が喜びに満ちるように笑う。

負けられない。

大剣がそこにとどまる事に飽いたのか、俺を切りたいと望むのか。ゆっくりと、まるでギロチンのように俺の頭へと落ちるのが見えた。

こんなところで負ける訳には行かない……！

ただその一心で俺は腕をがむしゃらに前へ、その大剣を拒絶するように突き出す。

金属音が響き、衝撃が腕に伝い、背中に痛みが走り、見下したグリードの顔を見て、俺が地面に叩きつけられたのだと知った。

「終わりだ……」

そう言っただけグリードは再びゆっくりと大剣を振りあげる。今度こそそれは俺を処刑するギロチンになった。

体が衝撃のせいで言うことを聞かない。動けと命令しても痙攣して動かない。

そうこうしてるうちにどんどん腕は持ち上げられていく。ゆっくりと、着実に、確実に。

そして……。

勢いよくその大剣が振り下ろされた。

思わず目を瞑る。こういうのは原始的な恐怖だ。死なないと分かっているのに、痛みがないと知っていても、それでも反射的に起してしまう。

もう気持ちは死んでいた。体が死ぬ前に、心が負けてしまっていた。

あれだけ負けないと負けるわけには行かない意気込んでおきながら、その力の差の前にはなにもかもが無意味だった。

気持ちで現実を覆らない。現実世界ならばまだ可能性があるかもしれないが、仮想現実のなかでは数字だけが全てで、唯一の絶対だ。意思だとか心が入り込む隙間はなかった。

だから俺はここで死ぬ。

……でも、俺が死んでこの世界、この後はどうなるんだ？ グリ
ード達が勝利して、シア達を手籠めにする？ 俺は死体として処理
されてしまうのか？

それともやっぱりゲームの定番で言う所のゲームオーバー画面に
飛んで、セーブした所からか？ 分からない。どちらにしるそれは
死んで見なければ分からない事だ。しかし、もし前者ならば、俺は
……。

想像すれば吐き気がこみ上げる。それと同時に怒りと苦しみまで
もがこみ上げる。

金属音が耳に響く。かなり近い距離でうるさいほどだった。

目を開けると意識はあり、腹立たしいグリードの顔が見える。俺
は、死んでなかった。それどころか大剣は俺に触れてもいない。

「殺すと思ったか？ 死んだと思ったか？ 残念。だったな。俺は
てめえを殺しもしないし、死なせるつもりもねえよ」

信じられない言葉だった。今までそんな素振りすら見せずに、本
気で殺しに掛かっていたグリードがそんな言葉を口にするのは、俺
にとって予想外すぎる行動だった。

もしかして、これは何かしらのイベント扱いなのか……。
イベントの負け戦闘や、一定時間持ちこたえるとイベント発生、
というのは別に珍しい事ではない。

だからグリードの取った不可解な行動がイベントの一端だとする
のならば、この状況を何とかしてくれる助っ人なんか来る可能性
はある。

それを僅かでも信じられるのならば、そこに希望が生まれる。

「言つたる？ てめえの目の前であの女共と遊んでやるって！ だ
からてめえは殺さないんだ……ん？ つはいい表情だな。希望が絶
望に変わったようなその表情。心地いいぜ」

僅かでも、極僅かでも、その光を見出そうとした自分が馬鹿だったと知った。

だからもうこいつは信じてはいけないのだと、そう確信した。だから俺は左手に力を込める。

そこに握られたトツネの短刀が、今なら届くのだ。俺の絶望に油断し、かつ至近距離にいる今なら、短刀のリーチでもグリードの生身に届く……！

息を吸い、体に無理矢理力を込めて、大剣の柄を持つグリードの右手の鎧が守っていない部分目掛けて短刀を放つ。

「！ つぐ……」

捕らえた！ 俺の行動にすぐさま反応したグリードだったが、やはり油断しきっていたようで、避ける前に短刀が突き刺さる。

そして唱える。今度こそ光を見出すために。

「ディスプレイ解呪！」

短刀が青く光る。一際強く光ったと思えば、すぐにその光はしぼんで消える。

隙を逃さぬようにすぐさま右手の剣を不安定な体勢ながらも振って、少しでもダメージを通しておく。地面に倒れたままの体勢からだ、鎧の隙間や鎧のカバーしていない部分に、片手剣を当てるのはその長さからいって難しいのだ。

腕の振りを使って今度は体勢を崩させるため片足を狙った攻撃を仕掛ける。鎧ならばその重さのせいで一度倒れてしまえばこっちのものだ。

作戦は順調だった。

グリードが体勢を崩した隙に起き上がり、大剣に足をかけて使え

なくしてから、首に目標を定めて右手の剣を素早く振った。

手に感触が伝わる。……………硬い、何かにぶつかる感触が。

グリードはその何も持たない手を掲げ、手甲によって改心の一撃が防いだ。

すぐに身を引く。取っ組み合いになっても勝てる見込みは少ない。そもそも対術なんて現実世界でも習った事すらないし、デュアルワールドでも剣ばかり降っていたのだから当然といえば当然なのだが、どのみちこれで解呪が成功していれば、再び魔法を掛けるなりするはずだ、その隙を今度こそ逃さなければ、行ける……………！

未知のものであればどうしようもないが、既知のものであれば破るための対策も考えられる。

「……………ツクツクツク……………魔法の初歩すら知らないとは……………とんだ騎士様だ」

すぐにその意味が分かった。その言葉は……………解呪が強化魔法には意味を持たないのだと、そう告げていた。

「残念だが徒労に終わったな。所詮安物の玩具か。どうする？ 万策尽きた今、お前には勝つ術はあるまい。……………そうだな、ここまで逃げ延びた褒美だ。裸で地面を舐めるといふのなら、お前も俺達の後で、女共と遊んでもいいぞ。どうだ？」

腐ってるとしか言えない。ありえない。そんな事、ありえないし、させもしない……………！

……………でも、グリードの言うように俺に策はない。

それに……………俺は内心負けたくないし繰り返しながら、……………その実全くと言っていいほど、有利にすら立てていない。

……………それで勝つなど考えるのは……………我ながら滑稽だと思ってしまう。

「何しよぼれてんだ！ ニケーー！！」

声が聞こえた。それはトツネの声。励まし、激励する声。

「頼む……勝ってくれよ……！！」

スーツと体に冷たいものが抜けていく感覚がした。

多分、俺は無意識のうちに手加減というものをしていた。いや……

……正しく言うならば躊躇していたのだ。相手が人だから、人の形をしていたから。

……グリードは敵だ。倒さなきゃならない敵。

人ではなく、魔物と同じ扱いでいい。そう自分に言い聞かせる。

……助けるべき人と同じ存在である者を、魔物と同じ物のような見方をするなんて、都合のいい事なのかも知れない。

だが今だけは……。

再び対峙した俺とグリードは睨み合っていた。

俺はただその態度、行動、思想、何もかもが気に食わなくて、腹立たしくて。

グリードは表に出す態度こそ余裕を保っているが、その手につけられた傷といい、俺の行動にそのはらわたは煮えくり返っているはずだ。

だからもう二人とも、ただ相手を倒すのではなく、殺す事しか考えていなかった。このデュアルワールドで死がどのような形になるのかは知らないが、いずれにしる決着はつく。それだけで十分だった。

そして、二人は地を蹴った。

剣劇の終着

多分、それは躊躇する必要もなかったのかもしれない。

相手はデータの塊で、俺は意識こそ生身のものだが、体は同じデータの塊。

だから一切の容赦もなく、自分の身が削れようと痛みすら感じないこの体を、使い捨てるように使えば、強大な相手に立ち向かうのも難しいことじゃない。

腕一本を消費して相手の動きを止められるのなら 勝てるのなら安いものだ。止められる時間がたとえ少しの間でも、急所をつくには十分な時間。

互いの距離が一気に縮まる。数秒と持たないでぶつかり合う程度の距離しかないのだから、互いが互いに向かって走れば、そうなるのは当たり前のことだ。

グリードは一切の小細工もなしに、魔法で強化された力を頼りにして、無造作にその大剣を振るう。

まともなぶつかり合えばまず俺が負ける。それは今に限らず最初からそうだった。だから俺はグリードの剣をまともに受けることはしない。……いや、俺のしようとしていることはまともに受けるといったほうが正しいのかも知れない。

言わば、肉を切らせて骨を絶つ作戦なのだから。

距離を測り、右手を振り絞る。弓を引くように限界まで後ろに引く。全てはこの一突き スキル『ストライク』で決める。そして左手やその他のことは全て捨てる覚悟だ。ただ一回だけの攻撃に全てをかける。そしてそれで全てを終わらせる。

グリードは案の定考えなしの振り下ろしだったが、単純にそれだけでも俺にとっては致命的な脅威だ。でも引かない、引けない！

体を捻り左手を構える。自分の体を抱くように構えた短剣はフェイクだ。斬りつける格好はするものの、実際はグリードの大剣を受

け止め、横にそらすだけの盾。

距離を測り、丁度グリードの顔の位置目掛けて、左手を右から左へ薙ぐ。

俺の捨て身の攻撃に多少は驚いたようだったが、それで止まるほどグリードは臆病ではなかった。急制動を掛けて速さを押さえ、首を後ろに反らして短刀を避ける。

グリードの大剣はまるでグリード自身とは別の意思を持つように止まる素振りすら見せずに俺の体を両断しようと襲い掛かる。

それを振った左手で横合いから殴りつける。

大きく弾けるぐらいの力があればそれで傷を負うこともなかっただろうが、如何せんそううまくはいかない。だが予想通りだった。

左手の感覚は一切がそぎ落とされたが、まだ体は動きをやめない。

引き絞った右手に力を込め、急制動のせいで切り取られたように動きを止めたグリードの首へ、狙いを定め、打ち抜く。

風切るように、俺は腕を最大に伸ばしきった。

グリードを殺すための剣はその首を確かに傷つけていた。

真つ二つではない。首の横を掠めるように俺の剣は伸びている。

直撃しなかったのはグリードが直前で避けようとその首を無理矢理動かしたから。まずい、とその瞬間は思ったが、結果を見れば避け切れなかったのだから、これで十分だった。

グリードが膝を折って地面にうずくまり、大剣は派手な音を立てて地面に放られ、その両手で切り裂かれた首筋を抑えている。

明らかな致命傷だった。首筋を切られればその血管から溢れんばかりの血がこぼれる。それはすなわち死ぬ事と同じ。その猶予期間が出来ただけだ。

グリードの仲間であるステイドは、強化魔法を使っていたんだ、回復魔法ぐらい持つてはいるだろう。これで結局殺す事なく、殺される事なく事件は収束できる。後は俺が回復させる前に剣を突きつけて、回復させたきや負けを認めろ！ とでも言えばそれで終わる。助けられる……。

そしてそれを実行しようとして剣をグリードに……………え？

そこにはうずくまったままのグリードが痛みを堪えるように傷口を押さえている。そして……………その抑えた両手の隙間から伝い滴り落ちるのは真つ赤な鮮血。

ちよつと待て……………このゲームは年齢制限がない。だからこんなリアルな表現は許されていないはずなのに……………グリードから滴るもの、それは紛れも無い血だ。

ある予感が頭によぎり、恐る恐る俺は自分の左手を、グリードに勝つために捨てた左手を見る。

言葉は出なかった。息を吸う事も吐く事も忘れ、それを見てしまった。

抉られた肉が裏返し、その隙間から血が滴る。それを認識してしまった瞬間、体を痛みが支配した。

俺はその場で膝をつく。

「な……………んで……………!!」

ありえない。こんな事はありません。なのに現実としてそこにあった。

足音が聞こえる。それも複数の。

苦痛に耐えながらも顔を上げると、シア達が一斉に駆け寄ってくる姿が見えた。

少しほつとする。傷み自体が和らいだ訳じゃないが、それでも気休め程度にはなる。なにせ俺の勝利条件はこれで達せられたようなものだから。

最後に立ち上がる。ゆつくりと確実に。本当に最後の力を振り絞って。

シア達と同じく駆けて来たステイードに俺は震えた剣を突きつける。

そう、これで終わり。これを言わなければ……………。

ステイードは痛みを堪え、死の恐怖に耐えるグリードと俺を交互に見る。その顔は不安に満ちた顔。それを鼻で笑ってやる。

そして俺は告げる。

そして、それを聞かなければ、終われない。

「俺の、勝ちだ……。負けを、……認め、ろ」

「……………ああ」

視界が暗闇に支配されていく。体は痛み、意識は眠気に。俺は全てを投げ出して、全てを支配され、意識を失った。

剣劇の終着（後書き）

短いお話ですがこれで一区切りと言う事で投稿させてもらいました。次の展開へと進む前に一度この物語を再構成したいと思っておりますので、しばらくは投稿の方も無くなると思います。この言葉を無かったように次を投稿するかもしれませんけどね……。

休息の一時（前書き）

前回の後書きなんてなかったんです。一応手直ししていますが、やっぱり先を書きたい気持ちもあるので、ペースを落としていく方向にしました。

休息の一時

……何か声のようなものが聞こえる。

『システム制限の一段階目が解除されました。引き続きゲームをお楽しみください』

明瞭な女性の声だった。頭に直接響くような不思議な声。声によって揺り起こされた意識が、体の感覚を引き戻す。

……体が重い。ああ、そういえば俺はグリードと戦ったんだっけか……。

それで最後に捨て身の攻撃で一撃を食らわせて……そして、勝った。だけど俺も深手を負って……そのまま……。

記憶を探る。そして思い出す。あの鮮血の惨状を。

何で？ どうして？ あの時は疑問に思っても、その答えを考えるとどの余裕はなかったが……今は考えるまでもなく、俺は答えを知っている。

システム制限解除……。それが血と傷みを俺に及ぼしたのだ。

何をきっかけにその現象が起きたのかは分からないし、そもそもその制限が解除されるような事はあってはならないはずなのに、現に俺の身に降り注いでいるのだから、それは実際の出来事だと捉えるしかない。

粗方の情報を頭の中で整理してから、目をゆっくりと開く。

静かだった。耳をそばだてれば遠くの方で相変わらず怒声や鍛冶の音が聞こえるが、それが聞こえるのはこの部屋が静かなせいでもある。

窓から差し込む明かりは夕日の色をしていて、部屋をその色に染めていた。部屋は質素な造りだったが、宿よりはまだ生活感がある。ふと、俺は視界の端に映ったものに気付いた。寝ぼけ眼もそのおかげで覚める。

枕元にもたれかかるように眠ったシアの頭を撫でようと、包帯で

巻かれた左手を動かそうとする。

「つく……………!!」

僅かな動きだけでも声が漏れ出てしまうほどの激痛が走る。腕から肩に傷みは伝染し、左半身までも支配する。

まるで長時間の正座で痺れた足のような感覚に近かったが、それに傷みが伴っているのだから笑い事じゃない。

「ん……………二、ヶ……………さん？ 目が……………」

多分きつと、そこでシアの動きが止まってしまったのは、俺が変な状態で、引きつった笑みを浮かべながらシアを見ていたからだろう。傷みを耐えながらも俺は必死に言葉を振り絞る努力をした。そしてようやく捻り出せたのは「……………たんま」というどうしようもない言葉だった。

「大丈夫、ですか……………？」

シアの優しい言葉に、健康そのものの右手を振って大丈夫だとアピールする。

二人で腰掛けているベッドは、流石に二人分の体重のおかげで沈みはするものの、その弾力のおかげで心地良い。使われていたのか分からないが、綺麗なシートで、ホテルのような清潔さだ。

「なあ、シア……………あれから、どうなったんだ？」

俺は自分の傷よりもそっちの方が気になっていた。

戦いに勝って、負けを認めさせて……。そこまでしか俺は知らない。だからその後の事、傷を負ったグリードとその仲間である魔法使いステイード、ニアさんやシアも傷を負っていたし、シアは俺の看病をしてくれていたぐらいだから大事はないと思うが、それも含めて、どうなったのか。知りたかった。

「私と、ニアさんは軽い打ち身だけ……。あの人も剣は使わなかったから……。今はニアさんとディアさん、トツネちゃんが晩御飯の買出しに行ってます……」

「そっか……」

女は強い。体じゃなくて、なんというか心の切り替えの速さ、とも言うべきか。もちろん全く気にしてない、考えてないって訳ではないだろうけど、そこを割り切って晩御飯の買出しに行けるのは、心をしっかりと持っているから、なのだろう。

俺ならばらくは怪我を理由に介抱してもらうのに……。

「あとあの人はその場で傷を治してから、どこかへ行きました。何も、言わないまま……」

「……そっか。まあ、あの後また横暴な事しなかっただけマシか……」

実際、あの二人にはそれを行うだけの力もあつただろう。

グリードは傷さえ治れば普段と全く変わらない力を出せたはずだし、ステイードも強化魔法と治癒魔法しか使っていないから、それしきでMPが切れることもないだろう。その風貌から察するに魔法主体だとすぐにわかるし、たかだか数回の魔法でMPが切れてしまふようなら、グリードの相棒的立ち位置にはいられない。あの性格だ、弱ければ容赦なく切り捨てるはず。

それでも何もせずその場を去ったのは、傲慢故に屈辱に耐えれな

かったか、俺に敬意でも表してくれたか………ないな。まずない。あの性格でそれはない。

まあ、いいか。何もせずどこかへ行ったんだ。今後会わないことを祈ろう。冒険者らしく魔物退治にでも励んでいれば、俺はもう何も気にする事はない。

わざわざ探し出してあれこれ言うのも面倒だし。

「そつだ、シア。ここは一体どこなんだ？」

「ここはトツネさんの家の二階です」

「ああ………」

ディアさんが現れたのは確かに二階だったな。それならこの生活感も納得いくが、誰の部屋だとかは考えちゃいけないだろう……。

そんな事を思っていると声が聞こえる。俺やシアじゃない、それでいてどこか聞いた事がある声が複数。少し籠ったような感じだが、言葉としてははっきりと聞き取れる。

そういえばディアさんが一階の会話は二階に筒抜けだって言うってたな……。

「母さん、準備手伝うよ」

「あら珍しい。頭でも打ったのかしら」

「そうじゃないよ。……ほら、今日の事件だって私が原因のようなものだし……料理ぐらい振舞ったってどうしようもないと思うけど、それでも………」

「……わかったわ。すぐに準備しましょう。ニケ君が目を覚ます頃には出来立ての料理が並んでいなきゃ、示しがつかないわ。ニアアは休んで。まだ傷が痛むでしょう」

「すまない、姉さん。食事まで………」

「気にしないの。子の責任は親の責任。あなたは私の子供を守ろうとして傷付いたのだから、謝られちゃ私が困るわ」

その後はもう声は遠くなり、会話は聞こえなかった。おそらくはトツネとディアさんが料理の準備に、ニアさんはそんな二人の後姿でも見ながら椅子にでも座っているのだろう。道具屋にいた時も心地良さそうに座りっぱなしだったし。

しかし、今の会話からするに、どうやら俺がこのタイミングで下に降りるとまずい気がした。

「もう少し、ここにいた方がいいかな？」

俺と同じく下の会話に耳を傾けていたシアに、俺はそんな事を投げかける。料理が出来たタイミングで降りた方が、色々と向こうにとって都合も良さそうだった。今から下に降りても何もする事もなければ、ただディアさんたちが申し訳なく思ってしまうだけだ。

それに……。

「……そう、みたいですね」

もう少しシアと二人きりでいてもいいだろう。あれだけの事をやって、予想外の痛みにも耐え、その結果として少しぐらい甘えたって誰も咎めはしない、はず。

はにかむシアの顔は夕日のせいで赤く染まっていた。

「……………」

沈黙が部屋を覆いつくす。何というか……この雰囲気は、どことなく苦手だ。

シアと視線が合う。大きくて丸いその目に、吸い込まれるように魅入ってしまう。視線をずらす事は出来なかった。いや、俺が許さなかった。

時が止まったような錯覚を覚える。夕日の色が少しづつ変わっていくのが見て取れるのだから、それは間違いなく錯覚なのだが、それでも二人は止まっていた。

「……………あ、あの！」

先に沈黙を破ったのはシアだった。日も落ちかけているというのに未だに顔は赤くて、必死にその言葉を紡いだのか、緊張で今にも心臓が破れそうな顔をしていた。

俺はそんなシアの顔を見て笑ってしまう。そのあまりにも真剣ながらもどこか間の抜けたような表情を見て、笑わずにはいられなかった。

「な、なんで笑うんですか……………！」

少しむくれた表情へとかわるシアへ、俺はようやく笑いを収め、改めて向き合う。

「いや、悪い。シアを見てると面白くてな……………」

「ど、どどういうことですか……………!?!」

今度は驚き慌てるような表情。見てて飽きない。

そんな表情を、ずっと見ていたい。もっと見てみたい。そんな事を思うのはきつと変なのだ。

シアはゲームのキャラ。自分の頭脳と思考を持つてはいるが、それはAIであって、あくまで考える頭を持っているというだけ。そこに人間としての意志は……………。

……………何を馬鹿な事を考えてるんだ。シアは、いや、シアだけじゃなくこの世界に住む人達はみんな人間だ。だってこんなにも笑って怒って悲しんで喜べる。それを人間と呼べないのなら、俺でさ

え人間じゃない。

デュアルワールドの住人には心がある。何も知らない人からすればふざけた戯言かも知れない。それでも俺はこの世界の住人が人間であると、断言できる。

でなければこの気持ちも嘘になってしまう。

「いや、気にしないで。独り言だから」

「そう言われると余計に気になるんですけど……」

もし俺がこの気持ちを打ち明けたとして、シアはどう受け取ってくれるのだろうか？ ゲーム的にはどうなるんだろうか？ それは見当もつかない。

なにせシステム制限すら解除されてしまっているのだから、これから何が起きようとも何ら不思議ではない。

ふと思いついてメニュー何気ない仕草で開く。シアには画面は見えていないから、動作だけ自然にしていれば何も怪しまれる事はない。

メニュー開いたのはある一点を確認するため。この世界から脱出する手段である中断とゲーム終了の欄。それらがさっきのシステム制限解除というアナウンスがきっかけで、使えなくなってしまっていたりしないか、それだけを確認したかった。

漫画や小説、ゲームでも、時代を先取りしていて、このデュアルワールドのようなVRゲームで異常が発生し、大概はMMOが舞台だったので数千から数万というプレイヤーがログアウト出来ずに閉じ込められる、なんて話を見た事があった。

それと今のこの状況はまさに一緒なのだ。

世界初のVRゲーム。そして本来ありえない血の描写に痛覚の解放。それはこの仮想世界をより現実世界に近づける事象だ。

そして、ログアウトが出来ずにゲームの世界に閉じ込められた人々は、大抵が現実の死と隣り合わせの環境に置かれる。いわゆるデ

スゲームという事態に陥る。

アバターが自分自身となり、ゲームの世界で生き抜いていく。そんな筋書きに必要な条件が今の俺には、このデュアルワールドという世界には揃っていた。

MMOではなくオフラインのRPGなので、現実の人間がプレイヤーと言う事はないが、その代わりに仮想世界の人はたくさんいる。そして俺のアバターはシステム制限解除に伴い、より現実的にこの世界を感じる事の出来る、年齢制限などどこ吹く風の描写と、同じく痛覚の解放。そして俺が今確認しようとしている、ログアウトが出来ない、という状況にもなっていれば、ここは死が隣り合わせの箱庭と化す。

恐る恐る視線を向ける。中断とゲーム終了の文字がそこにあった。その色もまた白く、ログアウト不可能という状態にはないようだった。その見た目だけならば。

ただそこにいつもと変わらなくあるだけで、それを無条件に信じられるほど俺はこのゲームを普通に遊べた訳じゃない。グリードとの戦いでそれを知った。

ログアウトできなければそんな表記も何も意味はなさない。

だから俺は中断という欄に狙いを定め、指先で叩いた。

もし成功したとしても中断だけなら、デュアルワールド内の時間は進まずに済む。叩いた指先に反応して次の画面が空中に現れる。改めての確認の画面だ。それをもう一度力強く肯定の文字を叩く。

その瞬間、体から感覚が抜け落ち、意識が途絶えた。

合間の日常

目を開いた。そこは生活感のある見知らぬ部屋でも、隣で可愛い女の子が心配してくれるなんていう状況でもなく、左手に常に疼いていた痛みすら消え去って、何年と過ごした自分の部屋だけがあった。

俺は、無事に現実世界に戻ってきた。これで、あのゲームがデスゲームではない事が証明された。……もつとも、今は、だが。

あの声はシステムが第一段階解除された、そう言っていた。

あえて第一段階と言ったのだから、さらにその上、第二段階が存在していても、何ら不思議な事じゃない。具体的に何が解放されるのかは分からないが、どちらにしろそれは仮想現実がより現実世界に近づく、そういったものである可能性は十分にある。それこそデスゲーム状態になる、とか。

一人で考えていてもしょうがない。今は出来るだけデュアルワールドについて情報を集めよう。

こういう時に便利なのはパソコンだ。不特定多数が情報を持ち寄る、巨大な書庫のようなインターネットから、出来るだけ情報をかき集める。

一番欲しいのは、俺と同じくシステム制限解除を通告された者の情報だ。類似点でも見つければ何か制限解除の鍵が見つかるかもしれない。

あとはこまごまとしたゲームとしての情報。現実のように傷みが伴うのならば敵の情報、フィールドの情報は出来るだけ知っておいたほうが危険は少ない。

攻略前から情報を知るというのは、俺のゲームの楽しみ方に反する事で、普通ではまずありえなかったが、今は状況が普通じゃない。

この明らかに違法で無法な現状を、警察などに通報するというのも考えたが、それは留まった。現状では十分な証拠がないのだ。

複数人、それも二人や三人ではない、結構な数の人がそう証言するならば警察も動き出してはくれるだろう。しかし今は俺しかシステム制限を解除した者を知らない。

だから俺以外にもシステム制限を解除したものがいる事を確かめてから通報した方が、何かと都合が良い。

俺一人で通報して、良い年した男がゲームばかりして頭がおかしくなった、とでも思われたら一大事だし、ここは慎重になってもいいはずだ。まだデュアルワールドで致命的な事態が起きた訳じゃない。現実世界に戻れば痛みだつて消えるのだから。

手早くパソコンの電源を入れ、情報の海へ飛び込む。デジタル表記の時計が示す時間は三時過ぎだった。

俺は時を忘れて出来る限りの情報を集めた。

しかし俺のようにシステム制限を解除した、という情報は一切なく、見る限り誰も彼もがただVRゲームとして楽しんでた。

ふと、まるで俺だけが異常な存在になって、世界から取り残されたような、そんな感覚を覚えてしまう。

もしかしたらこの世界すらまだ仮想現実の中なのではないか、そんな事を思ってしまう。

夢から覚めるには頬をつねるといい。そんな事を思い出し、唐突に自分の頬をつねって見るが、もちろん痛くて俺はただ自分を苛めているだけだった。……そもそも仮想現実ですら傷みが再現されるのだから、こんな事しても何の証明にすらならない、全くの無意味だった。

気を確かに持て。そう自分に言い聞かせ、思い込む。

改めて集めた情報を元に判明した事実を頭の中で整理する。

まず事の始まりは全員が共通だった。王様の下に集まった状態で王様の言葉と共に決起の声が上がる。そして門の前まで出ると後は各々自由行動、という流れだ。

その後はもう各自が好き勝手やっていたらしく、あまり共通した情報は得られなかった。もっとも出現する魔物や、街の位置と施設

など世界の基礎は一切変わっていないらしく、ウルフリーダーに食
い殺された、だとか、道具屋のニアさんが俺の好みだとか、それ
らに遭遇している俺にとっては、どこか微笑ましくなってしまうよ
うなのも目にした。

しかしシアは一切その名前を挙げられていなかった。冒険の始ま
りからすぐの広場で人ばかり作っていれば、誰か一人ぐらいは俺と
同じように食いついてもおかしくないのに、ましてや可愛い女の子
ともすれば男達は放っておかないはずなのに。

起動時の乱数で発生するイベントなのだろうか……。そうだとす
れば俺は相当に幸運だったという事になる。

正直俺一人、初期レベルの初期装備で、ウルフリーダー達に勝て
る見込みはゼロだった。シアがいたからこそ俺は生き延びる事が出
来たのだ。

それ以外でもシアの力を借りっぱなしだ。戻ったら改めてお礼の
一つでもしないと……。

そこまで考えて、俺は気付いた。

俺はいつの間にか、またあの世界に戻る事を当たり前のように考
えている。

傷みが再現される世界だというのに、もはやゲームとはいえない
ほど危険な世界なのに、それでも俺はあの世界でシアと共に冒険者
として旅をする事を、当たり前のように、それが当然だと、疑問す
ら持たずに思っていた。

……もしかすると、これがシステム制限の鍵なんじゃないだろう
か。俺はそんな事を考えてしまう。

どんなに危険があろうとも、どんな困難だろうと、向かっていけ
る。それを誰かのために　俺ならシアのために。

俺は現実世界と仮想世界を行き来できる。だがシアは仮想世界の
住人で、現実世界には来る事は敵わない。再び会うには俺が仮想世
界へ向かわなきゃいけない。

でもそこは俺にとって死と隣り合わせの世界だ。環境の整ってい

る現代日本に比べて、魔物が蔓延る無法地帯の方が多く世界が、どれだけ危険かなんてのは比較するまでもなく分かる事だ。

それでも大切な人のために、立ち向かえる気持ちがあるかどうか。それが鍵となるのではないか。

……荒唐無稽もいいところか。

第一そのためには誰かと一定以上に親密になった上で、さらにその気持ちを汲み取る事が出来なければならぬ。VRGだけで俺の心が読み取れるとも思えないし、前提が揃わないのなら、すべては無意味だ。

見慣れた天井に向けたため息をつく。こうしたのはもう何度目か。もはや癖のようなものだ。

椅子が軋む音を立てて、俺の反った背中に合わせて曲がる。

色々とおったが、真相ははっきりとしない。分からない事が多すぎる。

その真相を暴くためにはゲームをクリア、もしくはシステム制限とやらを解除していくしかないのかも知れない。もっともそれすら俺の推測に過ぎないが。

もう一度ため息をつく。考えすぎて知恵熱で倒れそうだ。

パソコンの電源を落とし、椅子から離れベッドへと倒れこむ。その衝撃でVRGがベッドから落ちそうになったのを慌てて確保し、安全な所に置いてからうつ伏せになって再び考え込む。

幾つかの疑問は浮かべど、その答えは闇の中。思い出したのはシアの顔。

瞼が重い。ああ、俺は眠いんだと自覚した時には、もう睡魔の誘惑に勝てないほどに眠かった。

白を基調とした内装は清潔さを感じさせる。家具等は綺麗に整理整頓されていて、使っているのかどうかも怪しい綺麗さだったが、

ほこり等はなく、ちゃんと手入れが行き届いているようだった。

その中で静かにその駆動音を鳴らしながら、点滅する光、点灯する光が散りばめられた大きな箱のような物体の前に、一人の男がいた。全身が彩色のない地味な服装で、その格好は明るさと清潔さを演出する部屋の色とは反対で、混ざる事のない浮いたものだったが、それでいてどこか馴染むような矛盾する雰囲気だった。

優しく撫でるようにその箱の表面に手を触れている男の表情は、少し長めの髪に潜んでいたが、それでも垣間見える顔はどこか寂しげで、それでいてどこか悲哀なものを纏っていた。

「……やっと、一人目だ」

男は呟いた。誰かに語りかけるように、それでいて誰もいない空間での独り言のように。

それに応える者はいない。
それでも男はそれを気にも止めず、ただ稼動する箱に手を掛けたままだった。

まぶたを持ち上げると眩しい陽光が目染みる。そういえば夜にカーテンを閉める事も忘れて、そのまま寝入ったんだっけか……。思い起こすとどこか遠い思い出のような、デュアルワールドでの出来事が頭をよぎる。それでもベッドの脇に置いてあるVRGを被り、再びその世界に行けばそれが夢や幻ではない事は実感できるだろう。

携帯の画面に触れて、真っ暗な画面を消し、現れた待ち受け画面で今の時刻を確認する。

今日もバイトは休みを取っているために出勤する必要もないが、明日からはその分働く羽目になる。まあ、それも当然の代償だろう。

幸いにも俺がゲームをプレイしていない時間は、ゲーム内の時間も止まる。自分の都合で中断出来るのは色々と助かるものだ。

現在時刻は朝の七時。雀がその声で朝の挨拶をしているようだった。

真夜中まで起きていたのに、こんな時間に目を覚ましてしまうのもなんだか不思議なものだ。いつもなら昼前まで寝ているのが当たり前なのに、今日に限っては健康的な目覚めを体が欲していたのかも知れない。

睡眠時間自体はとても健康的なものとは言いがたかったが、少なくとも二度寝をするぐらい眠い訳でもないし、目が覚めてしまったのだから仕方ない。

折角この時間に起きてしまったのだし、久々に朝の家族の団欒でも楽しむ事にしよう。

デュアルワールドの事は後回しだ。ゆっくり考えても手遅れになる事はない。

そして俺は部屋の扉を開け、居間へ向かうのだった。

階段を降りて、居間に顔を出すと鼻をくすぐる良い香りがした。

見れば母さんが台所に立っていて、慣れた手つきで料理をしているところだった。

台所はカウンターのようになっていて、二階から降りる階段の所からだと、店員と客が向かい合うような形に自然となってしまう。

「おはよう、母さん」

「あら珍しいわね。おはよう、啓介。そうだついでだから由紀を起してきてくれる？」

「あー、うん、わかった」

居間に入ってすぐに俺は踵を返して階段を上っていく。

妹の部屋は俺の部屋の隣だ。今日は平日だし、高校生はしっかりと学校のある日だ。この時間まで寝ているってのも高校生としてど

うなんだ、とも思わないでもないが、まあそこら辺は俺には関係ないのでどうでもいいのだけれど。

すぐにドアの前まで辿り着く。二回続けてノックをするが反応はない。もう一度……反応なし。最後のダメ押しでもう一回。結果は言うまでもなかった。

仕方ない……。あんまり気は進まないが……ドアノブに手を掛けてゆっくりと捻り、開く。

中は暗かった。とはいえ小玉電球　豆電球だとか常夜灯などと呼ばれる事もあるが　ともかくその夕焼けのような光のおかげで全く室内の様子が分からないという事はなかった。

しかし、明かりがついていようと、足の踏み場がほとんどないような状態だった。

暗がりです具体的に何なのかというのは分かりにくいですが、床にこれでもかというぐらいいものが散乱している。主に脱ぎ散らかした服だ。そのあまりの汚さに、つい、ため息が出てしまう。仕方ないのでその中を足の踏み場を見極めて進み、カーテンの掛かった窓へと近づき、一気に開く。

カーテンは音を立てて左右に引かれ、眩い日の光が窓を抜けて部屋を一気に明るくする。

「ん……っ……」

由紀の声が聞こえた。流石にこれだけやれば目も覚ますようだ。

俺は再び足場を探しながら部屋の電灯まで行って電気を完全に消す。

「……あ、れ……って、何やってんの？兄貴」

花も恥らう高校生としてどうなのかと問い詰めなくなる格好のまま、寝ぼけ眼を擦る由紀に俺はまたもため息をついてしまう。

「時間だ時間。起きないと遅刻するぞ」
「ふーん……あ、本当だ」

もぞもぞと携帯に手を伸ばして時間を確認する辺りは、兄妹故か現代の若者だからなのか。というかこいつは嘘だとも思ってたんだろうか……。もう一度ため息をつきそうになって、俺はそれを止める。

ため息の数だけ幸せが逃げる、とはよく言ったものだが、実際問題ため息をついてばかりでは何も進展がない。ため息をつく暇があったら動けと言ってるようなものと、俺は思ってる。

「二度寝するなよ」
「分かってるって」
「あと部屋を片付けろ」
「うるさい！」

そんなやり取りをしながらも俺は部屋をそそくさと出て扉を閉じる。俺の朝の一仕事はこれで終わりだ。とりあえず歯を磨いて、シャワーでも浴びるか……。

再び居間に戻るとテーブルには料理が並び始めていた。いつも俺が朝には大体寝たままなので、朝食は基本的に冷蔵庫に詰められているのだが、今日は珍しく朝に起きて来たからか食卓には俺の分の料理も並んでいた。

手早く手際よく配膳する母さんにしっかりと由紀を起こした事を告げて、俺は洗面所へと向かった。

俺と由紀、母さんの三人が食卓に座り、テレビの音声をBGMにして食事を楽しんでいた。

「何で兄貴がこんな朝っぱらから起きてんのよ」
「起きたからだ」

朝の食事は目玉焼きとトースト、それにサラダという随分とオーソドックスな品揃えだったが、朝にのんびりと食事をする事のない由紀と、そもそも小食な母さんはこれで十分だった。俺には少し物足りないが、腹は膨れるので何も言う事はない。むしろ毎日手間を掛けさせている分、この程度で文句を言うのも馬鹿らしい。

「でも本当に珍しいわね、啓介がこんな朝から起きてくるのも」
「たまたまだよ」

そんな会話を繰り返していると、ふと聞き慣れた単語が耳に飛び込んでくる。

『世界初のVRゲームは、発売から一日たった今日もまだその熱は冷めやらぬようで、その中でも一番人気なのはデュアルワールドと言うRPGゲームらしく、その購入者の数は……』

……思わずテレビ画面に見入ってしまった。そういえばまだ一日しか経ってないんだっとな、現実時間では。

デュアルワールドでは実質二日に近い時間を過ごしている。それも色々と詰め込まれた濃密な時間だ。バイトで過ごす四時間が向こうの世界では一時間足らずのようにも思える。あくまで俺の体感での話だが。

「大丈夫なのかしらね、この……VRゲーム？　って言うのは……」
「大丈夫なんじゃない？　売られてるんだし」

母さんの心配する言葉にも由紀はどうでも良さそうに軽く返している。

しかし、俺は何とも言えない気持ちになっていた。

何故なら俺はそのVRゲームでありえない事態を体験しているのだ。それをここで告げるのは……。

迷った。でも、俺はそれを言わない事にした。多分言えば母さんは心配するし、由紀は馬鹿じゃねーの、とか言ってくるだろうけど、どのみちVRGは俺の手元からなくなる事になるだろう。VRGだけじゃない。そのソフトであるデュアルワールド、それと……俺がその中で過ごした記憶も一緒に。

そんな事は今の俺にとってはありえない選択だ。

「……きつと、大丈夫だよ」

「……兄貴なんか変だよ」

あっけらかんと言いつつ由紀の言葉に俺は驚いた。そんなに俺の心情は顔に出ているのだろうか……。

「そんな事ないさ」

「いや、絶対変」

……全く妙な所で勘がいいのは母さん譲りなのか、女の勘って奴なのか。やっぱり女って怖いな。

とはいえ真相を話せば、さっき考えたとおりの展開になってしまっし、俺は話題を無理矢理変えるために、一度息を細く吐く。

俺の反応を待っているのか由紀も母さんも箸を止めて、俺の事を見ている。

「由紀、時間だぞ」

「えっ、あ、本当だ。まずっ！」

俺がそう言うと二人は一斉に慌てだす。

由紀は急いで食べ終わりそうだったトーストを全部丸めて口に放り込み、皿を全部重ね一つにしてから台所へと小走りで持っていく。母さんも由紀を追うように椅子から立ち上がり、玄関へ向かう。由紀の見送りのためだ。俺も今日は起きているし、久々に見送つてやるとするか……。

昔は一緒に登校したものだが、今はそんな事は全くなくて、極稀に見送りをする程度に収まっている。

玄関を開けて飛び出そうとしたところで俺も母さんに追いつき、玄関口に立つ。

「それじゃあ行ってくる」

「行ってらっしゃい」「行って来い」

二人して由紀を見送った。扉が閉まる寸前に由紀がこっちを見ていたが、きつと俺がどこかいつもと違つと、そう感じているからなのだろう。

ゆっくりとドアは閉まっていき、やがてつまらない音を立てて完全に閉じた。

それを確認してから俺と母さんは居間へと戻ってくる。テレビの話題はもう別のものに切り替わっていた。

その後は俺と母さんが食事を食べて、俺が家事をしていると母さんがどうやら出る時間になったらしく、今度は母さんを見送るために俺は再び玄関口に立った。

「それじゃあ行ってくるわね」

「ああ、行つてらっしやい」

俺はスーツに身を包んだ母さんの背中を見送った。時刻は大体九時ぐらい。

そろそろいつもの俺が起き出して来る時刻でもあるのだが、今日に限ってはそんな事もなく、逆に見送る立場になつてしまった。

そして俺は改めて気合を入れる。全ては家事をこなすために。

何というか、久々な朝の空気に俺の気分は何故か高まつて、母さんが多分いつも通りの家事をこなそうとしたのだろう。それを俺は制して「後は俺がやっておくから」なんて言つたので、母さんは喜んでいたので、一方で「やっぱり由紀が言うように少し変よ、啓介」なんて言われもした。引きつった笑いだけでやり過ごしたが。

家事はすぐに終わった。洗濯、食器洗い、床掃除等など……。

普段は俺が起きる前に母さんが全てやってしまふのだけど、俺だつて手順を全く知らない訳じゃない。そもそも学校に通つてた時は毎朝やつてたものだ。

全てを終わらせて俺は自室に籠る。もちろんやる事は一つだ。

VRGを手取る。それを被つてVR移行ボタンを押せば、それだけであのシアと二人きりの空間に飛ぶ事になる。

何をどこまで話していたかなんてのはもはや空の彼方まで飛んでいってしまつてるが、そこは流れを察知し、誤魔化して何とかするしかない。

息を吐く。なんだか最初に被つた時よりも緊張しているような気がしないでもないが、多分本当に緊張している。……心臓の鼓動が強くなつている。

それら全て飲み込むように意を決して勢いよくVRGを被り、ボタンを押した。

感覚は吸い取られるように無くなり、思考も全てが遮断された。

現実と仮想

俺は、自分の意思でこの世界に戻ってきた。

左手に傷みが再び宿り、俺を苛む。鬱陶しいその痛みも今は俺が仮想世界にいる証になる。

部屋は薄暗く、普通ならすぐにも電気を点けるところだが、いまは体を動かす気にもならない。

そもそもゲームのシステムで勝手にやってくれる明度調整のおかげで、最低限の視界の確保はされている。流石に真つ暗闇だと、ものの輪郭が見える程度でしかないのだけど。

今は少しの明かりが部屋を 二人を照らしてくれているから、互いの顔も見れるし表情だって読み取れる。

俺はポツリと呟いた。

それは多分、俺の心の底にあった想い。

「なあ、シア」

「……なんですか？」

現実に戻った事で生まれてしまった想い。

「もし、自分とは絶対に相容れない存在に恋をしたら、それは許される事なのかな？」

結局、それが全てを隔ててしまうのだ。どんなに人のような容姿を持っていても、どんな人らしい思考を持っていても、それでも間にある溝は埋められない。

「……良いと、思います。それが本当の気持ちなら」

「……そっか」

肩の荷が下りた、とでも言うべきか。溝を少しだけ埋める事が出来た、と言うべきか。

なにせよ、少しは気持ちも楽になる。

もう日は落ちたのか、部屋は暗い。夕焼けの色は欠片すら残っていないかった。

静寂の包む中、軋むような音がした。

「行こう、シア。どうやら準備も終わったみたいだ」

「……はい」

そして俺とシアが立ち上がると、床を鳴らす足音が扉の前で止まり、ノックの音が二回鳴る。

その返事代わりに扉へ近付いて開けると、そこには金色の髪を揺らして立つニアさんがいた。

「お邪魔だったかな」

「……そんな事は」

意味ありげな薄い笑みを浮かべたニアさんに苦笑いで返し、三人は並んで階段を降りていく。

階段を下りると、テーブル同士を引き合わせた急造の大きなテーブルに、料理が並んでいて、机のほとんどを埋め尽くしていた。そして椅子とテーブルだけで一階の空間の三分の一ぐらいは占領していた。

色とりどりの料理が揃い、湯気を立てて出来上がったばかりだと誇示しているものもあった。

「ニケ君、起きたのね。怪我、大丈夫？」

「ええ、まだ少し痛みますけど、そんなでもないです」

「本当に大丈夫か、二ヶ」
「大丈夫、心配するほどじゃないよ」

ディアさんとトツネに心配されるが、なんて事はない。実際に痛みこそあれど動けない訳じゃないし、食欲もしっかりとある。だから俺はただの怪我人だ。

それにここでいちいち取り合っていたら折角の料理も冷めてしま
う。

「そんな事より、食べましょう。冷めちゃいますよ」

俺はそれでも心配そうな表情のトツネに、大丈夫だと後押しするためにも、明るい表情を作り、元気で明瞭な声を作り、そう言った。そして全員が椅子に座り、食事を始める準備が整ってきた所で、勢いよく裏口が開いた。

「トツネ！ トツネは無事か！！」

叫びながら乱入してきたのは、しっかりとした体付きでいてその顔はどこか中性的なのが特徴的で、その背丈は俺と同じくらい。何か動物の毛皮なのか、高級そうな皮装備に身を包むその男は家に入るなり、全員が揃った食卓を トツネを見て、その姿を確認すると飛びつくようにトツネを抱き上げて、喜びの声を上げていた。

「おお！ 無事だったかあ！ いやあ心配したんだぞ、父さんはお前が……」

「ああーもう！ 寄るな！ 離れる！」

そんな事を言いながらも嬉しそうな顔を浮かべるトツネを見て、つい口元が綻んでしまう。

「もうヒコネさん。お客さんもいらしてるんだから程々にしてくださいね」

言うのが早いか、屈強な男　つまりトツネの父親であるヒコネさんの傍にディアさんはいて、その皮製装備を預かっていた。

こうして三人が揃っている場面を見ると、家族なんだなあと思ってしまう。

そして今朝に俺が現実で過ごした時間も、傍から見ればこのように映ったのだろうか……。

その光景を誰も見れるはずはないのだから、その真相は闇の中なのだが。

「その嬢ちゃんがシアちゃんて、その兄さんはニケ君でいいのかな？」

「え？　あ、はい」

俺とシアは二人揃って戸惑いながらも返事をした。

その戸惑いはヒコネさんのその快活な声の勢いに押されたのと、どうして名前まで知っているのか、という二重のものだった。

そんな心情が顔に出ていたのか、ヒコネさんはその様子を楽しむかのように豪快に笑い、言葉を続けた。

「ああ、街の連中に聞いたんだ。一騒動起きた時にそれを解決してくれた冒険者がいる、ってな。流石にトツネやニア姉さんまで巻き込まれるとは思わなかったが……、何はともあれ無事で……っ
ていつでも怪我はしてるか。ともかく命に別状はなく、丸く収まったみたいで良かった良かった。本当に守ってくれてありがとう」
「そんな大したものじゃないですよ」

そもそも俺はシアを守りたかっただけだ。もちろん他の人が傷付くのもいやだし、傷付かせたくないという気持ちも持ってはいたが、その原点はやはりシアなのだ。

だからその褒美であるシアとの少しの時間をもう過ごしたし、これだけの料理を用意してもらって、その上またお礼を言われてもそれは身に余るものだ。

「それと……すまなかった」

「……何がですか？ 謝られるような事はされていませんよ」

「これは町の連中から会ったら伝えてくれと、そう言われてな。手助けも出来ずにすまなかった、と」

そういえばこの街の人々は一切手出しをしなかったな……。唯一抵抗したといえばトツネとニアさんぐらいなものか。

鍛冶やら何やらで肉体的には俺より明らかに強い人たちばかりだったのに、どうしてなんだろう。それに数もかなりいたのだから、全員で一斉に取り囲めばそれこそ被害もなく安全に取り押さえられて俺の出番すらなかったんじゃないだろうか。

もっとも特殊な形態をしている街だから、特有のなにかまずい事でもあったのかも知れない。

現にこうして俺に謝罪を入れてくる辺り、ただ無視をしていた、どうでも良かった、という具合ではなさそうだ。

「気にしないでください。一応無事に解決したんですし」

「……そうか。ありがとな」

そう言ったヒコネさんは多分、これ以上この話を引っ張るのは勘弁してください、という俺の表情を読み取ってくれたのか、改めてその場を仕切りなおし、それを機に全員が明るく、笑顔になる。

ディアさんは預かったヒコネさんの服を二階に持って行き、父親から解放されたトツネは顔を赤くしながらその頬を膨らましていて、まるで小さな子供のようにだった。

ニアさんはそれ見て笑い、そのせいで体の痛みがぶり返したのか、体を捻って苦しみを避けながら笑うという何とも言えない状況になり、シアはそんなニアさんを心配しながらもその顔は笑っていた。

そして俺は、それを遠目に眺めていた。

もちろん顔は笑ってる。楽しいと思うから笑ってる。

でもどこか馴染めない。あんなに皆生き生きとした表情で、心のままに生きていくというのに、それを見る俺の目が曇っている。

楽しいはずの時間に、俺の気持ちが付いて来ない。まるで対岸の火事でも見ているかのように、自分とは無関係なものを見る気持ちでその光景を、傍観していた。

どんなに繕っても、どんなに隙間を埋めようとしても、相容れる事はない。

それが現実と仮想の狭間だった。

ここに居る人達、ここにあるものはすべてが仮想のもの。そして俺だけが現実なのだから、浮いて当たり前、取り残されたような気持ちになるのも当たり前。それでも俺はこの世界に自分の意思で足を踏み入れたというのに、また揺らいでしまう。

……俺は弱い人間だ。現実も仮想も関係ないと、シアがそう言ったように、俺も堂々と胸を張って言えればいいのに、俺の中の何かをそれを認めない。

その存在は俺にも明確に捉える事は出来ないものだ。

だからせめて、この場を壊す事のないようにだけはしなければいけない。それが俺の出来る精一杯だった。

空の星は綺麗だった。いつかの夜、一人で外を出歩いた時を思い出す。

あの時はアビリティを何に振るかで悩み、空中に浮かぶメニュー画面とにらめっこしながら歩いていたせいで、時間をかけて星空を観察する事もなかった。

今思えばそれは凄く勿体ない事だった。何せ現実とは比べ物にならないくらいに星が綺麗なのだ。まるでプラネタリウムを眺めているようで、とても心が落ち着いた。

二階の窓から見る眺めはとても壮観で、闇夜を町の明かりが照らし、遠くでは木々や山々が並び、星空に浮かぶ月は鮮やかだった。

俺が二階に上がる時は、一階で飲み比べをしていたヒコネさんとニアさんがノックダウンしており、その介抱をディアさんとトツネがしていた。

そして「今日は泊まって行って」というディアさんの好意に甘えて、あてがわれた一室でのんびりと過ごしていた。

シアはトツネの部屋で一晩を過ごす約束をしていたらしく、今夜は俺は一人だった。

とはいえ特にする事もなく、だからこそ景色を楽しんでいたのだ。もつとも、それすらどこか落ち着かない気持ちを静めようと、無意識にってしまった行動なのだと思う。

俺は不器用だ。だから両方の世界を確かな現実だと認める事など、出来なかった。

左手の包帯を眺め、あの戦いを思い出す。何のために戦って、何のためにこの傷みを受けたのか。

……そして俺にとって現実とはなんなのか。

その時　小さな音が聞こえた。

振り向くと扉を開けて立つシアの姿があった。

「どうした？」

表情は俺を窺うようで、何か物言いたげだった。

「いえ、少しお話でもしたいなと思ひまして……迷惑、でしょうか……？」

俺に断る理由もない。

むしろ心の底では俺もシアと話したいと思っていたところだ。

「そんな事ないさ。どうぞ、入って」

シアは俺の言葉を聞くと小さく頷き、ドアは小さな音を立てて完全に閉まった。

風呂上りなのかその髪は濡れていて、シアが傍まで来るといい香りが鼻をくすぐる。

艶やかなの霧困気を纏うシアは、どこかいつもより大人っぽくなつたようにさえ見えてしまう。

「何かしてたんですか？」

「いや何にも。強いて言うなら景色を眺めていた」

「景色……ですか？」

「ああ、星とか綺麗だなあ、って」

本当にそう思っていた。都会の空は星さえ見えないような、汚れた味気のない空。その色は灰色と言ってもいいぐらいのものだ。

だからこのデュアルワールドの星空は新鮮で、それでいて綺麗だと思える。昔、旅行に行った先で見た星空よりもよりその輝きは心に染みた。

そんな俺の隣でシアは笑う。

「意外とロマンチックな事を言うんですね、ニケさんって」

「男は大抵ロマンチストなもんさ」

「そうなんですか？」

「そういうもんなの」

男はどこか未知のものに憧れる。

それが何なのかは人それぞれだが、俺の場合は……。

「だからさ、宇宙人とか、異世界人とか、そんなのもいるって信じてるんだけど、シアはどう？」

「宇宙人や異世界人、ですか……？ 考えた事はないですけど。：

……そうですね、素敵です」

「……素敵、なの？」

俺はそれに驚いた。普通はもつと受け入れがたいものだとばかり思っていたからだ。

実際の所、俺に限らず人類はその存在を知ってはいるものの、どうせいる事のない存在だと思っている。もちろん例外もいるが、大半はそんなものだ。

それをよく考える事もせずに、あっさりと言つてのけたシアの本心は俺に分からない。

「ええ、素敵です。……私は自分の知らないものを知る事が好きなので、冒険者の皆さんが聞かせてくれる異境の話とかが好きで、ついつい聞き入っちゃったりして……そのせいで怒られた時もあったんですよ」

「……そりゃまた意外だなあ」

「……だから、私は……」

言葉が途切れた。

話に耳を傾けていた俺は、その突然の沈黙に何事かとシアに顔を

向けるが、そこで動きが止まっていしまう。

なぜならシアの顔が俯き、その目に涙をためていたから。

「……どうしたんだ？」

俺はそうとしか言えなかった。

触れれば割れてしまう水晶のような　そんなシアに触れる事すら出来ない、臆病者だった。

だからその涙を拭う事も出来ず、ただ眺め、答えを待つしかない。

「……今の話、きつとニケさんの事、ですよ……」

「……どうして、そう思ったの？」

確かに少しぼやかしてはいたものの、間違いなくこれは俺の事だ、直接聞く勇気もなく、それでいて聞いて欲しいと思ったから、まるで人事のように振る舞い、シアに話を振った。

自分でも笑えるぐらいの臆病っぷりだ。

それを看破されて、俺は多分、なにかが振り切れてしまった。

言い換えれば……、俺に現実と仮想は違うと思わせていた何かがいま壊れてしまったのだ。

「夕方目覚めた時もそうでしたし、最初に会った時から不思議だったんです。国の募集に応じる冒険者は大抵が腕に自信のある人達ばかりで、まるつきり初心者になるなんて事はないですし、わざわざフィルストで王様の召集に応じたのに、国の事は何も知らなくて、それでいて魔物の事すら知らない。他所の国から来たのなら少なくとも魔物の存在ぐらいは知っているはずですよ。国家間の道中で魔物の出ない場所なんてあるはずがないんですから」

シアの言った言葉の大半は、考えて見ればその通りだった。

そもそも俺はいきなり王様の前に放り出されて、星の欠片を探せと言われ放り出された。だってそれはこのゲームの設定だから、俺がどうにかした訳じゃない。

しかしこの世界に生きているシアからすれば、俺は何も知らないくせに無謀な事をしている奇妙奇天烈な人間に見えたはずだ。

俺だって逆の立場だったらそう思うだろう。

それでもシアは今の今までそれを口にしないで一緒にいてくれたのだ。

シアの表情は、いつの間にか強さを持ったものに変わっていた。

目の周りは赤く腫れていたが、もうそこに雫はない。

「何か隠している事があるのはわかります。それを言いたくないのなら言わなくても私は構いません。でもこれだけは覚えていてください」

言葉を一度区切り、言った。

「私は、傍にいます」

吐く息が揺れた。息を吸う事すら忘れ、何かが溢れ出すのを止められなかった。

シアが俺の体に寄りかかる。

それを何も言わずにただ抱きしめた。

泣き顔を見られるのが恥ずかしくて、俺はずっとシアを抱きしめていた。

そして、全てを無視した無遠慮に頭の中で声が響く。

『システム制限の二段階目が解除されました。閉ざされた箱庭

で生き延びてください』

それはデスゲームの始まりだった。

深愛の温度

不思議とその宣告に動揺はしなかった。する余裕がなかったと言った方が正しいかも知れなかったが、そんな細かい事は今はどうでも良い。

ただ嬉しくて、泣いていた。

もはやシアに頼りにされているのか、頼りにしてるのかも分からない状態で、涙が止まるまで抱きしめ続ける。

声はなく、互いのぬくもりと鼓動だけが二人を繋いでいた。

どのくらいの時間が経ったかはわからないが、ようやく涙も止まってゆつくりと二人は離れる。我ながら名残惜しいのか、その肩に手は伸ばしたままだ。

自分の腕に挟まれたその狭い空間から見えるのは、シアの顔だけだった。

頬が赤く、その瞳は潤んでいて、今まで見た事がないような色っぽさを持った顔を真正面に見ていると、どこか気恥ずかしくなって目を背けたくなる気持ちになるが、ここまでしておいて俺の方が逃げるのも情けない。

ついさっきまでずっと縋っているようなものだったし、もう十分情けない所は見せてしまっているのだから今更という気持ちもあるし、これ以上は見せられないという意地もある。

だから俺は向き合って、小さくその名を呟く。

「……………シア」

その呟きにシアは反応する。

大きな瞳は柔らかに細まり、口角が僅かに上がり微笑みを作る。その笑顔はとても素敵だった。

「……………二ヶ、……………さん」

「……………さんはなし、で」

「あ、はい……………えっと、二ヶ……………」

「……………うん」

「なんか、恥ずかしい、です……………」

「気にしない気にしない」

潤んだ瞳が閉じた。

……………そして、多分、唇を重ねたんだと思う。

感触が残っているような、それでいて信じられない気持ちもあつて、色々と思うところもあつただのだけど……………、でもその行為は、隔てる何かを乗り越えさせて、溝を埋めてくれたような気がした。

白で染まる空間に黒い影があつた。目に刺激を与えるデジタルな画面を複数、縦横無尽に延ばして設置していて、各々の画面には別々の情報が表示されていて、流れるように画面が動いている。

その一つの画面に赤い表示が警告音と共に現れる。

「ん……………随分と早いな」

男は画面の前で椅子に座りながらうたた寝していたが、そのけたたましい警告音で目を覚まし、画面を眺め呟いた。そして素早く手元のキーボードを叩き、赤い警告表示を消した後に、二つの画面を拡大表示させる。

そこには二つの顔写真と、名前から何まで情報が並んでいた。

「第一段階を突破した奴か……………。この速さはよほど誠実な奴か、よほどのやり手か、まあどちらにしるこつちにしては助かるが……………」

粗方の情報に目を通した男は画面を消し、椅子から立ち上がる。ゆっくりと歩き向かったのは、黒い箱の前だった。

「……死ななければいいんだが」

その後シアとはどこことなくギクシャクした時間の中、幾つかの言葉を交わしたところで、トツネがシアを呼びに来たので、シアはそれに応じて俺の部屋からいなくなった。

急に一人になるとどこか寂しい所もあったが、今はそれでも良かったと思える。

多分あのまま一緒にいても、お互いが気恥ずかしさから窒息しそうだったから、そういう意味ではトツネの来たタイミングは非常に助かるものとなったのだが、二人の時間をもっと過ごしたかったかと聞かれると、やっぱり頷いてしまう。

でもこれから旅はまだまだ続くのだ。集めるべき欠片もまだ序盤もいところだ。話す時間もこれからいくらでもある。

おそらく今やるべき事は、これからのためにも自分の状況、状態を確認する事だ。

『閉ざされた箱庭で生き延びてください』そう告げた声は、最初のシステム制限解除の時と同じ、明瞭な女性の声だった。

そして閉ざされた箱庭というのは、半ば予想済みでもあったデスゲームの開始を告げるものだというのは分かる。最初の制限解除の時から予感はしていたからそれについてはさほど驚きはなかったが、気になったのは後半の部分だった。

生き延びてください、なんてデスゲームをけしかけた側が言うような台詞とはとてもじゃないが思えない。

しかしそれを告げた声は確実にシステム側のものだ。だから間違

いはないはずなのだが、そうなる何かしらの意図が隠されているというのには予想はつくものの、その先は一切考え付かない。

どうしてこんな状況を作っておきながら、それと矛盾した事を言うのか。

……よく考えればこれは、試練のような……、そんな形をしている事に気付く。

ゲームという体裁で様々なものが用意されたこの舞台で、命を懸けたデスゲーム状態になり、それでいて生き延びると言う。

これは明らかに俺を試しているとしたか言えない構造になっていた。どこの誰だかは知らない。ゲームの製作者辺りが妥当なところだが、生憎とこのゲームの製作で名前が大々的に公表されている人なんて俺は心当たりはない。

会社全体がグル、なんて壮大な事も考えて見るが、どこか現実味が無いと思ってしまう。

……ともかく今はそんな犯人探しなんてしてる場合じゃない。言われた通りに動くのも何だか癪だが、まずはこの世界で生き残り、ゲームをクリアしなきゃならないだろう。

ゲームクリアしても脱出出来ない、なんてふざけた展開もないとは言えないが、さっきの見立て通りにこれが試練だとするならば、そんな理不尽はないと信じてやるしかない。

現実の俺の体は……俺にどうする事も出来ない。そもそもどういうメカニズムで死に至るかすら分からないのだから、天にでも祈るしかない。

メニューは開くが諸々の項目は削除され、随分とシンプルなものへと変更されていた。

ステータスなんてものは見れなくなり、レベルと言う概念も消失しているが、アイテムやアビリティなど項目は残っている。無駄に設定を残してるあたりが小憎らしい。

その有様はまるでゲームであった名残で残された残骸のようにも思えるのだが、正常に機能する上に、ご丁寧にデスゲーム仕様に変

更されていたりするので、それがわざと残されたものだとわかる。変なところでどこか親切と言うか……。デスゲームと言うわりには気が抜けてしまうものを感じてしまう。

俺はメニューを閉じてベッドに横になり、体を楽な体勢にしてこれまでの仮想世界を思い返す。

これからは今までのような無茶は出来ない。していられない。

一人でレベル上げなんて持っただけのほかだし、捨て身の作戦も使えばそれなりに命の危険が待っている。

安全に安定させてゲームを進ませていき、やがてクリアを迎え、現実に戻る。

その時俺がこの世界をどう思っているか、現実をどう思っているかなんてのは想像もつかないが、きっと今考えているのとは違う考えを持っているだろう、と思ってしまう。

今この状態ですら俺は現実をとても軽視している。まともな思考じゃないとは我ながらに思うのだが、状況が状況だから仕方ないと自分に言い聞かせて今は納得しておく。

ゆっくりと目を閉じて、息を吐く。今は休もう。

仮想の現実には本当の現実になり、俺は其中で生きていく。

朝目が覚めて一階まで降りると、そこにはディアさんとニアさんの姿があった。

ニアさんは椅子に座りのんびりと湯気の立つ何かを飲んでいて、ディアさんは食器を片付けている最中だった。……しかし改めて二人が並んでいる所を見ると、そっくりすぎて何も言えない。

シアやトツネ、ヒコネさんの姿はなかった。

「おはようございます」

「おはようニケ君。ご飯あるから食べて」

「あ、はい。ありがとうございます」

昨日の夜とは違い、テーブルも片付けられたのか一つだけの小さなものに変わっていたが、その上に並べられた料理の数々は昨日のものに量こそ劣るものの食欲を誘われるものだった。

すぐにでもその食事にかぶりつきたくて、そそくさと椅子に座る。どうやら俺以外の人はもう食べ終わって、どこかに行ってしまったようだ。その証拠に誰かが手をつけたのか、皿の盛り付けが中途半端なものが幾つか見受けられる。

俺が起きた時にメニュー画面で見た時間は、現実時間の昼前を示している、デュアルワールドでの時間は太陽の具合から丁度朝の七時か八時と言ったところだろう。

朝食の時間としては妥当な所だが、それよりももっと早いのだろうか随分な事だ。

「もう皆さんは朝ご飯を食べたんですか？」

「ああ、とつくに食べたよ。トツネちゃんとヒコネさんは朝早くから仕事の何だから出掛けて行ったけど」

「朝早いですねー、魔紋師って」

仕事といえば、昨日なんだかんだでうやむやになってしまっていたが、トツネの依頼の事をすっかり忘れていた。

いま思い出しても遅いんだけど、昨日行けなくて大丈夫だったのだろうか、という気持ちはある。昨日のトツネからはなんだか焦っているような、緊急のような感じもしたし、まだ間に合うのなら今日行っても俺は全然平気だ。

左手の痛みも一晩寝たおかげか、思い切り壁にでも打ち付けられない限り痛くはない。

……寝起きに寝ぼけたままふらふらと歩いて、その手を壁に打ち付けたせいで今は少しの傷みがあるが、それも少しづつ収まってい

るのが分かる程度には痛みも引いている。

「本当はもっと遅いんですけど、なにかあるみたいですよ」

「なにか？」

「私にはわかりません。仕事に関しては私は関わらないと決めてますから」

涼しげな笑みを浮かべ、洗い終わった食器を片付けているディアさんはそう言った。

何かは分からないが、どのみち俺の知る所ではないだろう。専門職の仕事なんて俺には理解できないし、したところで何の役にも立たない。

「シアも一緒ですか？」

俺がそう言うとニアさんがカップに付けていた口を離し、その顔を上げて不思議そうな表情を作り、俺の質問に答えてくれる。

「いや、今日はまだ見ていないが……」

その時、軽い足音が耳に届いた。その音の方向へ首を向けると、そこには……かなり際どい格好のシアがいた。寝ぼけ眼を擦りながら、壁に手をつけて歩いているのにふらふらと揺らめき、見ているだけで怖いぐらいの不安定さで。

際どい格好は……具体的に言うのなら肌が透けているぐらい薄い生地で出来た、薄紫のキャミソール。確かに寝る時には楽な格好でいいと思うのだが、正直その格好で降りてくるのはいささか危険が過ぎる気がする。

見ればディアさんとニアさんは苦笑いを浮かべていた。

「……シアちゃん。女の子はもう少し恥じらいを持った方がいいと思うわよ?」

ディアさんが俺に視線をちらちらと向けながら、そうシアに言うのと、シアはその言葉の意味が良く分からなかったのか、その視線をゆっくりと下へ下へと向けて、……そして、爆発した。色々と。

顔は遠くから見分けるほどに真っ赤に染まり、体を抱くように手で隠し、何も言わず階段を猛スピードで駆け上がっていく音だけが聞こえた。

「……いつもあなのか?」

「……いえ」

居間にいた三人はその出来事のせいで半ば固まっていたが、何気なく呟かれたニアさんのおかげで少しは空気が和らいだ……気がする。

でも確か昨日はそんなに寝起きが悪いという事もなかったと思うのだけど、まあ俺も人の事を言えないぐらい寝ぼけていたのだけ……。

そんな事をぼんやりと考えていると、なにやら物音が聞こえる。何か重いものが地面に落ちた時のような重厚な音。

なんだろう、と思う暇もなく、その正体が明らかになる。裏口を開けて入ってきたのは、少し薄汚れた作業着を着たトツネとヒコネさんだった。

「ただいま、ってニケ起きてたのか。シアはまだ寝てるの?」

「ははは……起きては、いる」

「なんだそれ」

俺の乾いた笑いを理解できるのは俺を含め三人だけだったが、そ

の三人ともが全く同じ様な表情を浮かべていた。そしてそこに真相を知る四人目が、タイミングよく現れる。

探るように、隠れるように階段の影から除き見るシアがそこにはいた。

「あ、シアおはよう」

「お、おはよう……」

トツネの朝の挨拶にシアは戸惑いながらも答え、それをきっかけにその姿をはつきりと現した。その服装は至って健全な、いつもの服装だ。

そしてディアさんに俺と同じ様に食事を勧められ、俺の隣に座った。

どこか気恥ずかしそうに俯くシアに適當ながらもサラダを盛ってやる。ぼそりと「……ありがとうございます」とだけ言って、食事を始めた。

トツネはそんなシアの様子にどこか不思議そうな顔をしていたが、ヒコネさんのよく通る呼び声に、弾かれるように再び外へと飛び出して行った。

その後は何もなく平和に食事も終わり、俺とシアは二人で食器を洗っていた。

ただでさえ泊めてもらっているのに、その上で遅れて食事を取っているのだから、それくらいは当然の事でもあるのだが、やっぱりディアさんは譲ろうとしなかった。

なにかとトツネを助けてもらったから、ニアさんを助けてもらったから、と言って俺達に良くしようとしてくれるのは素直にありがたいのだが、こちらとしても世話になりっぱなしでそろそろ良心が痛み出す頃だったので、強引に俺がやると言って押し通した。

シアも俺と同じ言い分でディアさんに詰め掛けて、多分そのおかげでディアさんも諦めたのだ。

俺が洗い、シアが拭いて片付ける。同じ柄や似たような大きさの皿でまとめておき、たまに片付ける場所がわからないならばディアさんに聞く、という形で手際よく片付けていた。

使った食器も片付けて、濡れた手を拭いていると裏口からトツネとヒコネさんが、使い込まれたような汚れの、元は白色だったはずの膨らんだ袋を二人で重そうに運んでくる。

「何なんですかそれ？」

俺の投げ掛けた問いにはすぐに答えは返らなかった。

その代わりにその袋が放られて、大きな音を立ててその袋が床に落ちる。それからその重荷を下ろしたヒコネさんが額の汗を拭い、それでいてどこか涼しげなそんな表情を浮かべて俺の問いに答えてくれる。

「こいつは仕事用の鉱石だ。仕事に使う予定のものが不足しててな、それで今朝のうちに運んできたんだ」

「これが昨日頼んでたやつだよ」

付け出すように言ったトツネの言葉でようやく納得がいった。

しかし、元々はそれをここまで運ぶ道中の護衛という話だったのだから、ここまで運んでしまった今、俺のやる事はなくなり、同時にその対価として受け取るはずだった、魔紋の刻印料が半額になるというおいしい報酬もなくなる。

「これがそうなのか……」

デスゲームとなってしまうた今、即効性のある戦力強化にはうつてつけだったのだが、仕方ない。俺がただその好機を逃してしまっただけ。恨むのなら自分の不運でも恨むしかないだろう。

トツネ達はさらに袋を引きずって切り取られたように空間の質が変わっているところまで引っ張っていく。

多分その場所が作業場なのだろう。袋を引きずる二人の姿はやがて見えなくなり、少しするとその空間から出てくる。

するとヒコネさんが何か思い出したように「あ」と声を発するの
で、俺もシアも、ディアさん達までもヒコネさんに注目し、その言葉
を待った。

「実はニケ君にプレゼントがあるんだ」

「…………え？」

それはあまりに突拍子もない事で、思わず声を漏らしてしまった
が、呆然としているのは隣のシアも一緒だった。

「ああ、もちろんシアちゃんにもプレゼントは用意しているよ。正
しくは用意させてもらう、だけどね」

シアの方へとウィンクをかますヒコネさんに若干の嫌悪を覚える
が、この際は無視して俺は会話を続ける。

「……………どういう事ですか？」

「君達にお礼として無料で一つ。武器でも防具でもいい。オーダー
メイドで造って、それをプレゼントする！」

不測の対価

ヒコネさん造る武具は、独自の技術で丹精に造られ、その質も最高級なものなのは間違いない。なにせ王様に気に入られるくらいなのだから、性能に限らず蒐集品としても価値は十分なのだ。

それなのにただの冒険者、しかも名がある訳でもない俺なんか、わざわざオーダーメイドで造ってくれるなんて言う言葉が、すぐには信じられなかった。しかも俺だけじゃなくシアの分も造ってくれとさえ言ってくれた。

トツネに魔紋の刻印料を聞いた時でさえ、高いものは到底手の及ばないものだったのに、それを遙かに上回るであろうヒコネさんの作品を無料で手にいれるなんて、千載一遇の出来事なのだが、トツネの時と同様にうまい話があると、その裏があるのではないかと疑ってしまう。

だから俺はつい試すように言葉を続けてしまう。

いい人だと分かってはいる。だが疑心暗鬼になってしまうのは、俺がどこか心の奥底で動揺していたからだと自覚は出来ていた。

いつ、誰が、どのように牙を向くかなんて、わかるはずもない。

全てを疑い、生きていく事は難しい。だけど少しばかり慎重に生きるのには悪い事ではないはずだ。なにせ命が懸かっている。俺と、シアの。

「えーっと……なんでまた急にそんな事を？」

俺の言葉にヒコネさんは大きく笑い、気が済むまで笑った後に近くに居たトツネを昨夜と同じ様に抱きかかると、もちろんトツネは抵抗をして暴れるが、まるで幼稚園児がたかいたかいでもしてもらって喜んでるようにも見えなくもなかった。

「言っただろう？ お礼だって」
「でもヒコネさんの造るものの値段はかなり高額だと聞きましたし、それに見合うだけの事はしてないつもりです」
「いいや、したさ。ニケ君達からすればそれほどの価値はない行動だったかも知れないけど、僕達にとっては価値のあるものなんだ」

ヒコネさんは自信ありげにそう言った。

「だってそうだろう？ 我が子より大事なものなんてあるはずがない」

その一言で、俺は何も言えなくなってしまった。

俺はまだ親の気持ちの方が分かるほどに歳を取っている訳でもないし、子供がいる訳でもない。それでも親が子供をどれぐらい大事に思っているのか、どれだけかけがえのないものだと思っているのかは、少しばかりは理解出来ているつもりだ。

俺自身が親に大事に思われて生きてきたのだから。

「そう、ですね。すいません」

「いやなに、謝られても困る。ここはどーんとありがとうございませす！ と言ってもらわないと」

「……ありがとうございます」

そう言っって頭を下げた。

遠慮も時と場合を選ばなきゃ失礼にさえなる。

これは受け取らなければならぬお礼だったのだ。だからもう遠慮をする事なく、素直にそのお礼を受ける事にする。

俺に続いてシアもお礼を言っって、ヒコネさんは笑い、俺たちもつられて笑顔になる。

「さあて！ それじゃあ何がいいか、まずはそこからだ」

俺とシアは二人で街を歩いていた。

今日も街は相変わらずな様子だったが、昨日までとはやはり町の人々が向けてくる視線の色が違った。そもそも道行く人達に視線を向けられる事自体が、昨日とは違っている。

出掛ける前、俺とシアは散々悩みぬいた拳句に、ようやくヒコネさんにオーダーを出し、ヒコネさんもそれを快諾してくれたのだが、二人分のものを造る手間に加え、元からあった注文の事もあって、早くて三日、遅ければもつと掛かってしまつかも知れないと言われってしまった。

もちろんだからと言って「じゃあいいです」なんて言う訳もなく、待つ間はトツネの家に泊まってもいいとも言われたので、いい機会だから俺はその好意に甘える事にした。

ただその間にゲーム攻略に勤しむというのもどこか味気ない。シアと二人だとゲームを楽しむ気すら湧いてくるからだ。

その原因は俺がこの世界に閉じ込められたからだろう。俺は二人が相容れないものだ、そう思っていた。

でも今は、仮初であっても俺はこちら側の住人で、同じ様に生きていける。だからこそこの世界を現実として感じ、楽しむ事が出来る。

もつともそれもシアという時ばかりで、一人でいるとネガティブな事ばかりを考えてしまつて駄目だった。

我ながら気持ちが高浮ついているとは思うが、これも仕方ないだろう。シアだって朝からあんな事もあったせい、どこかいつもより口数も少ない。

「……なあ、シア」

「は、はい！」

「どうしてそんなに緊張してるの？」

シアは肩を強張らせて、ギクシヤクとした動きで、俺の隣を歩いていたのだ。

それがずつと気になっていて、タイミングを見計らって言ったつもりなのだが、どうやらあまりよろしくないタイミングだったらしく、シアはその足を止めてしまう。

……いや、確かに昨日の夜の事があるとは言え、何もそこまで急に意識するような事でもないような気がするのだけど……そう思ってるのは俺だけなのだろうか。

「いえっ……これは、その……」

「もしかして昨日の事？」

「いえ……その……朝に恥ずかしいものを見せてしまった……」

ああ……あれか。

脳裏に焼きついた光景を思い起こす。透けて見えた体は、程よく筋肉がついており、それでいて無駄な所はない細身で、女の子特有の丸みを帯びる体は……。

「……忘れてください」

「かわいかった」

シアにそう言ってやると言葉すら出ないのか、顔を赤くして俯く。本当かわいいやつだ。

そんなやり取りをしていると、前方がなにやら騒がしい。

「誰か捕まえてくれー!!」

前方からこっちにそう叫びながら、必死の形相で走る中年の男の前を、なにやら小さな白い羽根の生えた物体が、逃げるようにふらふらと飛んでいた。

よく見るとそれは爬虫類のような、それでいてどこか気品さも感じさせるような生き物だった。

俺はそれに見覚えがあった。そして触れている。

このゲームの最初、OPで乗っていた飛竜と似たような姿。それは間違いなく幼い竜だった。

少しづつ縮まる距離とともにその姿も鮮明になっていき、もはや捕まえてくださいと言わんばかりに近くを飛んでいたので、つい反射的に捕まえてしまう。

キューー、と弱弱しく、か細い声で鳴くその白い竜の体には、泥のような汚れや赤く血の滲んだ箇所も見受けられた。

それは人為的に暴力を振るわれた痕にも見える傷痕だった。

俺の捕まえた白い竜をシアも隣から見ている、すぐに俺と同じ思考を辿ったのだろう、その表情はさっきまでとは打って変わって、可愛さなんて欠片も残っていないような、怒りの表情だった。

そしてそれが向けられるのは当然、こっちに向かって走ってくるその中年の男だった。

「いやー、すまないね。さあ渡してくれるかい」

肩で息をする辺りは、年齢相当の体力なのだと思わせるが、その顔に浮かぶ笑顔はどこか嘘くさく、目が笑っていないかった。

俺は迷ったが、シアにこっそりと服を引っ張られ、決意する。

「この竜。怪我しているみたいなんです、手当ては？」

「いやー、それが手当てしようとしたら、傷みが我慢できなかったのか逃げ出しちゃってねえ。ともかく捕まえてくれてよかったよ。流石にこの歳になると怪我をした竜にも敵わないぐらいになっちゃ

つてねえ」

相変わらずその目は笑わない。それどころか苛立ちすら感じられる。

「この竜はあなたが保護したんですか？」

「……ああ、そうだよ。俺は竜商いって言って、若い竜を各地に売ってまわってるんだ」

「へえー、竜商い。それじゃあこの竜も売り物なんですか？」

「いや、その竜はたまたま見つけたばかりでな。まだ私に慣れていないんだ。だから逃げ出したんだけどな……」

表情にすら陰りが見られる。どこか怪しいこの男にこのままこの竜を引き渡していいものか。

「……いや、いいはずがない。でもここで堂々と突っぱねるだけの確たる物はない。

言ってしまうはこの男が言った通りの筋書きでも通用するのだ。

実際にその場面を見た訳でもなければ、何か話を聞いていた訳じゃない。竜から直接話でも聞ければ別だが、そんな事も出来るはずはない。

「穏便に筋を通して、この竜を男から引き離す方法……。そんなうまい方法が今すぐに浮かぶのか……」。

考える。出来るだけ真つ当な手段で、この竜を男に渡さない方法……。ああそつだ。どうなるかはわからないが、少しばかりの可能性に掛ければあるいは……。

話の筋を頭の中で組み立て、出来るだけの会話の流れを想像し、俺は口を開く。

「あの……この竜も商品なんですよね？」

「ん？ ……ああ、怪我が治ったらそうなるが……」

「じゃあ今この子を買う、ってのは駄目ですかね？ お恥ずかしな
がら、一目惚れしてしまいました……」

男の目の色が変わった。すぐにでもその場を去りたいような、そ
んな苛立ちの表情も消え去り、完全に商売をする表情へと塗り変わ
っていた。

「うーん、俺は構わんが……そうだな、白竜の相場から怪我やらの
分を抜けば……大体二万つてところか」

「二万……」

それは普段ならどうしようもない金額だった。

提示された金額は魔紋の上位クラスの値段で、手持ちでどうにか
出来るはずもない、途方もない金額だ。

だがここまでは予想通り。現実でも犬や猫が数万円から数十万円
までと幅があるのだから、少なくとも結構な値段を吹っかけられる
のは、十分予想できる事だった。

それに対して俺が出来るのはただ一つ。ここからが賭けになつて
しまうが、十分賭けるだけの勝算はある。

「……物々交換とは行きませんか」

「はあ？ いやまあ……金額相応ならば構わないが……それだけの
ものを持つてるとは思えないんだが……」

とりあえず前段階はクリア。物さえ提示する暇もなくあしらわれ
てはこちらとしてもお手上げだったが、取り合ってくれるのならば
まだ希望はある。

「えっと……これなんですけど」

ポーチに手を突っ込み、そのお目当ての品を頭でイメージして引き抜く。どこかブヨブヨとした感触に気持ち悪いと思ってしまうが、それをいま顔に出す訳にも行かず、我慢しつつそれを広げた。

俺が取り出したのは魔物の死体だった。クリーチャーコープス。二つ名の付いた貴重なはずのそのアイテムを竜商いの男に見せる。

「こいつは……レイス、か……？」

具体的な価値を知っている訳じゃなかったが、現実で情報を集めた時にレイスは序盤の救済、という情報があった。だからそれなりの価値はあると踏んではいたが、男の反応を見る限り微妙そうだ……。

それでも出来る限りの交渉はして見るが、半ば俺は諦めていた。

「ええ……駄目、でしょうか……」

シアの引つ張る手に力が込められるのが分かった。話の雲行きが怪しい事がわかったのだろう。背中を押されるような気持ちになるが、俺には出来る事しか出来ないの、全てはこの男次第だった。

「……いや、ちょっと見せてもらっていいか」

「？ 構いません」

俺の言葉を受け取ると男は腰のポーチから虫眼鏡のようなものを取り出して、まるで鑑定でもするかのようにそのレイスのコープスを観察していく。

俺の手元で抱かれた白い竜も、俺の隣で心配そうに事の顛末を見守るシアも、ただその男の行動に目を釘付けにされていた。

様々な角度から十分に時間を掛けて観察し終えた頃には、男の息も整い、白い竜もすっかり俺の手元にいる事に慣れてしまっていた。

さつきまでの怯えた様子もなく毛づくろいまで始める始末だったのだから、能天気というか、なんとというか……。

「よし、これで交渉成立だ！」

「……へ？」

あまりに突拍子もない事だったので声が漏れる。それでも竜商いの男は笑って俺にその言葉に至る経緯を説明してくれた。

何でもレイス自体の相場は大して値段も高くなって、聞くとウルフリーダーと同じかそれ以下だと言う。そうなるのももちろん白い竜の値段に到底届かないのだが、やはり二つ名付きというだけあって、通常のレイスとは違う、変異種なのとか。

それを聞いて真っ先に浮かんだのはデュアル種、D型の事だったのだが、どうにもD型とはまた違うらしい。

詳しいことは専門用語の塊みたいな説明だったのでよくわからなかったのだが、適当に噛み砕いて理解すると、ここデュアルワールドでは特異なものは総じてその価値は高く、D型は元の魔物に姿形が似ていて、かつ変異した種で、迷いのレイスのような二つ名付きは持つ力自体が強力で、時に街一つがなくなるほどの力を持っている奴もいるのだとか。

もちろんこの世界の人々に二つ名が分かる訳ではなく、あくまでプレイヤーである俺しかそれを見る事は出来ないのだが、普通の魔物を知っている人からすれば、見れば見るほどにその性質が違う事が分かるのだとか。

レイスの場合は舌先の硬化やその大きさなどらしい。

そして迷いのレイスを値段で換算すると五万程になるらしかったが、俺はそれを全て渡す事にした。

「本当にいいのかい？」

「いいですよ。こっちもいきなりの話でしたし、冒険者でないあな

たがそれを換金するとなるとその分手間も掛かるでしょうから、その分だと思っただければ……」

クリーチャーコープスは冒険証がなければ換金できないのは、初めてCCへと赴いた時に、ガランさんから教わった。
クリチャーズコレクト

この竜商いの男の腕には冒険証はなくて、それでもコープスで交渉が成立する辺り、知り合いに冒険者でもいるか、改めて誰かに依頼するか、どちらにしる換金の代理をする時にある程度の手数料ぐらいは渡すだろう、というのは簡単に予想が付く。

その分も払ったと思えばなんて事はない。それに正直なところ白い竜はもう少し高く、レイスはもつと安く、良くてギリギリ釣り合うぐらいだと思っただけに、文句を言われないほどの差があるのならそれ越した事はない。

竜商いの男は上機嫌で、もと来た道へと引き返していった。最初は邪推していたものの本当に怪我をしていた白い竜を保護していただけだったのかも知れない。真相こそ分らないが、帰り際に見せた笑顔はなんか純粋な気がした。

そして街中の通りに残された俺とシアは、一匹の白い竜をこれからどうしたものかと頭を悩ませる事となってしまった。

白竜の名前

俺はケン、ホワイト、シロウ。

シアはキャピー、かび丸、さとう。

となった。

何の話かと言われれば至極単純明快に竜の名前だ。

つい話の流れで怪しい中年の竜商いから傷付いた白い竜を購入したのだが、そのまま逃がす訳にも行かず、かといって親なんて見つけるのには途方もない時間が掛かるので、やっぱり購入してしまっただから責任を持って飼おう、と決めたのだが、そこから先は一切進まなかったのだ。

まずは名前ですよ、とシアが言って始まったのだが、俺の上げる名前は白い竜からはそっぽを向かれる始末で、それじゃあ私がつと言いたげにシアが代わりに白い竜の名前を列挙して言ったのだが、やはり首を振られる始末だった。

竜は幼いながらも人の言葉を理解できる程度には知性を持っていて、ぬいぐみのように抱えてもてる程度の大きさでは、まだ生後数ヶ月なのだから。

そのあと一年足らずで自分の餌を確保するようになり、数年もすれば親の元から去るそう。そして人が乗るぐらいに成長するのは竜の種族にもよるらしいが大体で三年。つまり俺がOPで夢見た竜の乗っての空の旅は、この竜ではあと少なくとも二年もかかってしまう事になる。流石に二年もこの世界には閉じ込められていないだろうし、そもそも三年目でようやく乗れるようになるというのだから、それから俺自身がなれないといけないのでさらに時間は掛かるだろう。

その話を聞いた時にはついため息を漏らしてしまったものだが、それを罪なき白い竜にぶつける訳にもいかず、俺はただひたすらに白い竜に気に入ってもらえるような名前を考えるしかなかった。

町の広場のベンチで流れる水の音が心地良い中、俺とシアは隣り合わせて座り、まだ名もない白い竜は、散々飛びまわった後にシアの頭の上に乗っかって体を休めていた。

この町の広場は四角くなっていて、地面には浅い水路が引いてあり、よく見て歩かないとその水路に足を浸す事になる。実際シアは水路に落ちそうになって、俺がその手を引いたおかげで水路に足を落とさずに済んだのだ。

「なあ、何がいいんだよ」

シアの頭でくつろぐ白い竜にそんな言葉をぶつけるが答えが返ってくるわけもなく、代わりに眠りを妨げたせいかな大きな欠伸で返す始末だ。

「そもそもこの子って男の子なのか女の子なのかも分かりませんよね」

「……そう言われると確かに……」

しかし、なんとなくオスのような気がしなくてもない。その俺に對しての態度とシアに寄っていく辺りでの推測だが。

「竜の性別の見分け方とか知らないの？」

「流石にそこまでは……」

竜の生態については知っていたシアでも、そういう辺りの事は知らないようだ。それもそうか……。

となれば竜の詳しい事が書いてある本か、もしくは竜に詳しい人に聞いて見るしかないだろう。もっともそんな本も人も心当たりがないのだけれど。……いや一人、いたか。

じっとしていても考えが煮詰まるばかりで、白い竜の名前すら浮

かばずにただただ時を過ごすばかりになってしまっ。

俺はベンチから立ち上がり思い切り体を伸ばす。声が漏れるほどに体を伸ばしきって、一気に体を戻す。俺が体を戻す頃にはシアも白い竜を頭に載せたまま立ち上がっていた。

「どうしますか、これから」

「……そうだなあ、とりあえずあの竜商いのおじさんを探すついでに、街をうろついてみるでしょう」

竜に詳しいといえはもちろん竜を扱っ商売をしているの人が当てはまる。あれからまだそう時間も経ってはいないし、少し探してみればまた出会う事も出来るかも知れない。もっともそれも希望的観測に過ぎないので、何もなければただのデートになってしまうのだが、それもまたいいだろう。

そんな事を考えながら白い竜と出会った通りまで再び足を向ける事となった。

再び元の通りまで戻り、竜商いの中年男が最初に来た方向へと歩いていくと、その先にあったのは街を取り囲む森だった。人々が幾度となく通るせいか草すら根付く事もなく、茶色の土が剥き出しになった部分が、端々を草や木々が彩るおかげで、土の色は道になっていた。

森で視界が悪かったが、少し歩けば森の境界も見えて、来た時の森よりは距離が短いようだった。

しかしそれ以上は、実のところ進みたくはなかった。

なにせあのグリードとの戦いはまだ昨日の事で、今もまだこの辺りにグリード達が復讐の機会を虎視眈々と狙っていて、隙を見せれば襲ってくる可能性もゼロとは言えない。むしろ高いと言ってもい

いぐらいだ。それでも少しぐらいなら、と軽い気持ちで町の外へ出た訳だが、まだ街までの道もそう遠くはないので大丈夫だろう。

「……いないな」

「そう、ですね……」

先が開けた森の境界から見える視界にはそれらしきものは見当たらない。

その先からは魔物すら出る領域だ。無理に動く事はやめて素直に引き返す事にする。

「戻ろうか……」

俺がそう言うと、シアもいま現在俺たちが置かれている状況が分かっているのだろう、何も言わずにただ頷いて踵を返した。

一応気は張っていたが、特に何事もなく無事に街のエリアまで辿り着く。街に入れば安全か、と言われれば、特に安全という事はない。そもそも昨日は街中での戦闘だったのだから当たり前といえば当たり前なのだが、それとは別に逃げるといふ選択肢を作るためにも街の中という入り組んだ場所は都合がいい。

正直あの戦いは偶然に偶然が重なった奇跡的な勝利に過ぎないし、どちらかといえば痛み分けといっても差し支えないものだった。痛覚があるいまは前の戦いより俺は大胆に動けないのに、それに比べ向こうは何も変わる事のない命のやり取りなのだから、やはり精神面での不利もかなり大きくなっている。

だから俺は今度あったらひたすらに逃げる事にした。ヒコネさんに頼んだ防具もそういった能力をつけてもらう事になっている。もちろん男なら武器で立ち足はだかる敵を切り伏せる、というのも魅力的な話なのだが、俺はあえて守る力を選んだ。その理由としてはやはり生き延びる事とシアを傷つけないという想いから来ている。

「申し訳ないが少しいいでしょうか」

そんな声に俺は思考の中から現実に取り戻される。

街の外壁に背中を預けて立つ男が、こっちを向いていた。丁度街に入っただけのところ、まるでそこからやってくる人を待っていたと言わんばかりに、

その頭には大げさに反ったような唾の大きい青と白の縞帽子を被っていて、全体的に青と白に構成されたその服装は、どこか漫画なんかで見るところの唾の部分、金色をしていて丸い細剣が携えてある。その風体はまさに貴族らしい。

さらにその後にとった行動がまた紳士的だった。繊細かつ丁寧に右手を回すように胸の前まで持ってきてお辞儀をする。そんな馬鹿丁寧なお辞儀はせいぜい漫画やゲームの中での執事キャラや、ウエイターぐらいなものだった。

遅れて不恰好なお辞儀を返し、頭を上げるとその端麗な顔が目に入る。その顔は明らかに日本人のものではなく、瞳の色もまた青い。その声を掛けてきた男の姿に呆気にとられていたが、意識を戻して俺は言葉を返した。

「……なんででしょうか」

「実は、人を探しています……」

「人？」

これは困った。俺とシアがせいぜい知っているのはヒコネさんとディアさんにニアさん、それとトツネぐらいなものだ。この街の規模からすればせいぜい四人知っている程度で人探しに協力が出るはずもないと思うのだが、一応誰を探しているのかぐらいは教えてもらえれば、あとでヒコネさんにも聞けば分かるかも知れない。

「ええ、この街で一際評判がいい……アメノヒコネという人なのですが……」

……まさかそんな低確率に当たるとは思わなかったが、確かに良く考えてみればヒコネさんは国の王様ですら知っている人なのだから、その名に惹かれる人がいても何らおかしくはない。しかもこの紳士的な男は外見だけ見れば優男と言った具合だが、その腰の剣といい、立ち方ひとつでさえどこか気品と存在感を押し出している。明らかに戦闘に慣れた人物である事はわかるし、そんな人物ならヒコネさんに武具の依頼をしたい、と言うのも何ら不思議な事ではないだろう。

それに悪い人では無さそうだし、ヒコネさんのお客とくれば俺が拒む理由もないし、いまの俺達に目的もない。

一応シアに確認しておこうと顔を向けるのだが、いつもならばちりと目が合うところが、俺が目にしたのはシアの横顔だった。シアの視線はもちろんその紳士的な男に向けられ、釘付けになっている。……これは、俺が男として負けているという事なのだろうか……。

心の中で落胆しつつ、俺は顔を向けられないシアに確認の声を掛ける。

「いいか、シア」

「あ、はい。私は大丈夫です……」

どこか浮ついたような表情のシアは、慌てて俺の方へ向き直りそう言った。その態度が何故か釈然としなくて、もやもやとしたものを感じてしまうが、いまここでそれをぶつけるわけにもいかないし、そもそもが俺の身勝手なのだからひとまずは置いておく。

そして俺の目の前の男に嘘をつく訳もなく、素直にヒコネさんを知っている事を告げる。

「えっと、知ってますよ。そこまでご案内いたしましょうか？」
「おお、本当ですか！ これはありがたい」

神聖的な男は再びお辞儀をして、その顔に笑顔を浮かべる。第一印象が紳士な貴族というものだったので、その表情には少し驚いてしまった。なにせ少年のような喜びを満遍なく表現した屈託のない笑顔だったからだ。

疑っていなかった、といえば嘘にはなるが、正直ここまで純粹な人だとは思わなかった。もっと、口先は回って、実力もある。そんな万能紳士だと思っていたのだが、その印象も今ので改めなければならぬだろう。

「私の名前はトリニア・グリデイス。トリニアとお呼びください」

「俺はニケ。こっちはシア」

「……よろしく願います」

シアは恥ずかしそうに後ろ手で指を絡ませていたが、それは俺にしか見えない光景だったので黙っておく。

「それじゃあ行きましょう」

俺はそう言っただけで先陣を切って歩き出す。道案内なのだから後ろで歩いていったってどうしようもない。

いささかこの街を知っているという風にも見れなくもないという事に気づいたが、まあ突っ込まれる事はないだろうと、安易ながらも考えておく。それに嘘を言った訳でもないで、聞かれたら素直に知らないとも言えはいいだろう。無駄に見得を張ると後で後悔するというのは、少ない人生でも何度も体験した事だ。

並びは俺が先頭でシアがその隣で、頭の上にまだ名のない白い竜。

その後ろに紳士の貴族のトリニアを連れて、俺は何度か歩いた道を歩いていくのだった。

嫉妬の心情

「ところでその白い竜は……」

まだ通りの途中で、俺の後ろを歩く紳士の貴族ことトリニアさんは、物珍しそうに通りを眺めていたのだが、なにせ通り全てが似たようなものなのだ。それも次第に収まり、やがて興味はシアの頭の上でのんびりとしている白い竜へと向いたのだろう。なんでもトリニアさんは竜について詳しいらしく、シアは白い竜を頭から離してトリニアさんへと手渡し、不思議と慣れ親しんでいるかのように白い竜は抱きかかえられて、トリニアさんは観察を始めた。

数分すら掛からないような時間でトリニアさんは答えを出した。やはり詳しくければ何かしらの特徴ですぐに分かるのだろう。

「この子はオスですね」

やっぱり、と心の中で呟き、お礼を言ってからオス用の名前を頭の中でこねくり回しながら再び歩き出す。白い竜はトリニアさんの手を離れて、自分で飛んでシアの頭に乗っかっている。もうそこがコイツの定位置なのだろうか……。

「それにしてもスノードラゴンとは珍しいですね。この地方には生息していないと記憶していましたが……」

「いえ、この竜は竜商いから購入しまして……」

白い竜はスノードラゴンと言うのか……。確かにその白い体表といい、触れた時のヒンヤリ感といい、雪の名を冠するには十分な特徴を持っている。となると竜にはありがちなブレスとかもそういった類のものになるのか、とぼんやりと考えながらトリニアさんと竜

談議に花を咲かせる。

「竜商い……確かにその筋の方々ならスノードラゴンを扱っていてもおかしくはないですね。しかしその傷は……」

さつきからどこか疑惑の色が浮かぶ表情だったのはそのためか。

ようはトリニアさんはスノードラゴンの体に付いた傷を俺達がやったのではないのかと密かに疑っているのだ。もちろんそれを堂々と聞こうとしない辺りは気を使ってくれているのだろう。確証が持てないうちに、なんでも自分の考えだけで物事を考えるのは駄目だと思っているからこそ、トリニアさんも「その傷はあなた達がやったのですか」なんて聞かずに、傷の事にだけ触れて、それに対する俺たちの反応で真偽を確かめようという腹なのだろう。

わかってしまえばなんて事もないし、善意から来るものだとわかってるので腹を立てる必要もない。

「ああその傷は俺達も良く分からないんです」

「わからない？」

怪訝な顔を浮かべ探るような目つきを向けるトリニアさんに、俺は言葉を付け足す。ありのままの真実を告げても何を言われるでもない。

俺達がスノードラゴンに出会った時の事から、トリニアさんに出会うまでの経緯を簡単に説明すると、ちゃんと理解してくれたのか怪しむ顔も明るい笑みに変わる。

「そういえばトリニアさんは何故ヒコネさんに会いたいんですか？」
「それはやっぱり、評判高いその技術を持って私の武器を造ってもらいたく思いました」

それは確かに真つ当な理由なのだが、ヒコネさんの仕事の現状を知っている俺からすると、なんだか少し申し訳ない気持ちになった。ヒコネさんは急を要する仕事だけは後回しに出来ないのので先にこなしでしまい、まだある程度の余裕がある仕事を、後回しにしてまでも俺達の武器を造ってくれと言っていたのだ。だからもしトリニアさんがいま依頼しても、それなりに時間が掛かる事になるだろう。その原因の一端を担っていると思うとどこか気が重い……。

そんな気持ちを俺の中から追い出すためにも、普通の会話を試みる。

「やっぱり腕の方も相当なんですね」

トリニアさんの腰の細剣に目をやりながらそういうと、照れくさそうに笑って腰の剣に手を掛けて隠すような仕草をする。

「いえいえ、自慢するような技は持ち合わせてないですよ。ただ私の力不足を補うためにも業物があればいいと思ひまして」

確かに評判も高いヒコネさんの作った剣なら、実力を持った人が扱えば相当の実力となるだろう。まさに鬼に金棒状態だ。こういう人が仲間にいれば俺も安心してゲームクリアを目指せるのだろうけど、生憎とトリニアさんは遠方で定住しているという物言いだし、仲間にするのはうまくいかないだろう。

気づけばニアさんの道具屋の前を通り過ぎ、ヒコネさんのところまでもう少し……と思った時に気づいてしまった。

俺が知っているのは裏口であり、客が来るべき店先ではないのだけれど、しかしいま思えば俺は店先にすら行った事がなく、そこまでの道のりは一切を知らない。探し回れば見つける事も出来るだろうけど、この街の地理を全て知っている訳ではないので、少し迷う可能性もある。道案内を言うと行ってしまった以上、少しでも迷うとなんだ

か申し訳なくなってしまう。

裏口に案内するか、一か八かで正面側を探るか、どちらにしようかと頭を悩ませるが、結局裏口の方にした。迷う可能性がある方はどうしても選ぶことは出来なかった。お客さんを裏口に招き入れるのもどうかと思うが、多分、ヒコネさんなら許してくれるだろう。

そしてヒコネさんの店の裏口に繋がる路地裏にそろそろ差し掛かろうという所で、何だか妙に騒がしい人だかりが丁度その路地裏への入り口を塞ぐようにあった。

「またか……」

ため息すら出るような頻度のイベント発生確率だが、それに文句を言っても事態が変わるわけでもないので、諦めて道を引き返す。

「ニケさん、どうかしたのですか？」

「いや、本当はこの先なんですけど色々面倒なので回り道しましょう。そうしましょう」

トリニアさんはさらに何か言おうとしたが、シアがその手を引くと言いかけた言葉も外に出る事もなく、ぱくぱくと餌を欲しがる金魚のように動かしていたが、俺はそれよりも頬を赤らめたシアの方が気になって仕方なかった。

いまさら気づいたが、俺は多分嫉妬しているのかも知れない。

だからといってそれを表面には出さないのだが、やっぱり胸がざわつくというか……落ち着かない。

……しかし今はこの場から離れるのが先決だった。

出来る限り騒ぎに巻き込まれないようにしたい。余計な事をする
と命に関わる事態まで発展する羽目になる。それこそ昨日のように。

……まあ、あれは俺が引き金を引いたものではないのだから少し違
うかもしれないが……。

ともかく今は騒ぎを避け、記憶にある店の位置を思い出し、脳内マップを駆使して向かう。そう思った直後、不幸にも厄介なイベントから逃げ切れずに、怒鳴り声が背中にぶつけられた。

「よおやく見つけたぞ……！ てめえら……」

その聞き覚えのあるねっとりとした声に頭だけ振り向けば、そこには既に抜き身の大剣を持ったグリードがいた。その後ろにはステイードが魔道書的なものを開いて、もう臨戦態勢だった。……正直泣きたい気分だったが、泣き言も言ってられないだろう。

気持ちを切り替えて今はどう切り抜けるかだけを考える。……が、もちろん浮かぶ選択肢は一つだけ。

「三十六計、逃げるに如かず！」

俺とシア、遅れてトリニアさんは訳もわからないなりに俺達に付いてくるように走った。

後ろでは再び怒鳴り声が聞こえるが、もちろんそれら一切を無視して走る。

魔法を使われるかもしれないので、とりあえず安直に直線を走り続けるといふ事はしないで、すぐに角を曲がり一端姿を消す。次にやることはトリニアさんへの説明と、行き止まりにだけはぶつからない逃走経路の確保だけだった。

「その包帯はそのせいで……。……つまりあの方々はあなた達の敵………なんですね」

「まあ言ってしまうえばそうなりますけど、別に危害さえなければどうでも……」

「人同士での争いは良くないですし……」

白い竜は今回ばかりは自ら空を飛んでいたが、余裕そうな顔を浮かべながら全力疾走と並走されると、すごく悔しい気持ちになってしまうのはどうしてなのか。

走りながらも簡潔に何故こんな事になっているのかをトリニアさんに説明し終えたところだった。多分数分も経ってないだろう。

トリニアさんはやはり鍛えているのか息切れすらする事なく、涼しい顔で考え込む仕草すら見せる余裕っぷりだった。

「それではあの二人はただの八つ当たりという事になるのではないのでしょうか」

「……そうとも言えると思いますけど、プライドが傷つけられたとかが負けたのが悔しいとか、そんな気持ちもわからなくはないですし、変だとも思いません。けどもう一回戦えば俺は負けるんで逃げてます」

「潔いんですね……」

「死ぬ事の方が怖いですから」

それは俺の率直な本心だ。確かに自分のプライドだとかはあるが、それはやはり命には変えられないもの。自分の矜持と命を賭して戦うというのも男心くすぐられるシチュエーションではあるのだが、それを出来るほど俺は強くはない。

「そう、ですか……」

トリニアさんは何故か俯きどこか悲しむような素振りを見せる。なにか俺の言葉で思い出すところでもあったのだろうか……。まあどちらにしろ今の俺にそれを考えたり、聞いたりする余裕はない。だというのにトリニアさんが走る速度を少しづつ落としていき、や

がて立ち止まる。

もともとトリニアさんはこの状況で唯一の部外者なのだから、別にそのまま置いていってもグリード達に襲われる可能性も少ない。可能性がないとは言えないが、俺達といるよりは一人のほうが動きやすそうなタイプの人だし、大丈夫だろう。

だから俺はそのまま走る速度を緩める事もせずに駆けようとしたのだが、俺が置いてはいけない人が　シアがトリニアさんに合わせてその動きを止めてしまう。

「シア！」

俺の叫び声にシアはこちらを向くが、置いていけないとばかりにトリニアさんに再び振り向く。その瞬間、遠くの角から飛び出す人影。それは間違いなくグリードとステイードだった。

「……………くそっ!!!」

俺は走った。もちろん第一に守るべきはシアだ。

遙か彼方から迸る光芒は街の一角を赤く染めて、その力が現れる。空に浮いた強大な炎球が二つ、標的を焼きつくそうとその炎を揺らめかせ、そして弾かれるよう向かって来るのが見えた。

トリニアさんには巻き込んで悪かったとでも言いたかったが、それもこの状況を切り抜けて生きていたらの話だ。

距離的に無傷で避ける事はまず不可能だとわかっていたから、俺はシアを後ろから抱きしめて、そのままダンスでも踊るかのようにくるりと二人の立ち位置を入れ替える。

つまり俺の背中がその炎球を受け止めるように。

もうひとつの炎球はトリニアさんへ向かっているが、俺にはどうする事も出来ない。

傷みに耐えるために俺は目をつぶり、歯を食いしばる。全身に力

が籠り、シアを抱きしめる。

そして嫌な汗が伝う。それは背中に迫る熱気のせいだった。

疑惑の調査

熱気が体を撫でて、その次の瞬間には凍えるような冷気が熱気に取って代わる。何事かと、俺はシアを抱く手を解いて振り返った。

そこに広がっているのは一面の銀世界と言っても差し支えないような真っ白な世界。その場所だけが冬にでもなったかのように雪が積もっていたのだ。その中で細剣をグリード達へと向けて立つトリニアさんの姿と、俺とシアを庇うようにスノードラゴンの子供である、まだ名もない白い竜が空中で浮き続けていた。

トリニアさんは静まり返ったその空間で、隣で羽ばたく白い竜を見て笑った。それに応えるように白い竜も鳴く。

何も見ていなくとも、何も聞かなくともこの目の前にある光景は二人が引き起こしたものだとすぐに分かる。人ひとりを軽く飲み込んでしまいそうな炎球はその姿を一切残さず、それでいて炎球が衝突したような形跡すら残っていない。トリニアさんと白い竜の何かしらの力で掻き消されたのだとはわかるが、その力は遥かに俺の及ばない力だった事に、俺は痛感する。俺にシアを守れるだけの力がない事を。

突如出来た局地的な雪原の中で、凍ったように固まった時間と人影が同時に動き出した。グリードは大きな剣を一振りして、威嚇のように威勢のいい叫び声で吼える。

「……………殺すっ！！」

睨みつける目は鋭く、それでいて禍々しいほど憎悪に満ちていた。しかしその殺そうという視線もいまは、俺やシアではなくて完全にトリニアさんに向いていた。俺たちを守るためとはいえ、奴らに抵抗してしまったのだからそれも仕方のない事なのだが、その視線を向けられてもトリニアさんは涼しげに受け流し、剣先を天へ向けて

胸の前に構える。

「お前らは町の人々の安全というものを考えないのか？」

発せられた言葉はさっきまでのトリニアさんからは聞いた事のない、一段声のトーンの落ちた背筋が凍るような声。それでいてどこか達観しているような、憎しみなどが籠っていない声だった。

激昂しているグリードはその言葉でさらにその怒りの温度を上げる。周りの雪を溶かしかねないほどの怒りはその表情を歪めていく。そして溜め込んだ怒りはそこが要領の限界だったのか、一気に爆発し、グリードはトリニアさんに向けて大剣を構えながら疾走した。細剣と大剣では打ち合いなど当然出来るはずもなく、トリニアさんは振り下ろされた大剣を横へ飛んで避け、雪の下に隠された石畳に激しく大剣を打ちつけたグリードの隙を、文字通り突いた。

点のような切っ先が正確にグリードの鎧の隙間へ突き刺さる。トリニアさんはすばやく剣を引くと、後ろから飛んでくる複数の火球を同じくらいの大サイズの氷球で迎え撃つ。氷は音を立てて砕け散るが、飛んできた火球もその熱が奪われたのか、存在を消していた。

飛来した火球は後ろで援護をするステイードの放ったものだった。グリードは刺された右肩辺りを押さえて、トリニアさん相手に無謀に突っ込む事は駄目だと判断したのか、その身を引いた。

そして次に何をするのか、と目を張っていると突如視界が白一色に染まる。反射的に顔の目の前に手をかざすが、もちろん光の速さに敵うはずもなく、何も効果を持たず少しの間何も見えなくなる。やがて少しづつ風景とその色が戻ってくるが、そこにはもうグリード達の姿はなかった。

「そいつは多分、カサセって奴だな。話だけは聞いたことがある。」

今時期はこの辺りを通るからな」

腕を組んでどっしりと構えたヒコネさんから出された答えは意外なものだった。

グリード達と一戦を交えながらも無事に切り抜けた後に、トリニアさんをヒコネさんと引き合わせ、無事に依頼することの出来たトリニアさんは、出来上がるまでこの街に止まる事にする、と言って宿を探しに出て行った。

ヒコネさんの仕事も一段落したようで、一緒に仕事をしていたのトツネも一緒にテーブルについて、休憩がてらの談笑を楽しんでいた。その中で当然の如く、出掛ける前にはいなかった白い竜について突っ込まれて、その経緯を簡単に説明した所で、ヒコネさんはその竜商いの名前を口にした。

「カサセ……もしかして悪い噂とかあるんですか……」

それはもともと、この白い竜ことスノウ 店に着いてからシアが思いついた をはじめて見た時に考えた事だ。

竜商いと語っておきながら竜を傷付けているのではないか、という予想して、俺とシアはその場で買い取った。それが正解だったのか、あのカサセと呼ばれる中年の男の言った通りなのか、それは今話そうとしてくれるヒコネさんの話を聞けば、ある程度の判断はつくはずだ。そう思い俺はヒコネさんを見て、その言葉に耳を傾けるのだが、ヒコネさんは話を濁すようになり続けるばかりだった。

「どうか、したんですか……？」

「うーむ。悪い噂、ってほどのものはないんだ。ただ……」

「ただ……なんですか？」

歯切れの悪い言葉で、なおも話を濁すヒコネさんに少し苛立ちを感じながらも俺はじっとその目を見ていた。

「どうもきな臭いというか……、妙に竜の回りが良いというか……、貴重な竜ばかりいつもあいつの手元にいるんだ。買う側からすればありがたい事なんだろうけどな、いつもただ眺めるだけのこっち側からすれば、その状態は不思議でしかないんだ」

「不思議……」

確かに貴重だとヒコネさんが言うくらいに竜が、いつも数を揃えているのは不思議なものだろう。竜が具体的にどんな周期で子供を生むのかすら分からない現状でも、いくつもの貴重な商品が、これ見よがしに同じ棚に並べられてある図でも想像すれば、その強烈な違和感も少しは感じ取れる。第一それだけの商品としての竜をどこから仕入れているのか……。

思いつくのは自力で養殖しているか、裏でどこから安定して手に入るのか、推測を立てるにしても情報が少なすぎて具体的なものは浮かばないが、思いつく辺りはその辺りだろう。流石に竜の巢に忍び込んで子供を盗み出すなんて事をやるとは思えないし、それだけの實力があるようには見えなかった。まだトリニアさんの方がよっぽど強そうだったし。

「まあともかく変に関わらない方がいいだろう。行動を制限する訳じゃないが、せめて造ったものはちゃんと受け取って欲しいしな」

若干、冗談にも聞こえない言葉ではあるものの、笑って返す。もとより俺もそのつもりで、無茶な事はもうしないと決めた。グリード達は何かとしつこくて要注意ではあるが、それ以外は気をつけるものもない。

「行くぞ、トツネ。仕事の続きだ」

そう言って豪快に立ち上がり、仕事場のスペースへと二人は向かっていった。

「私、確かめたいです」

借りた部屋でありながらも、今は俺の部屋となっている部屋で、俺とシアはベッドに隣り合わせて腰掛けながら話をしていた。切り出したのはシアだったが、俺も心の中では密かに思っていたことだ。それはつまり、あの竜商いのカサセという中年の男の事だった。

ヒコネさんはただ貴重な竜をいつもラインナップとして揃えているのは不思議だと言ってただけだったが、実際にその姿を見た身としては嘘くさいものがあるのは分かっていた。確定ではないものの、十分に怪しめるのは確かだ。

そしてそれをシアは、どちらにしろはつきりしたものにしたい、とそう言ってきたのだ。

俺は出来る事ならば関わらずに行きたい所なのだが、シアからすればじつとしていられないのだろう。その証拠がこうして迫り来るシアの態度に表れている。

普段は大体俺任せであまり主体的な行動はしないというのに、今に限ってはやる気満々で、今すぐに飛び出していつでも不思議じゃないくらいだった。

それに対して俺が出来る事とすれば、せいぜい諦めかけた抵抗をするか、素直に受け入れるかの二択程度だ。どちらにしる結果は決まっているようなものだが、駄目元でとりあえず抵抗の方を選ぶ。

「駄目だ。不用意に出歩くとまたグリード達に襲われるぞ」

これで素直に引いてくれるなら俺も苦勞はしないのだが、案の定シアはそれを突っぱねる。こういう時の強引さは普段引っ込み思案で恥ずかしがりなシアからは想像もできないほどに強いものだ。

一度ため息をついてから、仕方なく、といった体裁をとりながらも、シアの話に乗る。

「ありがとうございます！」

「けどどちらにしろ慎重な行動が必要なのは間違いないし、いざとなれば調査なんて投げ出して逃げる事。命にだけは代えられないからな。それでいいか？」

「……はい」

シアの返答の少しの間が意味する所は俺にも分かるが、それでも俺はやっぱりその優先順位を譲れない。

シアはきつと、どんなに危険でも全てを投げ出して自分だけ助かるような道を選ぶことはないだろう。だけど俺はそれを黙って見過ごす事も出来ないし、かといってシアを完全に守れるだけの力もないのは、さっきのステイードの攻撃を防げなかった事もまだ新しい記憶だ。

だったら俺に出来る事は、危険が及ばないように考えて指示する事と、いざという時の覚悟くらいだ。もともと前に出るような性格ではないし、この方が俺の性には合っているのかも知れない。

「それじゃあまずはこの辺りの地理の把握と偵察。それで情報を集めてからだ。それも細心の注意を払わないとまたグリード達に襲われる。まあ、トリニアさんが追い払ってくれたし、向こうも多少は警戒するだろうから街中は大丈夫だとは思うが、念の為」

ヒコネさんに聞いた話だと、数週間は竜商いのカサセもこの辺り

に留まるらしく、街中にも顔を出して商売をするらしい。宿に泊まることはなくて、日が落ちるとそのまま町の外へ向かうらしいが、誰も野宿している姿は見た事がないらしく、どこで寝泊りしているのかすら不明らしいので、まずは身辺調査から入ることになるだろう。その過程で紐を手繰るように事実をかき集めるしかない。

「それじゃあ行くか。っとその前に行き先は告げとかないとな。いざって時に役立つかもしれないし」

二人してベッドから立ち上がり、シアは元気な表情で大きく伸びる。

一方俺は慈善活動みたいなことに巻き込まれて、おまけにトリニアさんと出会ってからのシアの行動や表情を思い出して、少し気持ちが落ち込んでいた。大体シアのせいなのだけど、それを全部吐き出してぶつけられるような人間ではない。そもそも俺の勝手な嫉妬心なのだから、それをぶつけられた所でシアにとってはただの理不尽に過ぎない。

色々と喉まで込み上げる想いを飲み込むためにも、俺はシアをぎゅっと抱きしめる。突然の行動にシアは戸惑っていたが、そんな事も気にせずに力をぎゅっと込めて、すぐにその腕を解く。ようはただの自己満足だった。

でも少しは元気が出た気がする。

突然の事で戸惑ってるシアに何も言わずにすぐに部屋を出る。自分からやっておいてなんだが、シアがすぐに慌てふためいて、俺がどうしてそんな事をしたのかと聞かれると、俺も慌てふためく羽目になるので、その前にさっさと退散したほうが身の為、精神衛生上もいいだらうと判断し、体がその思考に引っ張られるように動いたのだ。

男が、さびしいから、なんて言える訳もない。

階段を下りている最中に案の定シアの声が後ろから聞こえるが、

足を止める事無くそのまま階段を下りて一階へと向かう。

今の俺の顔を見られたら、一生顔を合わせる事が出来ないような気がして。

再び街へと繰り出して、竜商いのカサセについて情報を集める。二人別々の方が効率はいいのだろうけど、安全面を考えるならそれはただの愚考に過ぎない行為だ。

しかしこの街で集まる情報は大したものはなく、どれもヒコネさんに聞いたような話ばかりで、あつという間に手詰まりになってしまった。唯一寝泊りしているらしい場所は聞き出せたのだが、あくまでらしいだけで、そもそも違法な事をしていても決まった訳ではなかった。次にする事は直接的な情報収集となったのだが、そこで二人の意見が真つ二つに分かれた。

原因は俺の言葉だった。

「ここからは俺一人で行く」
「駄目です！」

シアの頭という定位置に丸まっていたスノウはその首をもたげ、何事かとキョロキョロさせていた。

俺にずっとくっついていいると言っことはなかったが、嫌われていく訳ではないので、緊急連絡用にスノウと俺の組み合わせで偵察に赴くと、そうシアに言ったのだが、もちろん断られる。

そろそろ街の中も家路につく人たちが多くなる時間帯だったが、その中でベンチにゆったりと座りながら話す俺達は、傍から見れば仲のいいカップルか、はたまた喧嘩でもしてるカップルか。どちらにせよこの時間ならば人の流れから浮く存在だった。ましてや竜までそこにいれば目立って仕方ない。

別に街の人々を信用していないという訳じゃなかったが、俺達がこうしている事や、調べている事も、住人を通してばれてしまう可能性は十分にある。だからやると決めたら迅速にやらなきゃいけないと思っただけで、現状は互いに譲らないまま平行線を辿っていた。

「えーっと、わかってくれないかなあ……」

「ニケさんが行くなら私も行きます」

頑なに譲ろうとはしないシアに半ば呆れながらも、俺は説得を試みる。本当はシアの言う通りに連れて行ければいいのだけど、やっぱり二人だと見つかる可能性も高くなるし、その場合に俺はシアを守るかと言えば、昼間の一軒が堪えてノーとしか言えない。そうなればあとは逃げるしかないのだけど、その場合は一人のほうが好きやすい。二人でバラバラに逃げるというのもあるが、もしシアのほうに向いてしまうと俺が困る。

と説明したのだが……。

「それなら私が一人で行きます。実力だってニケさんに負けてませんし、足の速さなら私のほうが上です。それに小柄なほうが身も隠しやすいですし……」

シアの言ってる事はもつともなのだが、やはり俺としても譲れないものがある。どこの世界に好きな奴を自分の目の届かない危険な場所へ向かわせるものか。

「そういう問題じゃないの。俺ひとりで行くから。シアは帰りでも待ってて」

「ニケさん。怒ります」

そういえばいつの間にか、さんづけになっているけど、まあいいか。今はそれよりもどうやってシアをなだめて納得させるかだ。

そんな時、スノウが小さく鳴いた。そしてその瞬間、この状況を打開する策が浮かぶ。……いや策っていうほどの大層なものではないか。

「わかった。それじゃあスノウに決めてもらおう。一回飛んでもらって、着地したほうが行く。それならシアも文句はないだろう？」
「えーっと……」

シアはなおも難色を示すが、俺がスノウに目で合図を送ると、もう一度、今度は任せるとも言うように強く鳴き、それをきっかけにシアも渋々ながらも了承した。

よくやったスノウ。あとでなんか買ってやる。

「でももしどちらにも降りなかったらどうするんです？」

「その場合は、二人で行くか出直すか、どっちかな。まあそれはないと思うけど。それじゃあスノウ、頼んだ」

俺の言葉を聞きスノウはそっと飛び上がる。シアは少し乱れた髪を手で直して、空中で八の字を描きながら飛ぶスノウの様子を眺めていた。俺も同様に眺めていたが、シアのように祈るような表情は浮かべない。もう答えは決まっているようなものだからだ。

シアはスノウの事を信頼しているし、スノウもシアの事を信頼していて、二人の仲は俺以上のもので、シアはスノウが自分の思った通りに動いてくれると思っっているだろう。……いや現にそうなのだ。しかし今回ばかりはスノウは俺の味方をしてくれるという確信があった。

竜は幼くとも人の言葉を理解する。だからこれまでの会話の流れから、ある程度なにを考えているかぐらいは読み取ってくれるはず

だ。そして互いにシアの事を大事だと思っている男同士で、しっかりとアイコンタクトも取れた。

だったら答えはひとつしかない。

羽ばたく音が止んだ。スノウが止まり木としたのは、俺の肩だった。俺はよくやったという表情でスノウを迎える。対してシアは驚きと少し悲しそうな表情を浮かべていた。少しばかり胸が痛むが今回ばかりは許してくれ、と心で呟き、シアにしっかりとこの勝負の結末を告げて、家に帰らせることにする。

「決まりだな」

「そんなぁ……」

しかし日はもう落ちかけていて、偵察には向いた環境なのだが、女の子が帰るには不向きな環境となってしまうている。とりあえずスノウでもつけて帰らせるかなぁ……と思っていると、丁度そこに見覚えのある姿があった。

全体的に青っぽい服装の落ち着き払った男が、紙袋になにやら詰めて目の前を歩いていて。歩く方向からしてトツネの家へと向かう方面だったので、多少不躰になるかも知れないが、護衛を頼む事にしよう。その力はもう目の当たりにしているので疑う余地はない。

「トリニアさん！ 奇遇ですね」

俺の声に気づいたトリニアさんはこちらに気づくと笑顔を浮かべて手を振ってこちらへとやってくる。急な話で申し訳なかったのだが、適当に経緯を話すと分かってくれたようで、やはり最初に俺達を疑ったようにこついうことには理解があるようだった。しかも手伝うとまで言ってくれてありがたかったのだが、今はシアの事を頼めるだけで十分だった。

心強い護衛も付いてくれたので、スノウは元の予定通り俺とともに

に向かい、非常時にはどうにかしてくれる手はずだ。

「トリニアさん、頼みます」

「任せてください。傷ひとつ付けずに家まで帰す事を誓いましょう」
「心強いです」

トリニアさんへ頭を下げる。そして感謝の念を送ってから頭を上げ、そしてシアへと顔を向ける。

「行ってくる」

「……………気をつけてくださいね」

「ああ」

それだけ言うとシアはくるりと体の向きを変えた。ふてくされてるのかなんなのか、まあ心配された分だけは気をつけることにしよう。トリニアさんと一緒にそんなシアを声もなく笑い合って、互いに背を向けて歩き出した。

シアとトリニアさんは暖かな家へと、俺は真っ暗な町の外の森へと向かって。

闇夜の探索

街は昼間ほどに騒がしくはないものの、やはり夕飯時なので各所からは笑い声などが漏れている。そんな中を俺と肩に止まる幼白竜
スノウは歩いていった。腹はあまり減った感じはしないが、それでもその雰囲気の中にとディアさん達と食べた昨日の晩の光景を思い出して、少し足が重たくなる。

元はといえばシアが言い出したことなのだけど、仕方なくとは言え俺自身が進んで引き受けたのだから、恨み言のひとつでも口にするのはお門違いだろう。

シア達と別れてから数分も歩くと、昼間に一度通った街と外の境界へ辿り着く。昼間とは違って夜の暗さが、森に不気味さと静けさを与えていて、足が進むのを拒んでいるかのように動かなかった。

もし、グリード達に襲われたら？

もし、盗賊とかに襲われたら？

もし、手に負えない魔物に襲われたら？

そんな予感が頭によぎる。この仮想の体の命はもはや俺の命と等しい価値がある。いや、価値なんてものではなく、もうそのものと言った方が正しいか。

鼓動がうるさいくらいに高鳴って、周りの音すら掻き消してしま
いそうだった。それを押さえ込もうとゆっくりと息を吸い、吐き、再び吸う。

落ち着きを取り戻して、鼓動も収まりを見せた頃、足もようやく自分の元へと戻ってきたようで、簡単に持ち上がる。

「それじゃあいきますか！」

掛け声をかけて気合を入れる。それに応えるのは肩に止まるスノウ。きゅいー、と力強く鳴いてくれるのがどこか心強かった。

一步、町の外へと踏み入れる。石畳から土の地面へと代わり、足音がジャリ、と音を立てる。そうなればもう躊躇する事もなく、身軽に前に進んでいった。

昼間とは違って視界は悪く、月明かりも木に茂る葉が遮るせいどころどころにしか差し込まない。道は分かるがそれ以外が全く分からないというかなり危険な状態だった。

システム補助のおかげで輪郭は浮かぶが、森の中では対して意味がないし、見える輪郭もはっきりとしているわけでもないの、奇襲をかけられればひとたまりもないだろう。

スノウにも警戒を頼んではいるが、俺自身も一切気を抜かないで一步一步を慎重に進んでいく。

この先をもう少し行けば開けた草原に出るから、そこまで行けばその心配もなくなるだろう。光が届き、視線が届く。まず奇襲は不可能だ。とはいえその条件だと逃げる事もまた難しいという事になつてしまふのだが、とりあえずはそこまで出てみないことには始まらない。

聞いた情報の場所がどこなのかまだ分かってないのだ。草原まで出れば分かるとは言っていたが、それも夜で分かるかどうか怪しい。しかしもし見えなければ帰る口実も出来るのであまり気にしていなかったりもする。だからこそ俺が気をつけるのは命に関わるつまり、何かに襲われる事にだけ向いているのだ。

やがて森の終わりが見えてくる。体感的には昼間の三倍ほど掛かった気がする。実際どうなのかは計っていないのでいまいち分からないが、それでも辿り着いた。第一目標である草原へと。

森と草原の境界で、一番身近な木に手をつけて体を休ませながらも周りを窺う。まず目に付いたのは巨体を揺らし歩く謎の生き物。

直感的に現実の動物で近いのはゴリラだと思った。一際大きい二本の腕があり、それを杖代わりにように体重をかけながら歩く様は過去に目にしたゴリラの動きそのものだった。ただその大きさは遠目から見ただけで分かるほどに大きく、多分近付くと俺なんか

その手だけですっぱりと収まってしまっただろうか。

月明かりを受けて見える体表は大半が黒い毛に覆われているものの、ところどころに鋭く伸びた金属質の棘のような物が伸びている。それを何に使うのかは分からないが、人間なら何人かはまとめて貫けるほど鋭くて長い。

思わず自分がそこに刺さっているような光景を想像してしまい、唾を飲む。

「冗談じゃねえ……あんなのと関わってられるか」

余計なものには知らぬ存ぜずで無視の一点張りが一番いい。もちろん頭の片隅に入れてはおかないと、あとで忘れた頃に遭遇する羽目になるので、知識としては覚えておく。

あまりに遠距離すぎて識別は発動せず、名前は分からなかったが、それでもあれだけインパクトがあれば忘れる事もないだろう。さらば名も知らぬ巨大な棘猿。

心の中でそんな事を呟きながら、視線で他になにかいないか、なにかないかを探る。

他には弓を持ったリザードマンや三体で組んだゴブリンなど、少しは魔物自体も強化されているらしく、俺一人だと危ないかもしれない。

とはいえ一度魔物とエンカウントしてしまえば、他の魔物が戦闘に加わるという事もないので、数自体はあまり気にする事でもないのだが、やはり回復などにも限界があるので、長時間戦闘地域をうろつく訳にも行かない。レベルは順調に上がるかもしれないが、危険性のほうが遥かに高い。

うろつく魔物は大体分かったので、次に探すのは話に聞いたところだ。

なんでも、街から少し離れた所にある山の周辺で、カサセさんらしき姿を見かけたという情報が多数あったらしく、興味本位で調べ

た若者がそこで竜の声を聞いたのだとか。それも数年前の今時期に。そんな事を聞けばやっぱりそこが怪しいと思うのは当然だ。しかしその若者も情報を聞いて探し回ったのだが、結局なにも見つからずに帰る羽目になったらしい。俺もそれと同じ道を辿る可能性は高いが、それもまたひとつの成果だろう。

目標となる山は他の山に比べて岩肌が多く露出していて、鋭利に尖っているのが特徴だと言っていたけど……。

見つけた。草原を現在位置から右斜めに行つたところの森の中にそびえる山。特徴と一致する山がそこにあつた。

距離は結構ありそうで、直線で向かう事が出来れば多少は時間も短縮できるだろうけど、何も無い見晴らしのいい草原は、時には味方になるが今の状況では敵となる。仕方ないのでいつでも逃げ込めるように森にと草原の境目に沿つて、直角のコースでその山へと移動する事にする。時間で命が買えるなら安いものだ。

息を殺し、辺りを窺い、できるだけ早く進む。
人生で一番過酷な時間がこれから待っているような気がした。

「ああ、私だ。……………そうか、わかつた。私が説明しに行く。……とりあえずは置いておけ。……………ああ、それでいい」

男は耳元から携帯電話を話すと、椅子を軋ませながら立ち上がり、すぐに服装を整える。男の他には誰もいない。だというのに男は準備を済ませ部屋を出る間際、何も無い空間に向けて一言呟く。

「……………行ってくる」

部屋の照明は消され、ただ大きな箱の光が不気味に闇に浮いていた。

部屋を出て、エレベーターで一階まで降りる。ここは三十階以上にも及ぶ高層マンションだった。その玄関口には既に車が用意されていた、そこに何の躊躇いもなく、当然の如く乗り込むと、運転手もまた行き先を聞く事すらなく、猛スピードで発進した。

もう世界には夜の帳が下りていたが、照らす人工的な光は月明かりすら打ち消す光量で闇を裂く。その光は道に沿うように伸びていて、道しるべのようにも見える。

法定速度を軽く無視した速度で走る事数分、車はその驚異的速度を緩め、やがて一軒の家の前に止まる。出発する前のマンションから比べれば道端に転がる石のような家だったが、それでも二階建ての三角屋根で、普通の価値観ならばそれなりに立派なものだ。そんな家の前に不釣り合いな高級車が止まって、その中から男が出てくる。それを迎えるのは黒服に身を包んだ複数の男達。何も知らない人達が見れば恐怖に慄き、警察に連絡してもおかしくはない。

家の明かりは二階と一階の両方が点いており、日常とは言えない有様でも家人が出て来る様な事はなかった。そして高級車でやってきた男は何も言わずに歩き出す。待ち受けていた男たちも何も言わずに頭を下げる。

インターホンを押すこともなくドアを開けるが、そこにはもちろん誰もいない。女物の靴が捨てられているかのように乱雑に散っていて、日常とは違うものを感じさせる。

それすら何も気に留めずに男は靴を脱いで家へ上がる。玄関を抜け、居間まで来るがそこには外にいた男達と同じ服装の黒尽くめの男が一人しかいない。

「上にいます」

その男は渋い声でそれだけ言い、それを受けた男は進行方向を階段に向け、二階へと上っていく。

階段を上りきる前から泣き声と叫び声が聞こえる。なにか錯乱し

ているとも思える声。ひとつではなく二つ。

半分ほど開いたドアの隙間からは光が漏れていて、そのドアノブに手を掛けると躊躇いすらなく男は完全に開ききる。

その先に待っていたのは質素な部屋の中、ベッドに横たわる青年の姿と、その脇で涙をこぼし脱力する少女の姿。そして青年に縋りつくように黒いスーツに身を包んだ初老の女性。涙をこぼし、力の限りを先程まで叫んでいたのか、今は息を乱し、疲れた様子だった。そんな彼女らでも、新たに現れた男を睨みつけるだけに力はあるらしく、扉を開けた瞬間から刺し殺すかのような鋭い視線が突き刺さっていた。

それでも男は表情に変わりはなく、ジェスチャーでなだめるような仕草をして、口を開いた。

「全部、説明します。まずは落ち着いてください」

もつ心身ともに削りとられてへとへとだった。

体感的には一日ぐらい経ったんじゃないかと思わせる、息の詰まる時間を過ごす羽目になるとは流石に予想できなかった。今回はしっかりと時間を計っていたが、実際はせいぜい一時間程度しか立っていない事に俺は心底びっくりした。

街からは結構離れてしまったが、俺が心配性なせいで慎重に慎重を重ねた結果でもあるから、実際の所はもつと早くは来れるはずだ。敵すら無視して一直線にすれば三十分も掛からないんじゃないだろうか。まあそんな事は俺にもシアにも難しいだろう。グリードやトリニアさんぐらいの力があれば別だろうけど……。

そんな事を考えて自分の手の平を見る。ここまで剣は一回も握っていないにも関わらず、手汗がすごい事になっているのに、見て初めて気が付いた。

それもそーか……、となんか妙に納得し、上を見上げる。遠くで見かけた時よりも高く細く見える。

まだ少し山の根元までは距離があるが、様子を探るには丁度いい距離だった。だが一通り眺めてみるものの明かりが漏れてるなんて事もないし、竜の声どころか不自然な物音は一切しない。

「眺めるだけじゃ駄目、か……」

意を決して山へと近付く。普通の山とは違ってまるで人工的とも言える灰色の山肌がむき出しで、地面との境がはつきりと見て取れる。岩肌に触れるが特に変わった感触はなく、ヒンヤリとしていた。改めて辺りを見回すが上れるような所もなさそうなので、岩肌を手につけたままグルリと回るように移動する。

するとやがて道が現れる。山の表面に巻きついた蛇のような螺旋を描く道。もうそこまで整備されているのならこの山は塔でも呼んだほうがいいんじゃないかとも思ってしまう。

何はともあれ歩ける道があるのならばこちらとしても助かるので、そこを伝って山を登り始める。道の幅は人が二人並んで歩くのがやっと、といった具合で、馬車は傾斜も相まって通る事はできないだろう。

そう考えるとここにカサセさんがいるとは思えない。竜商いというぐらいなのだからやはり商品である竜はそれなりの数がいるだろうし、生活に使う道具なんかを入れれば結構な大荷物になるはず。それをここまで毎回運んでいたら労力も凄まじいし、なによりあんな貧弱そうな体にはなっていないと思う。もとよりここは魔物も蔓延る危険地帯なのだから、寝泊りには適さないだろうし、街までの行き来の間に魔物に襲われる可能性は十分にあるのだから、わざわざこんな所を選ぶ理由もないはずだ。

どのみち噂のような話ではあったし、これで何もなくなるとも仕方ない。

螺旋の山道を落ちないように気をつけながら登り考えていると、やがて木よりも高いところまで上ってきていたようで、辺りが急に広がったように視界がひらける。

まず目に付いたのは今まで歩いてきた道のりと、次は草原を闊歩する巨大棘猿を含む魔物たち。それらはさつき見た光景なので対して新鮮味もないのだけど、この高さまで来たおかげで森の先が見えるのはとてもありがたかった。

この周辺には幾つかの山が森の中に点在していたが、やがてその先は完全に山脈となっていて、木々すら生えていない。方角的には街を南、草原の先を北とするならば北東と言ったところか。

最初の街、フィルストからすれば東へと移動する事になる位置だ。こちら側に来た人たちはその山脈方面か、草原の先の湿地帯かを選んで進む事になるらしい。どちらも適正レベル的には大差ないのでお好みで、という情報を目にしていた。どの道あとで道は合流し、辿り着く街もまた同じだというのだから、本当にどちらでも構わないのだろう。

山脈地帯も湿地帯も、ここからでは詳しいところまでは見えないようになっているのか、山には霧がかかり、湿地帯は木々の葉で完全に覆われている。それらの観察は諦めて、他に何かないかなあ、と辺りを眺めながら歩を進める。ぐるぐると回る視界の中、方向感覚を失いそうだったが、地形の大体はさつき頭に入れたから、帰る時にちゃんと確認すれば問題ないだろう。

その時、音が聞こえた。

……いや、これは、声？ それも竜のような声でもなければ、人のような声でもない。遠吠えのような感じだけど、ウルフリーダーなんかとはまた質が違うもの。

耳を澄まして音の聞こえた方向を探り、そちらへ視線を向けると、遠くの草原　俺が来た方向の草原である巨大猿が暴れていた。その巨体を持ち上げて両手を胸に叩きつけ何かを威嚇するように吼える。

辺りに他の魔物はいなくなっていて、その巨大猿が暴れたせいで逃げ出したのかも知れない。しかしさつき巨大猿を発見した時には他の魔物を無作為に襲うような事はしていなかったし、他の魔物もそれを恐れているような動きは見られなかった。

だから突然あの巨大猿が暴れたのか、俺には分からない。何かしらのきっかけがあつてあんなのだらうとは予想はつくものの、原因を明確に推測することすら難しいほど情報が少ない。

それでも何かしら分かるかもしれない、とその光景を遠目ながらも目に焼き付けておこうと注目した瞬間、不意を突いて耳に別の音が聞こえる。きゅー、と鳴く声。

それは肩に乗ったスノウが発した声だった。何かとそちらへ顔を向けようと思ったのも束の間、スノウは俺の肩から飛び立ち、山道の先へと鳴きながら飛んでいく。

まだ遠くの猿は暴れていてそちらを見ていたい気持ちがあつたのだが、スノウを無視する事も出来ず、一瞬の葛藤を経て、小走りですノウを追った。

そしてようやくスノウに追いついたと思えば、スノウは再び俺の肩へと止まり、先を促すように鳴く。なんだろうとその先へと進むと、そこには洞穴があつた。

地理的にも、その大きさと整えられたような形も、明らかに自然物ではなく人工のものだ。そしてその奥から微かに鳴き声が聞こえる。スノウのものと似てはいるがどこか違う、そんな声だ。

「……ビンゴ、か」

洞穴を覗くがその奥には明かりは一切なく、ただ吸い込まれそうな闇が待ち構えている。その奥で助けでも求めるかのように聞こえる声に、俺は決断を強いられる。

このまま進んで何かがあるのか、何をしているのか確かめるか、それともここで引き返し別の作戦を考えるか。

その二択を考えるが、万が一洞穴の中にカサセさんがいるとすれば、それは鉢合わせする事になってしまい、言い訳の余地もなく俺は敵意を向けられてしまうだろう。それにこの地形ではすぐに逃げ事も難しいし、真つ逆さまに落ちればひとたまりもない高さだ。逆に一端離れて様子を見るにしても、ここは身を隠す場所もない山の中腹で、道は一本道。下から観察しようにも、螺旋状に削り取られ伸びるこの場所は、下からは観察しにくい立地となっていてどうしようもない。

となれば一か八かに賭けて進むか、素直に帰るか。

しかしそんな考えを選ぶ暇もなく、足音が聞こえる。その足音は確実に下のほうから聞こえて、慌てて身を伏せ、ゆつくりと下のほうを探ると、そこに道を登ってくる人影があった。それは月明かりに照らされてはつきりと見て取れる。間違いなくあの竜商いであるカサセさんそのもの。

まずい、このままだと見つかる……。

逃げ道はない。一本道で、少しでも音を立てれば相手にも聞こえてしまうだろう。

どうする……？ どうする……？

頭を働かせ考える。この状況で身を隠す方法。

まだカサセさんは二段下の道を歩いていたので、少しぐらいは時間がある。それでも確実に迫っていることは確かだ。こうしている間にもどんどん追い詰められている。

素直に事情を話してみるか……？ でもそれはリスクが高い。

カサセさんが何かしら企んでいて、その鍵にもなる場所がここだとしたら、もちろん知ってしまった俺を消そうとする。

だから俺が今するべきは、まず姿を見られず、気配を悟られず、それでいて様子を窺える場所へと移動する事。最悪様子は窺えなくとも身は隠さなきゃならない。

そしてその場所は、道に戻るでもなく、洞穴の中へ入るでもなく、先へ進む事。

足音を立てないように、気取られないように細心の注意を払いながら、洞穴の入り口を通り過ぎて先へ進む。そして少し進んで丁度洞穴の入り口の真上の位置でしゃがみ込み、音だけで様子を探る。足音が少しづつ大きくなり、近付いてくる。それと同時に緊張が走り、心臓が脈打つ。

足音はゆっくりとその位置を変えて、そして止まる。丁度真下の位置、洞穴の入り口に。

「……………」

そして。

「これはお久しぶり。竜も元気そうで何よりだ」

声に振り向く。

俺の真後ろには下にいるはずのカサセさんが、笑顔を浮かべそこに立っていた。

前後の実像

動く事すら許されないような緊張感と、恐怖が身を包んでいた。下手に動けば何をされるか分かったものではない。それをスノウも分かってくれているから動かず、それでいて警戒心を一気に最大まで強めている。

それでも目の前で何かを構えるでもなく、腕を組んで立っているカサセさんは、笑っている。そしてなだめるかのような、子供にでも尋ねるかのように優しい口調で俺に話しかけてくる。

「……………どうして、ここにいるのかな」

答えるかどうか迷ってしまう。

状況を考えるならば、どう答えようと危険が及ぶだろうから、スノウは飛んで応援を頼み、俺はどうかして逃げなければならぬ、が……この地形で、一分分すら離れているかどうか怪しい位置にいるカサセさんから、無傷で左右に伸びる道へ逃れられるとは到底思えない。

そうなれば最終的に逃げ道は限られ、数メートルは下の道めがけて落下を試みる、という手段ぐらいしか残されていなかった。俺に羽根でもあれば空を飛べるのに、なんて現実逃避も、一向に答えない俺に苛立ったのか、カサセさんの言葉で遮られる。

「安心してくれ。素直に言ってくれれば何もしないよ」

明らかに嘘だ。というか悪役の常套句とも言っていない。

それでも俺はそれに答える。同じような虚言ではなく、真実をそのまま。

「……調査です」

「調査。それは誰かに言われてかい？」

僅かの表情の動きすら見逃さないように目を張り、綱渡りのような会話を交わす。

俺が調査と言った瞬間に僅かに眉が動いたのは、多分何か心当たりがあるからなのだろう。何も心当たりがない人がそんな事を言われてそんな反応をするという事はほとんどない。

それに最初出会った時に、何度か疑問を投げ掛けた時がそんな動作はしなかった。そしてあの時は明らかに嫌悪の表情を表に出していたし、心情が表情出やすい性格なのか、俺のような奴には取り繕う事すら必要ないということなのか、どちらにしろこのカサセは顔である程度は心の動きが分かる人間ということだった。

「いえ……自分の意思です」

「……どうしてそんな事をしようと思ったのか、聞かせてもらえるかい？」

これじゃあまるで尋問だ。と心の中で思いながら、機を窺う。もし相手が先に動けばこちらも動かざる終えない。どんな力があるか分からないが、なんにせよ相手に掴まれる事は俺の不利にしかならない。最悪突き落とされるといふパターンもあるだろう。

慎重に言葉を選んで、誘導しつつ、警戒は解かないで相対する。

ここからが肝心な所だ。

「このスノウを俺があなたから買った時のこと、覚えてますか」

「……ああ。それがなにか」

「あの時傷付いたスノウはあなたがやったんじゃないかと疑っていました」

「……それは、分かっていた。それだけで、わざわざここまで？」

「はい。……………そろそろ自分を隠してモノを言うのはやめたらどうでしょう?」

もう少し。

足に力を込めてすぐに後ろへ下がれるようにしておく。勢いよく飛び出せばただの自殺にしかならないので、岩肌に手をつけて急斜面を滑り落ちるように行くしかない。

冷や汗が伝う。

「何の事が分からんね。昏間に言った通り、何もしていない」

「……実は、……私はあなたに嘘をつきました。ここまで来たんですから腹の中のもの全て出しましょう」

「……嘘」

眉がつりあがる。多分頭の中では俺との会話を思い出して何が嘘だったかを考えているところだろう。

「ええ、自分の意思で調査をした、と言ったところです。実は頼まれたんですよ。あなたが怪しいから調べてくれないか、とね」

「それは誰から?」

表情が変わった。誤魔化すような生ぬるいものではなく、どこか恐怖すら感じさせる怒りが浮かび、目は射抜くように鋭く、細長く伸びる。

「それは言えませんが……そうですね。同業の方、とだけ言っておきましょうか」

「そうか……」

カサセは目を閉じ呟く。次に何をするのか予測もつかないので、

全身にいつでも動けるように命令しておき、体の緊張を少しでもなくそうと、意味があるかは分からないが、ただひたすらに落ち着けと心で呟く。

そもそもこの作戦は前提から危ういものではある。

カサセが違法に手を染めていて、それをひた隠しにしながら活動していることが条件だが、そこらへんは初めから疑っている部分なのであまり揺らぐという事もない。問題はその背景がどういう事になっているかが全く分からない事だ。

だから俺は大雑把にその背景を想像して話を進めた。

悪事を働くもの同士で繋がりがあり、それでいて互いを信用していないながらも利用する間柄。

割とよくある物語に出てくる悪者とかがそんな感じなのでイメージはしやすい。

そして俺は健気に働く下っ端で、より良い雇い主を見つけたので手土産を持って尻尾を振っているという、ロールプレイ ようは、なりきりだ。

「正直……、お前如きがそんな事を頼まれるような奴だとは思えないし、この状況でべらべらと語り始める以上何か腹があるんだろう？ よくもまあ”腹の中のもの”は全て出しましょう”なんて言えたものだな」

「それに関しては仕方がなかったんですよ。あなたが全てを見せてからじゃないと私も動けなかったもので」

「……どういうことだ」

少しづつ俺の張った糸に絡まりつつある。ハッタリの糸で作った獲物を絡め取る罠。引っかかって揺れ動くのは相手の心だ。

「単刀直入に言いますと、私を買収しませんか、ということですよ」

情報収集と逃げ道の確保を両立する道が出来上がる。後はそこを通るだけだが、まだまだ障害は多い。

そもそも断られればその場でアウトだし、仮にうまくいっても俺はそんな裏事情を知っている人間ではなく、ただのハッタリで身を隠しているだけなのだからボロなんてのは簡単に出ることだろう。それを悟られる前に逃げる。所詮、逃げるまでの時間稼ぎついでの情報収集だ。

咄嗟の思いつきだが、じっくりと考えられるとやはり酷いぐらいに疎かなので、出来るだけ考える隙を与えないように交渉のフリを続ける。

「……おまえの依頼主の名前を聞いてから答えよう」

「いえ、それは答えられません。名前だけ聞かれて切り捨てられても敵いませんから。私を買い取ってくれるのならば名前は教えいたしましょう」

「……いくらだ」

俺はその質問に口で答えなかった。右手の指で三を示す。

もし口で答えて、相場とは大きく外れた額を提示してしまえばたちまち疑われる。そもそも相場の金額なんて分かる訳がないのだから、全ては反応で察するしかない。

だから指で曖昧に示し、反応次第で額を切り替えるために口では言わないのだ。悪あがきのような小細工に過ぎないが、それでもしないよりはマシだろう。

右手だけなら相場の平均値に、プラス端数という意味にも取れるので、かなり曖昧な現し方でもある。

「三十か……」

かなり怪訝な表情を浮かべ眉を動かす。そのままでは高すぎるの

だろうと察して、すぐに金額を訂正する。流石に三万はないと思うので三十万を上限に細かく調整していく。

「いえ、違いますよ」

「ならその指の通りだとしても言いたいのか」

「まさか。……ここに一本」

そういつて左手の人差し指を右手の手に平に添える。それは四にも取れるし、左手の一本で十万と考えれば細かく数字を動かせる。

あまりやると疑いが深まるだけになってしまつが、そこに言葉を添える事で何回かは調整できる。

「十三、か……」

表情が少しばかり和らぐが、それでもどこか怪訝そうに窺ってくる。

もう少し上か……？

具体的に言ってくれば助かるのだけど、そううまくは相手も動いてくれないのは仕方ない事として諦めるが、もう少しだけ分かりやすい表情をしてくれればいいのと思わなくてもない。少し危険度が増すが揺さぶりを掛けて見るのもいいかも知れない。

俺は口を開く。

「そこに、依頼者の情報を含めます」

そういつて左手を二本に増やす。これで向こうは二十三と思うはずだ。

そこが適正かどうか、まだ分からない。

「……その依頼者の情報とは、名前以外も含めてか」

「もちろん」

「どこまでの範囲だ」

「概ねは」

ここまでのやり取りである程度は相場の額が絞れる。

三十万では高すぎて、十三万は微妙。それに情報を上乗せすると
言って二十三万を示すと、情報の度合いを探ってきた。つまりそれ
はその値段で情報と釣り合うのかを探ろうとした訳で、情報次第で
はその金額でも良いという事になる。

最後に上乗せした金額は、情報料にしては俺の示した金額が高い
ということを物語っていて、それに十三万の時の反応を合わせると
答えがおおよそ十万強だとは検討がつく。

後はそれをそれとなく向こうに示せば、何とかこの場は収めら
れるかも知れない。

「名前だけを望むのなら十七辺りでは如何でしょう」

「そうだな……」

カサセは顎に手を当てて本格的に考えるポーズを取った。

内心喜びその動向を見守る。さっきよりこころなしか気持ちも落
ち着き、それとは別に不思議な高揚感が込み上げていた。

それはこの窮地を切り抜かれるような作戦が成功しそうだからな
のだろう。

「見てる限り機転も利きそうだし、昼間に見せてもらったレイスの
件もあるから戦闘技術もそれなりにはあるのかも知れない。確かに
駒になるならば役には立ちそうだ……」

目を閉じ、腕を組んだまま、流暢にそう語った。

そして目を見開き、笑顔を浮かべる。その笑顔は既視感のあるも

のだった。

……どこで？　それは、さっき……。

「ところで……、この茶番はいつ終わるんだい？」

その言葉に俺の体は強張る。一気に嫌な汗が噴出してきて血の気が引く。

こいつは全て最初から分かっていた。それをうまく騙せたと喜びさえした自分が馬鹿らしい！

スノウが耳元で鳴いた。

「クツ……！！」

その声で俺はようやく冷静を取り戻し、すぐに後ろに弾かれるように、それでいて飛び過ぎないように加減して降りる。落下の際の傷みも今は我慢するしかない。腕ならまだいい。ただ逃げるための足はなんとしても走れる状態でないと困る。

浮遊感に身を任せ、落下した。落ちる間際にカサセが何かしらの妨害をする物だと身構えていたのだが、カサセは相変わらず薄く笑ったまま腕を組んで、追おうという素振りすらしない。それにどこか嫌な予感がして、すぐにそれがわかる。

「そもそも、私がどうして君の後ろにいたのか。考えなかったかい？」

目で確認した時にはもう不可避の距離だった。俺が落ちようとしていた洞穴前の道には人影があり、その人影の右手が何か巨大なものへと変化して俺を押し掴みにする。その握力のせいで体は軋み、急に頭を振られたので意識もどこかへ飛びそうになる。それでも何とか堪え、俺を掴むその人の顔を見る。

「なっ……なん、で……！」

そこにはカサセと全く同じ顔があった。俺は落ちる時にカサセの顔を見ていたし、その間に俺に手が伸びていたはずだから、カサセ自身が一瞬で移動した訳でもない。それにこの俺を拘束する腕はどこかで見たことが……。

腕はぎりぎりと力を増していき、締め付けられるほどに内臓が口から出るんじゃないかと思いさえしてしまう。

もう全てが訳が分からなかった。考えがまるで追いつかない。

そしてそこに嘲笑うような声が飛んでくる。今度こそ間違いなく俺と話していたカサセだった。

「驚いたか？ 本当はこのまま絞め殺して跡形もなく処分する所なんだが……、グリードに言われてるし、とりあえず閉じ込めておく事にする。残り短い余生を過ごすんだな」

それだけ言うとカサセはどこかへ消えていく。住居にあたる部分はまだ上に存在しているのだろうか……。

最後のカサセの捨て台詞が聞こえる。

「ああ、そうそう。基本的に下つ端の相場なんて数万程度だよ。闇で働くものにロクな奴はいない。生きるのもやっとな奴らばかりさ」

それだけいっていなくなる。最初から俺の言葉など子供の戯言としか見ていなかったのだ。

偽カサセの俺を締め付ける力は脱出できるほどではないが緩くなり、そのまま洞穴へと入っていく。

洞穴の中は真っ暗だったが、偽カサセが空いた手で光の球を作り出すと、眩しいぐらいに空間を照らした。

洞穴から入ってすぐの所はそれなりに広い空間が取られていたが、その先は通路と呼べるぐらい狭くなり、左右には何かを閉じ込めておくような、まさに牢獄というのが正しいものが隙間なくあった。ひとつの広さはアパートの一室ほどはありそうだったが、荷物やらが置かれていて実質のところはその半分程度のスペースしかない。

奥へ奥へと進み、やがて声が近くなる。それは洞穴の入り口で聞いたスノウとは違う竜の鳴き声。

光に照らされ姿を現した幼い竜たちは色とりどりで、並ぶ姿は虹のようにも思える多彩さを持っていた。

俺の姿を見てか、偽カサセの姿を見てか、竜たちはその鳴き声を一層強くしたが、偽カサセがその檻に何も言わずに一蹴り入れて、俺もびくついてしまうぐらいの音を鳴らすと、竜達は一斉に鳴くのをやめた。

その竜達の檻の前で立ち止まり、その檻と向かい合う方の檻の扉を開いて、視界がぶれたと思ったときには息が止まるほどの衝撃が背中から体へ伝わる。

体を反射的に丸めてしまい、そんな俺には何も言わずに檻の扉が無慈悲に無機質な音をたてて閉じた。その音で顔を上げるが、そこには壁一面を覆う紫の光の膜があった。それも少しの時間で闇に解けるように消えていく。

光の玉を手の平に浮かべこちらを窺っていた偽カサセの腕は、いつの間にか普通の人間の腕に戻っていた。

そして光とともに、その姿はゆっくりと足音を鳴らして消えていく。

暗がりの中、俺はまず辺りを観察し、考えた。じたばたしても何も始まらないからだ。

多分この空間に蓋をしたあの光の膜は魔法の類のもので、俺如きの知識ではどうしようもなく、周りも魔法のような特殊なものではないものの、単純に俺の独力でどうにかなるような代物ではない。なにせ岩の塊だ。人の手でどうにかできるほうがよっぽどおかしい。

周りを眺めるだけでも、もう俺に打つ手が無いのはわかる。俺は所詮ただの人間で、無力な存在だ。

息を吸い込む。湿っぽくて埃っぽい、咳き込みそうな嫌な空気を肺へと送り、少しでも頭の回転の助けにする。脱出は出来ない。俺に出来る事は考える事。

あいつが、カサセがどんな力を持っているのか、それだけでも分かれば十分な収穫だ。

スノウが今頃町の方へ飛んでいつているだろう。俺が腕に掴まれる直前、すぐに俺に構わずに飛び出してくれていたのはいい判断だった。すこしでも俺に構ってればスノウすら捕まっていた事だろう。とはいえカサセがスノウの存在に気づいてないとは思えないし、あの超人的な偽カサセの力を持つてすれば、シアの元へ辿り着く前に捕まえられてしまいかも知れないが、今の俺にはただ無事を祈ることしか出来ない。

それにカサセはあの時グリードの名前を出した。グリードとステイドの名前は俺が識別アビリティで盗み見たもので、名乗られた訳ではないし、俺がその名前を呼んだ訳でもないの、向こうは俺が名前を知っているとは知らないはず。そしてその名前を呼んでも分からないと思ったのだろうか、あの場面で名前を口にした。だがそれは迂闊だった。

あの三人が何かしらの繋がりとわかるし、その力も俺は身をもって知っている。つまりそれは相手の戦力がどの程度のものなのか、推測できるという事だ。

ここから脱出してもおそらくは無事に逃げると言うことはなく、なにかしら必然的に戦いにはなるだろう。その時に相手の力が分かるのと分からないのでは、随分と有利不利が変わる。

シアにも及ばない力で、拳句捕まってしまうような体たらくでも、出来る限りの事には挑戦しなければどうしようもない。

ここまで俺一人では来れなかった。シアがいたから、色んな人がいたからここまで来れた。まだ短い期間でも数多くの人と出会い、

過ぎました。

死ぬ気なんてない。それは現実で死ぬからなんてものではなく、死んだら悲しんでくれる人が、現実にも妄想にもいてくれるから。

” 捕まってしまったから死ぬしかない ” そんな馬鹿なことは考えられない。どんなに惨めでも、地べた這いずることになったって、生き抜く。自分のために、悲しんでくれる人のために。

些細な情報でも思い出せ。その欠片を繋いで形を思い起こせ。

時間はある。シアなら来てくれる。

それまでに……。

少女の模様

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

机の上に湯気の立つ芳醇な香りの黒っぽい液体の入ったコップが、シアの前に置かれる。シアはそれを持ってきてくれたディアにお礼を言い、それを手にとって口を付けるが、猫舌なのか一口つけるだけでその動きをやめて、飲み物を憎憎しげに見ていた。

その光景をディアは笑っていた。大丈夫？ と声を掛けられて、ただたどしい口調でシアは大丈夫と答える。手に持っていたコップを一端机へ降ろす。

窓から見える外の風景は寂しげなものだった。最低限の道を照らす程度の光しかなく、外を歩く人の数はフィルストに比べ極端に少ない。その数はほとんどいないと言ってもいいほどのものだ。

「心配？」

ディアはシアの向かいの椅子に腰かけ、未だに舌が痛みでもするのか口から舌を少し出したままのシアへ、そんな言葉を投げかける。シアは飲み物へと向けていた視線をディアへずらし、舌を引っ込めると喋りづらそうにしながらもその問いに答えた。

「……はい」

「それはそうよね。好きな人を気にしない女の子なんていないもの」

そう笑顔で言ったディアの言葉にシアは赤く顔を染め俯いてしまふ。その様子を見てディアは一層その笑みを明るいものへと変えた。ヒコネとトツネは奥の工房で今尚作業を続けている。しかしその

作業は昼間の街に流れる金属音をだすような作業ではなく、そのおかげで無人のような静けさだった。

だからいま部屋の中にいるのは、シアとディアの二人だけ。

シアは恥ずかしそうにしながらも、人生の先輩として無事にゴールインを果たしたディアに聞いてみる。別に難しいことではなく、ただパートナーとしてどうあればいいのか、どう接していいのか、そんな他愛のない話が聞きたかったのだ。

シアにとって自分の人生はそんなことが許されるような余裕はなかった。

けど今なら、少しだけ前に進み、隣にいてくれる人がいる今なら、少しはそんな事を気にかけてもいいのかも知れない。そうシアは思っていた。

「それはあなた自身にしか見つけれないものよ」

だからディアにそんな風に返されて驚いていた。そんなシアにディアはさらに言葉を重ねる。優しく諭すように紡いだ言葉に、シアの表情は見てわかるほどに変わっていく。

「言うのは簡単。聞くのも簡単。でもそれをちゃんと解るのはとても難しいこと。まだシアちゃんには早いわ。もっともって悩んで考えて、自分である時に気づいたなら、その時に私の言っている事も理解できるはずよ」

「そう、なんででしょうか」

「ええそうよ。だからもう少し悩んでみなさい」

ディアの言葉にシアは一層頭を悩ませる。しかしそんな事ですぐに答えが出るはずもなく、知恵熱でも出たのかやがて諦めたように天井を見上げる。その様子を見てディアは微笑む。

「悩みなさい悩みなさい。今しか悩む事は出来ないんだから」

その言葉にさらに頭を悩ませることとなるシアだった。

その時、正面入り口であるカウンターの方から何かがぶつかるような音がした。夜になり閉店時間になると正面は封鎖されているのだが、どうやらその壁に何かがぶつかったらしい。

「酔った人かしら……」

ディアは怪訝そうな表情を浮かべ椅子を立ち、通りに面する方の脇の窓から外の様子を窺う。しかしそこから見える光景には人らしき姿はない。

「おかしいわね……。シアちゃんちよつと付いてきてくれる？」

「え、あ、はい」

いくら見知った人たちばかりの街とはいえ、ニケやシア、トリニアといった外からの訪問者も少なくない。万が一何かあれば困るので、そう言った時にはいつもヒコネが付いていたのだが、生憎と今は仕事中である事もあったので、それなりに戦闘技術のあるシアに頼んだのだ。

二人はディアを先頭に裏口から外に出て、路地裏を縫うように歩き正面へと回った。そして店の前に辿り着く。そこには生き物がいた。

出会った時よりもよりひどい傷を体に刻み、無造作に放られたぬいぐるみかのように、白い体表に赤が滲ませる小さな竜が。

「スノウ！」

二人共がその姿を見た時に息を吸い、恐怖のあまりディアがその

口を両手で押さえ、シアはすぐさまその倒れた竜の元へ駆け寄る。

シアが抱き上げるとぐったりとしていながら、僅かに首が持ち上がる。まだ死んではいなかった。その事に僅かに安堵するシアだったが、鳴きすらしめないスノウは危険な状態であることには変わりない。すぐに手当てをしようとシアは立ち上がり、それを見たディアもようやく冷静さを取り戻し、シアと共に急いで家の中へと戻ろうと駆け出した。

その一歩踏み出した瞬間、轟音とともに通りの中心に砂煙が巻き起こる。その衝撃で飛び散った石畳の破片達は近辺の店の壁などに深々と突き刺さり、一瞬で辺りを傷つけた。

その破片はシア達にも及び、爆心地から放射状に撒き散らかされた破片からディアを庇うように、そしてその手に抱えたスノウを庇うように、背中ではシアはその破片の直撃を受けた。その勢いに押され、ディアごと地面へと倒れこむことになったが、ディアやスノウは守られていたおかげで大したダメージはなかった。

「シアちゃん！」

ディアの上に倒れこんでいるシアの背中では服が破れ、こぶしよりも大きな傷が肌に赤い痕を作っていた。それを見たディアはシアを慌てて揺り起こす。

ぐったりと倒れていたシアは気絶していたようで、その意識を取り戻す。目覚めてすぐに状況を思い出し、ディアにスノウを預けスカートに隠した短刀を手に取り、構えた。

まだ砂煙は晴れてはいないが、それでも何かがおぼろげにそこにいるのが分かった。揺らぐ影が砂煙に隠れている。

「シアちゃん逃げましょう！」

ディアは叫ぶ。確かに何かあった時に守ってもらうためにディア

はシアを連れて外へ出た。しかし素人目で見たってあの存在はどうかできるようなものではないとわかる。おそらく空から飛来したであろうそれは、ただ着地しただけで辺りをめちゃくちゃにした。しかもその一撃はとても重く、吹き飛ばされた破片の一発を受けただけでも意識を刈り取られるような一撃なのだ。

範囲も威力も規格外。しかもどう考えたって向こうはまだこちらの存在に気づいておらず、ただ偶然にも攻撃に巻き込まれてしまっただけで、致命的とも言えるような状態まで追い詰められるのだから、普通に考えて逃げるしかなかった。

それでもシアは立ち上がる。短刀を影に向けて構える。

一足遅れてディアもスノウを抱えて立ち上がった。

「ディアさん……逃げてください。私は逃げる訳にはいかないんです」

シアは今がどんな状況なのか、すぐに理解できた。

もともとスノウはニケとともに出かけて、一緒に帰って来なかった時は、それはつまりニケの身に何か起きたという事に他ならない。そしてぐったりと瀕死のスノウ。それに続くように現れた謎の何か。

それだけでシアにとって戦う意味がある。スノウを傷つけたであろう相手への復讐。そしてそんな事をする奴はもちろんニケにも何かしらの関係がある。それも吐き出させる。

シアは怒りに染まっていた。それ以外はただ心配する気持ちだけ。だから引かないし、逃げない。

「……気をつけてね……」

ディアもそれを感じ取ったのか、ただ一言だけを呟いて路地裏へと消えていく。その手にはスノウを抱え。

やっと自分ひとりだけとなったシアはため息をつく。ディアに向けてではなく、自分に向けて。

シアは自分がどれだけ無謀な事をしているのかははっきりと感じ取っていた。敵うはずもないとわかっていた。それでも逃げれるとも思っただけはなかったのだ。

謎の相手がスノウを追ってきたのなら、それを連れて逃げれば追われるのは必然。だからといってスノウを見捨てられるような薄情にもなれず、誰かしら時間稼ぎでもしなければいけない。

ならその場で一番適任なのはシアだけだ。謎の相手と事を構えるのに十分な理由をもっているのはシアしかいない。

砂煙はやがて薄れていき、かすかに残った宙へ浮いた砂も一陣の風にさらわれて完全に姿を消す。クレーターのようになへこんだ地面から上ってきたのは人だった。

両手両足に動作の全てを取っても人間。だがその顔には表情が窺えない。それもそのはず、その顔には仮面のようなものが取りついていたのである。土を固めて作ったようなそれは一切の表情、視線すら通さないであろうのっぺりとしたものだったが、その姿を観察していたシアと視線がぶつかる。

見えていないのだから視線なんてあるはずはないのに、それでも確かにその突然現れた土仮面の人間から視線が放たれてシアを捉えた。シアも敵として身構えていたのでその土仮面の男を凝視していた。

その瞬間、土仮面の男が地面を力強く蹴った。その速度はそれなりに速いものの、魔法強化したグリードほどのものではなく、シアでも十分に避ける事の出来る速度だった。その右手が振り上げられてシアへと迫る。シアはそれをしっかりと目で捉えて横に跳ぶ。

振り下ろされる直前に土仮面の男はその腕を異形の物へと変化させた。シアを丸ごと飲み込むような大きさの腕。月明かりすら吸収してしまいそうな黒に近いこげ茶色の毛で覆われたその腕が、地面に触れた瞬間、地面に大きな穴が開く。通りの真ん中に出来たクレ

ーターほどではないが、それでもそれが一撃でシアを砕いてしまうような破壊力を秘めている事は明白だった。

シアはそれに戦慄すら覚える。少ないながらも魔物とはある程度戦ったが、それでもあれほどの威力のある攻撃ははじめて見たのだ。魔物だけではなく、熟練の冒険者ですらあの威力の攻撃は出来ないだろう。だというのに土仮面の男は人の姿でありながら魔物のような腕を振り回し、それでいてその両方とも及びつかない力を持っている。

二撃目がすぐに繰り出された。シアの着地後の隙を狙うように胴体辺りをなぎ払う広範囲でありながら、無造作な攻撃。それでも触れるだけで空中を地面と平行に飛んで建物の壁に叩きつけられるような威力を持っている。

シアはそれを上に跳んで避ける。見事なまでの後ろ宙返りで空を舞うシアは、着地と同時に土仮面の男へと突っ込んだ。それが無謀だとはシアは思っていない。

一撃、二撃と避けて、その速さがそれほどもなく、自分でも十分に避けられる速度である事に気が付いたから。もちろん当たれば即致命傷というものはあるが、なんとかなるかも知れない。そんな気持ちでシアを動かしていた。

真っ直ぐに突撃するシアを迎撃しようと土仮面の男は振り回した右手を引き戻そうとしたが、勢いが死んでいたわけではなく、それを反転させようとすれば一度動きを止めてから反対へと動かさなければならぬ。ただの人間の腕であればそれも隙なく容易に出来ただろうが、その振るった腕は人よりも大きいものだ。だから腕の振りを反転させる少しの間に隙が生まれる。そこを狙ってシアは突っ込んだのだ。

しかし真正面からいくら隙があるとはいえ、何が隠されているのかもわからない相手なので、最大限相手の動きを観察しながら短刀を構える。狙うのは四肢のいずれか。

シアは命までは取ろうと思っていなかった。いや奪えないといっ

た方が正しい。人を殺すのが怖い。それはいつかの二ヶが無意識下で行っていたもの。しかしシアはそれを意識的にしている。

二ヶは元はといえば平凡な現実世界で、テレビやニュースから情報として受け取る以外は、何一つそういった事件に巻き込まれた事のない普通の人だ。だから殺す殺されるなんてのはもちろん日常の外で、自分とは関係ないものと思っていた。そしてそんな環境に二十年近くも浸かっていれば、人に刃物を向けるだけですら戸惑ったとしても不思議ではない。

それに比べてシアは昔から魔物が蔓延るこの世界で生きてきて、無用心に外を出歩けば魔物に食われてしまうような、そんな生活を送ってきた。死が身近にあつて、常に殺した殺されたというのが身近にあつた。だからそれが意識から離れる事はないが、同時にその怖さを知っているからこそ殺す事もできなかつた。

しかしいまはやらなければ死んでしまう場面だ。だから自分に最大譲歩してその四肢を切つて、行動不能に追い込むことにした。それが正しいかどうかはシア自身も分かっていないが、それしかどうにかする手段はないとそう思っていた。

あと数歩という距離まで肉薄したシアに、土仮面の男は巨大な右手が間に合わないと判断したのか、今度はその左手が動く。

捻れるように変化したその腕はどうなっているのか。肘から先は鋭利な刀身となつて、通常の手の長さよりも長く伸びた剣がシアへと振り下ろされる。斜めに振り下ろされた刃をシアはかろうじて見切る。その変化に驚かなかつたわけではなかつたが、止まる訳にもいかずに、土仮面の男の頭の上を弧を描くように飛ぶと、がら空きの背面を取る。

間髪いれずに右手に握つた短刀に最大限の力を込めて、口からは呪文が唱えられる。炎を纏わせる魔法の呪文を。

闇夜を切り裂くように暖かな光がシアを中心に土仮面の男を照らす。さながらそれはスポットライトで照らされるダンサーだったが、二人が踊っていたのは生と死の境界の狭間だつた。

夜空へ向けて火の柱が上る。下から切り上げたシアの短刀が描く炎の軌跡。

確かに土仮面の男の右肩に食い込んだそれは、傷口に炎を残してそこから全てを燃やし尽くすべく体を這うようにその威力を増す。一瞬の爆発のように炎が広がると、瞬く間にその炎は姿を消した。

「えっ……」

シアは驚き、今度こそ動きを止めてしまった。

炎が消えたこともそうだったが、なによりその傷が生き物のように動き、を完全に塞がってしまったからだ。

土仮面の男は動かなかったが、その背中表面だけが蠢く。それを見たシアはようやく体を動かすがその時にはもう間に合わなかった。

男の背中から棘が飛び出す。巨大で人を何人かは突き刺せそうな鋭い棘。直撃はしなかったものの、何本もその背中から生えた棘はシアの四肢を削るように傷つける。

反射的に後ろに跳んだシアはそのまま棘の勢いにも押され、壁へと激突した。地面に座り込むように倒れたシアは動かない。腕や足を挟られて体のあちこちから血が流れ出している。意識ははつきりしているようだったが、その体は動かない。動かそうと試みているのか、体は震えるように小刻みに動いて、やがて力尽きたような垂れ下がる。

シアの目の間にはもう人とは思えない異形がいた。せいぜい両足と頭が人間っぽいというだけになった土仮面の男は、ゆっくりと振り返りシアを見下す。

シアはその姿を、諦めと悲しみと怒りと……とにかくあらゆる感情の混ざった目で見ていた。もう何かもが風前の灯で、それでも諦めたくない気持ちでシアを突き動かすが、体は言う事を聞かない。

土仮面の男は、傷つけて本来は動かなくなるはずの巨大な右手を

振りかざす。それを叩きつけられればシアは跡形も残らない。せいぜい残るのはシアだった肉塊と赤い血ぐらいなものだ。

「…………ごめん、ね…………」

こんな事に巻き込んでしまつて。それは二ヶに向けた言葉。いま大変な思いをしているであろう二ヶに、事の発端となつた自分のわがまを謝る。もしくはもう命を落としているのならば、死んだ後に謝ろう、そんな事をシアは考えて目を閉じて俯いた。

そして、狙いを十分に定められた土仮面の男はその右腕を、力なく全てを受け入れたシアに向けて振り下ろした。

絶望の牢獄

シアが吹き飛ばされて、その際に炎を纏った短刀は空中に放られた。地面にぶつかり甲高い音を立てると、その炎は消えて転がった。

だから明かりは消えて暗転したなら、舞台はもう幕引きだった。

振り上げられた巨大な土仮面の男の腕によって月明かりは遮られ、シアは辺りよりも一層深い闇の中に溶ける。

風を切る音がした。振り下ろされた腕は音を立てて地面と壁を一切の容赦なく抉る。そして辺りには飛び散るものがあった。

土仮面の男はゆっくりとその叩きつけた腕を持ち上げて、後ろを振り返る。

月明かりに照らされてそこに立っていたのは、少しばかり歳のいった男。およそ三十から四十ぐらいの男は、激しい物音に誘い導かれるように出てきてしまい、そして遭遇してしまったのだ。

土仮面の男はその男を新たな標的に定める。両手が凶器と化した土仮面の男はそれを容赦なく振るう。しかし新たに現れた男にそれは一切が当たらず、全て完璧に避けきられる。しかし男はなにか反撃をする訳でもなく、ただ避けて避けて、ひたすらに避けて、やがて一気に距離を離す。後ろに大きくふわりと浮いたように跳んで、着地する頃には通りに人が溢れ出るように家々から出てきて、その男と土仮面の男との間を埋めてしまう。

遙か後方へ退避した男は、家から飛び出してきた、これまた少しばかり歳のいった女性にその手に抱えたものを引き渡す。

傷だらけで意識を失った少女を。

少女を女性はしっかりと抱きとめる。すぐに家の中から若い女性が出てきて、協力してシアの体を家に運んでいく。

それを確認してから初老の男は再び大きく跳ぶ。今度は前へ、高く。

その足には月明かりに誇らしげに輝く、鎧の足具のようなものが

あった。表面には奇怪な文字が刻まれ、月明かりとは違う光を放っている。空を舞う男はその足にしか装備をしていなく、えらく不恰好だったが、そんなのを気にする人間はこの場所にはいなかった。通りを埋める人々は、ほとんどがどこか体の一部に金属製の鎧のようなものを装着していた。どれもがその表面に文字を刻み、輝く。空中を十分に堪能した男は、そのままさつきまで対峙していた土仮面の男目掛けて、直接落下の勢いをつけた蹴りを放つ。

「どうりゃあああああああ！！！」

威勢のいい声とともにほぼ垂直に落下攻撃を放つ男を、土仮面の男はその仮面でしっかりと捉えて、右腕で受け止めようと手の平を広げ待ち構えた。

そして勢いの付いた強烈な蹴りと、その人間離れした臂力を持つ腕はぶつかりあう。

土仮面の男は立っていた石畳を割って少しばかり後退する。しかしそれだけだった。それだけで土仮面の男は強烈な勢いの蹴りの威力の全てを受け止めた。

手の平には威力を受け止められて固まる男の足が。それを土仮面の男は見逃すはずもなく、手を握りその足を、男を捕らえる。

「うお！」

その事態が予想外だったのか、男は戸惑いの声とともに振り払おうとするが、その力には微塵も抗えず無意味だった。

だがそれも少しの間。しっかりと男を掴んで離さない土仮面の男目掛けて、また別の男が駆けていく。

しっかりとした体つきに、中性的な顔もいまは険しく凜々しい。その両手には金属製のグローブのようなものがはめられていて、それを走りながら構える。力強く握られた右拳を体ごと引き捻り、捻

ったゴムが元に戻るような勢いをつけて、弾かれるように放たれたその拳を、男を捕らえている土仮面の右腕に放つ。

しかしそれを一瞥し、土仮面の男は左手の肘から伸びる鋭利な刀身を、鬱陶しい八工でも払うかのように振るう。もうすでに拳を放った体勢のヒコネにそれを防ぐ手段はなかった。それでもヒコネは自分が殴るべき対象だけをその瞳に捉えて、迫り来る必殺の刃には目もくれない。その刃が無防備なヒコネの体を真つ二つに切り裂こうとした瞬間、火花を散らして何かに弾かれる。

思いもしないその現象に、土仮面の男は戸惑いこそ浮かべないものの動きが止まる。左手の刃は弾かれて体勢も崩す。そしてヒコネの右手の拳が、土仮面の男の巨大な右腕を綺麗に円形に消し飛ばした。

肩の辺りからごっそりと消えた腕のことすら何も思わないのか、土仮面の男は衝撃で数歩後ずさった後もその場で踏みとどまり、腕をだらりと下げた棒立ち状態になる。

巨大な腕は跡形もなく消えその名残である指先に絡まっていた男も、這い出て立ち上がり、土仮面の男と向き合う。

「助かったぜ。ヒコネ」

「気にしないでください。ただもう少し気をつけてくださいね」

「応!」

ヒコネはその両拳を胸の前でぶつけて気合を入れる。さっきまで捕まっていた初老の男は足先を何度か地面へとぶつけその調子を確かめる。そしてヒコネの後ろに立つまだ若い男はその左手の手甲を撫でる。その若い男は先程のヒコネに襲い掛かる凶刃を弾き飛ばした張本人だった。

突然街に現れた襲撃者と一合まみえた三人を先頭に、その後ろには十数人が各々自慢の魔紋武器を構えて待ち受ける。

1対三十。その状況は土仮面の男にとってはとても不利だった。

人を超越したような力を持つ土仮面の男に匹敵するような、魔紋武器の力と圧倒的に上回る数。それにそのコンビネーションも決して悪いものではない。さらにその右腕ももう消し飛ばしてしまい、片腕もなくした状態。

「行くぞ！」

先頭のヒコネの号令に従い、人数に対して決して広くはない通りを、たくさんの人達が一点を目指して走る。中には空を跳んで、空中までも戦場にする者もいる。

町の人々は戦闘というものには慣れていない。今回も体力自慢の男ばかりが家の外へ飛び出し、自分達で鍛え上げた武器を持ち出して挑んでいた。

そもそもこうして町の人々が怪我をすくかもしれない戦いに挑むのは、全てがグリードと戦闘を繰り返した二ヶ、その際に怪我を負ったシアへの贖罪。無色の冒険証を持つ冒険者に下手な事をすれば何が起きるか、何を言われるかは分からない。正しく言うなら悪いことは起きるが、どんな悪い事が起きるのかわからない、といった状態だった。

だからグリードの横暴の際に手を出せずに、無力だった街の人々はそれを悔やんでいた。

でもそれを後悔したからこそ、いまこの場にこの人数が集まった。相手はもう冒険者ではなくて、ただの闖入者だ。だから何も憂う事なく、全員が存分に結託して脅威に立ち向かえる。

町の人々はシア達の現在の事情を知っている訳ではなく、事前に相談があった訳でもない。土仮面の男が通りに墜落し、クレーターとともに発した轟音で異常に気づき、家の中からその様子を窺った。そして見た光景からすぐに助ける用意をした。

多少の遅れはあったが、それでもなんとかシアの命だけは助けられた事で、全員の目的はただ敵と定めたものを倒すことだけとなる。

猛然と突っ込む者、それをカバーする者。相手の裏を取りかく乱する者。何も言わなくとも自然と連携が取れていた。必要な役目に必要な人数だけ集まり、的確に混乱することなく四方八方から襲い掛かる。そしてそんな街の人々の放った勇気の刃は、一切が土仮面の男へと吸い込まれていき、その身に届く前に、全て弾き飛ばされた。

刃を向けた者、サポートしようと息巻いて顛末を見守っていた者。そこにいた全員が驚き固まる。

そこに土仮面の男の姿はなかった。あるのは六角の巨大な筒。地面からせりあがった強固な土の壁が、土仮面の男を取り囲むように現れた。その壁は土である事は色合いから分かるものの、尋常じゃない強度で数ある攻撃を全て防ぎきった。

しかしそれでも少しの沈黙の後に、ヒコネは叫んで前衛の全てを下がらせる。そこに入れ替わるように現れたのは第一陣に参加しなかった、後方で見守っていた人達。

全員が一齐に各々の構えを取って、その六角の土倉に籠城した男に向けて照準を定める。そしてそれぞれが放つ光が合わさり、夜を消すような光が空間に満ちる。全員が同じ色ではなく、わざとばらばらにしたかのような不揃いぶりの光の列は、やがてそれぞれの属性の塊へと変わり、炎に水、電気など魔紋魔法で出す事の出来る魔法が全て揃っていると言っているほどの多彩な魔法が、一点に注がれて驚異的な破壊力を生み出すと、その一点だけに留まらない規模で破壊が起きた。

通りの幅の限界の大きさを爆発が起こり、さらに魔法の余波が辺りを傷つけながら炸裂する。石畳を風が抉り、落雷のような電撃が地面を焦がし、炎は燃え上がり光を生んだ。水は雨のように上空から降り注ぐ。辺りの家も無傷という訳でもなかった。それでも気にするようないない。

もともとこの街は鍛冶と魔紋の製造に特化しているために、その特殊性から家にもまた魔紋が刻まれている。それは魔法をシャット

アウトする類のもので、ある程度の威力ではものともしない。本来は魔紋を刻む際の事故で、内側から外側に被害が出てしまうのを防ぐものだったが、副作用的なもので外からも遮断する。

しかしあくまで魔法自体を遮断するだけなので、土仮面の男が飛来時に撒き散らした石片などには完全に無力だ。

雨風によつて払われた土煙の中には、変わらずに六角の土がそびえていた。街の人たちはどよめくが、やがてはつきりと姿を現すようになる、僅かな歓声が上がる。

土の城はその端々を削られて無残な姿となっていた。確かに魔法は効果があった。その結果を目で見ると、魔法をぶつけた意味があったと喜ぶ街の人々だったが、その次の瞬間、土の壁にひびが走ると一瞬で全員が黙り込む。中にいるはずの男を注視するようにひたすらに視線を向けた。

それを嘲笑うかのように、未だ姿を見せようとしない土仮面の男が籠もる六角の土壁の足元から、石畳を割りながら地面が盛り上がる。その予兆だけで全員が警戒を高める。

土がそのまま盛り上がってやがて球体を形作る。ウィングラスのような土台の上に球体がのった、そんな不気味なオブジェが三つ並んでいた。土の六角柱と対抗する街の人々との間に立ち塞がるように不気味に沈黙を決め込んでいた。

緊張が走る。誰かではなく全員に等しく。未知なるものに対する恐怖があった。

それを感じ取ったかのように三つのオブジェが生き物のように蠢き、だんだんとその形を作っていく。

一つは大きな翼を生やし、鷹のような鋭いくちばしに、それ以上に鋭く伸びた目は、どよめく町の人々を獲物を見る目で捉える。土から生まれたとは思えない軽やかさでその翼を動かすと、誰もが目を覆う砂嵐が巻き起こる。

もう一つは、地を軽々と叩き割る力を持った四肢をしっかりとつけ、獠猛な目をぎらつかせ唸る。その姿は獅子だった。口に収まり

きららない牙が月明かりを受けて荘厳なまでに存在を誇張する。頭上に向け猛るように吼えりと、辺りの地面には亀裂が走り、家々のガラスは粉々に砕け散る。その音は全て咆哮に飲まれ聞こえない。

最後の一つは巨大な蛇だった。見る見るうちに見上げるような高さまでその頭を持ち上げ、見下したようにたじろぐ街の住人を眺める。舌を何度か伸ばしては引つ込め、威嚇のような声を発する。それすら体にびりびりと伝わるほどに空气中を揺るがす。

現れた三体の土の魔物は、形作ると同時にその表面を本物のように変化させ、土の怪鳥は今にも浮かび上がりそうなほどふわりとした羽毛に包まれ、土の獅子はその体表を黄金色の毛並みに染め、牙も爪も欠ける事すらないだろうと思わせる漆黒。土の大蛇は変化した鱗をすり合わせ、奇怪で不快な音を絶え間なく流し続ける。

そしてその三体が揃い、全てが整ったとばかりに三体の後ろで隠れ潜んでいた土仮面の男は、自身の周りの壁を全て取り払い、改めてその姿を現す。

その姿は人外の三体の存在を生み出したとは思えないほど当たり前の人間の形をしていて、ヒコネに吹き飛ばされたはずの腕も完璧に元に戻っていた。

その時だけ、僅かな静寂が流れた。

だが、それはただの猶予だった。

一人が叫び逃げ出す。その声は静かすぎた故に全員に伝わり、やがて恐怖を堪えていたものたちに伝染し、後はもう総崩れだった。

しかし十人にも満たない数だが、一部の人はそれすら乗り越えて武器を構え立ち塞がった。

普通ならば逃げ出すような恐怖と怯えに支配される。それでも残った人達は、全員が同じ考えを持っていた。

もうここまでくればシア達への贖罪だとか、後悔を晴らすためなんていうのは体裁のいい言い訳に成り下がる。このままいけば街が壊される。何十年と過ごした街が、生まれ育った大切な街が壊されてしまう。それを守るのは自分達だと、だからここで引く訳にはい

かないと、震える足ながらも背中を向けることはしなかった。

だがそんな覚悟と決意が力になるかと言われれば、現実はそのような優しいものではない。魔紋武器は確かに強力なものだ。王様にも気に入られるほどの一品を携えたヒコネもいる。しかしそれはあくまで”冒険者が普通の魔物を狩る道具”であり、本来製造側の人間が武器を満足に扱えるわけでもないし、また対峙するのも普通の魔物なんてものではない。

だからたとえ決死の覚悟で、捨て身で挑んだところで、結果はもう見えていた。それでも逃げ出して死ぬぐらいなら、せめて一矢報いて死んだほうがまだ誇れると、そう全員が密かに考えていた。生き残った誰かに誇れるだとか、後に訪れる誰かに誇れるだとか、そんなくだらない事ではない。自分に、街に、誇れるようにそこにいたのだ。

やがて逃げ出した人々が少しづつ戻ってくる。今にも崩れそうな決意を秘めた目をする者に、新たに魔紋武具を持ち出してきた者。中にはその頬に真っ赤な痕を付けた者もいる。おそらくは逃げ帰ったところを自分の母か伴侶に叩かれたのだろう。涙目で武器を抱えている。

再び通りに集まった人間は最初の二倍にも及ぶ。シア達のことをそもそも知らない人達や、遠くて気づかなかった人達も、ようやく事態を嗅ぎつけてそれぞれが準備を整えやってきたのだ。

膨らんだ戦力を見ても土仮面の男は身じろぎ一つしないで、ただそこに立っていた。

やがて、三体の恐るべき魔物は動き出した。

怪鳥は空高く飛び上空から砂の槍を放ち、獅子は猛然と人の群れへ牙をむき出し突っ込む。大蛇はその口を大きく開け、いかにもといった紫の液体を飛ばす。

上空からは毒と砂の槍の雨、眼前からは見たこともないような巨大な獅子。そんな巨大な殺戮の檻の中に閉じ込められた誰もが、もう駄目だと思った。力が違いすぎる。

獅子を殴った所で逆に吹き飛ばされ、遠隔制御の盾もせいぜい砂の槍を一本防ぐのがやっと。総勢数百本にも及ぶ槍を防げる道理はなかった。空を飛べたって、そもそも逃げ場が存在しないのだ。誰も逃げ出すことすら諦める絶望。だというのにそこに敢えて飛び込む一つの影があった。青い影が。

戸惑い、絶望する人達の集団の先頭、つまりヒコネの隣にその人物は降り立つ。

「アンタ……！」

ヒコネの言葉にすら反応せずに、すぐさま青の影、トリニアは腰の細剣を頭上に掲げ、叫ぶ。

「アクアブリーズン
水壁牢！」

掲げた剣は光を放ち、まるで夜空に光る月のような存在感を示すと、辺りの空間が歪む。それはまるで水中を覗き見るようで、家々も道も、迫り来る三体の魔物の姿すら、ある一定の境から歪んで見える。

それは人々を包み込む巨大な檻だった。

人々の錯綜

ただ息を切らしながらもその足を止めることもなく、トツネは鮮やかな装飾の施された儀礼用の短刀を一本その手に持ち走っていた。短刀の総本数は五本。残りは手に持つその一本だけで、それを設置すればトツネが出来る事は全て終わりだった。見慣れた街中を駆けずり回り、短刀を一定の間隔を置いて満遍なく街に配置する。それは全て、トリニアの指示だ。

作業に集中していたトツネとヒコネは、突然の響くような轟音に気づき作業場を出た。窓から見る光景には、シアが武器を持ち謎の男と戦っている姿が映る。すぐにヒコネは武器を探す。トツネもまた戦おうと武器を探し出したところで、それをヒコネに止められる。

「なんでさ！ 私も行く」

「駄目だ。お前はここにいるんだ」

「どうして!!」

トツネにとってシアは友達だった。たとえ出会ってから何日かしか経っていなくとも、大事な友達だった。

その戦い傷付く姿を黙って見ている事なんて出来ない。すぐにでも加勢に行きたい。ましてそこに父親が加勢すると言っているのに、それよりもシアに近い自分が何故言っただけは駄目なのか。その答えがトツネには理解出来ず、友達を助けたい気持ちと父親の言葉とがせめぎあつて胸を締め付けていた。

真剣な目つきで武器を吟味するヒコネはそんなトツネの気持ちも分からない訳ではなかった。それどころか一緒に行こうとさえ言いたかった。でもそれは我が子を危険な場所へ導く行為なのだ。だからそれを父親として、トツネに言えるはずはなかった。

親は子供を守る義務はない。見守り、時に手助けはするだろう。しかしそれがいつまでも続けば子供は親に甘え、墮落する。もはや一人では生きていけないほどに。

だから子供は、育てばやがて養われる立場から少しづつ養う立場へと変わっていく。その過程で親がもう子供を見なくても安心出来るような時が来る。しかしそれはトツネにはまだ来ていない。

まだ全てを手放して任せるには程遠く、すべてにおいて未熟だった。だからいまこの時だけは、ヒコネは親としてトツネを守る。

「今だけは、わかってくれ……！」

ヒコネはその表情を歪ませる。その表情を見たトツネはそれ以上は何も言えずに、込み上げてきた言葉全てを飲み込んで黙り込むしかなかった。

ヒコネが武器を漁る音だけが静かに響く。そしてその後にはシアが戦いを繰り広げているのを思い出させる大きな音。次いで裏口が勢いよく開かれ、音を立てる。トツネとヒコネはその首を急がしく回して、裏口に目をやった。

そこにいるのは息を荒げたディアの姿。その手には傷だらけのスノウが大事に抱えられている。

「トツネ手伝ってー！」

ディアはそう言うと早足に歩み、机の上にそつとスノウを横たえる。そこにトツネも駆け寄り治療の手伝いをする。包帯等をディアに頼まれてトツネは家の中を駆ける。一気に慌しさと緊張が空間に満ちる。

その中をゆつたりと、両の手に金属の塊を装着したヒコネが真剣な顔つきで歩き、裏口へと向かっていく。トツネは救急箱を探しに言ってその姿は見えず、ディアは自身の後ろを歩いていくヒコネに

顔をすら向けずにスノウを見ていた。

「行ってくる」

「行つてらっしゃい」

ただその言葉だけを交わし、ヒコネは裏口を出て扉を閉める。バタンと扉を閉める音が鳴り、一瞬の静寂のあとにトツネが救急箱を持ってくる。

そこでトツネはヒコネの姿がない事に気づく。手に持った救急箱を机に置くと、それをディアは手早く手繰りあけて、スノウに処置を施していく。

そんなディアにトツネは呟くように投げ掛ける。

「……行つちやつたんだ」

ディアは何も言わない。しかしそれは答えているに等しい沈黙だった。トツネはヒコネと同じ様にディアの後ろを横切り、歩く。

「待ちなさい」

ディアの言葉にトツネは足を止める。何も言わずにその言葉の続きを待つ。

「父さんがどうしてあなたを連れて行かなかったのか、分かるわね」

ディアは手を止めずに、厳しい口調で言った。その顔は子供を叱る親の顔。

「分かるよ」

時間が止まる。刹那の沈黙の間に二人は何を考え、何を理解したのか。

血の繋がりを持ち、長い時間とともに過ごしてきた二人に、多くの言葉は要らない。

だから。

「私も同じ気持ちだから」

再びトツネは歩き出す。それを止める言葉はなく、再び裏口の閉まる音がした。

ヒコネとディアは親として、家族としてトツネを守りたかった。

トツネはヒコネを家族として助けたかった。ただそれだけの話だった。

そして家を出たトツネは走り出す。ヒコネの向かった方向ではなく、それとは全く違う方へと。トツネは自分自身が何の力にもならない事を分かっていた。それでも何か力になりたいと思った。

しかしすぐに付けられるような力はある訳もなく、草原の魔物程度を相手に出来るぐらいの戦闘技術では、ヒコネの元へ行ったところでお荷物にしかならない。だとすれば出来る事は自分より力のある者に手助けを頼む事ぐらいだった。

トツネは、シアがトリニアを連れて来た時にその強さについて話を聞き、宿の場所も何かあった時の連絡用に聞いていたので居場所も分かる。

全力で息を切らし走るトツネは、やがてその宿の近くまで来た時に視界の端に青い人影が見えたのに気づく。トリニアは土仮面の男が起した最初の音に気づき宿の外に出て、音の下方角の空を眺めていたのだ。トツネはなりふり構わずトリニアに向けて叫ぶ。

「トリニアさん！」

その叫びに反応してトリニアがトツネに気付く。

そこから起きた事を全てありのままに話し、トリニアはその話を承諾。そしてトツネに儀礼用の短刀を四本手渡した。その表面には魔紋が刻まれている。

「これを、このように地面に突き刺してください」

そう言ってトリニアは手に持った、トツネに手渡したものと同じ短刀を地面へと軽々と突き刺す。地面はただの剣を弾くほどには固い石畳だというのに、その短刀は何の抵抗もなくすんなりと地面へその刀身を隠し、柄だけが地面に出張っていた。

「これは力がなくとも刺さるので安心してください。出来れば使う機会がなければ一番良いのですが、話を聞く限りそうも行かないようですし、大雑把で良いので大体街を五角で囲むように配置してもらえますか？」

「……はい！」

「では私はすぐに向かいます」

それだけ言うとトリニアはすぐに駆け出す。その後姿に少しの間羨望の眼差しを向けた後に、トツネもまた駆け出した。

「これは……」

自身の力を増幅させる陣の構成をトツネに一任したトリニアは、駆ける勢いを殺してその場に立ち止まる。

目の前には人が大勢いて、鬨の声とともに何かに向かい、武器を構え突撃していた。それと似た光景を、見飽きるほどに目に焼き付

けてきたトリニアでさえ、その光景に感嘆する。

洗練されたような動きではないものの、多人数の戦闘にしては混乱もなく、互いが自分の役割を理解してきつちりとその役をこなす。それだけでも集団で動く場合はとても難しい事だ。

しかしその鬨の声と勢いも束の間。謎の物体が遠目に現れる。それは三つのオブジェ。どこか不気味な雰囲気をかもし出すその物体の出現に、全員の動きが固まる。

トリニアもそれに目を取られ動きが止まっていた。それを解くの若い女性の声。

「無理だつて！ 大人しく休みな！」

近くの民家からその声は聞こえた。誰かに叫ぶような声にトリニアが気づいて首を向けると、それと同時に扉が開く。だが開けた扉からは誰が飛び出してくるわけでもなかった。代わりに地面へと倒れこむように一人の少女が現れる。

それを見たトリニアは慌ててその少女に駆け寄る。なんとか地面に体を打つ前にしっかりと受け止めたトリニアは、一安心を意味する息をひとつだけついた。扉の奥では心配そうな表情を浮かべながらも、見慣れないトリニアに対する驚きもあって、立ち尽くす女性があった。

「私はトリニア。この子の知り合いです」

トリニアはまずその女性を落ち着かせようとそう言った。女性もそれで少しは戸惑いも消したようで、その表情も柔らかいものになる。

「……………トリニア、さん？」

トリニアの手の中でシアがそう呟く。目を閉じればそのまま消えてしまいそうなほどの意識で、なお呟く。

トリニアはシアの手をしっかりと握る。シアが普段なら痛いと思ってしまうほど強い力で握られた手は、意識をしっかりと保てるように、というトリニアの計らいだった。

シアはその痛みと自分の心を頼りに、かろうじて意識を繋ぎとめていた。

「私……行かないと……アイツを、止めないと……。街が……」

シアは弱弱しく声を出し、その体にも力を入れているのだろうか体が持ち上がることにすらない。そしてそれはシアの体を預かっているトリニアが、シア本人よりも確かに分かっていた。

そのまともに動きさえしない体でなおも誰かの心配をする姿に、女性もトリニアも言葉が出ないまま、ただいたたまれない表情を作っていた。

だがいつまでもそうしている訳にも行かず、遠くではオブジェがその姿を変え、禍々しい魔物となって動き出そうとしていた。

「街は私がかします。だからシアさん体を休めて待っててください」

「そう、ですか………すみません………ありがとうございます………」

シアは具体的にいま何が起きているのかは分かっていたいなかった。それでも対峙したあの敵は止めないと大変な事になる。そしてそれを街に引き込んだのは自分に責任があると、そう思っていたからこそ、無理してでもその体を動かそうと必死だった。

それもいまはトリニアがその役目を請け負うと言ってくれたおかげで、安心したような表情で謝罪とお礼を言えた。

だが看病していた女性とトリニアは、シアの発言に再び驚くこと

になる。

「頼みます……私は、ニケさんの、ところに……」

「何を言ってるんですか！ 自分の状態を考えてください！」

トリニアは言葉を荒げた。シアの言葉はあまりにも自分を考えていない言葉だったからだ。街のため、愛する人のため、そこには自分の事など何も無い。シアの行動の理由には相手の事ばかりで、自分がいま動けない状態だということも、休むということも一切がない。

「全部、私が悪いんです……。私のせいで、何かが失われるなんてそんなのって……。納得、できませんよ……。失う事になってしまったものに……。自分に……」

だから例え動かない体でも関係ないと、シアは言う。そんなのは馬鹿げているとトリニア言いたかった。けど、言えなかった。

体に傷を作り、意識さえはつきりしていないのに。現状ですらトリニアに支えてもらってなんとかという状態なのに。

トリニアはその胸の内にあるものを全てシアにぶつけたかった。

シアが大人しく休むと言ってくれらるまで説得さえしたかった。

それでもその全てを飲み込んでしまうほど、シアの瞳には決意があった。そして動かされたのはトリニアの心だった。

ヒールドロップ
「癒水」

シアに水滴が落ちて淡い光が包む。その水滴の一粒はシアのものよりも大きく、また光も強く体全体を包み込んでいる。シアの目が徐々に生氣を取り戻し、はつきり開かれていく。

トリニアは回復魔法なんて施すつもりはなかった。

回復魔法は人の持つ治癒力を元に力を発揮するために、弱っている体には余り効果がない。だから弱りきっているシアに施したところで、その効果はせいぜい立って歩く、会話をする程度のものにしかならず、戦いどころか走るだけでもすぐに体力がなくなってしまう。

下手に動ける状態よりは自力で身動きの出来ない状態の方が、動こうとする怪我人を休ませるには良いというのに、トリニアはシアに動けるだけの力を与える。

シアはすぐにトリニアの手から離れて立ち上がる。トリニアも同じく立ち上がったところで、異変に気づく。

三つのオブジェがその姿を変えて、辺りに影響を及ぼしていた。

「私はもう行きます」

トリニアはそれ以上何も言わずに駆ける。その後姿を、自力で立つシアは見送ってその身を翻す。

「お世話していただいてありがとうございました。もう、大丈夫です」

「えっ、あ、いえ、なんてことはないですけど……」

さっきまでの弱ったシアとはまるで別人の、いつもと同じ笑顔で離すシアに戸惑いながらも女性は答えた。

そしてシアは歩き出す。トリニアとは逆の方向に。町の外へ出るために。

暗闇にも、もう目が慣れてきていた。

ここに閉じ込められてから一体どのくらい経ったのか。それを知

る術であるメニュー画面を開く動作をして、現れた画面の端にある時刻表示を見る。閉じ込められてからすぐに確認した時間と照らし合わせると、まだ三十分ほどしか経っていなかった。

一見何の変哲もない檻も、手を近づけると紫の膜に弾かれて、隙間から何かするという事も出来ない。床や壁の冷たさが心まで染み込んでしまいそうでどこか嫌だった。

向かいの檻に囚われている幼竜達も俺に興味があるのか、助けを求めているのか、視線は合うがそれ以外には何もする事は出来ない。僅か三十分程度で俺の心はもはや通常通りに動く事すら出来なくなっている。暗所で閉所という事もあるのか、落ち着かない。

落ち着かない原因は他にもある。スノウの事とシアの事だ。外の情報が一切入らない中で、それでいて何かが起きているのはわかるという状況はなかなか心にくる。

あれから色々と頭に残る情報の欠片から、何か得られる物がなかかと思案してみたものの、せいぜい、あの偽カサセがここに来る途中で見つけた巨大棘猿に近い腕を持っていたことから、何かしら魔物の特徴を得ることの出来る力があるんじゃないか、ということとその力を持った偽カサセが本物のカサセと何かしら繋がりがあること。そんなことしか分からない。

もうこの牢で出来る事は全てが終わっていた。後はシアがやってくるなりで、外からの変化がなければ俺にはどうする事も出来ない。そんな事を思っている、俺の願いが通じたのか人影が見える。闇闇を裂くように光が差し、その中に人の影が移りこんでいる。

それが光を放つ魔法によるものだとはいすぐに分かるが、光を遮る影は明らかに二人分だ。

そうなるとシアである可能性はぐっと低くなる。もしかするとトリニアさんと来たかも知れないが、多分ないだろう。必要のない事に人を巻き込むような事をシアは好まないだろうし。

となれば偽カサセとカサセのペアか、あるいは……。人影が灯りとともに姿を現す。白色の光の球が二人目の後ろにふ

わりと浮いていて眩しいぐらいだった。思わず手をかざしてその影から覗いて見えた顔は、どちらも見覚えのある顔だった。

「よお、また会ったな」

「これで、三回目だっけ？」

青灯の名を持つ鎧一式に身を包み、その背中には大剣を背負ったグリードと、一見して身軽そうなローブを羽織り、その腰には一つの本としては重そうなほどの分厚さで、煌びやかな装飾の施された魔法の源であろう本を提^さげているステイード。その二人の姿があった。

それに驚くことはない。そもそもカサセがグリードの名前を口にしていたからには何かしらの繋がりがあるのは容易に想像がつく訳で、こうして目の前に姿を現そうと何も変わるはずもない。ただ強いて言うなら現れた速さについては少し早いな、と思う。

俺が捕らえられてまだ三十分ほどでグリード達にその旨を伝え、それを聞いたグリード達がここまで来るのにそれだけの時間で足りるのか。そもそも伝達手段は魔法の類なのだろうか……。

そんなくだらない思考はグリードに切って捨てられる。二人の言葉に俺が一切反応しなかったからだろうか、グリードは少し口調を強めていた。

「おい、聞いてんのか？」

俺はそれに怯えるような事はなかった。不思議と心が落ち着いている。

多分、俺自身が何も出来ない状況のせいで、一種の諦めのようなものを心を感じているのかも知れない。それはそれで助かるのだけだ。

「なんだ」

もう何度も顔を合わせ、命のやり取りもした相手だ。いまさら礼儀なんてある訳もない。ぶっきらぼうに一言だけ言ったのだが、反応した事でグリードの機嫌は良い方へと向いたらしく、上機嫌そうに声を出す。

「聞いたぞ。お前、カサセにハツタリをかましたそうじゃないか。それも命が掛かった状況で、堂々と」

聞いた、ね。やはり直接的な繋がりがあるのだろう。もしかしたらカサセと寝食をとにもしているのかも知れない。

しかし、これだけ上機嫌なグリードなら普通に話を続けるだけでも、もしかしたら何かしらの情報を漏らすんじゃないか。そんな希望を抱いてしまう。

いまのこの状況ならそういった方向に動いてみるのも一つの手だろう。

「ああ、それがどうした」

「どうしてそんな事をした。命乞いをするならば直接言えばいいだろう」

そんなことか。もっと暴言やら何やらをぶつけられて、散々言った後にそれ以上の行動に移るものだと思っていたが、案外考えなしな性格ではないのかも知れない。それともただ話をしてみようという単純な興味かも知れないが。なんにせよ傲慢で自分勝手というところは覆る事はない。

「………思いついただけだ」

「………それと、なんでお前は俺たちを見た時に驚かなかった？」

俺達があいつと繋がりがあつたことを知らなかつたはずだ」

俺がそれを知り得たのは、シアを含むこの世界の住人が知らない、持ち得ない力のおかげだ。

識別アビリティなんてのは普通じゃまずありえない力を持っている。他にも習得したアビリティはあるが、どれもわかるはずもないものばかり。しかし識別に関しては俺が普通では知り得ない情報をシステムを通じて得るものなので、こうして疑問に思われてもそれは仕方がないことだ。問題はそれを言つていいかどうか……。

……そうか。このアビリティこそが、俺の持ちえる唯一の力。この世界の誰も得る事が出来ず、それでいて強力な力を秘めたもの。レベルなどが廃止されてもアビリティに関してはそのまま残つていたのは、アビリティを利用してどうにか生き延びるという事だったのかも知れない。……しかしそれは考えたもののどうにも腑に落ちなかつた。

なにせレベルが廃止されているのだから、アビリティを新たに得るためのポイントアビリティポイントが得られない。APはレベルアップの際に得られるものだからだ。

現在俺の持つているアビリティは全部で四つ。ポイントも残つてはいるが、強化するだけには至らず、そうなれば新たにアビリティを習得する事に目が向くが、生憎といまの残りポイントでは習得に至る初期ポイントに届かずに、半数は手が届かない。

結局、ぬか喜びだった。本当はもつと力が付いてからデスゲームが始まる所を、何か手違いでも起きたせいでこんな弱いステータスなのだろう。そうでなければあまりにも理不尽だ。

少しの思考の間に希望を見出し、絶望に落ちた。この世界で力を得る手段を見つけたと思えば、その基本が成り立たない。なんだか阿保らしくて、この仕様を考えた奴に悪態をつけどもそれが届く訳もないし、現状がどうにかなるわけでもない。

だからもう、半ばやけくそだった。

「……わかるさ。お前はグリード。そっちはステイード。そうだろう？ あいつはお前らの名前を口にした。だから少なくとも見知った仲だとは思ってたよ。だから驚きもしない」
「なっ……………」

二人の表情を見るだけで名前が正しいものだとわかる。システムは絶対なのだから間違うはずもないのだけど。

驚き慌てるような表情で、俺がどこからか情報を得た可能性でも記憶の中から探っているのか、二人は少しの間沈黙した。心なしか揺らぐ浮いた光も、二人の動揺を表しているようだ。

「それは……………」

ステイードが口にして、すぐにやめた。俺が二人の事を知りえたのは魔法の類じゃないかと、そう聞きたかったに違いない。ステイードは魔法特化なのだから、自分の知らない魔法があるのかも知れないと疑って口にしたところで、そんな事はありえないと自分の経験と知識がそれを拒んだ。一芸に秀でた者がその分野で自分の知らないことがあるとそれを否定する。それはその道に浸かっていけば浸かっているほどに強くなる。ようは自分の世界を守るために、プライドを傷つけないために。全てを知っているという全能感を失わないために。

それに大体の超常現象は、魔法がある世界では魔法によって行われたと理解するほうが確かに理に適ってはいる。この世界で過ごした時間はそう多くないが、いまさら暗がり火の玉が浮いてようとそれを怖がる事はしない。むしろ山火事でも起きないかとか、誰がその火の玉を生み出しているのか、と考えてしまう。

俺でもそうなのだから、この世界で生きてきた者ならばそれはより強くなる。

だがグリードは、口をつぐんだステイードの意図を理解してなおそれを俺に投げ掛ける。

「それは、魔法か？」

グリードにとってはステイードのプライドなんかよりも、俺の持つ力が何なのかを知る方が大事なのだろう。隣ではステイードが祈るように、不安げな表情だ。

「違う」

ステイードは安堵の息を吐き、肩から荷でも降りたかのような様子だ。しかしグリードは顔をしかめる。だとすればなんなのか、そう言いただけな表情がなんだか心地いい。

俺は何も出来ない檻の中だというのに、一矢報いる事が出来た気がした。とはいっても状況は一切変わらずに囚われの身なのだが。こっそりとメニュー開き時刻を確認する。もうすぐ捕らえられてから一時間が経とうとしている。何事もなくスノウがシアの元へ行き、シアもまた何事もなくここに向かっていけば、そろそろこの場所の近くまでは来ているはずだ。もしかすると話し声が聞こえて近くに身を潜めて様子を窺っているかも知れない。

それまでに俺がどうにかならなければ良いが……。

「じゃあ何だ」

率直に迅速にそう返したグリードに、俺は正直に言ったところで分からないし、こいつらがそれを得る事は出来ないのだから言ってもいいか……とか思い出した頃、グリードでもなく、ステイードでもない声が洞穴に響く。

その声はあのカサセだった。姿は見えないが確かにそれは間違い

ようもない。

「おい、二人共。出てくれ」

二人は洞穴の入り口の方へ目をやるが、ステイードは涼しげな顔で何事かと見ているのに対して、グリードは会話を途切れさせられたのが腹立たしいのか、その顔は不機嫌そうに歪み、舌打ちさえする始末だった。

「街の方の戦況が危うい。消しても構わんから派手に暴れて来い」

……街？ それは、もしかして……。

脳裏にここ数日暮らした町の光景が浮かぶ。それとそこで出会った人達の顔が……。それが……。

こいつらが慈善活動なんてしているとは思えなくて、そうならばこいつらの起す行動はそういったものとは正反対の……。

「おい！ どういうことだ！ 何が起きてる！？」

脳が嫌な映像を想像し、そのせいで心臓の鼓動も早く強く打つ。血の気が引いたように体が冷たくなる感覚があるが、そんなのに構っている場合じゃない。

街が襲われているのなら、そこにいる人たちは……！

「なんだ、まだ処分していなかったのか。お前がしてやられたと聞いたから、こうしてその雪辱のチャンスを残してやったというのに」「いま取り込み中だ。お前は黙ってる」

グリードは敵意を込めた言葉でカサセにそう言うが、それを受けたカサセは涼しげにあしらう。

「相変わらずだな。しかしそうも行かないのだよ。自体は一刻を争う」

カサセを睨みつけるグリード。そのまま数秒の沈黙があつて、グリードは観念したようにその体を洞穴の入り口へと向ける。その後を続くようにステイードも歩く。

グリードはカサセとすれ違う間際に言った。

「俺のために生かしておいたって言うなら、そいつに手を出すんじゃないぞ」

「……ああ」

ステイードに追従していた光の球が少しづつ遠くへ行き、洞穴を埋め尽くしていた光もまた遠ざかり、代わりに闇が洞穴を埋め尽くす。

「……という訳でお前には手を出さないが、……そうだな、お前が気になることを教えておこう。お前の予想通り、あの街はいま私の手によって戦いの最中だ」

それだけ言うと足音とともにカサセは去っていく。残された俺に残るのは焦燥と不安。それが分かっているからこそカサセも改めてそれを告げたのだ。

それを分かっているとしても、俺は気持ちを抑えることは出来ない。ともに過ごしてきた人達が今この瞬間にも傷付き倒れてるかもしれない。そこには一番大事な人もいる。

だというのに俺はこんな所で何も出来ずに黙っているしかない。それが悔しくて、苦しくて。力の限りに牢から出ようと殴りつけても、叩きつけた感触も音も何もせず、ただ紫の膜が俺を遮る。それ

がもどかしくて腹立たしくて、さらに拳を叩きつけるが結果は何も変わらない。

「くそっ……！ 何て様だ……」

本当に、俺は、無力だった……。

反撃の狼煙

水の檻に囲われた全員が安堵し、戸惑いを持っていた。土の魔物が各々放った攻撃の嵐は全てが阻まれた。しかし前方の獅子の魔物だけは、その勢いを持って水の檻の一角を打ち破り、再びその巨体を揺らして突っ込んでくる。

それに相對するのは、飛び入りで全員を窮地から救ったトリニア。近くで呆然としていたヒコネに叫ぶ。

「ヒコネさん。私があれの動きを崩すので、その隙を突いて喉元にその拳を叩きつけて下さい」

ヒコネはただトリニアを見た。それは戸惑いがあったからだ。

なにせ相手は人の何倍にも及ぶ体躯で、走る勢いに触れたならば形を残さず、仮に耐えうる力があるうとも軽々と吹き飛ばされるのは容易に予想できる。その動きを単独で崩し、ヒコネのみに攻撃の指示を出した。それだけの事で本当に獅子を止められるのか。それは当然の疑問だった。

しかしそれをトリニアと問答する時間さえない。もう獅子は目の前まで迫っていたからだ。

ヒコネは何も言わなかった。ただ覚悟を決めたように両の拳を打ち鳴らし身構えた。その目には決意が宿っていた。

獅子が迫る。その迫力を真正面から見れば逃げ出したなる気持ちすら湧き上がるというのに、トリニアは一步も動かない。それどころか怯えさえ見せない。それを見てヒコネもまた体の震えを堪える。トリニアはその細剣を今度は獅子に向けて構える。まるで狙い定めるようにピタリと構えられて微動だにしない。

巨大な獅子はその体躯に相応しい四肢を地面に振り下ろし、猛然と突進する。

その動きを計るかのようにトリニアの目は鋭くなった。

一步、そしてもう一步、右の前足を獅子は振り下ろそうとした瞬間、トリニアが動いた。細剣が青色の淡い光を帯びて、そこから二つの青の弾丸が発射される。一切ぶれることなく飛んだ二連の光の塊は、先の一発が獅子の右前足が捉えていた地面へといち早く辿り着き、地面に衝突すると同時にそこに水柱を作り出す。その水の勢いはまるで滝を逆さまにしたようなものだった。

足元に突然現れた吹き上がる水の勢いに押されて獅子はそのバランスを崩す。しかしそれだけで倒れはせずに、勢いのまま前方へ向かおうとした獅子の体を支えていた左足に、今度は二つ目の水柱。しかも今度は真上ではなく真横に。

二度の妨害で今度こそ獅子はそのバランスを崩し、横に倒れこむような動作をして、勢いのまま滑り込むようにトリニア達へ向かう。それを迎撃するのはヒコネ。

その喉元に向け、光を帯びたヒコネの右拳が唸りをあげる。舌から抉るように振り上げた拳は、吸い込まれるように獅子の喉元へ向かい、捉えた。

獅子の重さが相まって強大な力を得たヒコネの拳が、獅子の動きを完全に止めた。再び横合いから水柱が現れて獅子の体をヒコネの上から跳ね飛ばす。ヒコネは獅子を止めたその右腕を抑えてその場にしゃがみ込む。いかに魔紋武器でもそれを扱うのは所詮人間だ。魔紋の効果である程度のダメージは軽減されるが、それでも人の身には重すぎる衝撃だった。

ヒコネの右腕から血が流れ、凄惨なものだった。痛みを堪えるヒコネの顔には汗も浮かぶ。すぐさまトリニアが駆け寄り、魔法によってその右腕を直す。シアに使ったものと同じ魔法だ。腕を回復したヒコネは立ち上がる。二人が目をやったのは倒れこんだ獅子。

黄金色の毛並みも今は土色に侵食されて、畏怖さえ覚える牙は半ばから折れて地面に突き刺さると、体表と同じく土色に侵食され、土の山になる。それを見て、それが土から生み出されたものだと思

い出す。

敵わないとさえ思い、逃げ出したくなる恐怖すら植えつけられた強大な三体の魔物。しかしその一体を倒したことにより、状況は一変する。

町の人々は叫び、士気が上がる。もはや逃げ出そうと思うものはいなくなり、全員が勝てると思じた。

土の山と化した獅子だったもの奥には、獅子をも超える大きさの蛇と一人の男。土仮面の男は獅子が倒されたことにも動揺した様子はなく、ただそこにいた。

土仮面の男と会話を交わす時間もなく、隣で待機していた蛇が動き出す。鳥の魔物は未だ空から際限なく槍の雨を降らし、そのためにトリニアは空を覆う水の天井を崩す訳には行かなかった。

だというのに蛇は頭を下げて尾を振り上げ、立ち並ぶ家ごと地表を一扫しようという、一切の遠慮もない無慈悲な攻撃だった。それは街の人々の力が及ばない広範囲に及ぶ。

そうなればそれを防ぐ手立てがあるのはトリニアただ一人。

トリニアは蛇の動作で何をしようとしているのかを悟り、慌てた様子で手に持つ細剣の切っ先を地面に向け、その手を放した。地面へと垂直に吸い込まれていった細剣は刀身の半ばで動きを止め、そこから放射状に青い光が漏れ、そこから生み出された光の環が三つ、剣を包んだ。

それは新たな魔法の発現。家々と通りの境に等間隔で水の柱が現れ、やがてその隙間を生めるように水のカーテンが現れる。それは平時ならば幻想的な光景だが、いまは観賞よりも大事な役割を持っている。

蛇が尾を振り、蛇を中心にして半円状になぎ払おうとした。しかしそれは水の壁によって完全に防がれる。まるでそれと呼応するように、トリニアがその場で座り込んでしまう。

「大丈夫ですか！」

「ええ……なんとか……」

攻撃を阻まれた事に腹が立ったのか、大蛇は何度となくその凶悪な攻撃を振るい、水の壁に叩きつける。それでも水の壁は人々だけではなくこの町を守っていた。

鬱蒼とした森と、どこまでも広がるような遮蔽物のない草原。どちらを歩くかといえればそれは決まっていた。奇しくも二ヶと同じ道を辿るシアは息を荒げながらも進んでいた。

時々倒れこみそうになる時もあったが、その時は自分の癒水ヒールドロップを使つて、無理矢理歩き出す。

そんな事を繰り返していると当然次第に使えなくなり、後はもう気力だけで歩くしかなかった。

もとより戦う力はない。だというのにこのタイミングでシアはそれと遭遇する。

森の陰に紛れるように隠れ、すぐ近くを通る光の球、もといその近くにある二つの人影をシアは目を凝らして見た。

魔法の光は月より明るくその顔を照らしていた。そしてそれはシアを凍りつかせるには十分なものだ。

グリードとステイド。どちらもシアにとっては完全に敵。万全に戦える状態ですら簡単にあしらわれるほどの相手。それでいて殺されるだけ憎まれている相手。

シアは祈った。神でもなんでもいい、どうかあの二人が気づかないようにと。

二人の歩く方向から街に向かっているのは分かる。だがあの二人ならトリニアが何とかできる。だけどシアにはどうしようもない。だから今だけはシアは自分の安全を願う。

しかしシアの願いは届かなかったのか。二人はそこで足を止めた。

「なあ、ステイード。俺達が行ったところで何か助けになると思うか？ カサセの土人形は魔物を吸収してその力を振るう。そしてあいつは力を溜め込んでたんだろ？ さっきだってスピアコングを吸収してた。それらを使って苦戦する相手となると……」

「昼間に邪魔してきたあの青いのかな」

「あいつか……。たしかにあいつならカサセの土人形の相手は出来るだろう。だが倒しきれるとは思えない」

「それは僕も同意。カサセの力は規格外だよ。魔法とは違う魔力の力。でもそのうち自滅するかもね。なんでも体を蝕む呪いのようなものらしいし」

「その前に俺が殺してやりてえけどな」

「ははは、止めときなよ。返り討ちにあうのが関の山だよ。二人で戦ったって結果は同じ。今の内にカサセ本人を狙うってのもあるけど、まあ土人形を呼び戻して終わりだろうね」

「だがあいつに手伝わせればどうだ？ 牢屋は入口のところで仕掛けを解除出来るし、そこに囚われてるチビ竜達も陽動に使って、その裏で俺達が首を取る」

「駄目駄目。あいつ急所だけは肌を固くして守ってるから、生半可な攻撃じゃ通じないよ。……まあ、こんな僕達には無意味な事を喋ってないで、行こう」

「そうするか」

光の玉は動き出す。二人とともに。

シアはその場から動かずにただ二人が消えるのを待った。やがて遠くに光の球が点となって浮いているのが確認できる程度には離れたところで、ようやくシアは息をついた。隠れ潜む緊張感のせいでその顔には汗が伝う。

グリード達が話した内容をシアは一言一句覚えようと、口をかすかに動かして呟きながら記憶に刻み込む。

シアがその時に一番感情を出して喜びそうになったのは、グリード達が言った言葉。二ケの生存を表す言葉。

最悪の場合がなくなったというのは、いまのシアにとって一番精神的に救われる出来事だ。しかしまだ二ケを無事に助け出した訳でもないし、街の事もあるので完全に心を安堵で満たすには至らない。それでも肉体的に限界だったシアは、その情報のおかげで前を向いて歩ける。希望が先に待っているのならば、絶望なんて必要ない。下を向いて希望を探す必要もない。

ただ前に、前に進んでいく。

光のない暗闇なんてものは、今の俺からすれば怖くも何ともない。それよりも怖いものが身を包み、震わせる。

暴れた。だけどそれは分かっていたように無意味だった。だから俺はいつしか力尽きて足掻く事すらやめている。

ただただ頭を動かし、その度に最悪のビジョンが浮かび、どうにかなりそうだった。

そんな俺を現実へと引き戻す、誰かの足音。

またカサセが嫌がらせにでも来たのかと顔を上げると、そこには……。

「二ケさん……！」

シアがいた。暗闇の中で光もないために姿は見えないが、声で分かる。

牢屋がシアの手によって音を立てて開かれた。あれだけ俺を遮った紫の膜は何故か跡形もなく、消え去っている。おそらくシアが解除してくれたのだろう。方法は分からないが、きっとここまで辿り着くのにいるんな事があつたはずだ。

牢屋が開放たれて俺がすぐに外に出ると、シアがその体を預けてくる。牢屋を出ると微かに光が当たり、シアの体に付いた傷が目に入る。預けてくる体も自分の意思で寄り添うというよりは、もう限界だった体がようやく休む時を得た、という感じで、これ以上は動けそうにないほどに疲弊していた。それでもシアはまだ動こうとその体に力を込める。

俺はすぐにしゃがみ込んでシアも一緒に座らせる。

それからシアは、必死に起きた事、ここに来る途中でグリード達が話した内容、その全てを聞かせてくれた。

それを聞くだけでとんでもない事になっているのは分かる。どうしようもないくらい悲劇が起ころうとしているのがわかる。それを止めるのは俺にほかならない。

シアはここまで情報を集めて伝えてくれた。だからあいつを、カサセを止めるのは、ここまで何も出来なかつた俺の役目だ。どうなるかは分からないが、最低でも街にいるという偽カサセを、カサセ本人に呼び戻させるところまではやらなければならぬ。

グリード達がもたらした情報が本物かどうか怪しいところではある。だがシアの話聞く限りではわざとしか思えない節が窺えるので、シアに気づいてそれを漏らしたのは間違いないだろう。

しかしそれをわざわざ行う理由がない。あの二人は少なくとも敵対はしていないようだったし、渋々と言った感じではあったが、カサセの指示に従って行動を起すまでした。それでいて敵である俺達に、しかもシア一人で命を狙うには絶好のチャンスだったというのに、それを無視してあえて情報を流す。そこに俺たちにとっては分からない意味があると思っただろう。

それが俺達にとって悪い思惑か、良い思惑かはわからない。それを知るのはグリード達だけだ。だがグリードがここから立ち去る際に言った言葉を考えれば、シアに情報を吹き込んで俺を騙そうというのは、少しばかり遠回りのしすぎで可能性が薄いと思う。

だとすれば残るのは俺達を当て馬にするという事。実際シアから

聞いた話ではそういう話もしていたらしいので、可能性はぐつと高まる。

もし思惑に乗る形になると、俺が行動して街を救うのだけは揺るがす訳にはいかない。当て馬でもいい。それを目標に捧げてやるしかない。

シアはもう動けないだろうから手助けは期待できないし、むしろこれ以上動けないのは酷な話だろう。だからといってここにそのまま一人で置いておくのは心配が残るが、今はどうしようもない。

そこに鳴き声が響く。それは囚われた竜達の声だった。どうせなのでその牢も開放して外に出してやる。喜びの声を上げる竜達は俺とシアを囲んで飛びまわる。意外と元気だなあとか思っていると、一匹の竜が力強く俺に訴えかけるように鳴く。

なんだ？ と目をやるともう一度強く鳴き、それに賛同するように他の竜もまた鳴いた。

これは……、任せると、そう言っているのか？

そう聞くと再び、今度は全員が揃って鳴いた。

……そうか。俺は力強く頷いて竜達への返事として、歩き出す。

腰には剣がそのまま残っているから戦う武器はある。そして戦う理由もある。

カサセはこの山の上にいるはずだ。急がないと街の方も危ない。

シアの話ではトリニアさんが何とかしてくれていると言う事だったが、確かにあれだけの強さなら何とかかなりそうなものだが、それでも全てを放り投げて任せきりというわけにも行かない。

後は、すごく個人的な話もある。

シアが戦ったのは偽カサセと言っていた。その顔には土の仮面を付けていたらしいが、状況を考えるに間違いないだろう。そしてその偽カサセは本物のカサセの操り人形。と、言うことは単純に考えれば、シアを傷つけたのはカサセということになる。

だったらもう俺が取る行動は一つしかないだろう。

「ああ、
覚悟しろよ……クソ野郎……！」

諸悪の根源

目の前にはカサセがいた。

山を少し登った先に囚われていた牢屋と似たような感じで穴が開いていて、そこには明らかに人工的と思われる光が漏れていた。こつそりとそこを覗き見ると中は山をくりぬいたような半円の空間。そこにはカサセがいて、そのほかにも色々荷物やらが置いてある。おかげでここが奴の拠点なのだと確信した。

一度顔を引つ込めてから自分の気持ちを落ち着けるために息を吸い、吐く。

一息で攻め込む。急所は入念に守られているという話だったから、それ以外のところを狙う。今の俺が優先すべきは、カサセに自分の偽者を呼び戻すほどに危機を感じさせること。だからグリードの時のような致命傷は必要ない。もちろん致命傷が入れば儲けものだがそうはうまくいかないだろう。ハイリスクハイリターンよりはローリスクローリターンを積み重ねるほうが俺の性に合ってる。

腰の剣を抜いた。牢屋で暴れた時に握ったが魔法の膜に傷一つ付けることもなく、また剣自体も一切の傷はない。もしあれで損傷でもしていたらトツネが加工してくれた剣ではなく予備の剣を使う羽目になるところだった。あの時は我を忘れていたとはいえ迂闊だったなあ、などと思いつつ、俺は剣を改めて握り覚悟を決めた。そして、走る。

威力重視の両手持ちでだらりと下げるように構えて、ただひたすらに俺に気づかずに呆けているカサセへ向かう。その距離は十歩ほど。気づかれても十分対処できる距離だ。その距離でカサセは振り向く。なにせ夜も静かな時間で、今は色々と立て込んでいるせいでその神経も敏感になっているだろう。だからそんな静けさの中で駆ける足音に気が付かないはずがない。

カサセは俺の姿を見つけるとはっと驚いたような顔を一瞬見せる

が、すぐさま腰にある俺と似たような片手直剣を抜いて構えた。その目は真剣そのもので焦りのひとつも見えない。

もう距離はほとんどない。あと数歩進み剣を振れば十分射程圏内だ。

だらりと下げて両手で剣を振るのは非常にやりにくい。振り下ろしたり横に振るのならば力もそのまま剣に乗って威力も増すだろうが、下からはそうもいかない。その原因は多分体の捻りが難しいからだ。慣れてくれば問題なく出来るのかもしれないが、生憎と剣を握ってまだ数日。そう簡単に剣を扱いをマスターできるはずもない。なら何故そんな構えを取っているのかと言われれば、それは不意打ちをかます為としか言えない。

もう少しという距離で俺は左手を離し、剣は右手に任せる。そのまま腰に付いたポーチに左手を突っ込んで、頭でそれを思い浮かべるとそのまま引き出して走る勢いのままカサセに投げつけた。

空を舞うのは俺の手元にある剣と同じもの。厳密に言えばトツネの加工がある分違うのだが、細かいことは抜きで考えると大本は鉄の剣。それをポーチから出して無造作にカサセに放ったのだ。

剣の刀身は三十センチはあるだろう。それが空中で激しく回転しながら迫ってくるのは中々に恐怖を味わえる代物だと思う。俺自身がそんな目にあってないので分からないが、凶器が自分目掛けて投げられれば誰だって怖い。

最初に切りにくい構えで突っ込んだのは、直前までポーチからの奇襲を感じかせないためだった。

空中を何度も何度も縦に回転する鉄の剣は、正確にカサセを捉え飛んでいく。距離は全くないといってもいいので一瞬でも迷えばもれなく飛んできた剣が刺さるが、カサセは迷いなく構えた剣を振った。

甲高い音が夜の闇に響く。カサセは飛来する鉄の剣を正確に打ち払った。横合いに跳ね飛ばされた鉄の剣は音を立てて転がる。しかし第二波として俺の持つ鉄の剣がカサセを狙う。今度は俺が操るた

めにそう簡単には弾かせない。

剣を振った後には隙が出来る。それはもう戦いでは必ず言われ、そして必ず狙うものだ。だから俺も狙う。剣を引いて、動きが硬直しているカサセを深々と貫くために構えた。

スキル『ストライク』突き技を強化してくれる案外お世話になっている代物。それを頼って俺は腕を伸ばす。俺自身の勢いも乗り、剣はカサセへと吸い込まれてそのまま柄の部分まで刺さった。

「え……」

驚くのは俺の方だった。

狙ったのは心臓や首などの急所ではなく、利き腕であろう右腕を自在に操るための肩。そしてそれは深々と刺さったのだが、それがどうにも素直に喜べない。

あまりに簡単すぎるのだ。確かに偽カサセの力は強大でその代償にカサセ本人の力が恐ろしく弱いというのも考えなくはないのだが、それを否定したのはカサセ自身の行動においてだ。

敵と対峙してすぐに剣を抜く。飛来する剣を迷いなく弾く。その一連の流れで胆力があり、剣を扱い慣れているのはわかる。そんな奴が素人の剣を避けようとしてもしないものか。

俺は右肩を狙い、その通りに剣が貫く。それはいくら隙を突いたとはいえ全てがうまく行き過ぎだ。まるで避けれなかったのではなく避けなかったような。

そこまで考えて気づく。カサセの体から何かが零れるように落ちたのを。

それは破片だった。剣が深々と突き刺さった箇所から剥がれるように土色の破片が落ちて石の床に辿り着く。

直感的に、反射的に俺は剣を引いた。その行動が正しかったのは、次の瞬間に分かることとなる。

カサセの体から抜き払った剣が嫌な音を立てていた。何かが蝕ま

れるような焼けるような音。目を向けるとカサセの体に埋まっていた部分の刀身が少し黒ずんでいるのが見えた。それは明らかに鉄の剣が劣化した証に違いなかった。どういった現象でこうなったのかは分からない、だがこれもまたカサセの力なのだろうとは分かる。剣を離し一歩引いた俺をカサセは笑って見ていた。その粘つくような視線が俺に嫌悪感を与える。

「どうした？ 不意打ちを仕掛けてきた相手が逃げるといいうのもみっともないぞ」

何が……みつともないだ。こいつ最初から俺の攻撃をなんとも思っていないかった。あの投げつけた鉄の剣だって、わざわざその手で弾かなくともなんともなかったはずだ。なにせ奴の体は 土で出ているのだから。それもただの土ではなく、おそらく触れたものを腐らせる特殊で異質な土。

これが、シアが聞いたという呪いに似た力によってだとはわかるが、これを崩す手立てはあるのだろうか。

考える。推測しろ。今ならまだ間に合う。虚を突く手段はある。

一度目の奇襲は失敗したが、それでも俺は奴の力を知っている訳じゃない。そしてあいつもそれを分かっている。そして安易には敗れないという自信があるからこそあややって手の内を晒しているのだろう。だとすれば今この瞬間にそれを破る手段を思いつき、それを実行できれば、カサセも慌てふためき土人形を呼び戻すかも知れない。

思い出せ。目的は呼び戻させる事だけ。そして微かな情報からでも答えを導き出すしかない。

そうだ。カサセは急所だけは固く守っていると聞いていたじゃないか。そしてそれ以外のところを狙えば、先と同じように腐る土によって防がれるどころか、それはもう反撃と言っても良いほどの手痛い仕返しを受ける。まだ気づいてすぐに離れたから剣も無事

で、被害は少なかったが、あれを直接体で触れたならどうなったか、想像もしたくない。

ともかく奴の体で攻撃が通るのは急所が確実。そしてそれを守るのがどのくらいの防御なのかは分からないが、一点に絞ってひたすらに攻撃を重ね砕く。それしかない。

思考を束ね結論を弾き出し、俺は臆せず突っ込む。カサセは顔に余裕の表情を浮かべたままだ。その不快な表情を断ち切るかのように、俺は剣を上段に構え、振り下ろす。

そのまま吸い込まれるようにカサセの頭へ向かう刀身をカサセは防ごうともしない。それだけの自信があるのだろう。そしてそれを証明するかのごとく、甲高い音とともに剣が弾かれる。手には硬い岩に打ちつけたように痺れる感覚が走り、危うく剣を手放しそうになるぐらいの衝撃だった。

「……ふむ。狙いを変えてきたか。その機転と切り替えの良さは他のやつらとは違うな」

カサセはその右手を俺に伸ばしてくる。それがまるで死神の手でもあるかのように思えて、嫌な汗が噴き出る。

「だがお前の刃では私の命には届かんよ」

すぐに俺は後退する。みっともなかるうがここでやられるのだけは絶対にやってはいけない。だが、伸ばしたカサセの手は俺が後退してもそのまま宙に吊り上げられたように固まった。地面と平行に構えられた腕の先、男らしい骨が出張ったごつく太い指先が真っ直ぐに俺を射抜いていた。

それが何なのかわからなくて、俺は注視したまま固まってしまふ。もちろんあらゆることを頭で想定し、その際に自分がとるべき行動も考え付く限り考えておく。一度通った思考ならば体も反射的に反

応ずる。

だから俺が即座に反応できなかったのは、カサセの行動が俺の予想の範疇を超えていたからだ。

カサセは左手を持ち上げ、真っ直ぐに構えられた右手首を掴み、そのまま剣を鞘から引き抜くような軽々しさで腕を引き抜いた。血は出ない。その代わりに土が幾分か切断面から零れ落ちる。

「なっ……!!」

理解できなかった。伸ばした右手から何か飛ばすのかと思つてた。りした俺にとつて、カサセが自分の体を傷つけるのは意味のある行動と思えなかった。それでもカサセは笑う。不適に妖しく笑う。その表情に俺は得体の知れない圧力を感じて後ずさるうと体が反応してしまう。

逃げてどうする。もう時間はないし、ここで引くわけにも行かない。それだけを頭に強く刻み込みどうにか踏みとどまる。

それを見てより満足げに笑うカサセは、そのちぎった腕を俺に向かって軽く放り投げる。きれいに放物線を描き向かってくるカサセの右腕を、俺は目で追つてすぐに避ける動作に入る。何かしらの意図が隠されているのは明白だ。それを黙って受け取るのは馬鹿とは思えない。何が起こるかわからないのならば出来るだけ距離をとるか、何かが起こる前に突撃するか。安全に行くのなら前者だ。うけど、今は時間も惜しい。だから俺が取ったのは、放られた腕を避けつつも、いま現在俺が出しうる最高速でカサセを叩きに行く事だ。

真っ直ぐに放られた腕を迂回するようにカサセに向かって走る。

「駄目だな。その程度で避けれるはずもない」

そのカサセの言葉が耳に届いた瞬間、俺は強烈な力で動きを封じ

られる。

見れば放り投げられたカサセの腕から、俺を追尾したかのように土色の紐状のものが伸びて俺を捕らえていた。

俺は勢いのまま地面を滑るように倒れる。左半身に強烈な衝撃。そのあとに体を熱く苛む

痛みが襲う。

地面に無様に倒れこんだ俺はどうか動こうと試みるがどうにもならない。土で出来たものなのだからどうにかなるだろうと暴れてみても、そこらの縄なんかよりもよっぽど強靱らしく、俺の捕縛が解ける様子はなかった。

そんな俺に影が差す。

見上げればそこには、俺を見下し愉悦に浸るカサセがいた。

「だから言っただろう？ その程度の力では私をどうにかしようなど、天地がひっくり返ろうとありえない」

「うる、せえよ……」

実際、今の俺には打つ手立てがない。剣はかろうじて手放さないでいるが、それもすぐに離してしまいそうだ。何故なら、さっきから俺の体は痛みとともに侵食されているからだ。

俺を縛るカサセの腕から伸びた縄は、剣をも溶かそうとしたあの土で出来ていた。だから俺を縛りながらも食い込むようにどんどん溶かされていき、焼けるような痛みが迫る。

もはや意地か気合か。どちらにしる諦めるという選択肢は存在しない。

俺の表情からそれを読み取ったのか、カサセは鼻で小さくあざ笑い、かろうじて手元に残していた俺の鉄の剣を強引に奪い取る。今の俺にはそれすら抗うことも出来ず、まな板の鯉のように無防備で無力だった。

「狙いは悪くなかった。筋もいい。だが自分の力は正しく認識し、それにふさわしい相手を探すべきだったな。私とお前では格が違う」
「そんなこと、言われるまでもなくわかってたさ……それでも、やらなきゃいけない時があるだろうよ……！」

「ふむ……それもそうか。その意思と私をここまで追い詰めた褒美だ。一息で死ぬといい」

それだけ言うとカサセは俺から奪った鉄の剣を振り上げる。

ああ、いつかもこんな光景を見たな。グリードとの死闘の時だ。

結局あれから俺は何も成長していなかった。何も変わっちゃいなかった。

あれから色々あった。シアと向き合い、ただのVRゲームも現実となった。ヒコネさん一家とも何日と過ごして、その後もスノウと出会ったり、トリニアさんとも出会った。グリードと再会した時もスノウとトリニアさんで守ってくれたっけな。

そう、その時だって俺は何もしていない。何も出来なかった。

だからこんな無力な俺がここで死んでしまうのも、当然といえば当然の結果だと言えるだろう。でもシアは助かった。いや俺がここで死ねば次に狙われるかもしれないが、それでも幼竜達がいる。なんとかなるだろう。少なくとも俺と一緒にいるよりはるかに安全なはず……。

街は……謝るしかないな。謝って済む問題でもないけど、それでも俺には何も出来なかったのだから、謝るしかない。街のためにと立ち上がるのなんて誰でも出来る。それこそ子供でも、志さえあればそれで十分。だけどそれを達成するには、目標に見合っただけの力なければいけない。それが俺にはなかったというだけの話。

結局、俺は誰も助けられない弱者だっただけという事。

ごめん、シア。ごめん、皆。

カサセの腕が剣とともに動く。それは実に正確に俺の首を狙っていた。

ああ、悔しいな。

夜空の炎燐

音がなくなる。何もかもが塗りつぶされてしまったかのような、そんな感覚。

体が震える。小刻みに振動が伝わり体全体を包み込む。

目の目には地面に勢いのままぶつかり中ほどから折れた剣が、突き刺さるようであった。それを持つのはカサセ。地面が一度大きく揺れたせいでカサセが狙い定めていた俺の首から少し外れて、石の床に剣を叩きつけてしまったのだ。

しかしカサセ自身その事は歯牙にも掛けず、何事かと辺りを見渡している。

やがてもう一度揺れる。今度は一度目の揺れとは比較にならないほど強烈なものだった。次に目に入ったのは、床から見上げる天井に亀裂が入り、落下してくる細やかな石の欠片だった。そしてそれに気づいた時にはもう何を出来るわけでもなく完全に手遅れだった。声を出す間もなく、天井が真ん中から人を押しつぶすには十分すぎるほどの大きさの塊に姿を変えて、雨のように降り注ぐ。

カサセはすぐにそれに気づき外へ向かって掛ける。もちろん俺なんかを一切気にすることもなく、縛り付ける腐食の土縄すら解くこともない。

結局俺はここで死ぬ。それは目の前に迫る光景からしてすぐに理解できる。

でも俺はそんな光景すら目に止めないほど、あるものに目を惹かれていた。

落下する瓦礫の隙間、カサセが逃げた方向とは別の方向、それは俺が最初に入ってきた入り口。そこに、薄く笑い、立つ一人の少女がいた。見覚えのある顔に、今はその髪もすべて下ろしていてなびいている。

それは、間違いなくシアだった。でも、雰囲気はどこかいつもと

違う。

その身に、見るだけでも火傷しそうなほどの紅蓮の炎を纏い、それでいて本人は涼しげな顔だ。あんな力が、シアにあった……？

岩の瓦礫が俺に当たる直前で溶けて跡形もなく消えていく。それが他の誰でもなく、シアによってだというのは馬鹿でもわかる。問題はそこじゃない。

どうしてシアがそんな力を持っているのか、それが今一番の問題だ。

シアはゆったりとした動作で腕を振るった。それに遅れて重なるように炎が揺らめく。

その瞬間、すべてが消えた。本当にすべてが。

あれだけ降り注いでた瓦礫もすべて何も残らず、俺がいるこの場所より上のものがすべて消え去って、残るのは果てまで見渡せるようになってしまったこの展望広場のような空間。

ここは元はといえば山の中腹を少し登ったところ。そこから上の部分は山全体から見れば少ないと言え、それでもその大質量は人の手に負えるものではない。でも現実に、俺と一緒に行動してきたただの人であるシアが、ただの腕の一振りですべて消えてしまった。

気付けば拘束していたカサセの腕が変化した縄も消え去っていて、俺はもう自由の身だった。それに気付きすぐに立ち上がる。体の痛みだとかはどうでもよかった。そんなことより大事なことがある、確認したいことがある。

俺はすぐにシアの元へ駆け出す。

でもそれは声によって遮られた。声が聞こえたのは俺の後ろ。しかも少し離れて上からといった感じだった。

今この場で存在する人といえば、俺とカサセ、あとはなぜか目の前にいるシアだけのはずなのだ。だとすれば、すぐに答えが出る。頭で答えは出ているものの、やはり振り向いて確認してしまう。

そこにはカサセが二人。巨大な翼を生やしたカサセと、それに掴まれて息を切らすカサセ。翼の生えたほうが偽者で掴まれているほ

うが本物だろう。

「なんだっ……その力は……。貴様、一体……！」

その驚愕の声が向けられたのは、俺じゃない。俺はもうすでにカサセには敗北している。命があるのは、たぶんシアのおかげだ。

だからその人ならざる力をなぜか持っているシアに向けられた言葉に、俺もその答えを静かに待った。

どうして、なんで、どうやって。それを知るのはシアだけなのだ。だがシアは答えない。そして返事の代わりとも言うようにその手から炎の槍を吐き出す。いつかのステイードが放ったものよりも小さいが、その色は闇夜を裂くほどの白で、宙に浮くカサセを射抜くように放たれる。その速さは残像を残すほどだ。

だがカサセもすぐに避ける動作に入る。最初は偽カサセに掴まれながら逃げていたが、やがて同化して一体となると、速度も旋回の速度も段違いに変わる。だがそれを追尾するように白炎の槍は軌道を曲げていく。

いくら逃げようと執拗に追い回す。そして俺もカサセも気付いた。

その炎は消えないのだ。正確に言うなら、軌跡が炎で描かれているのだ。それも延々と燃え続け、消えることを知らないかのように煌々と輝く。それはつまり逃げれば逃げるほどに軌跡の炎が増え続け、やがては檻のようになる。おまけにその炎を撒き散らす槍本体は振り切れないし、おそらく防ごうとするならばすべてを溶かし貫くことだろう。俺でもそれぐらいは理解できる。カサセほど実力なら嫌というほどわかってるだろう。だから何も打つ手がなく逃げ回っている。しかしそれではジリ貧だ。

ともすれば取れる行動は限られる。軌跡の炎を生む白炎の槍はどうにも出来ない。ならその槍を生み出しているシアへとその目標は変えられる。

幾多もの線で空中は昼のように明るく、空は燃え上がっていた。その中をかいくぐるようにカサセは棒立ちのシアへ特攻する。その際に多少は軌跡の炎にその身を掠めていたが、一切気にする様子はいなかった。

二人の距離が狭まる。カサセはその腕を人外の物へと変貌させシアへと迫っていく。それは俺が捕まった時と同じ黒く脅力が凄まじい腕。さらに滑空する勢いも相まれば破壊力は想像もつかない。

それでもシアは慌てる様子すらなく、眉ひとつ動かさない。だがその顔からは笑みが消えていた。心なしに纏う炎が揺れた気がした。カサセが何もしないシアに向かってその腕を振り下ろす。俺には何も出来なかった。

そもそも何かしようとするのが間違えていると思えるほどに、どちらとも規格外の存在にしか思えなかったからだ。俺がどちらに付こうが何も変わらない。いてもいなくてもいい存在。それが今の俺だから出来る事と言えば見守る事だけ。最後の結末を迎えるまで。

カサセが……燃えた。腕に火が伝い、やがて凄まじい速度で延焼し火だるまとなる。カサセが焼かれてもがく。断末魔も叫ぶだけ叫ぶが、ただむなしく空に消えていく。

シアは無傷だった。纏う炎がシアにカサセの腕が届く前に焼いたせいだ。

そして燃え盛るカサセに後を追ってきた白炎が突き刺さると、一層勢いを増した炎は全てを白に染め、消えた。カサセはもうそこになかった。

この場に残るのは俺と、シアだけ。

向かい合う。だが何も言わなかった。言えなかった。

どうすればいいのかわからない。街を救ったという事実も、カサセを倒したという事実も、シアがどうしてこうなったのか、という疑問に比べればとても些細なことだった。

長い沈黙の後、シアが困ったように笑う。それがどこか儚げで胸を締め付ける。そのせいで言葉がなお出なくなる。

そんな俺を見てか、シアが先に言葉を紡いだ。

「……えっと、……やった、ね？」

それは何も変わらないシアだった。紛れもなく共に過ごしたシアだった。……俺の好きなシアだった。

それで何かつつかえが取れた気がした。だからようやく、俺もそれに答える形で言葉を紡ぐことが出来た。

「……ああ、やった、はず」

そして再び沈黙。

だけどさつきよりは、まだ気まずくない時間だった。

「なあシア。……それは？」

俺はそう切り出した。その力は何なのか。その最大の疑問が解かれない限りは俺も素直にこの状況を喜べない。

「………これ、すごいですよね」

そう言って、まるで着てきた服でも紹介するようにくるりと回ったり、ちよつとしたポーズを取る。その動きに合わせて炎が揺れ動く。

「熱くないの？」

「はい。ぜんぜん」

シアは笑顔でそういった。まあ確かに平気じゃなかったら今頃大変なことになってるもんな。

「どうしてそんなことに？」

「……これ、実は竜の炎なんです」

「竜の炎？」

竜ってあの竜、か？ 何だってそんなものをシアが……あの後に何かあったのかなあ。そして俺の知り得ない何かでパワーアップとなるほど。

「ええ、竜の心臓を食らうことで、その竜の力を得ることが出来ます。竜の炎は『原初の炎』どの炎にも勝り、浄化、創造、断罪などあらゆる力の根源です」

「はあ……って」

「……そうです。わたしは竜の心臓を食らいました」

今度こそ言葉が出ない。それはつまり……このために竜を殺したと。しかもそれはあの幼竜達以外に考えられない。そんなことをシアが？ 街を救うために、カサセを倒すために、あの幼竜達の誰かを犠牲にした？ そんな……。

「あつ、と……たぶんいまニケさんが考えてるのはちょっと違います」

「へ？」

なんとも素っ頓狂な声を出してしまった。心でも読まれてるのかと思ってしまう。

「あの牢屋は竜達が記憶を消されるまで閉じ込められる場所だったんです。魔法にある程度耐性がある竜達には、記憶消去の魔法が完全に掛かるのに時間がかかったらしくて、それまであそこでただ待

「続けた」

シアはそう語る。それが事実だとすれば、スノウももしかしたら記憶を消されてしまった後なのかも知れない。あそこに残ってシアの面倒を見てくれるといった竜達も完全ではないのだろうけど、その記憶消去の魔法が掛けられているということになる。そんな事をカサセはしていたのか……。

いまさらそれに怒りを抱こうとどうしようもない。もうそれを行っていたカサセはいない。死という罰が与えられた。だから俺は解放された竜達を祝福してやるべきだ。もう負の感情を抱く必要はない。全て終わったのだ。

「けどひたすら耐え続けた竜の中で、不幸にも一匹が記憶を消される前にその命が消えかけてしまいました。それを他の竜が食い止めるために力を使ってコールドスリープさせたんです」

「……そして半永久的にその衰弱した竜は生き続けた、と」

「はい。しかしそれを助ける術はなかったのです。ただ生き延びさせるだけの処置でした。そして私が目を覚ました時にそれは解かれました」

「……どうして？」

「僅かとはいえその竜は生きていました。だから他の竜が今の状況をその竜へ伝え、そのうえでどうするかをその死に掛けていた竜に聞きました。ただ死んだように生きるぐらいならば、死して華となる方がいいと、そう言ったそうです」

「……ちよっと待った。それはいいんだけど。いま言ったとか聞いたとかって……」

「はい。いまの私には竜と会話するだけの力があるので、あとで聞いた話なんですけどね」

そっかあ、となんだか妙に納得してシアに話の続きを促す。

「そして私はその竜の命を頂いて、……あとはもうニケさんが見た通りです。こんな私でもあれだけ出来るんですからやっぱり竜の力ってのはすごいですね」

「……確かに」

思い起こしてみれば全てを圧倒する力だった。山の一部を消し飛ばし、それでいて無傷であのカサセをも消し去る。そんな場面を思い出して、つい空を見上げてしまう。すると空に刻まれていた炎の轍はシアの手によってか、崩れるように形をなくしていく。それが雪のように降り注いだ。触れても熱いということはなく、すこしばかりあったかい程度のものであった。

その光景は幻想的。まるで全ての終わりを祝福するよう。

そう全て終わった。いや、帰って街の方も確認しないとイケないか……。だけど、成すべき事は終わったのだ。

だからシアの方へと歩いて、その目の前で止まり、手を差し出す。

「帰ろうか」

シアは笑顔を作る。だけどその手は差し出されない。俺の手を握ろうとしない。

「……ごめんなさい」

どうして……？ そんな叫びが喉までせり上がる。

だけどシアが浮かべる少し困ったような顔のせいで、止まってしまっ。

「原初の炎　　竜の炎は人の身に余る力です。だから、」

シアは言葉を区切る。

だから、なんだよ……。なんなんだよ……！

わかっている。何が言いたいのか、何がこれから待っているのか、もう頭では勝手に推測をしている。それを認めたくない。シアの口から言わないで欲しい。それが現実だと認めさせないでくれ。……そんな事を思っていた。

でも、そんなことで現実是不変ならない。事実には覆る事はない。

「私は、もう、帰れないんです」

だからシアが口にしたことで、それを認めざる負えなくなる。

自然と涙がこみ上げてきた。シアもその大きな瞳に涙が浮かんでる。でもシアは全てを覚悟の上でその力を手にしたのだ。それを俺なんかが、命を賭けても何も出来なかった俺なんかが否定なんて出来ない。してはいけない。

俺が無力だったから、シアが代わりに力を手にした。ただそれだけの事。全ては俺のせいだ……！

シアの片腕があっさりといひじの辺りから取れて、地面に落ちる。地面に触れた途端に燃え上がり、カサセのように跡形もなく消えていく。

「……そろそろ、限界みたいですね」

シアは笑う。腕がなくなっただけに、痛みなどはないようだったが、それとも俺を不安がらせないように表に出さないだけなのか、俺には知る術もない。……。……。

「……楽しかったです。短い間でしたけど色々な人と会って、色々事件もあって、怖い事や危ない事もありましたけど、……。それでも私は楽しかったです。ニケさんと出会って、私も変わることが出

来て、……好きになれて本当に良かったです」

……そんな事を言うなよ、と叫びたかった。だけど涙を抑え、嗚咽を堪えるのに精一杯で何も言えない。

シアはどこか遠い目で、いままでを思い出すように話す。

「傍にいらって言ったのに……これじゃ嘘つきになっちゃいますね」

そう言って照れくさそうに笑う。

シアがそうやって明るく、いつものように振舞えば振舞うほど俺の胸が締め付けられる。泣きたくなる。

言葉が出ないのなら、と体が動く。今にも消えそうなシアの体に少しでも触れたくて。

でも。

「駄目です!」

シアが強く言った。それに呆気にとられ体が固まる。

そして申し訳なさそうな表情を浮かべてシアが、小さな声で言った。

「……ごめんなさい。この炎は私以外の命あるものを無差別に焼き尽くします。そもそもこの炎は私であるが故にコントロール出来ていない竜の炎なんです。だから……」

俺は、もうシアに触れることすら叶わない。

シアが言いたいのはその言う事だった。

「……大好きでした」

シアの体が、炎によって下から蝕まれて存在がなくなっていく。

さようなら

声は音にすらならず、ただ口だけがそう動くのを見た。

そのせいで、もう俺は全てを堪えるのをやめた。

シアの体どころかその体を燃やす炎すら消え去ろうと弱弱しくなっていく。それがシアの命を現しているようで、どうにかなくなってしまいそうだった。

そしてシアに止められたが、もう俺は炎など構わずに、……いや炎ごとシアを抱きしめる。

その存在は希薄ながらも確かにあった。

しっかりと抱きしめ、感触を実感する。耳元では慌てふためくシアの表情があるだろうけど、もう遅いし、気にしない。炎が俺を焼いているが、なんてことはない。もう消えかけているせいかな、カサセの腐食土の縄で拘束されてた時の方がよっぽど応える。

消えかけたシアと涙目ながらも向き合う。いつかの時と同じように肩に手をかけて、二人の顔だけが見える狭い空間が出来上がる。

シアが笑顔を作って、その後ゆっくりと目を閉じた。

そして……………。

残されたのは俺一人。

不自然に作り出された石の広場で、夜空を見上げていた。

大元であったシアが消えたのに、まだ空には少しの炎が残っていた。だがそれももう消える。

おそらく最後の火の欠片がゆっくり落ちてきて、つい差し出してしまった手に触れて、消えた。

一瞬の温かみを手に残して完全に消えた。

もう、消えてしまった。

『ゲームはクリアされました。これより自動的にログアウトします』
そんな幾度か聞いた声が頭に響いた。

「……………余計な事、するんじゃないよ……………」

俺の声が届くはずもなく、急に意識がブラックアウトした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5022x/>

現実世界の仮想現実

2012年1月6日21時41分発行